第56回

日本生態学会大会プログラム

会 期 2009年3月17日(火)~21日(土) 会 場 岩手県立大学 盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内) アイーナ(いわて県民情報交流センター)

 学会会長
 矢原
 徹一
 大会会長
 由井
 正敏

 企画委員長
 永田
 尚志
 実行委員長
 牧
 陽之助



日本生態学会第 56 回大会 (ESJ56) 実行委員会

〒020-8550 盛岡市上田 3-18-34

岩手大学 人文社会科学部 環境生物学研究室 気付

TEL(FAX 兼): 019-621-6829

電子メール:esj56@mail.esj.ne.jp

大会公式ホームページ http://www.esj.ne.jp/meeting/56/

目 次

第 56 回日本生態学会大会

● 大会日程概略	3
● 大会日程一覧表	4
● 諸案内	6
● 注意事項	7
● 大会規則	1 0
● 会場へのアクセス	1 2
会場案内図 岩手県立大学	1 4
会場案内図 マリオス・アイーナ・ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING	1 8
● 学会賞授賞式・受賞記念講演	1 9
● 公開講演会	2 0
● シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会一覧	2 1
● シンポジウム概要	2 5
● フォーラム概要	4 1
● 企画集会概要	4 4
● □頭発表一覧	6 6
● ポスター発表一覧	7 6
● 自由集会概要	1 0 0
● 参加登録者一覧	1 1 3
第 57 回日本生態学会大会(2010 年 3 月 東京)のご案内	1 3 0

大 会 日 程 概 略

各種委員会 3月17日(火) 岩手県立大学 共通講義棟

外来種検討作業部会	9:00 ~ 11:00	委員会室1(2F 202 講義室)
生態系管理専門委員会	9:00 ~ 11:00	委員会室 2 (3F 308 講義室)
将来計画専門委員会	9:00 ~ 11:00	委員会室 3 (3F 302 講義室)
自然保護專門委員会 保全生態学研究刊行協議会 大会企画委員会 大規模長期生態学專門委員会	11:30 ~ 16:00 11:30 ~ 13:30 11:30 ~ 13:30 11:30 ~ 13:30	J 会場 (2F 208 講義室) 委員会室 1 (2F 202 講義室) 委員会室 2 (3F 308 講義室) 委員会室 3 (3F 302 講義室)
日本生態学会誌刊行協議会 Ecological Research 刊行協議会 生態学教育専門委員会	14:00 ~ 16:00 14:00 ~ 16:00 14:00 ~ 16:00	委員会室 1 (2F 202 講義室) 委員会室 2 (3F 308 講義室) 委員会室 3 (3F 302 講義室)
全国委員会	16:30 ~ 19:30	M会場 (3F 307 講義室)

総会・受賞講演 3月20日(金)

9:30~13:30 盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)

総会

生態学会賞/生態学会功労賞/生態学会宮地賞/生態学会大島賞/ER 論文賞授賞式

生態学会賞受賞者および功労賞受賞者挨拶

生態学会宮地賞受賞記念講演および生態学会大島賞受賞記念講演

公開講演会 3月20日(金)

14:30~17:30 盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)

第 12 回日本生熊学会公開講演会「数えることで見えてくる! - 生物の数の不思議 - 」

一般講演・シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会

一般講演(口頭発表)3月18日(水),21日(土)一般講演(ポスター発表)3月18日(水),19日(木)シンポジウム3月18日(水),19日(木)フォーラム3月18日(水),19日(木),21日(土)企画集会3月18日(水),19日(木),21日(土)自由集会3月17日(火),20日(金)

懇親会 3月20日(金)19:00~21:00 ホテル メトロポリタン盛岡 NEW WING

「エコフォトアワード 2009」のご案内

今回が初企画となる写真展「エコフォトアワード 2009:生態学者が選ぶ『未来に残したい森羅万象』」を、3月20日(金)に盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)3階ホワイエにて行います。ご来場の皆様に審査員となっていただき、表彰作品を選出いたします。表彰作品は当日の懇親会にてお披露目されます。総会や授賞式・受賞講演、公開講演会とあわせて、写真展にも是非お立ち寄り下さい。

「エコカップ 2009 盛岡大会」のご案内

生態学会大会に合わせて開催されてきた親善フットサル大会(5人制のミニサッカー)を、3月22日(日)に開催します。会場は岩手県営体育館(盛岡市)です。詳しくは、エコカップ・ホームページ(大会公式ホームページからのリンクをご利用ください)をご覧ください。

大会日程一覧表

3/17(TUE) 岩手県立大学 共通講義棟

		09:00-11:00	11:30-13:30 14:0		0-16:00		16:30-19:30
2F	委員会室1	外来種	保全誌	生	態誌		
3F	委員会室2	生態系管理	大会企画	Ecologica	al Research		
3F	委員会室3	将来計画	大規模長期	生態	学教育		
3F	M会場						全国委員会
					15:00)-17:00	17:15-19:15
1F	B会場				W01 乾燥地林	直物	W12 生態学とFOSS4G
1F	C会場				W02 化学物質	質の生態影響	W13 小笠原外来種
1F	D会場			W03 シロアリ	の階級と社会	W14 カワヒバリガイ問題	
1F	E会場			W04 GLM 再之	八門	W15 樹木の水輸送	
2F	F会場			W05 琵琶湖(の生物多様性	W16 湖に面した水田の特性	
2F	G会場				W06 次世代?	シーケンサー	W17 微生物·土壌生態系
2F	H会場				W07 生態学(のための計測	W18 開花・結実の生理生態
2F	I会場			W08 街へ出。	↓! Part5	W19 天然林施業を考える	
2F	J会場		自然			W20 科学的進化論決起!	
3F	K会場			W09 大台ヶ原	自然再生	W21 群落談話会	
3F	L会場			W10 系統樹(の推定と応用	W22 チョウノスケソウ	
3F	N会場			W11 統一中立理論			W23 外来生物の分布拡大

3/18(WED) 岩手県立大学 共通講義棟 (PA:体育棟, PB:3階西側廊下, PC:3階東側廊下)

		09:15-12:15	12:15-14:15	14:15-17:15		17:30-19:30
1F	B会場			英語(分野は不問)		T01 Forest dynamic data to habitat association
1F	C会場					T02 休眠の進化生態学
1F	D会場					T03 琉球諸島世界自然遺産
1F	E会場	S01 Parasite and sex wars		保全		T04 群集生態学の挑戦
2F	F会場					T05 樹形変化
2F	G会場	S02 マクロエコロジー		物質循環		T06 進化生態と系統地理
3F	H会場	S03 アカマツ林の生態学		植物個体群 送粉 菌類	類	T07 偽高山帯
2F	I会場	S04 Plant responses to CO ₂		フェノロジー 植物生理生	態	T08 河川敷の樹林化問題
3F	K会場	S05 撹乱の進化群集生態		生態系管理		T09 砂堆と砂浜の自然
3F	L会場	S06 生態 と持続		外来種		T10 菌類研究 & 生態学
3F	M会場	S07 水田群集生態学最前線		数理		U01 科研費·特別研究員
3F	N会場	S08 侵入生態学		行動 動物生活史		T11 アジア放牧地生態系
	ペスター会場 PA PB PC	ポスター	コアタイム	ポスター		

大会日程一覧表

3/19(THU) 岩手県立大学 共通講義棟 (PA:体育棟, PB:3階西側廊下, PC:3階東側廊下)

		0'	9:15-12:15	12:15-14:15	14:15-17:15	17:30-19:30
1F	A会場	S09 ユビキ	タス生物保全		S17 野生動物の保全と管理	▼ T12 アグロエコロジー11
1F	B会場					T13 MAFES
1F	C会場					T14 ニセアカシアの生態学
1F	D会場					T15 伊豆諸島の生物
1F	E会場	S10 Isotope	s in ecosystem ecology		S18 森林動態モデルの進展	T16 一斉開花の生態と進化
2F	F会場					T17 泥炭地湿原の構造
2F	G会場	S11 生態リ	スク		S19 温暖化問題と生態学	T18 1+1≠2メタ個体群
2F	H会場	S12 Phenoty	ypic Diversity		S20 菌類植食者と種多様性	İ T19 湖沼の保全・再生
2F	I会場	S13 Sexual	selection in crabs		S21 森里海のつながり	T20 生態系サービス評価
3F	K会場	S14 熱帯材	の持続的管理		S22 土壌有機物とは何か?	T21 気候変動と生態系
3F	L会場	S15 生物多	・様性の総合評価		S23トキ野生復帰の最前線	U02 生態系機能の情報基盤
3F	M会場					U03 生態教育フォーラム
3F	N会場	S16 縄文社	:会と環境変動		S24 森林の遺伝的攪乱	T22 アジア・太平洋の植生
	スター会場 PB PC		ポスター	コアタイム	ポスター	

3/20(FRI) 盛岡市民文化ホール大ホール・アイーナ・ホテル メトロポリタン盛岡 NEW WING

			09:30-13:30		14:30-17:30	19:00	0-21:00
盛	盛岡市民文化ホール 大ホール		総会·授賞式·受賞講演		公開講演会	150	
ア	8F	W会場			W24 動物移動軌跡		親会
1	8F	X会場			W25 フェノ研/花生態		テル コポリタ
	8F	Y会場			W26 大型水鳥と里地生態系	レーシ	盛岡 / WING
ナ	8F	Z会場			W27 温暖化操作実験	INLV	, wind

3/21(SAT) 岩手県立大学 共通講義棟

		09:15-11:15	12:00-14:00	
1F	A会場		T23 自己相関と偽反復	
1F	B会場	動物群集	T24 生態学と社会教育	
1F	E会場	動物個体群	T25 捕食・被食の展開	
2F	F会場	古生態 分子	T26 チョウ類の衰亡と保全	
2F	G会場	景観生態	T27 生態ネットワーク	
2F	H会場	群落	T28 迅速な適応性	
2F	I会場	植物生理生態	T29 里山里海評価	
3F	K会場	動物と植物の相互関係	T30 里地里山の半自然草地	
3F	L会場	遷移∙更新	U04 若手支援	
3F	M会場	社会生態 動物繁殖	U05 魚釣島の 生態系変化	
3F	N会場	進化	T31 植物データベース	

諸 案 内

受 付

• 受付の時間と場所は次のとおりです。

3月17日 12時30分から 岩手県立大学講堂エントランスホール

3月18・19日 8時30分から 同 上

3月20日 9時15分から 盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)ホワイエ

(注)アイーナには受付を設営しません。

3月21日 8時30分から 岩手県立大学講堂エントランスホール

- 3月17日の14時から15時、および翌18日の朝には受付の混雑が予想されます。当日参加の方には、特に早めにお越しになることをお勧めします。
- 会場では必ず名札をつけてください。総会・授賞式・受賞講演会への参加は会員に限られます。
- ウェブでの参加申し込み (学会が運営する大会登録システムを利用) は、2009 年 2 月 20 日 17 時まで受け付けます。
- 大会参加費・懇親会費の事前支払いは JTB マルチエントリーにて、2009 年 2 月 20 日 17 時まで受け付けます。詳細は大会公式ホームページ (http://www.esj.ne.jp/meeting/56/) にリンクされている「申込の手引き」などを参照してください。早めの手続きをお願いします。
- 名札・領収書・要旨集引換券等の事前送付は、参加費の支払いと同時に申し込むことができます。 大会公式ホームページ(http://www.esj.ne.jp/meeting/56/)からリンクされている「申込の手引き」 等を参照してください。
- 名札・領収書・講演要旨集引換券などの事前発送は3月5日前後となります。3月10日までに未 着の場合、大会実行委員会に連絡してください。
- 大会に参加できない方で講演要旨集を希望の方は、大会実行委員会に申し込んでください。一冊 3,000 円(送料込み)です。代金は郵便振替で、振替口座番号:02280-8-70338、加入者名:日本 生態学会第56回大会実行委員会、に振り込んでください。大会終了後に送付します。

駐車場

- 岩手県立大学会場では、大学敷地内の駐車場が無料で利用できます。降雪や路面凍結の事態も予想 されますので、自家用車等での参加の場合、冬用タイヤやタイヤチェーン等をご用意ください。
- マリオスとアイーナ会場では、盛岡駅周辺の 24 時間営業有料駐車場を利用できます。料金は 30 分ごとに 100 円程度、ただし 24 時間までは最大 900 円程度です。

懇親会

- 懇親会は、ホテル メトロポリタン盛岡 NEW WING 4 階「メトロポリタンホール」(電話: 019-625-1211)にて、3月20日(金)19時(開場18時45分)から開催します。会場へは徒歩で、 盛岡駅から約3分、盛岡市民文化ホールおよびアイーナから約6分です。
- 懇親会参加申し込みの受付は、会場の定員に達し次第終了いたしますので、早めの申し込みをお勧めします。なお、大会開始時点で定員に達していない場合のみ、当日参加が可能です。

託児所

大会主会場の岩手県立大学内と、総会・受賞講演・公開講演会会場の盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)に託児所を設けます。ただし、**利用は事前に申し込みをされた方**に限ります。

- 対象年齢は、生後6ヶ月から小学生までです。
- 託児時間は大会が開催されている時間内のうち、原則として 9 時から 17 時です (ただし 3 月 17 日は 15 時開始、また 3 月 21 日は 14 時終了です)。時間外の利用についてはご相談ください。
- 利用を希望する方は電子メールで、大会実行委員会(esj56@mail.esj.ne.jp)まで、お子さんの

年齢、性別、人数、託児希望日時をご連絡ください。メールの表題は「託児所利用希望」としてください。折り返し、ご利用案内や申込書類等をお送りします。

● 申込書類の大会実行委員会への提出締め切りは、2月24日(火)です。

盛岡企画のご案内

3月20日の公開講演会に合わせて、盛岡市民文化ホール大ホール(マリオス内)ホワイエでは次のような企画を行います。会員の皆様も、ぜひ会場に足をお運びください。

- (1)写真展/エコフォトアワード2009:生態学者が選ぶ『未来に残したい森羅万象』
- (2) 生態学会の専門委員会等の活動を紹介するパネル展示
- (3)公開講演会の講演の主題となる生物や、岩手の人々にとって身近な生物を観察できるコーナー

宿泊の予約

JTB マルチエントリーシステムにてお申し込みください。

注 意 事 項

参加者の皆様へ

大会規則

本大会は、日本生態学会大会規則(p.10~に掲載)に基づいて実施されます。大会期間中、参加者はこの規則および下記の注意事項を遵守し、大会実行委員、座長、会場係の指示に従ってください。

撮影について

会場での講演・ポスターの撮影は、発表者の了承を得た場合に限り認めています。また、発表者に 了承を得て撮影する場合でも周囲の方に迷惑がかからないようにしてください。

岩手県立大学会場での飲食、喫煙等

- 委員会室の一部や共通講義棟ロビーなどを休憩室として利用できます。休憩室にはお茶などを 用意します。
- 大会会期中、学生食堂で食事ができます。また弁当の販売も行う予定です。なお会場周辺に食事ができる店舗はほとんどありません。
- 学生ホールに売店が、近隣にコンビニエンスストアがあります。
- 大学構内は「**敷地内全面禁煙**」です。ご協力をお願いします。

盛岡市民文化ホール大ホール会場およびアイーナ会場での飲食、喫煙等

- 盛岡市民文化ホール大ホールでは、ホワイエでの飲食が可能です。ただし、ホール内への飲食物の持ち込みはできません。また、喫煙は所定の場所でのみ可能です。
- アイーナでは、会議室内に飲み物の持ち込みが可能です。館内は全面禁煙です。ご協力のほどお願いいたします。
- マリオス 4 階と 20 階にはレストランがあります。アイーナ 1 階にはコンビニエンスストア、 飲食店があります。

発表者・企画者の皆様へ

一般講演(口頭発表)

● 口頭発表は、会場備え付けのパソコン (OS は Windows Vista) と液晶プロジェクター (解像度 1024×768) を使用したマイクロソフトパワーポイント (Windows 版 PowerPoint2003) あるい

はアドビリーダー (PDF ファイル) による発表に限ります。持ち込んだコンピューターを使用 しての発表はできません。お断りいたします。

- 発表用ファイルの作成方法:上記の使用機器に充分留意してください。また、「事前にお送りいただいた発表用ファイルを各会場のパソコンのハードディスクにあらかじめコピーしておく」ことをふまえ、発表用ファイルを作成してください。以下の点にもご注意ください。
 - *パワーポイントファイルは、Windows 版 PowerPoint2003 で動作可能なこと、標準的なフォントを使用し、アニメーションを設定しないこと、を守ってください。
 - * Mac OS でファイルを作成した場合には、必ず Windows ファイルに変換し、Windows 機で動作確認を発表者の責任でおこなってください。
 - * PowerPoint2007 などでファイルを作成する場合は、必ず「PowerPoint97-2003 プレゼンテーション(*.ppt)」を選択し、*.ppt 形式のファイルを準備してください。ファイルの保存時にファイルの種類として「PowerPoint プレゼンテーション(*.pptx)」を選択しないでください。
 - * パワーポイントあるいは PDF ファイルのファイルサイズは、できるだけ小さくしてください (上限 5MB、推奨 2MB 以下)。写真を多用される方は液晶プロジェクターの解像度 (1024×768) を考慮して必要最小限の解像度に変更してください。
- **発表用ファイルの提出期限**: 2009 年 3 月 6 日 (金) 17 時です。大会公式ホームページにて 登録してください。
 - *各自のファイル名は自動で作成されます。**期限までに発表用ファイルが登録されない場合には、プロジェクターを利用した発表はできません。**なお、パソコンと液晶プロジェクターを使用しないで発表される場合は、3月6日(金)17時までに大会実行委員会(esj56@mail.esj.ne.jp)あて電子メールでその旨をご連絡ください。発表用ファイルの登録がなく、ご連絡をいただけない場合には、発表ができませんので、ご注意ください。
- 講演時間は、発表 12 分、質疑応答 3 分の合計 15 分です。一鈴 10 分、二鈴 12 分、三鈴 14 分 30 秒です。時間を厳守してください。
- パソコンの操作は、**最初のスライドを表示するところまではオペレーター(会場係)が行います。**その後の操作(スライドの進行)は、講演者自身で行うことも、会場のオペレーター(会場係)に指示することも可能です。
- 講演の終了した講演者は、次の講演の座長を務めてください。最初の座長は、大会実行委員会が対応します。

一般講演(ポスター発表)

《ポスター会場》

- ポスター発表は 3 月 18 日、3 月 19 日とも、体育棟(PA) 3 階西側廊下(PB) 3 階東側廊下(PC)の3つの会場に分かれて行います。
- 展示場所は「ポスター発表案内デスク」(PAの入り口に設置)、3階西側廊下(PB)、3階東側廊下(PC)の両端に設置された「**展示案内地図**」に指示されていますので確認してください。 わからない場合はスタッフにお問い合わせください。

《展示および発表時間》

- 展示は、18 日発表分については前日の 15 時から当日 10 時まで、19 日発表分については発表 前日 17 時 30 分から当日 10 時までに完了してください。
- ポスター展示ボードの大きさは 90cm×210cm(縦長)です。ポスター貼り付け用のピンや画鋲 は各自でご用意下さい。
- ポスター賞に応募している方は、できるだけ前日もしくは当日の 9 時までに掲示を完了してく

- ださい。展示が遅れた場合、またコアタイムに説明できない場合は審査が受けられません。
- コアタイムは、両日とも 12 時 15 分から 14 時 15 分です。発表者はこの時間帯には必ずポスターの前で説明をしてください。
- ポスターの撤去: 18 日発表分は当日 17 時 00 分まで、19 日発表分は当日 19 時 30 分までに撤去してください。

《ポスター賞》

- 日本生態学会では、若手研究者の奨励のために優秀なポスター発表に賞を贈ります。ポスター 賞の運営方法や選考基準については日本生態学会のホームページ
 - (http://www.esj.ne.jp/meeting/poster_prize/about.html)に記載されていますので、必ず事前に確認の上、審査に備えてください。
- ポスター賞の対象となる発表には、ボードに応募を示す表示が貼り付けてあります。ポスター 賞に応募しているにもかかわらず表示がない場合には、すぐに「ポスター発表案内デスク」(PA の入り口に設置)に連絡ください。
- 受賞ポスターには、16 時前後に受賞を示すリボンが付けられます。表彰式は 16 時 30 分から 17 時の間に学生ラウンジ(学生ホール 2 階の売店の前)で行います。ポスター賞を受賞された 方はこの時間帯に表彰式においでください。
- 「最優秀賞」受賞ポスターは特設掲示板(学生ラウンジに設置)にポスター発表終了時(19日の19時30分)まで特別展示されます。受賞者の方は展示の移動にご協力ください。
- ポスター発表終了時より前にポスターを持ち帰りたい受賞者は、ポスター発表案内デスクのスタッフに申し出た上、お持ち帰り願います。ポスター発表終了後まで残っていたポスターは処分します。

各種集会(シンポジウム、フォーラム、企画集会、自由集会)

- 設定された時間内に終了するよう努めてください。時間延長はできません。
- 各種集会会場には会場係がつきません。問題がありましたら大会本部までご連絡ください。た だし、20 日のアイーナ会場で開催される自由集会には、4 会場全体の会場係を配置します。
- 発表には会場に設置されている液晶プロジェクターが使用できます。ただし、液晶プロジェクターに接続するコンピューターおよび発表用ファイルは、**集会企画者の責任で準備**してください。

日本生態学会大会 規則

(2008年12月10日制定)

(目的)

第1条 この規則は、日本生態学会(以下、本学会)が開催する学術集会である年次大会(以下、大会)について必要な事項を定める。大会は生態学の振興に寄与するためにその研究成果を発表する場とするとともに生態学研究者の交流の場を広く提供することを目的とする。

(名称)

第2条 大会の名称は「日本生態学会大会」とする。1953年に開催された大会を第1回とし、年次 ごとに回数を加える。各大会の名称は回数を冠して、「第##回 日本生態学会大会」とし、略 称を「ESJ##」とする。

(周期)

第3条 大会は年1回開催する。

(運営)

第4条 大会は本規則第 10 条で定める大会企画委員会(以下、企画委員会)と第 11 条で定める大会定画委員会(以下、企画委員会)と第 11 条で定める大会定ででである。

(開催地区)

- 第5条 大会の開催地区は、全国委員会の議を経て総会で決定する。
 - 2 大会会場は実行委員会が企画委員会との協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。

(日程)

第6条 大会日程は実行委員会が企画委員会との協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。 (参加費)

第7条 大会参加費と懇親会費は実行委員会が企画委員会の協議のもとに定め、常任委員会の承認を得る。

(行事)

- 第8条 年次大会開催期間中に以下の各号に掲げる行事を実施する。
 - 一 本学会会員(以下、会員)による学術論文の一般講演(口頭発表、あるいはポスター発表)
 - 二 シンポジウムをはじめとする研究集会
 - 三 通常総会(以下、総会)
 - 四 全国委員会
 - 五 各種専門委員会
 - 六 本学会が定める各賞の授与式
 - 七 懇親会
 - 八 その他、全国委員会が必要と認めたもの

(参加者、発表者)

- 第9条 大会には本大会の目的を理解し、所定の手続きを経たすべての者が参加できる。会員資格は 問わない。
 - 2 一般講演、研究集会(以下、一般講演と研究集会を合わせて学術セッションという)の論文 発表者は、会員に限る。ただし、企画委員会、実行委員会が認めた場合、発表者の会員資格は 問わない。

(大会企画委員会)

第 10 条 大会の準備および運営のため、学会は常設専門委員会である大会企画委員会を設ける。大会企画委員会は、主に一般講演、シンポジウム等の学術セッションの準備、運営を担当する。

(大会実行委員会)

第 11 条 大会開催の準備および運営のため、開催地となる地区会は大会実行委員会を組織する。大会 実行委員会は、会場管理、会計事務等大会運営に必要な事項を担当する。

(会計)

第12条 大会の会計は本学会会計の事業関係経費として処理される。

(参加者の義務)

第 13 条 大会参加者は大会参加費を支払わなければならない。ただし、企画委員会、実行委員会が認めた場合、大会参加費の支払いは免除される。大会参加者は「大会規則」、「注意事項」等大会運営に関わる諸規定を遵守しなければならない。

(退場)

第 14 条 実行委員会委員長あるいは企画委員会委員長が大会の運営に支障をきたすと判断した場合は、生態学会会長の了解を得て参加者に大会会場からの退去を求めることができる。また、過去に退去を求められた者の大会への参加を拒否することができる。

(プログラム、要旨集)

第 15 条 企画委員会はプログラムおよび要旨集を編集する。プログラムおよび要旨集の著作権は本学会に帰属する。投稿された原稿に、公序良俗に反する内容が含まれると判断した場合、企画委員会は著者に内容の修正を求めることができる。著者が修正に応じない場合は掲載を差し止めることができる。

(改正)

第16条 この規則は、全国委員会の議決を経て改正することが出来る。

(別規則)

第17条 この規則の施行に必要な事項については、企画委員会の議決を経て別に定める。

附則

(施行)

第1条 この規則は、制定と同時に施行する。

(適用)

第2条 この規則は、第56回(2009年)大会から適用する。

会場へのアクセス

岩手県立大学

[口頭発表、ポスター、シンポジウム、自由集会など]

岩手郡滝沢村滝沢字巣子 152-52

TEL: 019-694-2000

IGR いわて銀河鉄道滝沢駅から徒歩 20 分

詳しくは下記参照

盛岡市民文化ホール (マリオス内)

[総会、授賞式、受賞講演、公開講演会] 盛岡市盛岡駅西通 2-9-1、TEL: 019-621-5100 JR 盛岡駅から徒歩 3 分

アイーナ

[自由集会]

盛岡市盛岡駅西通 1-7-1、TEL: 019-606-1717 JR 盛岡駅から徒歩 4 分

ホテルメトロポリタン盛岡 NEW WING

[懇親会]

盛岡市盛岡駅前北通 2-27、TEL: 019-625-1211 JR 盛岡駅から徒歩 3 分

盛岡農高前▮ 滝沢駅前 滝沢 IC 分レ南 滝沢駅 巣子車庫 東 巣子駅 北 自 動 ■厨川駅前 厨川駅 車 渞 青山駅 盛岡 ホテルメトロポリタン IC 盛岡 NEW WING 盛岡駅 ■盛岡駅前 アイーナ マリオス ■■■■ いわて銀河鉄道 岩手県交通路線 - 岩手県北バス路線 至仙台 バスセンター

国道

4号線

至青森

て銀河

各地から盛岡市へ

空路:日本航空(JAL)便

- ・花巻(いわて花巻)と札幌(新千歳)、名古屋(中部)、大阪(伊丹)間に1日各2往復運行。
- ・いわて花巻空港と盛岡駅前間は特急バス(岩手県交通)で約50分、航空便の発着に合わせて運行。 盛岡駅前東口8番乗り場のバス出発時刻は、いわて花巻空港航空便出発時刻の110分前です。

至青森

鉄道: JR 東日本(東北新幹線) 東京駅と盛岡駅間は1時間あたり約2本運行。

高速バス:

- ・岩手県交通が東京駅・池袋駅と盛岡駅前・盛岡バスセンター(BC)間に1日2便運行(予約が必要)。
- ・岩手県北バスが品川 BC・浜松町 BC と盛岡南営業所・盛岡駅前間に1日1便運行(予約が必要)。

自家用車:東日本高速道路(東北自動車道)の盛岡 IC と盛岡駅間は約 6km、14 分。東北自動車道滝沢 IC と岩 手県立大学間は約3km、7分。国道4号線を青森方面へ出て、二つ目の交差点を右折してすぐです。

盛岡市内から岩手県立大学へ

鉄道: IGR いわて銀河鉄道

- ・所要時間 12 分、運賃は片道 360 円。
- ・盛岡駅での改札口・発券機・ホームは JRと異なります。JR からの利用者は一度、北出口を出て、東口 1 階北側にあるIGRの発券機・改札口をご利用下さい。ただし、*はJR直通列車のため、利用する際はJR の発券機・改札口となります。

(会期中、臨時便を運行する予定です。決まり次第、ホームページでお知らせします。)

- ·盛岡駅発 滝沢駅方面 (7~18 時) 7:25* 7:31 7:53* 8:12 8:30* 8:55 9:46 10:10 11:10 11:29 11:50 12:10 12:39 12:50 13:10 13:43 14:10 14:41 15:02 15:10 15:30 15:43 16:16 16:34 16:44 17:04 17:22 17:47
- ·淹沢駅発 盛岡駅方面 (10~21 時) 10:38 11:11 11:43 12:10 12:49 13:17 13:41 14:17 14:41 15:06 15:41 16:05 16:25 16:38 16:58 17:16 17:38 17:51 18:21 18:51 19:16 19:43 20:16 20:46 21:02

路線バス: 岩手県交通、岩手県北バス

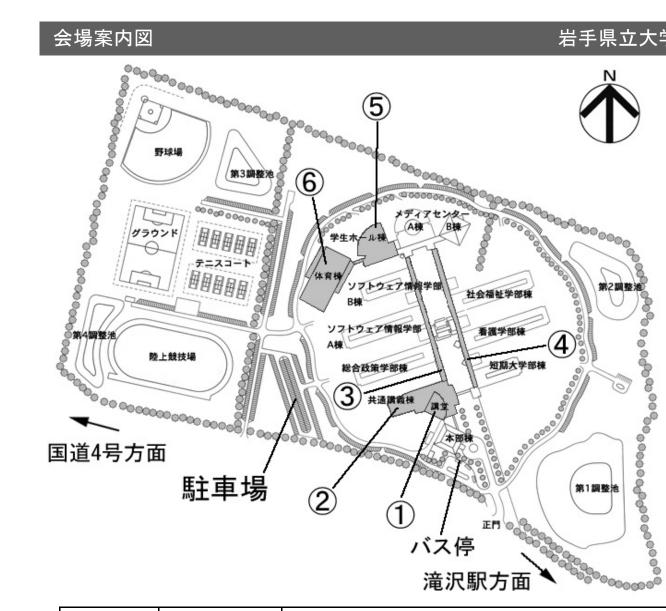
- ・いずれも盛岡バスセンター(BC)発着・盛岡駅前経由・岩手県立大学発着ですが、経由地が異なります。 (「(岩手)県立大学入口」は一つ手前なのでご注意下さい。「(岩手)県立大学」で下車です。)
- ・両社共通のバスカード 1,000 円券(1,100 円分利用可能)、3,000 円券(3,300 円分)などがあります。
- ・盛岡駅前と岩手県立大学間の所要時間は約30分、運賃は片道450円(*は480円)。 (積雪時・降雪時は、さらに時間がかかることがあります。)
- ・盛岡 BC 発時刻は盛岡駅前発時刻の 10~12 分前、運賃は片道 500 円(*は 540 円)。 (会期中、定期便と同経路で臨時便を運行する予定です。決まり次第、ホームページでお知らせします。)
- 盛岡駅東ロバスプール 2 番乗り場発 県立大学行 (バスの行き先表示を必ずご確認下さい。) 東ロバスプール 2 番乗り場については http://www.iwatebus.or.jp/bus noriba ekimae.html 参照
 - (3月17~19日7時~最終) 7:10 7:30 7:47 7:48 8:06 8:20 8:30 8:32* 9:27 9:30* 9:33 9:46 9:50 10:27* 11:02 11:07 12:07* 12:16 13:12 13:40 13:47* 14:02* 14:12 14:32* 14:32 15:07* 15:20* 15:37* 15:40 16:17* 16:22 16:47 17:22* 17:31 18:12*
 - (3月21日7~14時) 7:30 8:32* 8:01 8:16 10:27* 11:06 12:07* 12:55 13:47*
- ・岩手県立大学発 盛岡駅前経由 盛岡バスセンター行
 - (3月17~19日10時~最終) 10:40* 10:55 11:15 11:22* 12:05 12:15 12:55 13:30 13:50* 14:15 14:40 14:45 15:00 15:15 15:25 15:35 15:45* 16:05* 16:10 16:40 16:52* 17:20 17:25 17:55* 18:00 18:35 18:45 19:05 19:40 20:10
 - (3月21日10~16時) 10:25 10:40* 11:22* 11:55 12:55 13:40 13:50* 14:45 14:55 15:00 15:45* 16:00

タクシー: 盛岡駅と岩手県立大学間は約30分、約3,500円。複数のかたで同時に利用されると便利です。

自家用車:盛岡駅と岩手県立大学間は国道 4 号線で約 14km、27 分。国道 4 号線を北上し、「分レ南」交差点を右折して青森方面に向かい、二つ目の交差点を右折してすぐです。

- ・ 滝沢駅前発 岩手県立大学行 バス
 - (3月17~19日) 7:42 8:10 8:16 8:50 9:00 9:25 9:50 10:05 11:20 12:05 14:00 16:50、(3月21日) 9:00 9:50 11:20
- ・岩手県立大学発 滝沢駅前行 バス (*は 17 日はなし)
- (3月17~19日) 9:02 10:55 12:35 14:30 14:40 15:35 16:19* 16:35 17:15 17:52 17:55 18:40、(3月21日) 9:02 10:55 14:30 なお、タクシーで滝沢駅と大学間は約3分、約580円です。

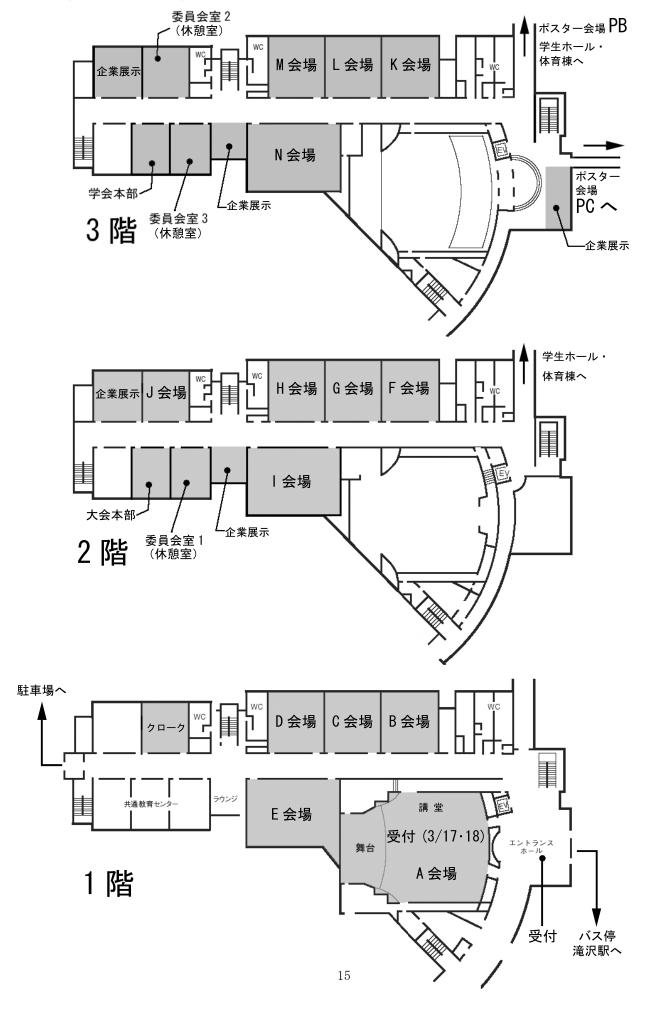
岩手県立大学



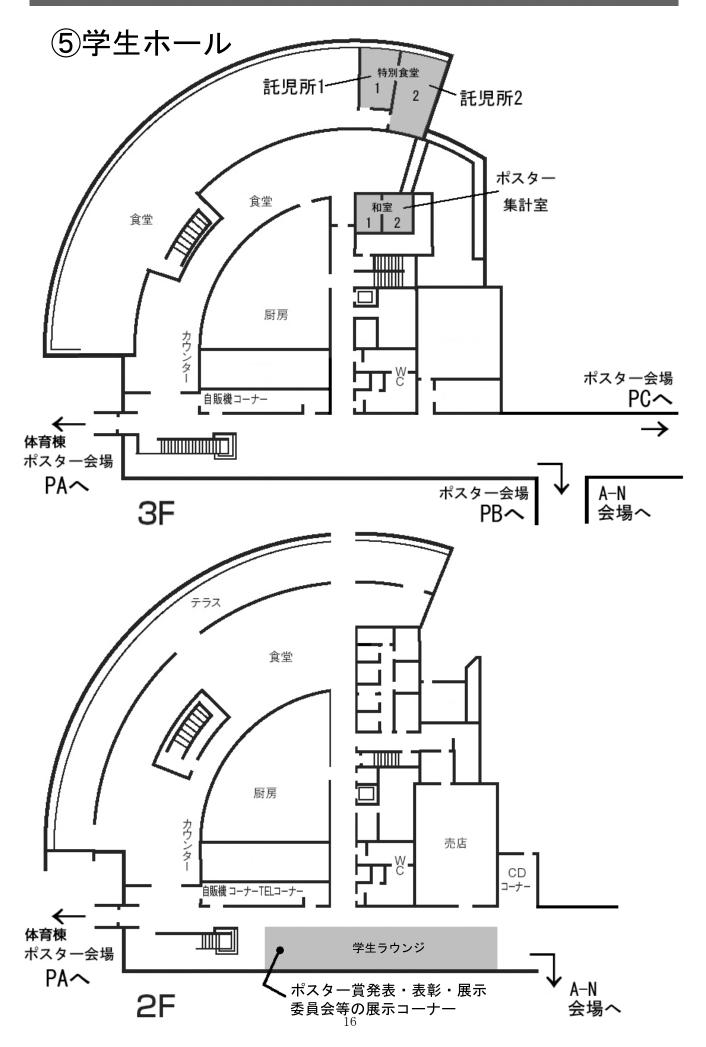
図中番号	建物名	会 場
1	講堂	・受付
	神 王	・シンポジウム, 企画集会: A会場
		・ロ頭発表, シンポジウム, 企画・自由集会: B-N会場
2	+ 海	·委員会室: 1-3
	② 共通講義棟 大会本部・学会本部	·大会本部 ·学会本部
		•企業展示
3	3階西側廊下	•ポスター会場: PB
4	3階東側廊下	•ポスター会場: PC
		•託児所
(5)		・ポスター賞発表・表彰・展示
9	学生ホール	・委員会等の展示コーナー
		・ポスター集計室
6	体 育 棟	・ポスター会場: PA ・ポスター案内デスク

会場案内図岩手県立大学

①講堂 ②共通講義棟

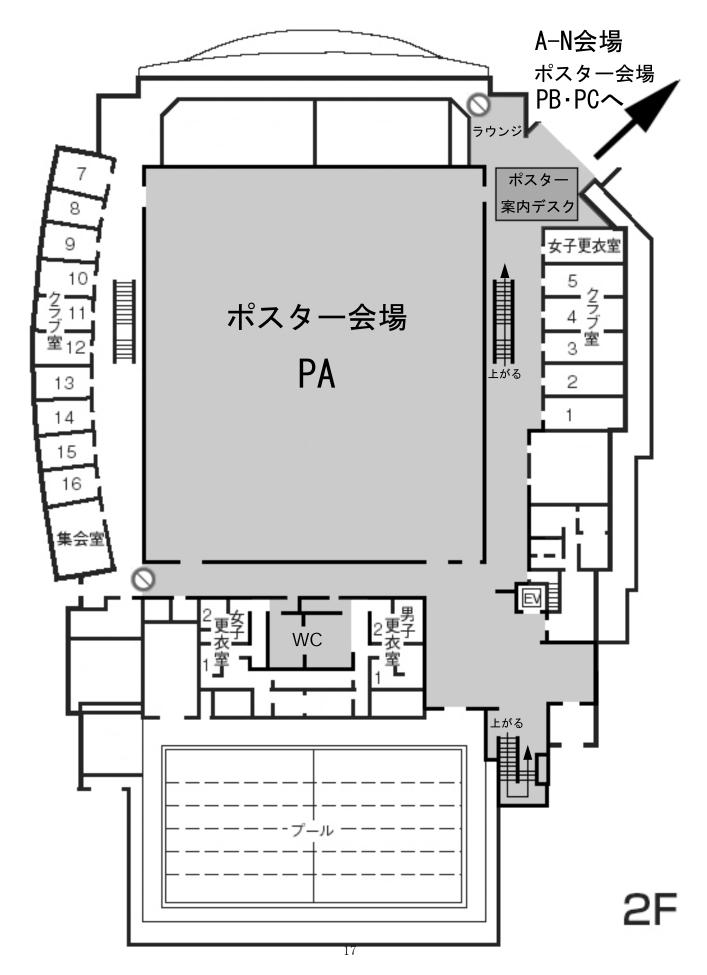


会場案内図岩手県立大学



会場案内図 岩手県立大学

6体育棟 ※着色部は土足で入ることができます。 3階からPB・PC会場へ行くこともできます。

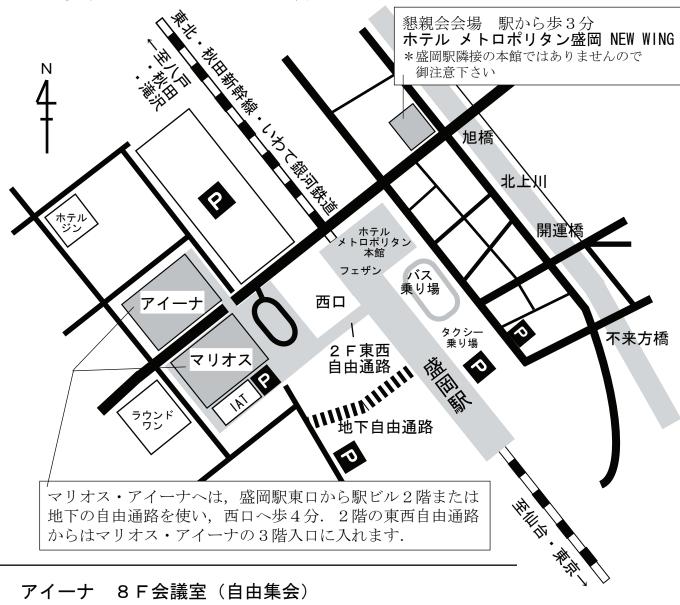


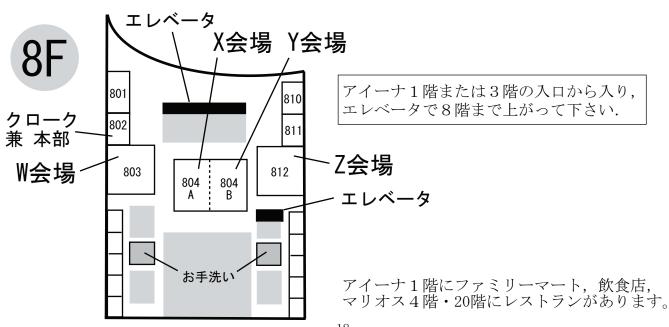
3月20日(金)

総会・授賞式・受賞講演・公開講演会:マリオス 盛岡市民文化ホール大ホール

自由集会:アイーナ 8 F会議室

懇親会:ホテル メトロポリタン盛岡 NEW WING





●「功労賞」「学会賞」「宮地賞」「大島賞」「論文賞」授賞式・受賞記念講演

3月20日(金)10:45~13:30

盛岡市民文化ホール大ホール (マリオス内)(リ会場)

第 13 回日本生態学会宮地賞受賞者・受賞記念講演演題

岸田 治 (京都大学生態学研究センター)

「形を変えるオタマジャクシ:表現型可塑性の進化生態学」

西川 潮 (国立環境研究所環境リスク研究センター)

「淡水生態系のキーストーン種~雑食性エンジニアの機能的役割を解明する」

森 章 (横浜国立大学大学院環境情報研究院)

「撹乱生態学が繙く森林生態系の非平衡性」

第2回日本生態学会大島賞受賞者・受賞記念講演演題

綿貫 豊 (北海道大学水産科学研究院)

「気候変化によるフェノロジーのマッチ・ミスマッチが海鳥の雛成長の年変化を説明する」

第 12 回 日本生態学会 公開講演会

3月20日(金)14:30~17:30

盛岡市民文化ホール大ホール (マリオス内)(U会場)

「数えることで見えてくる! 生物の数の不思議」

企画責任者:第12回日本生態学会公開講演会企画委員会

生態学の教科書である「Ecology」(1972年、C. Krebs 著)によれば、生態学とは「生物の分布と個体数」を明らかにしようとする学問分野です。今日、生物多様性の保全、自然再生、地球温暖化が生態系に及ぼす影響の評価等々、生態学がカバーする領域はきわめて多岐に亘っていますが、生態学の本質は今なお「生物の分布と個体数を調べる」ことにあるといえるのではないでしょうか。例えば、「野生動物と人との共存」のような社会学的な要素の絡む複雑な問題においても、人を含めた対象生物の分布と個体数を明らかにすることが問題解決の基本となると考えられます。

今日、生き物の数を把握し解析する技術と理論は飛躍的に進歩し、さまざまな領域で大きな成果が得られています。生態学において「数を調べる」ことの重要性は、ますます強く認識されるようになっているといえるでしょう。

この公開講演会では「生き物の数」をテーマとして、その不思議、個体数や捕獲数の変動などを中心に、生態学研究の最新の成果をわかりやすく市民に紹介します。生き物の数を把握することの難しさ、数を把握することで見えてくる面白さ、さらにそれが私たちの生活とどのように関わってくるのかを、この講演会を通して市民に広くアピールしたいと考えています。

主催者挨拶

- 1. 齊藤 隆(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター) 「動物の数から何が分かるのか? 野ネズミの個体数変動を例に」
- 2. 正木 隆(森林総合研究所) 「森林の結実を測り、予測する・・・ ブナ豊凶の全国予報への途」
- 3. 岡 輝樹 (森林総合研究所) 「クマとブナの微妙な関係」

休憩

- 4. 吉村 仁(静岡大学創造科学技術大学院) 「素数ゼミの秘密」
- 5. 松田 裕之(横浜国立大学環境情報研究院) 「サンマはいつまで豊漁か?-漁獲量の変動と環境に優しい漁業の未来-」

シンポジウム・フォーラム・企画集会・自由集会 一覧

Symposium number, title, time and room number

3月17日(Tue)

自由集会(15:00-17:00)

W01	乾燥地植物の水・養分利用からみた生存戦略	B 会場
W02	化学物質の生態影響パート3: 影響を見てどうすれば良いかを考える	C 会場
W03	遺伝・発生・生態から探るシロアリのカースト分化と社会性	D 会場
W04	データ解析で出会う統計的問題 GLM から始める統計モデリング	E 会場
W05	琵琶湖の生物多様性は維持できるのか?-レジームシフト進行中の古代湖-	F 会場
W06	次世代 DNA シーケンサーの生態学へのインパクト	G 会場
W07	生態学の進展に寄与する計測技術とは?	H 会場
W08	生態学者よ、街へ出よ!Part5	
	企業環境報告書を読む-生物多様性企業活動ガイドラインとの連動	会場
W09	大台ヶ原の自然再生と生態学	K 会場
W10	進化生態学のための分子系統樹の推定と応用	L会場
W11	生物群集の統一中立理論を楽しむ方法	N 会場
自由集	会 (17:15-19:15)	
W12	生態学における FOSS4G 利用の最前線	B 会場
W13	小笠原の世界遺産申請に向けての外来種研究の現状と研究者の社会的責任	C 会場
W14	特定外来生物カワヒバリガイの分布拡大および被害の現状と将来	D 会場
W15	樹木は水をどのように輸送しているか -樹種 , 木部構造 , 季節変化-	E 会場
W16	湖に面した水田の特性をさぐる-魚の目線から眺める-	F会場
W17	微生物がつなぐ土壌生態系と地上部生態系-北大苫小牧研究林を中心として	G 会場
W18	開花・結実の生理生態〜炭素と窒素の分配をめぐって〜	H 会場
W19	天然林施業の実行可能性	
	-過去の失敗分析に基づいた新たな森林施業研究へ向けて-	会場
W20	ダーウィニズム清算へ、「科学的進化論 (新今西総合説)」決起集会!	J会場
W21	群落談話会−群落学的な視点からとらえた	
	外来植物群落が在来植物群落に与える影響	K 会場
W22	チョウノスケソウの昔、今、未来	L会場
W23	だれでもできる外来生物の分布拡大シミュレーション	N 会場

3月18日(Wed)

シンポジウム (9:15-12:15)

S01	Parasite Infection, Sex Wars and Biodiversity	E 会場
S02	生物の空間分布・動態と生態的特性との関係:マクロエコロジーからの視点	G 会場
S03	アカマツ林の生態学 -日本人に離別されたアカマツ林-	H会場
S04	Physiological and ecological responses of plant communities to elevated CO ₂	l 会場
S05	撹乱の応用進化群集生態学 - 外来侵略アリからクローナル植物まで	K 会場
S06	生態学と持続可能性科学の新しい関係	L 会場
S07	水田をめぐる群集生態学最前線 - ミクロからマクロまで	M 会場
S08	侵入生態学〜外来生物の定着段階を科学する	N 会場
企画集	会(17:30-19:30)	
T01	Process generating habitat associations of woody species	
	∽linking forest dynamic data to habitat association∽	B 会場
T02	休眠の進化生態学	C 会場
T03	琉球諸島の森は世界自然遺産に値するか?	
	やんばる・奄美の現場からの検証	D 会場
T04	群集生態学の新たな挑戦(1)	E 会場
T05	生活史戦略としての樹形変化 -姿を変える樹木たち-	F 会場
T06	進化生態学と系統地理学の接点:	
	集団の歴史的背景が解き明かす適応プロセス	G 会場
T07	東北日本における針葉樹林欠落型の亜高山帯植生成立過程の解明に向けて	
	- 過去の植生史と現在の分布域・樹種特性からの	
	「偽高山帯」問題へのアプローチ -	H 会場
T08	河川敷の薮化・樹林化問題を考える - これまでの治水対策で大丈夫か -	l 会場
T09	砂堆と砂浜の自然と生物多様性	K 会場
T10	多様な菌類研究が生態学にもたらす可能性	L 会場
T11	北東アジアにおける放牧地生態系の再生と持続的利用に向けて:	
	個体群から地域スケールまで	N 会場
フォー	ラム(17:30-19:30)	
U01	科研費・特別研究員制度のよりよいあり方を考える	M会場

3月19日(Thu)

シンポジウム (9:15-12:15)

ノンが.) JA (3.10-12.10)	
S09	ユビキタスジェノタイピングによる生物多様性ホットスポットの	
	包括的生物保全	A 会場
\$10	Isotope applications in ecosystem ecology	E 会場
S11	我々は「生態リスク」とどう向き合うのか?	G 会場
S12	Interrelationship between Phenotypic Diversity of Communities and Ecosystem Function	H会場
\$13	Female mate choice and male-male competition for resources in the crabs	l 会場
S14	気候変動下における統合的生態系管理と生態学の役割:	
	熱帯降雨林の持続的管理と生態系予測の例	K 会場
S15	生物多様性の総合評価-生物多様性条約 COP10 に向けて-	L会場
S16	北東北の縄文社会と環境変動	N 会場
シンポミ	ジウム(14:15-17:15)	
\$17	大型野生動物の保全と管理 - 頑健性の高い調査研究と対策を目指して -	A 会場
S18	Dynamic forest models for prediction and diversity control	E 会場
S19	地球温暖化と向き合う生態学	G 会場
\$20	菌類・植食者などとの相互作用が作り出す森林の種多様性	H 会場
S21	森・里・海のつながりを探る:陸域研究者と海域研究者の連携に向けて	l 会場
S22	陸域生態系の動態を支配する土壌有機物プール:	
	ブラックボックスの解明に向けて	K 会場
S23	トキ野生復帰の最前線	L会場
S24	大規模緑化における森林の遺伝的攪乱、生態系への影響	N 会場
企画集名	会(17:30-19:30)	
T12	アグロエコロジ-研究会 1 1	
	"冬期湛水"は水田生物多様性の再生に貢献しうるか	A 会場
T13	Matter Flow and Ecosystems: "Satellite Ecology" for ecosystem function study	
	from plot to region.	B 会場
T14	ニセアカシアの生態学	C 会場
T15	伊豆諸島の生物地理と生物間相互作用	D 会場
T16	樹木の一斉開花の生態と進化	E 会場
T17	サロベツ湿原の保全再生にむけた泥炭地構造の解明と	
	湿原変遷モデルの構築	F 会場
T18	1+1 2 メタ個体群アプローチが解き明かす生態現象	G 会場

T19	生態系の保全・再生を生態学と人文社会科学から考える-	
	湖沼を事例として	H会場
T20	里山イニシアティブをめざした生物多様性と生態系サービスの評価	会場
T21	気候変動と生態系:フェノロジーを介した生物間相互作用への影響	K 会場
T22	アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 IV	N 会場
フォー	ラム(17:30-19:30)	
U02	生態系機能の広域的理解のための情報基盤整備	L会場
U03	次期学習指導要領での生態・進化の扱い	M 会場
3月	20日(Fri)	
自由集	会 (14:30-16:30)	
W24	海洋大形動物の空間利用を個体の移動軌跡から理解する	₩会場
W25	フェノロジー研究会「花生態の多様さと面白さ」	X 会場
W26	大型水鳥を支える里地生態系の構造、機能、再生技術	Y 会場
W27	3.8%の吸収源はいつまで維持できるか?〜温暖化実験から〜	Z会場
3月	21 日 (Sat)	
企画集	会 (12:00-14:00)	
T23	野外データに潜む自己相関と偽反復	
	-他人事では済まされない統計解析の罠-	A 会場
T24	博物館の生態学・生態系インタープリター協働企画	
	〜生態学の社会教育への新展開〜	B 会場
T25	捕食・被食系の新しい展開	E 会場
T26	東北地方のチョウ類の衰亡と保全活動	F会場
T27	生態ネットワーク - 水田水系を中心に実践・保全から理論まで	G 会場
T28	迅速な適応性-新しい次元の進化生態学	H会場
T29	ミレニアム生態系評価里山里海サブグローバル評価	会場
T30	里地里山域に残存する半自然草地の多様性とその現状	K 会場
T31	植物機能的性質の統合に向けて	N 会場
フォー	ラム(12:00-14:00)	
U04	若手のための学位取得後の多様なキャリアパス支援	L会場
U05	宇宙から見た野生化ヤギによる尖閣諸島魚釣島の生態系変化	M会場

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 E 会場

SO1 Parasite Infection, Sex Wars and Biodiversity

Organizers: Takahisa Miyatake (Okayama University), Zenobia Lewis (Okayama University)

Parasite-induced manipulation of host reproduction is a widespread phenomenon that has profound implications for our understanding of host-parasite population and evolutionary dynamics. In this symposium we will examine the relationships between parasite infection, sexual selection and biodiversity. In particular we will focus on the endosymbiont Wolbachia pipientis, a pervasive parasite of arthropods.

Commentators: Comments from theoretical views
Takehiko Hayashi (Research Center for Environmental Risk)
Akira Sasaki (The Graduate University for Advanced Studies)

- S01-1 Sexual Selection and Wolbachia?
 Nina Wedell (University of Exeter)
- S01-2 Biodiversity, Endosymbiosis and Evolution Takema Fukatsu (AIST)
- S01-3 Multi-level Effects of Wolbachia in the Mediterranean Flour Moth, Ephestia kuehniella Zenobia Lewis (Okayama University)
- S01-4 Feminizing Wolbachia Endosymbiont of Eurema Butterflies Satoko Narita (JSPS Fellow, NIAS)
- S01-5 Mutualistic Wolbachia Infection in Bedbugs Takahiro Hosokawa (AIST)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 G 会場

SO2 生物の空間分布・動態と生態的特性との関係:マクロエコロジーからの視点

企画者: 角谷拓 (東大・農)

同じような環境変化にさらされながら、数を減らす生物がいる一方で、新たな場所へ急速に分布を拡大する生物も存在する。このような生物の空間分布や動態パターンの決定メカニズムの解明は、古くから生態学における重要な課題となってきた。近年では、種の絶滅リスク評価や外来生物の分布拡大予測さらには気候変動への生物の応答予測といった応用的・社会的ニーズも加わり、空間的・時間的に大きなスケールで生じる生態学的事象を対象とするマクロエコロジー分野の発展はめざましい。

マクロエコロジーが対象とする大スケールでの事象は操作実験によるメカニズムの特定が困難な場合が多い。その状況を補うために有効な手段の一つとして、多数の種もしくは機能群を対象にした比較アプローチ (種間比較)がしばしば用いられる。種間比較を行なうことで、どのような進化・生態的特性をもつ種(機能群)がより特定の環境変化に対して脆弱であるか、一方で新たな場所に移入した場合に高い侵略性を発揮するかといった生物の空間分布・動態パターンの決定メカニズムについての知見を得ることが可能になる。

生物の空間分布・動態の決定メカニズムを明らかにすることを目的に種間比較を用いた研究はマクロエコロジーの発展とともにその数を増しているものの、日本国内での例はいまだ少ないのが現状である。本企画では、幅広い分類群を対象に生物の空間分布・動態とその態学的特性との関係を分析した最新の研究を事例に、マクロエコロジーの考え方を紹介することとしたい。

S02-1 マクロスケールにおける鳥類の分布決定要因と生態的特性

- *山浦悠一(森林総研), 天野達也, 楠本良延(農環研), 永田尚志(国環研)
- 802-2 トンボの絶滅リスクと生態的特性との関係 * 角谷拓, 須田真一, 鷲谷いづみ (東大)
- 802-3 河川域における外来植物の侵略性と原産国での生態的特性との関係 * 宮脇成生 (建設環境研究所), 鷲谷いづみ (東大)
- S02-4 外来植物の分布パターンと生態的特性との関係 * 赤坂宗光(国環研),高田雅之,北川理恵(道環研),五十嵐博(北海道野生植物研究所)
- S02-5 植物の絶滅リスクと生態的特性との関係 *大谷雅人(森林総研),石濱史子(国環研),西廣淳(東大)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 H会場

SO3 アカマツ林の生態学 - 日本人に離別されたアカマツ林 -

企画者: 久米 篤 (九州大・農)

アカマツは過去数百年以上にわたって人間社会の存続に不可欠な資源として利用され、その結果、江戸中期には日本各地の人里近郊の森林の多くはアカマツ林となった。しかし、今日、これらのアカマツ林の多くは衰退・消滅し、他の森林植生に置き換わりつつある。このようなアカマツ植生の盛衰については様々な角度から研究が進められており、人による森林利用の停止と、その生態系におよぼす影響が明らかにされている。また、東北地方には南部アカマツ林が残存しているものの、様々な形での衰退が進行しつつある。そこで、本シンポジウムでは、アカマツ林の遷移を様々な角度から俯瞰することによって、地上部の植生変化だけではなく、生態系のプロセス変化としてアカマツ林遷移を理解していくことを目的とする。シンポジウムにおける議論を通じて、里山林の管理放棄の影響を理解し、ひいては新しい管理指針の生態学的な基盤となる議論を進めることを目的とする。

総合討論「アカマツ林の遷移と今後の管理について考える」

- 803-1 アカマツ林の衰退と植生遷移 藤原道郎(兵庫県立大学自然研/淡路景観園芸学校)
- 803-2 アカマツ林遷移とキノコ相の変化 赤石大輔 (能登半島里山里海自然学校)
- S03-3 アカマツ林の分布と地質・地形の関係 *太田 謙(岡山理大・総情数理環境),波田善夫(岡山理大・総情生地)
- S03-4 アカマツ林からシラカシ林への植生遷移に伴う水循環の変化 * 飯田真一(森林総研),田中正,杉田倫明(筑波大学)
- 803-5 アカマツ林の炭素循環 富士北麓剣丸尾のアカマツ林 大塚俊之(岐阜大)
- S03-6 アカマツ林の衰退と栄養塩循環の変化 徳地直子(京都大・農),大手信人(東京大・農)
- 803-7 宿痾マツ材線虫病をかかえた日本のアカマツ林の行方 中村克典(森林総研)
- 803-8 高齢の南部アカマツ林を間伐して成長は好転するか? 正木 隆 (森林総研)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15

会場 I 会場

SO4 Physiological and ecological responses of plant communities to elevated CO2

Organizer: Shuichi Sugiyama (Hirosaki Univ)

Response of biological communities to elevated CO2 is one of the most important issues in plant ecology. To clarify this issue, FACE (free air CO2 enrichment) experiments have been conducted in several countries since 1990. In Japan, rice FACE project started in 1998 in Shizukuishi in Iwate prefecture, and many researchers including ecologists have joined this project. In commemoration of the tenth year of Shizukuishi FACE project, this symposium was organized to discuss influences of elevated CO2 on plant physiological performances, community structure and ecosystem processes.

- SO4-1 Responses of rice plants to elevated [CO2]: Case studies form chamber and rice FACE experiments
 - Toshihiro Hasegawa (Nat. Inst. Agro. Env. Sci.)
- SO4-2 Genomic, Physiological & Ecological Responses of Soybeans to Elevated [CO2]: A Case Study from SoyFACE.

 Elizabeth Ainsworth (USDA ARS, USA)
- SO4-3 Responses of deciduous broadleaf trees to elevated CO2 in mini FACE Takayoshi Koike (Hokkaido Univ.)
- SO4-4 Plant evolutionary responses to the atmospheric CO2 increase Yusuke Onoda (Macquarie Univ.), Kouki Hikosaka (Tohoku Univ.)
- SO4-5 How elevated CO2 influence methane flux and methanogenic bacteria communities in paddy fields
 Shu-ichi Sugiyama (Hirosaki Univ.)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 K 会場

SO5 撹乱の応用進化群集生態学 - 外来侵略アリからクローナル植物まで

企画者: 辻 和希 (琉球大・農)

このシンポジウムでは撹乱をキーワードに分類群を超え、生態学の新たな理論枠の提示を目指す.アリ、サンゴ、そして植物の7割をも占めるとされるクローナル植物には共通性がある.それはそれぞれが生物多様性保全や生態系サービス維持のための鍵と成りうる分類群である事.そして、一旦定着すれば移動が困難な超個体であることなどである.動けない制約ゆえ、撹乱に対しては、相通じる適応戦略が進化している可能性がある.そこで本シンポは以下に例示した基礎・応用的問題群を撹乱への生物の応答という一般的文脈で整理を試みる.(1)定着性生物における生活史上のトレードオフ、(2)外来種侵入でみえる群集理論の新側面、(3)外来種の撹乱環境依存性の理由、(4)撹乱が生物多様性と生態系機能に与える影響、(5)外来植物や外来アリの生活史がしばしば進化生態学理論の直感に反する理由、(6)遺伝的多様性が欠如する外来種がなぜ優占するのかなど.これらは多様ながらすべて群集生態学、進化生態学、保全生物学の基本問題に直結している.

コメンテーター: 高田壮則 (北大・地環研), 酒井一彦 (琉大・熱生研)

805-1 はじめに, 生活史理論がつなぐ超個体の進化, 群集, 保全 辻 和希 (琉球大学・農)

- 805-2 **侵略アリ研究の現状と課題―平衡群集観への挑戦** 辻 和希 (琉球大学・農)
- 805-3 環境撹乱下での、アリのコロニー分割比と拡散距離のトレードオフについて *中丸麻由子(東工大)、高田(北大)、大槻亜紀子(総研大)、辻和希(琉球大)
- 805-4 撹乱を介した樹木萌芽特性による森林群集の制御機構 久保田康博(琉球大学・理)
- S05-5 侵略的クローナル植物研究の現状と課題:イタドリを例として 鈴木準一郎(首都大・理工)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 L 会場

S06 生態学と持続可能性科学の新しい関係

企画者: 谷内茂雄(京大・生態研)

人間活動による生態系の劣化に抗して、生態系サービスや生物多様性を持続的に維持するためには、私たちの社会経済システムの変革を通じた生態系の保全・再生が不可欠となる。このような時代の要請に呼応して、アカデミズムにおいても、生態系を「社会-生態システム(Social-Ecological System)」として包括的に捉える学際的なアプローチが勃興し、持続可能性科学(Sustainability Science)や地球環境学といった名称で、保全生態学の発展の上でも不可欠となる概念と枠組を急速に統合しつつある。このシンポジウムでは、話題提供者による具体的な事例研究をもとに、1. 社会-生態システムのレジリアンス(復元力)向上の条件、2. 社会-生態システムのリスク管理、3. 生態系管理のためのガバナンス促進の条件、4. 持続可能な社会シナリオ構築の方法、の4つの主題から、新しい学問創出の根底にある問題認識、基本となる考え方、今後の課題をわかりやすく解説してもらう。その上で、コメンテータとともに、生態学と持続可能性科学・地球環境学の相互交流による新しい研究の可能性を議論したい。

コメンテータ:齊藤修(早大・高等研)、佐竹暁子(北大大学院・環境科学院)他

- 806-1 旱魃に対して脆弱な社会-生態システムのレジリアンス向上の条件 梅津千恵子(地球研)
- S06-2 コイヘルペスウイルス感染症を事例とした病原生物と人間の相互作用環の解明 川端善一郎 (地球研)
- 806-3 生態系管理におけるコミュニケーションと社会関係資本によるガバナンスの促進 谷内茂雄(京大・生態研)
- S06-4 滋賀県における持続可能な社会シナリオの構築 金再奎(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 M 会場

SO7 水田をめぐる群集生態学最前線 - ミクロからマクロまで

企画者:日鷹一雅(愛媛大・農・農山漁村),大塚泰介(琵琶湖博物館)

生物多様性の概念は今や農村現場に流布するようになり、各地で水田地帯の生物多様性を保全・再生しようとする取り組みがなされるようになってきた。だが、こうした保全・再生事業をよく見てみると、農村にトキ、コウノトリ、メダカ、タガメなどのアイコン生物が戻れば良しとするような、生物多様性偽装とでも

言うべき事例になりがちである。このような保全・再生事業の問題点を改善するには、私たち生態学に関わるものが、生物多様性を理解する上で最も重要な基礎であるはずの(人為を含む)環境諸要因と生物群集との関係、および群集構成種間の関係性について、科学的手法とともに未だ総合的な知見を提供しえていないことにも一因がある。今こそ、水田地帯の保全・再生をより良く進めていくために、水田地帯の生物群集について事例および理論の両面から広範に研究を進め、さらにその成果を総合化して事業に生かしていくことが求められている。本シンポジウムでは、水田地帯のミクロ(微生物)からマクロ(動植物)までの生物群について群集解析を進めてきた先駆者にご参集いただき、水田地帯の群集生態学の現状を総括し、今後の研究の発展を占うとともに、今後の保全・再生事業への寄与についても展望したい。

司会:大塚泰介・日鷹一雅 コメンテータ予定: 奥田 昇(京都大・生態学研究センター) 安定同位体を用いた水田生態系の構造と機能の評価方法」 亀田佳代子(琵琶湖博物館) 「水鳥をめぐる景観レベルの食物網解析の試み」 西原省吾(東京大・農) 「野外実験操作による節足動物群集解析」

- 807-1 水田環境の多様性を微生物から考える 木村眞人(名古屋大・生命農)
- 807-2 水田に魚を放すと、生物どうしの関係が見えてくる 大塚泰介(琵琶湖博物館)ほか
- 807-3 **ギルド構造視点でどこまで水田生物群集を理解できるだろうか?** 日鷹一雅 (愛媛大・農・農山漁村)
- 807-4 鳥類からみた群集構造「サシバの採食と水田地帯の景観利用」 東 淳樹 (岩手大・農)

シンポジウム 3月18日 9:15-12:15 会場 N会場

S08 侵入生態学~外来生物の定着段階を科学する

企画者:西川潮(国環研),内井喜美子(地球研)

コメンテーター:宮下直(東大院・農)

外来生物が新天地に侵入すると,まず,環境に適応し,その後,増殖や分布拡大を経て侵略的外来種(侵入種)となる。侵入種は,捕食や競合,病原菌の媒介などを通じて,在来生態系の構造や機能に甚大な影響を与える。しかしながら,外来生物は白(非侵略的)か黒(侵略的)かの二極に大別されるだけではない。生物学的侵入に伴う環境や生物との相互作用を仔細に観察すると,外来生物と環境,外来生物同士,ならびに外来生物と在来生物の間で実に複雑かつ多様な関係を築いていることが分かってきた。

本シンポジウムでは、外来生物を取り巻く相互作用の多様性科学という観点から、水域から陸域にいたる様々な生物学的侵入の事例を演者の方々に紹介していただく。一般に、生物学的侵入は、主要な環境リスク要因として、保全生態学の中心的テーマとなると同時に、自然実験として、進化学的かつ生態学的現象の解明に有効な場を提供する。総合討論の場では、これらを踏まえ、基礎面ならびに応用面での研究の発展性について議論を深めたい。

SO8-1 外来植物ミチタネツケバナ (アブラナ科) の侵入過程

工藤洋(京大・生態研)

- 808-2 外来病原微生物コイヘルペスウイルスの在来宿主個体群への定着機構 * 内井喜美子, 川端善一郎(地球研)
- 808-3 **陸水域の侵略的エンジニア~成長段階ならびに生息場所に応じた生態影響** * 西川潮,高村典子(国環研)
- 808-4 花資源をめぐる外来マルハナバチと在来マルハナバチの相互作用に、他の外来種が影響する? 国武陽子(城西国際大)
- 808-5 植物群集の被食・分解プロセスにおける外来植物の影響一共存する在来・外来低木種の特性比較から

黒川紘子(横浜国大),Duane A. Peltzer(Landcare Research, NZ),David A. Wardle(Swedish University of Agricultural Sciences)

S08-6 島嶼のトカゲ個体群とその餌生物群集に及ぼす、外来哺乳類(イタチ)と両生類(ヒキガエル) の長期的な影響

長谷川雅美 (東邦大・理・生物)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15

会場 A 会場

S09 ユビキタスジェノタイピングによる生物多様性ホットスポットの包括的生物保全

企画者:井鷺裕司(京大・院・農)

個体数が著しく減少した生物の保全には、遺伝的多様性、遺伝構造、ジーンフロー、遺伝的分化、交配様式、遺伝的荷重、対立遺伝子頻度における経時変化、人工繁殖における遺伝的に適切な交配相手の選定、違法盗掘防止のための個体識別等々、多くの遺伝情報が必要とされる。

本シンポジウムでは、チープ革命ともいうべき近年の遺伝解析技術の発達を活用し、個体数が数十〜数百にまで減少してしまった生物多様性ホットスポットの絶滅危惧種を対象に、現存する全個体の遺伝子型を特定し、その情報を基に、どの様な生物多様性保全アプローチがとれるか議論する。生育地に残存する全個体の遺伝子型を決定することを、本シンポジウムではユビキタスジェノタイピング(ubiquitous genotyping)と呼ぶ

ユビキタスジェノタイピングによる、絶滅危惧種の遺伝的状況に関する知見や、生物保全上の有用性について、異なった履歴によって成立した2つの生物多様性ホットスポット(小笠原諸島と阿蘇山系)の事例をもとに議論する。

- S09-1 ユビキタスジェノタイピング:遺伝解析におけるチープ革命を生物保全にどう取り入れるか 井鷺裕司(京大・院・農)
- S09-2 阿蘇山系における絶滅危惧植物の現状と保全活動 藤井紀行(熊本大),瀬井純雄(熊本県)
- S09-3 ユビキタスジェノタイピングにより見えてきた阿蘇山系の絶滅危惧種の現状 兼子伸吾(京大・院・農),横川昌史(京大・院・農),竹原真理(京大・院・農),井鷺裕司(京 大・院・農)
- S09-4 小笠原諸島の絶滅危惧植物の現状と課題ーユビキタス・ジェノタイピングから何が得られるのか-

安部哲人 (森林総研・九州)

S09-5 小笠原諸島における絶滅危惧種の遺伝的多様性 加藤英寿,森啓悟,加藤朗子,常木静河(首都大学東京・牧野標本館) シンポジウム 3月19日 9:15-12:15

会場 E会場

\$10 Isotope applications in ecosystem ecology

Organizers: Nobuhito Ohte (Department of Forest Science, The University of Tokyo), Ichiro Tayasu (Center for Ecological Research, Kyoto University)

Focus:

Many kinds of isotope techniques have been applied for investigations of the biogeochemical cycling and food web structures of various aquatic and terrestrial ecosystems during past two decades. We attempt to review the background, history and recent progress of isotope related studies, and then to discuss about perspectives for the technical development and new applications, which will be available for ecosystem ecology in near future. The 1st to 3rd topics are basically on biogeochemistry. The 4th to 5th topics are on ecology, and food web studies, etc.

Commentator: Dr. Eitaro Wada (Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, Japan)

- S10-1 Isotope applications in catchment hydrology and biogeochemistry Nobuhito Ohte (Department of Forest Science, The University of Tokyo, Japan)
- S10-2 Marine and estuarine nitrogen cycling revealed by coupled N and O isotopes of nitrate Scott D. Wankel (Department of Organismic & Evolutionary BiologyHarvard University, USA)
- S10-3 Use of geological isotopes in ecology

 Takanori Nakano (Research Institute for Humanity and Nature, Japan)
- S10-4 Food chain length in lakes, streams and islands

 David M. Post (Department of Ecology and Evolutionary Biology, Yale University, USA)
- S10-5 Nitrogen isotopic composition of amino acids as a tool for estimating food web structure

 Naohiko Ohkouchi (Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology, Japan)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15 会場 G会場

S11 我々は「生態リスク」とどう向き合うのか?

企画者:森章(横浜国大・環境情報),三村真紀子(横浜国大・環境情報)

生態系は、人間活動に由来する負荷(汚染物質,生息地攪乱など)により改変されつつある。そこで私たちは、生態系・種・遺伝子レベルで起こり得る「生態リスク」を予測し、管理する必要に迫られている。

生態リスクとは、広義には生態系サービスを低下させるリスクをと定義できる。しかしながら、その意味するところは非常に多岐にわたる。その理由としては、生態リスクを理解/管理する上で、基礎生物学から応用生態学まで関連分野が幅広いこと、対象となる生物多様性の段階的スケールや扱う生態リスクの時間的スケールが様々であること、また、それらの情報をもとにプランや政策をたてる管理者側が期待する情報と研究者が提供する(あるいは提供できる)情報にギャップがあることなどが挙げられる。

いま生態学には、持続可能な生態系の維持管理手法の提示、さらにはそれを可能にするための社会システムへの提言などが求められている。そこで、景観・生態系・種・遺伝子といった各階層に関わる生態系サービスと生態リスクに関する研究、管理プランや政策立案といった場でのリスク管理研究を対象としたシンポジウムを設ける。そして、それぞれの研究対象での生態リスクの定義と応用例、評価・意志決定段階における判断基準、また、研究・実践上の問題点を提示し、共有したい。さらに、それらについて議論することで「生態リスクとはなにか?」を考える場を提供し、今後、異分野間での自由で開放的な議論を促進したい。

- S11-1 化学物質の生態リスク評価: "生態リスク"の起源 * 林岳彦(国環研・環境リスク), 岩崎雄一, 藤井芳一(横浜国大・環境情報)
- S11-2 生態リスクマネジメントにおける留意点-生態系の非平衡性の観点から-森章(横浜国大・環境情報)
- 811-3 森林樹木と生態リスク 保全遺伝学の視点から 津田吉晃(森林総研・森林遺伝)
- S11-4 都市域の緑地計画・管理における生態リスク 田中貴宏 (広島大学・工)
- \$11-5 生態系サービスへの支払いにおける潜在力と課題*サーカー・アシュトシュ,嘉田良平,大野勝弘,森章(横浜国大・環境情報)
- S11-6 企業活動とリスク・コミュニケーション-生物多様性に関わる分析より-香坂玲(名古屋市大・経済)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15 会場 H会場

S12 Interrelationship between Phenotypic Diversity of Communities and Ecosystem Function

Organizers: Yoshinari Tanaka (National Institute for Environmental Studies), Jeremy Fox (University of Calgary), Jon Norberg (Stockholm University), Owen L. Petchey (The University of Shefield)

There is a threat of degraded ecosystem services due to anthropogenic disrupting factors, such as global warming, loss of habitats, invasion of exotic species and chemical pollution. For predicting functional responses by ecosystems to environmental changes a theoretical framework that links the changes in ecosystem properties induced by environmental perturbation to the corresponding changes in ecosystem processes or functions. The present symposium is intended to cover the recent development of trait-based approach for mathematical modelings and data analyses which aggregates community properties in terms of statistics of functional traits within communities, and to give consideration to future scope of the approach in extending resolution to find causal mechanisms for biodiversity-functioning relationship and establishing an analytical framework for ecosystem risk assessment.

Organizer: Yoshinari Tanaka Commentator: Takeshi Miki

- S12-1 The trait-based framework: Understanding environmental change and biotic responses Jon Norberg (Department of Systems Ecology, Stockholm University, Sweden)
- S12-2 The Price [Equation] of Species Loss

 Jeremy Fox (Department of Biological Sciences, University of Calgary, Canada)
- S12-3 The phenotypic variance-covariance structure and ecological interactions as determinants of trait dynamics under changing environment

 Yoshinari Tanaka (National Institute for Environmental Studies)
- S12-4 How species traits are linked to functional diversity and ecosystem function Owen L. Petchey (Department of Animal and Plant Sciences, The University of Shefield)

会場 [会場

S13 Female mate choice and male-male competition for resources in the crabs

Organizers: Koga T (Wakayama Univ), Matsumasa M (Iwate Medical Univ)

Female mate choice and male-male competition for females and/or the resources which females need to breed have been studied intensely since the birth of behavioral ecology. As the field has grown, many ideas about these components of sexual selection have changed drastically. Early research was often conducted under natural conditions or by simple experiments with stable conditions. However, drastic spatio-temporal changes often occur in the actual environment, and consequently, evidence that the decisions of individuals depend on the costs and benefits of fights, courtships and mate choice under changing conditions has been increasingly reported. Here, we will present studies of this field using fiddler crabs, a taxon where there has been much recent research on sexual selection. In addition, two related topics in other crab species will be presented. To conclude, we hope to discuss the present situations and perspectives of this field.

- S13-1 Introduction, and Increased predation risk and acquisition of a mate jointly alter the outcome of territorial fights

 Koga T (Wakayama Univ)
- S13-2 Sperm allocation in response to a temporal gradient in female reproductive quality in the stone crab, Hapalogaster dentata (in Japanese)
 Sato T (Seikai National Fisheries Research Agency)
- S13-3 Female choice for wave height in the fiddler crab Uca perplexa (in Japanese) Murai M (Univ of the Ryukyus)
- S13-4 Physiological costs of waving behavior and sexual selection in U. perplexa Matsumasa M (Iwate Medical Univ)
- S13-5 Female mate choice and the evolution of synchronize courtship in U. mjoebergi Reaney L (Univ of London)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15 会場 K会場

S14 気候変動下における統合的生態系管理と生態学の役割:熱帯降雨林の持続的管理と生態 系予測の例

企画者:北山兼弘,武生雅明,長谷川元洋

気候変化や土地利用変化によって生態系の劣化が今世紀末に向かって続くことが予測される中、生態学には、変動環境下で生態系を持続的に管理するための手法開発という新たな視点が求められている。これを達成するためには、生態系の予測能力向上が不可欠である。熱帯降雨林は最も急激な改変を受けている生態系だが、今後も土地利用と気候変化の影響によって急激に劣化するものと危惧される。熱帯降雨林には、木材資源の持続的供給と生物多様性の保全という、互いに矛盾した生態系サービスが期待されている。私たちは、変動的な環境下で木材生産と生物多様性保全を調和させるための研究をマレーシア・サバ州デラマコットで行っている。課題の1つが、気候変化や土地利用をシナリオに組み込んだ熱帯林生態系の長期予測と持続的管理手法の開発である。衛星データや生態系モデルを併用した私たちの研究を紹介しながら、持続的生態系管理における生態系予測の役割について考えたい。

S14-1 Detecting the reduction of tropical rain forests using satellite data and a future projection

Andreas Langner (森林総研・関西)

- S14-2 熱帯降雨林生態系への気候変動と伐採の影響:生態系モデルを用いた熱帯降雨林の長期動態の 予測
 - * 今井伸夫, 喜多智, 北山兼弘(京大・生態研)
- S14-3 上空からのネストセンサスと地理情報を用いたオランウータンの生息適地選定モデル * 武生雅明, 松林尚志, 若松伸彦, 中園悦子(東京農大)
- \$14-4 カメラトラップによる熱帯降雨林ほ乳類動物群集の広域把握 * 鮫島弘光, 北山兼弘(京大・生態研)
- S14-5 生態系の持続性指標としての群集組成

*長谷川元洋,服部力,末吉昌宏(森林総研),吉田智弘(東京農工大)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15 会場 L 会場

S15 生物多様性の総合評価-生物多様性条約 COP10 に向けて-

企画者:中静透(東北大学大学院生命科学研究科,生物多様性総合評価検討委員会), 永津雅人(財団法人自然環境研究センター)

2010年は生物多様性条約 (CBD) が掲げる 2010年目標 (2010年までに生物多様性の損失速度を顕著に減少させるという目標)の達成状況を評価する年であり、国際的に、地球規模の生物多様性の評価が行われている。2010年の CBD の第 10 回締約国会議 (COP10) は日本で開催予定であり、また第 3 次生物多様性国家戦略においても「生物多様性の総合評価を実施する」と示されたことなどから、生物多様性の総合評価を行い、国内外へ広くアピールすることが強く求められている。

これを受け、本年度より日本における生物多様性の総合評価が、環境省の設置する生物多様性総合評価検 討委員会により開始された。今後およそ2ヵ年をかけて、生物多様性の状況を把握するための指標の開発と それらの指標を用いた総合評価を行うこととしている。

本シンポジウムでは、これまでに検討された指標及び評価結果等を中間報告として発表し、多くの生態学者に広く意見を求めることで、よりよい指標開発や評価を進めていくことを目的とする。中間報告、講演に続き、総合討論を行う。

- S15-1 生物多様性総合評価の中間報告
 - 中静透(東北大学大学院生命科学研究科,生物多様性総合評価検討委員会)
- S15-2 植物レッドデータブックを基にした絶滅リスク評価とホットスポット解析 矢原徹一(九州大学大学院理学研究院)
- \$15-3 指標種を用いた里地里山の生物多様性の評価と空間生態学モデルを用いた地図化・将来予測 * 鷲谷いづみ, 角谷拓, 西原省吾, 須田真一(東京大学大学院農学生命科学研究科)
- S15-4 生物多様性の評価と生態系のリスク評価
 - *松田裕之(横浜国立大学環境情報研究院),田中嘉成(国立環境研究所環境リスク研究センター)

シンポジウム 3月19日 9:15-12:15 会場 N会場

\$16 北東北の縄文社会と環境変動

企画者:湯本貴和(総合地球環境学研究所),山田昌久(首都大学東京)

三内丸山遺跡(青森)や御所野遺跡(岩手)など、縄文期の大型遺跡の発掘調査や実験考古学の進展で、 北東北の植生変遷や縄文人の植物利用あるいは植生管理などについての知見が蓄積され、従来の縄文社会 と環境との関係についてのイメージが大きく変貌しつつある。たとえば、考古遺物や堆積花粉、現生植物 DNA の解析などから、縄文人によるクリ林の管理や北海道へのクリの持ち込みなど、生態学的にみても現在の植生や里山を考えるために興味深い情報が多く含まれている。今回のシンポジウムでは、植生史や実験考古の立場から、最新の学問的知見を紹介するとともに、現在の北東北の植生を考えるときに、どのような意義があるのかを検討したい。

司会:湯本貴和(総合地球環境学研究所)・山田昌久(首都大学東京) 総合討論「縄文里山を考える」

- S16-1 北東北の植生変遷と環境変動 辻誠一郎 (東京大学)
- \$16-2 花粉からみた縄文のクリ林 吉川昌伸(古代の森研究舎)
- S16-3 建物柱材の年輪解析からみた木材利用 木村勝彦(福島大学)
- S16-4 縄文人の森林交渉カー実験考古学からのアプローチ 山田昌久(首都大学東京)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 A 会場

S17 大型野生動物の保全と管理 - 頑健性の高い調査研究と対策を目指して -

企画者:室山泰之(兵庫県立大学)

野生動物の保全や管理においては、さまざまな時間スケールや空間スケールの調査研究や行政施策が求められる。とくにヒグマ、ツキノワグマ、シカ、イノシシなどの大型野生動物では、食物資源量や気候変動などさまざまな要因が複雑に個体群動態や分布の変化に影響するため、必要な情報を収集し続ける調査研究体制が不可欠である。一方、人身被害や農林業被害、生態系被害などについては、その時点で明らかになっている科学的知見にもとづき、最適と考えられる行政施策を確実に実施しなければならない。野生動物の保全と管理を適切に推進するには、このような調査研究と行政施策をうまく連携させながらバランスよく遂行することが重要であり、そのためには、地域固有のさまざまな課題に対応しながら、継続して調査研究を実施し行政施策に反映するための「頑健性」が求められる。

今回の集会では、絶滅が危惧されている一方で集落への出没や人身事故が問題となっているクマ類と、個体数増加による農林業被害や植生破壊が問題となっているシカについて、異なる管理手法を展開してきた北海道と兵庫県の事例を示し、大型野生動物の保全と管理における「頑健性」の重要性について議論する。

趣旨説明・司会:室山泰之(兵庫県立大学)

- S17-1 ヒグマ個体群の保全と危機管理 小平真佐夫(知床財団)
- S17-2 ツキノワグマ絶滅危惧個体群における学習放獣と効果検証 横山真弓(兵庫県立大学)
- S17-3 エゾシカの管理と個体数の動向把握 宇野裕之(道環境科学研究セ)
- S17-4 管理のための個体群動態予測に求められる3つの頑健性 坂田宏志(兵庫県立大学)

会場 E 会場

S18 Dynamic forest models for prediction and diversity control

Organizers: Takashi Kohyama (Hokkaido University), Takeshi Ise (FRCGC-JAMSTEC)

Forest dynamic models, using individual-based approach and partial differential approximation, are used to integrate physiology, biogeochemical cycling, demography and community processes with a variety of monitoring data. Models are applied to global-scale prediction of environment change as well as regional examination of forest management to sustain tree species diversity. These model studies will also contribute to answer questions of basic ecology, such as maintenance mechanisms of biodiversity, biome boundary formation, and its dynamics. This symposium provides an opportunity to learn the state of art of forest dynamic models and to discuss future direction.

近年、個体ベースモデルや動態方程式モデルによる森林動態モデルの開発が進み、生理、物質循環、個体群統計、群集の諸過程の野外データに基づく検証力のあるシミュレーションが試みられるようになってきた。こうしたモデルは、広域スケールや全球スケールの環境変化予測に適用されるとともに、地域スケールでは樹木種多様性を維持するような熱帯林の林業施業手法の検討にも用いられつつある。一方でこれらのモデル研究は、多様性維持機構や森林帯境界形成・移動メカニズムといった、基礎生態学における未解明な課題にも挑戦している。本シンポジウムでは、こうした動的森林モデルの最新の現状を紹介、レビューする。

- S18-1 The impacts on meteorological variability on forest dynamics and composition Paul Moorcroft (Harvard University)
- S18-2 Multi-use forest ecosystem management: the necessity of being spatial Matthew Potts (University of California, Berkeley)
- S18-3 Local applications of a dynamic vegetation model SEIB-DGVM for prediction and control of vegetation structure and function
 Hisashi Sato (FRCGC-JAMSTEC)
- S18-4 Simulating the two-way feedback between terrestrial ecosystems and climate: importance of forest ecological processes on global change

 Takeshi Ise (FRCGC-JAMSTEC)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 G 会場

S19 地球温暖化と向き合う生態学

企画者:伊藤昭彦(国環研,地球フロンティア),原登志彦(北大低温研,地球フロンティア),彦坂幸毅 (東北大院)

地球温暖化問題への関心はかつてないほど高まっており、生態学には持続可能な社会の実現に向けた研究と提言が期待されている。これまで IGBP などの枠組みで、植物の高 CO2 濃度暴露実験、長期モニタリングによる温暖化影響の早期検出、気候 - 生態系フィードバックのモデル解析などの研究が、温暖化問題に対応した研究として進められてきた。しかし、複雑多様な生態系の長期応答に関する理解は依然として不十分であり、将来予測には大きな不確実性が残されているのが現状である。また、今日では生態学は生理生態学から地球生態学まで対象・スケールや研究手法が分化してきており、温暖化影響をとってみても総合的な理解は逆に困難さを増している。本シンポジウムの目的は、生態学に各分野における温暖化問題に対応した研究の現状について紹介すること、および各研究者の立場から見て不十分な点や将来的な重要性が感じられる問題について意見交換をすることである。実験観測とモデル研究の間のギャップは、度々議論される点であるが、ここでは広い観点での提言を期待している。総合討論では、温暖化問題に向き合うための、各生態学分

野の視点の違いを踏まえた集約点について考えてみたい。

総合討論 コメンテータ:河田雅圭(東北大院)

- S19-1 **観測からプロセス研究そして全球モデルまで:その近年の動向** 和田英太郎(地球フロンティア)
- S19-2 地球温暖化研究における生態系モデルの役割と課題 伊藤昭彦(国環研、地球フロンティア)
- S19-3 地球環境変化予測のための植物機能のモデル化に向けて 彦坂幸毅(東北大院)
- \$19-4 タワーフラックスネットワークから見える陸域生態系の炭素収支 平田竜一(農環研)
- S19-5 大気 森林生態系モデルによる森林植生動態とエネルギー・物質収支の将来予測研究 戸田求・原登志彦(北大, FRCGC)
- S19-6 『地球温暖化問題』における土壌生態系研究の役割 金子信博 (横浜国大)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 H会場

S20 菌類・植食者などとの相互作用が作り出す森林の種多様性

企画者:清和研二(東北大学),大園享司(京都大学)

これまで温帯林の種多様性は光や土壌など非生物的な環境との関連を中心に説明されてきた。しかし、熱帯での多くの研究が示すように、植物の病原菌や共生菌、さらには植食者である昆虫・哺乳類などが植物の動態や植物間の相互作用を大きく左右することで、森林の種多様性の維持に大きく関わっていることが示されている。

森林の群集構造が出来上がる過程で、ベースとなるのはギャップや地形によって変化する光、水分、栄養 塩類等の無機的な環境のヘテロ性だと考えられる。さらにその基盤の上で、植食者や菌類などとの狭いスケ ールでの相互作用が群集構造の決定に大きく関わっていると考えられる。これまで、森林群集の動態や多様 性を決める要因として、無機的な環境のヘテロ性や樹木間の相互作用、さらには菌類や植食者との関係など が個別にそれぞれのスケールで説明されてきたが、それらの相互の関連性も、これから視野に入れる必要が あるだろう。

本シンポジウムでは森林の種多様性を説明する多くのモデルから、特に、生物間、それも病原菌や共生菌さらには植食者との相互作用を仮定したものに絞り、最近の意欲的な研究を紹介したい。

- \$20-1
 主旨説明

 清和研二(東北大・院・農)
- S20-2 地上部における菌類との相互作用が作り出す森林の種多様性 大園享司(京都大学・院・農)
- S20-3 地下部における菌類との相互作用が作り出す森林の種多様性 谷口武士(鳥取大学・院・農)
- S20-4 Janzen-Connell 仮説の温帯林での有効性 * 山崎実希, 清和研二(東北大・院・農)

- S20-5 物質分配から見た成長と生存のトレードオフモデル * 今治安弥 , 清和研二 (東北大・院・農)
- \$20-6 シカおよびササとの相互作用が作り出す森林の種多様性 *日野輝明(森林総研関西),伊東宏樹(森林総研多摩),高橋裕史(森林総研関西)
- S20-7 **種子捕食者の選択的資源利用と森林の種多様性** *島田卓哉(森林総研・東北),高橋明子(京都大学・院・農)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 I 会場

S21 森・里・海のつながりを探る:陸域研究者と海域研究者の連携に向けて

企画者:仲岡雅裕(北大・フィールドセンター), 向井宏(京大・フィールド研), 白山義久(京大・フィールド研)

近年の生態系研究の広域化に伴い、陸域生態系と海域生態系の間には物質や生物のつながりを介したさまざまな相互作用があり、お互いの動態に大きな影響を与えていることが明らかになってきた。その重要性の認識は、漁業従事者による植林事業に見られるように、生態系保全や管理の現場にも広がりつつあるが、その相互作用はあまりにも複雑であるため、科学的な理解が十分に進んでいるとは言えない。特に、日本においては、陸域および海域を研究対象とする研究者の多くが異なる学会に所属しているケースが多く、研究交流も十分とは言えない状況にある。今後の研究の進展のためには、研究対象域および研究分野を超えたより深い連携が必要であると考えられる。

沿岸域で起こりつつあるさまざまな環境問題や社会問題に対して、近年、日本の沿岸環境研究に関わるさまざま学会(日本海洋学会、日本水産学会、土木学会、日本水産工学会等)が連携して、「沿岸環境関連学会連絡協議会(沿環連)」を組織し、沿岸域の保全や利用、情報共有、環境教育・啓発に関するさまざまな活動に取り組んでいる。そこで、日本生態学会大会企画委員会では、沿環連の共催により本シンポジウムを企画し、上記テーマについてさまざまな角度からの話題提供および議論を行い、今後のより幅広い連携に向けた研究交流を図ることとした。話題提供は上記テーマに関連する研究課題に積極的に取り組んでいる生態学会会員・非会員が行う予定である。

コメンテーター:中静透(東北大)、灘岡和夫(東工大)、鎌内宏光(京大)

S21-1 天塩川プロジェクト; 流域生態系機能と土地利用変化の関係 柴田英昭(北大・フィールドセンター), Nina Ileva(北大・環境), 佐藤冬樹(北大・フィー ルドセンター), 上田宏(北大・フィールドセンター)

- S21-2 半閉鎖的内湾における陸域起源有機物の河口域生態系への寄与 富永修(福井県立大・生物資源)
- S21-3 天竜川・遠州灘流砂系の土砂動態 佐藤慎司 (東大・工)
- S21-4 京大フィールド研の森里海連環学と教育研究活動 山下洋(京大・フィールド研)
- S21-5 気仙沼での漁業者の実践について 畠山重篤(気仙沼「牡蠣の森を慕う会」/京大・フィールド研)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 K 会場

S22 陸域生態系の動態を支配する土壌有機物プール:ブラックボックスの解明に向けて

企画者:和穎朗太(農業環境技術研究所),藤井一至(京都大・農),平舘俊太郎(農業環境技術研究所)

土壌には、大気の約2倍、陸上植物バイオマスの約3倍の炭素が有機物として蓄積されており、これらは地球温暖化に伴ってCO2の発生源になることが危惧されている。しかし、土壌有機物の分解・蓄積メカニズムやその化学的実態に関する基礎的な知見は十分ではない。このため、土壌からのCO2フラックスを予測する上で、土壌有機物の正体がわからないまま、温度、湿度、リターの質といった「分解速度」を制御する因子との相関関係をもとに論ずるしかなく、「ブラックボックス」アプローチを取らざるをえない。近年の土壌学分野における土壌有機物研究の発展は著しく、土壌有機物の化学構造や分解・蓄積メカニズムについて新知見が次々と発表されている。陸域の炭素循環は、大気と植生のガス交換という現象のみならず、栄養塩動態および根や微生物の生育環境の制御など土壌有機物を介した生態系機能とも密接に関わっており、多くの分野の研究者が結集して研究を進めなければならないステージにあるだろう。本シンポジウムでは、生態学における炭素循環研究を overview するとともに、土壌学にあまり馴染みのない方々にもこれらの新知見をわかりやすく紹介し、土壌の持つ炭素貯留機能や生態系機能の理解につなげたい。

S22-1 趣旨説明

和穎朗太(農環研)

- S22-2 生態学における炭素循環研究: Overview 小泉博(早稲田大・教育・総合科学)
- S22-3 森林生態系における溶存有機物の動態と機能 藤井一至(京都大・農)
- S22-4 比重およびサイズによる土壌有機物の分画:各画分の量・分解速度およびその制御因子 和穎朗太(農環研)
- S22-5 安定的に貯留される土壌有機物の化学的実態:化学構造的特徴および蓄積メカニズム 平舘俊太郎(農環研)
- S22-6 シュミレーションモデルによる土壌炭素動態の長期・広域評価 白戸康人(農環研)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 L 会場

S23 トキ野生復帰の最前線

企画者:関島恒夫(新潟大・院・自然科学),河口洋一(九大・院・工学)

2008 年秋、我が国で野生絶滅したトキが、佐渡島の空に放鳥された。これは、一度野生絶滅した種を自然界に甦らせるという壮大な国家プロジェクトであり、我が国ではコウノトリに続いて2番目の事例となる。佐渡島では、トキが再び空に舞う姿を夢見て、NPOや行政諸機関がその生息環境となる河川、森林、水田などの環境整備を急ピッチで進めており、その取り組みは点から面の活動に少しずつ広がりを見せている。しかし、未だに地域限定的な印象を否めず、全島的な広がりを見せていない。その背景として、トキの野生復帰を推進する関連諸機関の組織横断的なネットワークが十分機能せず、トキを佐渡に定着させるという最終ゴールに向けた具体的かつ統一的な生息環境再生に向けたシナリオが未だに描けていないことも一因にある。トキの野生復帰に向けた自然再生に、今、何が求められているのか?市民、行政、研究者それぞれの立場からの最新の取り組みを紹介する。

S23-1 トキの島再生プロジェクトが目指す再生シナリオ

島谷幸宏(九大・院・工学)

- S23-2 トキのエサ場づくりマップの実践と定着 生玉修一(農林水産省・北陸農政局)
- S23-3 トキの野生復帰を支える行政組織のネットワークづくり 岩浅有紀(環境省・佐渡自然保護官事務所)
- **S23-4** 市民活動をベースにした地域再生の取り組み 竹田純一(里地ネットワーク)
- S23-5 トキと暮らす郷づくり一認証制度一 渡辺竜五(佐渡市・農業振興課)

シンポジウム 3月19日 14:15-17:15 会場 N会場

S24 大規模緑化における森林の遺伝的攪乱、生態系への影響

企画者:津村義彦(森林総研), 戸丸信弘(名古屋大)

近年、全国で広葉樹植林が盛んに行われている。広葉樹種苗には配布区域の法的な制限がないため、全国どこからでも入手が可能である。植物集団は長期的な気候変動に対応してその分布域を変遷させながら生き残ってきている。同一種でも地理的に遺伝的な違いが生じていることが多い。遺伝的に異なる集団を人為的に混ぜてしなうことは、これまでに長い年月をかけて自然が作り上げた遺伝構造を壊してしまうことになる。そのため異なる環境で生育した種苗を植栽すると、在来集団への遺伝的攪乱などの影響がでる可能性がある。本シンポジウムでは遺伝的攪乱の問題点、主要緑化広葉樹種の種苗の配布区域設定のためのガイドライン策定、実際に由来の異なる種苗を植栽した場合の問題点などについて講演して頂き、大規模緑化における遺伝子攪乱問題及びその対策について議論する。

S24-1 遺伝子攪乱問題と主要広葉樹種の遺伝構造

津村義彦,上野真義,松本麻子,津田吉晃,吉丸博志,武津英太郎(森林総研),斉藤陽子,内山憲太郎,井出雄二(東京大),青木京子(京都大学)

- S24-2 Impact of colonization and bottlenecks on genetic diversity in natural species: confronting theoretical predictions and observed results.

 Frederic Austerlitz (Universite Paris-Sud)
- 824-3 葉緑体・核 DNA と形態形質の系統地理学的解析にもとづくブナの種苗配布区域設定の試み 高橋 誠 (森林総研), 平岡宏一, 戸丸信弘 (名古屋大)
- S24-4 ソメイヨシノとサクラ属野生種との交雑による遺伝子攪乱 向井 譲 (岐阜大)
- S24-5 複数産地由来の苗木が植栽されたブナ造林地における生育状況の比較一地域性種苗を用いる必要性を示す実例として-

小山泰弘(長野県林業セ), 陶山佳久(東北大)

S24-6 遺伝子攪乱シミュレーションに基づく遺伝的ガイドライン策定の試み 岩田洋佳(中央農研)

U01 科研費・特別研究員制度のよりよいあり方を考える

主催:常任委員会 矢原徹一

生態学をふくむ基礎科学の発展にとって、科研費・特別研究員制度が果たす役割はきわめて大きい。したがって、その制度設計は、基礎科学の将来を左右するといっても過言ではない。この点に鑑み、日本学術振興会では平成15年7月に「学術システム研究センター」を設置し、第一線の研究者にプログラムオフィサー(任期3年)を委嘱し、研究者の意見を聞きながら科研費・特別研究員制度の改善をはかってきた。生態学分野では、矢原が平成18-20年度のプログラムオフィサーに選ばれ、科研費・特別研究員事業に関わってきた。科研費・特別研究員制度を今後さらに良いものにするためには、プログラムオフィサーを介して、日本学術振興会と研究者コミュニティの意思疎通をはかることが重要だろう。このフォーラムの目的は、両者のコミュニケーションの場を設け、日本学術振興会による制度改善の努力を現場に伝えるとともに、現場の声を日本学術振興会に伝え、今後の改革に生かすことである。

2題の講演のあと、審査員経験者・申請者からのコメントにもとづいて、総合討論を行なう。

科研費・特別研究員制度の概要

宮嶌和男 (日本学術振興会)

科研費・特別研究員制度のあり方ー学術システム研究センター専門調査員の経験から 矢原徹一(九大・理)

フォーラム 3月19日 17:30-19:30 会場 L会場

U02 生態系機能の広域的理解のための情報基盤整備

主催:大規模長期生態学専門委員会 日浦勉(北大・苫小牧研究林)

生態学的現象の広域的理解や、多様なスケールでの生態系観測を可能にするため、さまざまなデータベースの相互利用や観測分野のネットワーク間で連携を進める動きが加速している。植物の機能的性質の広域データベース構築、モニタリング 1000 の統一プロトコル、JapanFlux によるフラックスタワー観測で行う微気象学的手法、JaLTER による生態学的方法などを統合することによって、生態系機能の広域的かつ高精度な理解を促進させることが期待できる。また、衛星観測データとモデルの利用により、これら多点で得られた理解を面的に拡張することが期待されている。

本集会では、連携研究の情報基盤整備にむけて、各分野のデータベースの整備状況把握と実現すべき情報 基盤の展望を共有したい。また、そのような情報基盤の整備に向けて生態学コミュニティが取るべき道筋を 議論したい。

司会:日浦勉(北大・苫小牧研究林)

コメンテーター: 未定

モニタリングサイト 1000 (森林・草原調査) のデータベースの現状と展望

石原正恵・豊田鮎(自然環境研究センター)

植物機能的性質の統合にむけて

黒川紘子(横国大・環境情報)

連携研究のための情報基盤とエコインフォマティクス技術

小川安紀子(国立環境研)・大場真(国立環境研)

会場 M 会場

フォーラム 3月19日 17:30-19:30

U03 次期学習指導要領での生態・進化の扱い

主催:生態学教育専門委員会 嶋田 正和(東大・総合文化・広域)

生態学教育フォーラム(企画:生態学教育専門委員会)

次期学習指導要領における生態・進化の扱い

企画者:嶋田正和(生熊学教育専門委員長)

1999 年度に発表された現行学習指導要領は、生物分野は「理科総合 B」「生物 I」(3 単位)「生物 II」(3 単位)に分かれ、85万人の高校生が履修しセンター入試の出題範囲になる「生物 I」には、生態や進化の単元は含まれないという不備が見られる。次期学習指導要領は、2009年1月頃を目処にプレス・リリースされる予定で、教科書の構成は「生物基礎」(2 単位)と「生物」(4 単位)である。「生物基礎」では、第1編「生物と遺伝子」の冒頭で進化系統の概念である生物の共通性と多様性を学び、第3編「生物の多様性と生態系」では、植生と遷移、気候とバイオーム、生態系の物質循環、生態系のバランスが配置される。「生物」では、第4編「生態と環境」、第5編「生物の進化と系統」が配置される。このように、同じ単元が入門編と上級編の2段階で登場するスパイラル方式を取り入れている。

このような次期学習指導要領では、どのように高校での授業内容や大学受験が変わるだろうか?また、大学での授業へとどのように接続すればよいだろうか?――4人の話題提供をもとに、聴衆も含めて議論してみたい。

話題提供のプログラム (各講演につき 20 分話題提供+質疑応答 5 分=計 25 分) 最後に、総合討論 (20 分)

はじめに一次期学習指導要領の大きな改訂点:生態・進化の扱い

嶋田 正和 (東大・総合文化・広域)

次期学習指導要領に対応した生態分野の授業

早崎 博之(東京都立江北高等学校)

進化の授業はこう変わる一次期学習指導要領の進化分野ー

中井 咲織 (立命館宇治中学校・高等学校)

次期学習指導要領が受験生に与える影響は?

藤井 恒(代々木ゼミナール・理数研セミナー講師)

フォーラム 3月21日 12:00-14:00

U04 若手のための学位取得後の多様なキャリアパス支援

主催:常任委員会、将来計画専門委員会 半場祐子(京都工繊大),可知直毅(首都大学東京大学院)

将来計画専門委員会では、生態学分野の若手研究者支援や男女共同参画に生態学会としていかに貢献できるかについて検討をしてきました。その一環として、生態学分野の学位取得者のための多様なキャリアパスをテーマにしたフォーラムを企画しました。

このフォーラムでは、ノンアカデミックなキャリアパスの会員による話題提供とグローバル COE の中で実施中の博士課程修了者やポスドクのキャリア支援事業の紹介を通して、生態学分野での若手の活躍の場の将来性と可能性について考えたいと思います。また、生態学会が加盟している「男女共同参画学協会」が2007 年秋に実施した大規模ウエブアンケートの結果から、若手のキャリアパスにかかわる項目についてもご紹介します。

将来のキャリア形成について不安を感じている若手会員、若手支援について関心のある会員の参加を期待しています。

このフォーラムは、常任委員会、将来計画専門委員会、東北大学・環境適応グローバル COE、北海道大学・ 統合フィールド環境科学グローバル COE が共催します。

多様なキャリアパスに対する若手の意識一男女共同参画大規模アンケート結果から

可知直毅 (将来計画専門委員長/首都大学東京大学院)

いま企業に求められる環境系の人材とは

足立直樹 (株式会社レスポンスアビリティ 代表取締役)

自分のキャリアを活かす道一研究者を支援する仕事に携わって 三宅恵子(新潟大学女性研究者支援室 特任准教授)

東北大学「生態適応 GCOE」における人材育成と若手キャリアパス 中静 透(東北大学大学院・生命科学研究科 拠点リーダー)

GCOE 統合フィールド環境科学(IFES-GCOE)のキャリアパス支援 山中康裕(北海道大学大学院・環境科学院 拠点リーダー)

フォーラム 3月21日 12:00-14:00 会場 M会場

U05 宇宙から見た野生化ヤギによる尖閣諸島魚釣島の生態系変化

主催:自然保護専門委員会 横畑泰志

企画者らは、野生化ヤギによって大きな変化を受けている尖閣諸島魚釣島の現状を、リモートセンシングの技術を用いて追跡している。イコノスや Quickbird、ALOS (だいち) のような解造度の高い衛星画像が比較的容易に入手できるようになり、そのデータの加工や分析の手法も多様化しているため、以前に比べて様々な、有用な情報がもたらされるようになっている。本フォーラムでは、それらの技術を用いた最新の研究成果を報告する。

しかし、上陸調査の難しい魚釣島の、多くの固有種(モグラであったりサワガニであったりオトギリソウであったりする)の現状を把握するには、そうした手法を用いても、依然として多くの限界が存在している。リモートセンシングの情報を有効に活用するには、その専門家のみでなく、現地の情報や対象となる個々の生物の生活史や生態の知識を持った幅広い研究者の知識を総合することが重要であるため、当日の参加者を含む多くの専門家にご協力いただいて、それらの生物にヤギが及ぼす影響の実態を推定し、より正確な現状の認識と今後の予想を試みたい。リモートセンシングを用いる必然性が高く、哺乳類から顕花植物にいたる様々な分類群におよぶ多くの固有種を擁し、生態系の規模としてはむしろ小規模な魚釣島の例は、そうした

検討を行うのに優れたケーススタディとなるであろう。生態学会らしく、幅広い分野や研究対象の方々の参加を期待している。

司会:横畑泰志(富山大院・理工学・生物圏環境)

コメンテーター:横田昌嗣(琉球大・理・海洋自然科学)

趣旨説明/魚釣島のヤギ問題について

横畑泰志(富山大院・理工学・生物圏環境)

ヤギによる植生破壊の現状と変遷

* 金子正美・星野仏方(酪農学園大・環境システム),小野貴司,南澤 舞(EnVision),横畑泰志(富山大院・理工学)

宇宙から見た魚釣島の植生の変動

*星野仏方(酪農学園大・環境システム), 横畑泰志(富山大院・理工学), 小野貴司, 南澤 舞(EnVision),金子正美(酪農学園大・環境システム

企画集会 3月18日 17:30-19:30

会場 B会場

T01 Process generating habitat associations of woody species ~ linking forest dynamic data to habitat association ~

Organizers: Toshihiro Yamada (Hiroshima University), Zuidema Pieter (Utrecht University)

Studies using large-scale forest-dynamic plots revealed that most of woody species were distributed more in a particular habitat than the other habitats. However we do not know much about the process generating such habitat associations. Questions below, which are strongly related to the generating process, will be answered by studies using forest dynamic data;

- (1) Does a species having habitat association show the difference in growth, mortality, and recruitment rates among the habitats?
 - (2) If yes, how different are they among the habitats?
 - (3) Do the population dynamics of such species differ among the habitats?

Some ecologists have already conducted a study to answer the abovementioned questions. We would like to introduce such "pioneer studies" linking habitat association with forest dynamic data in this session and to discuss the mechanisms generating habitat association of woody species.

なお、講演は英語で行いますが、日本語での質疑応答や議論も歓迎いたします。

- T01-1 Variation among individuals and the dynamics of tropical tree populations. Zuidema Pieter (ユトレヒト大学)
- T01-2 Strong habitat preference does not imply large differences in population dynamics across habitats.
 山田俊弘(広島大学)
- T01-3 Effects of growth strategy and habitat association on spatial patterns of 11 dipterocarp species coexisting in a Malaysian tropical rain forest.

鈴木亮(首都大学東京)

- T01-4 Is there home-habitat advantage in tree dynamics at a Bornean rain forest? 伊東明(大阪市大)
- T01-5 Detecting key processes of tree population dynamics using projection matrices and the

relationships among demographic parameters, retrospective and prospective analyses. 金子有子(滋賀県琵琶湖環境科学センター)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 C会場

T02 休眠の進化生態学

企画者: 伊藤 桂(JST サテライト高知/高知大・農), 石原 道博(大阪府立大・理)

休眠性は重要な季節適応である。日本では、コオロギの体サイズを休眠との関連で解き明かした正木進三氏をはじめ、休眠研究の歴史は長い。しかし、最近の研究では休眠性の生理的特性の解明が主流となり、モデル生物では遺伝子レベルの休眠発現メカニズムが明らかにされようとしている一方で、休眠が生物の生活環の形成にどう関与しているか、また多種との関わり合いの中でどのような役割を果たしているかというマクロの視点からはあまり研究が進んでいない。休眠性は表現型可塑性の代表例として重要なものであり、生活環の中で、休眠がどのような役割を果たしているかが明らかになっていないことは不幸な状態である。

この企画集会では、休眠性の可塑性のコストや、フィールド生態学との融合を試みている例など、個体レベル以上の進化生態学の視点からとらえた研究例について紹介し、今後の休眠研究の方向性について議論することを目的とする。

- T02-1 趣旨説明:休眠研究をとりまく現状と課題 伊藤 桂(JST サテライト高知/高知大・農)
- T02-2 休眠が昆虫の生活史形質に与えるコスト * 定清 奨, 石原 道博(大阪府立大・理)
- T02-3 シカが植物の質の変化を介してジャコウアゲハの休眠性を変える? * 高木 俊, 宮下 直 (東大・農)
- T02-4 近縁種の存在が化性を決める? 気候適応では説明できない化性の地理変異 * 鈴木 紀之, 西田 隆義(京大・農)
- T02-5 コメント 石原 道博 (大阪府立大・理)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 D会場

T03 琉球諸島の森は世界自然遺産に値するか?やんばる・奄美の現場からの検証

企画者:小高信彦(森林総研・九州),高嶋敦史(琉球大学・農学部)

2003 年の「世界自然遺産候補地に関する検討会」において、琉球諸島は登録基準を満たす可能性が高い地域として選定された。琉球諸島の中でも、トカラ海峡と慶良間海峡の間、中琉球に位置する沖縄島北部(やんばる)と奄美大島の森林にはとくに固有種が多い。両地域では、世界遺産登録を遠い視野に置きつつ、森林生態系保護地域や国立公園の設定準備が始まっている。しかし、両地域の固有種は、とくに 1990 年代初頭頃までの天然林伐採や、近年のマングース侵入によって生息が脅かされてきた。森林利用と外来種問題は両地域のいわば人的影響の双璧であると言える。一方、やんばると奄美大島では社会的背景の相違から、森林利用の規模や歴史などにおいて大きな違いが見られる。これらの根本には生態学的な問題があり、科学的な解析を行いつつ、問題をクリアしていくことが登録基準を満たすための大前提であると言える。

そこで本集会では、各地域において、まず固有生物の生息数の変動とその生態学的要因、とくに外来種侵入と森林利用の影響についてこれまでの研究を紹介する。次に、森林利用や生態系管理など、森林と固有生物との関係に的を絞り、両地域における人的影響の背景、生態学的プロセスの相違、共通点などを確認しつ

つ、人間活動と固有種の共存への道を探る。

コメンテーター予定: 久保田康裕(琉球大学理学部)、佐々木健志(琉球大学風樹館)

- T03-1 やんばるの固有生物の現状と生態系管理の重要性について 小高信彦(森林総研・九州)
- T03-2 **奄美の固有生物の現状と外来種対策の国際ネットワーク構築** 山田文雄(森林総研・関西)
- T03-3 やんばるにおける森林利用の過去と現状 * 高嶋敦史(琉球大学・農学部)・齋藤和彦(森林総研・関西)
- T03-4 **奄美大島における森林伐採の背景と固有種に対する影響** 杉村乾(森林総研)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 E 会場

T04 群集生態学の新たな挑戦(1)

企画者:大串隆之(京大・生態研),近藤倫生(龍谷大・理工)

今日の群集生態学は、生物群集の構造や安定性、直接的あるいは間接的な生物間相互作用の解明だけでなく、構成種の個体群の時間的・空間的なダイナミクスはもとより、共進化の考え方の発展に伴い、生物進化の視点を積極的に取り入れつつある。他方、食物網による物質循環の理解を通して、生態系生態学の発展にも大きな貢献をはたしている。このように、今、群集生態学は新たな課題に取り組むことにより、大きな変貌を遂げようとしている。21世紀の「群集生態学の新たな挑戦」は、進化生態学から生態系生態学までを統合する新たな研究の枠組みを創り出す試みにほかならない。

本企画集会の目的は、群集生態学の最新のトピックスの紹介を通して、群集生態学の考え方がいかに今後の生態学の発展に不可欠であるかを浮き彫りにすることである。特に、生物群集がはたす「インターフェース」の役割に焦点をあて、最新の知見に基づき、群集生態学の新たな発展の方向性と課題を探りたい。

司会:大串隆之・近藤倫生

- T04-1 生態系と群集をむすぶ 仲岡雅裕(北大・北方生物圏センター)
- T04-2 メタ群集と空間スケール 野田隆史(北大・地球環境)
- T04-3 **進化生物学からせまる** 吉田丈人(東大・総合文化)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 F会場

T05 生活史戦略としての樹形変化 -姿を変える樹木たち-

企画者:城田徹央(北大・農),長谷川成明(地球研),関剛(森林総研・北海道)

森林生態系は複雑な空間構造をしているが、この複雑性は樹木やつる植物によって生み出されている。これらの植物は、その大きさや形を変化させて森林の空間を適切に利用する。この際、植物の形態変化は空間

構造を変化させる。すなわち、森林の空間構造と植物の形態変化は互いにフィードバックしあう関係にある。 従って、個体サイズと樹形の関係性解明は、その種に特有な生存や繁殖を達成するための戦略の理解である と同時に、森林構造の動的な形成プロセスを解明する鍵でもある。

これまでの樹形研究は、静的な形と資源の獲得・利用の関係の理解を目指してきた。しかしながら、樹木が林冠に達する過程でどのように姿を変えていくのか?という動的プロセスは十分に解明されていない。樹形変化を研究するためには、小さな個体から大きな個体までを対象として、順序だてた研究を統合していかなければならない。

本企画集会では、3名の講演者に、大きな個体の樹形形成の解析に基づいて、種の生活史戦略に言及していただく。講演者のアプローチはさまざまであるが、それは木と森をつなぐアイデアが豊富であることを意味している。シュートから個体へのスケールアップ、そして森林の長期モニタリング調査のなかで樹木の空間占有に関心を持つさまざまな研究者のご参加を希望する。

コメンテータ:隅田明洋(北大・低温研),伊藤哲(宮崎大・農)

- T05-1 **遷移初期種であるヤマウルシの樹形変化** * 長田典之(東北大・理)
- T05-2 樹冠構造に見られる木本性つる植物の多様な成長戦略 * 市橋隆自, 舘野正樹(東大・日光植物園)
- T05-3 熱帯多雨林における樹木 200 種の樹冠構造の種間変異 * 矢澤佳子,甲山隆司,久保拓弥(北大・地球環境), Abd R.Kassim(マレーシア森林総研), Matthew D. Potts (カリフォルニア大)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 G会場

T06 進化生態学と系統地理学の接点:集団の歴史的背景が解き明かす適応プロセス

企画者: 土松隆志(東大広域システム), 池田啓(京都大 人間・環境)

進化生態学の主要な興味は、適応的な性質や仕組みがなぜ、どのように進化してきたのかを知ることである。近年、種内においてすら適応進化や生物間相互作用の様相に大きな変異があることが明らかになりつつあり、適応進化のプロセスとメカニズムを解き明かす糸口として注目されている。こうした研究の土台として重要になるのが、デモグラフィー(Demography)と呼ばれる、種内のそれぞれの分集団がたどってきた歴史に関する情報である。近年、分子マーカーを用いた DNA 多型解析技術の飛躍的向上により、系統地理学は種内のそれぞれの分集団がどのように分布拡大/縮小、あるいは分化/交雑したのか、という集団のデモグラフィックな背景を詳細に解き明かしつつある。集団ゲノミクス・進化ゲノミクスの理論的研究の発展も相まって、生態学的研究と系統地理学的研究をうまく組み合わせることで、適応進化のプロセスを解き明かす研究が盛んに行われつつある。本企画集会では、若手研究者により進行中の動物・植物をもちいた系統地理学・進化生態学・ゲノミクスの統合的研究例を紹介し、適応進化研究の今後の展望を議論したい。

コメンテーター:細将貴(東北大・生命科学)「生物地理学の挑戦」

- T06-1 ミヤマタネツケバナにおける分断分布と適応進化 池田啓(京都大 人間・環境)
- T06-2 シロイヌナズナ属 2 種における自殖関連遺伝子の進化プロセス 土松隆志 (東大広域システム)
- T06-3 **異時的隔離がもたらす時間的輪状種** 山本哲史(京都大・理)

- T06-4 シギゾウムシ類を中心とした共進化ネットワークをひも解く 東樹宏和 (産総研)
- T06-5 スミレ属 2 種における分子系統地理と形質進化のプロセス 遠山 弘法 (九大・理)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 H会場

T07 東北日本における針葉樹林欠落型の亜高山帯植生成立過程の解明に向けて一過去の植生 史と現在の分布域・樹種特性からの「偽高山帯」問題へのアプローチー

企画者: 若松伸彦, 杉田久志

日本における植生帯垂直分布の主な規定要因は温度条件であり、ブナ帯の上にひろがる亜高山帯では通常 針葉樹林が卓越する。しかし東北日本では、本来亜高山帯域に卓越するはずのオオシラビソなどの針葉樹林 帯を欠いた山岳が多く存在する。これら山岳の亜高山帯域には落葉性の低木林やササ原が広がり、「偽高山帯」 と呼ばれる。このような針葉樹林欠落型の亜高山帯植生の位置づけについては、北東アジア全体を見渡した 比較検討が必要である。また、「偽高山帯」の成立要因については、半世紀以上の間、気候、生態や植生史 など様々な分野からの研究アプローチがなされてきた。その成果として、過去の気候変動に伴う植生変化が 深く関係することが明らかになりつつある。

しかし、過去の植生変化の復元は非常に困難であり、これら過去のデータと現在の植生から得られる、分布域、樹種特性などのデータを、いかに総合的かつ適切に考察するかも難しい課題である。東北日本の亜高山帯域以外にも、現在の植生分布が過去の植生変化に大きく影響を受けているケースは数多く存在し、この問題解決は今後の気候変動に伴う植生変化を予測する上でもキーとなる事例である。

本集会では、地史的研究と生態学的研究双方から、「偽高山帯」を中心とした東北日本の亜高山帯植生の分布に関するこれまでの研究成果を総合的に提示し、既存の研究により何がどこまで明らかになったかをまとめる。その上で、今後この問題解決には、どのような視点の基でどのようなデータを蓄積していく必要があるかを議論する。

T07-1 「偽高山帯」問題の概要

若松伸彦(東京農大)

T07-2 北東アジア沿岸性気候下における亜高山性植生の分布 中村幸人(東京農大)

T07-3 大型遺体および花粉分析からみた東北日本における亜高山帯の植生変遷史 守田益宗 (岡山理大)

T07-4 現在の植生から得られる情報からみた亜高山帯植生の成立 —分布域および樹種の生態的特性— 杉田久志 (森林総研・東北)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 I 会場

T08 河川敷の薮化・樹林化問題を考える―これまでの治水対策で大丈夫か―

企画者: 佐々木 寧, 田中 規夫

1) 藪化・樹林化の現状と課題:外来植物やツル植物の大繁茂で堤防上から川面が見えない河川が多く、水害防備林の竹林も今や水流阻害物でしかない。昨年の台風9号時倒木の年輪調査(多摩川)で30年未満がほとんど。2)河川敷利用形態の変化と樹林化の進行:過去100年間の河川敷地被変化を定量把握、樹林化は1970年代以降に始まり、1970年代まで樹林面積や樹林高に明確な差はないが、1990年代は平均で約3

倍となった.樹林化のプロセスは a) 草本からの遷移, b) 薪炭林の放棄による拡大, c) 耕作地放棄からの遷移。3) 河川敷樹木群の動態:河川複断面化で高水敷の樹林化が進行、特にハリエンジュ林の分布拡大が著しい。1970年代以降に樹林化した多摩川永田地区では、最近ハリエンジュ個体数の増加は頭打ちだが、幹断面積合計は依然増加傾向。4) 河道内樹木の洪水時破壊条件:樹木管理の際,洪水時の樹木破壊条件を把握が重要、荒川中流域の砂礫州上の樹木(タチヤナギ・ハリエンジュ)に着目,洪水前後の繁茂状況から破壊条件を把握、繁茂位置や生育基盤の違いが、破壊条件に与える影響を論議。5) 河川敷や砂州の物理・化学特性の変化と藪化・樹林化メカニズム:河川特有の樹木、草本類を対象に、生息域の土壌条件と成長速度に与える影響、洪水によって生ずる栄養塩供給の機構、流失の実態、河川管理への影響等を紹介。6) 討論・まとめ:河道内樹林は流下能力の減少、迂回流による堤防安全性の低下、流木の生産源等、治水面で負の側面を持つ一方、河岸侵食防止や流木・漂流物捕捉で災害低減の正の効果を持つ。藪化の影響は土砂堆積を進め、生態学的側面、治水面にも影響。本企画で河川の藪化や樹林化と管理の方向性を討論する。

T08-1 **藪化・樹林化の現状と課題** 佐々木 寧 (埼玉大大学院)

- T08-2 河川敷利用形態の変化と樹林化の進行 大石哲也(土木研究所)
- T08-3 河川敷樹木群の動態 星野義延(東農工大大学院)
- T08-4 河道内樹木の洪水時破壊条件 八木澤順治(埼玉大大学院)
- T08-5 河川敷や砂州の物理・化学特性の変化と藪化・樹林化メカニズム 浅枝 隆 (埼玉大大学院)
- T08-6 まとめ 田中規夫(埼玉大大学院)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 K 会場

T09 砂堆と砂浜の自然と生物多様性

企画者:加藤真,伊谷行

陸から海に供給された砂礫や土砂は、潮流や波によって摩耗され選別されつつ、海底や海岸に堆積する。 粒子サイズが 0.1~2mm ほどの粒子を一般に砂と呼び、それが堆積した特別な環境が砂堆と砂浜である。 そこは、間隙が多く、透水性が高く、多様な間隙生物を育み、そして多様な埋在性マクロベントスを育んでいる。イカナゴに代表される砂堆の生物は食物連鎖を通じて、周辺海域の魚類相や海鳥相を豊かにすることにも貢献している。かつて豊富に存在した瀬戸内海の砂堆は、大規模な海砂採取によってその多くが消失し、海砂採取の中心は長崎県や鹿児島県、沖縄県に移った。その結果、それらの地方で急速に砂堆が失われ、その影響で砂浜も急速に後退し始めている。この企画集会では、これまでその重要性がほとんど認識されてこなかった砂堆や砂浜の特異な生物多様性を紹介しつつ、急速に失われつつあるそれらの特異な自然を保護するための方策について考えたい。

4題の報告に続いて、向井宏(京大・フィールド研)にベントス生態学の立場より、籠橋隆明(弁護士)に海砂採取と海岸線の後退との因果関係に関する法学の視点より、コメントをいただく予定である。

T09-1 波と潮流がはぐくむ砂の自然 加藤真(京大・地球環境)

T09-2 砂堆生態系の現状と保全 大森浩二 (愛媛大・理)

T09-3 土佐湾の潮下帯砂底のベントス群集

*伊谷行(高知大・教育),山田ちはる(高知大・黒潮圏)

T09-4 星砂に棲む: スナハゼと間隙生物群集 椿 玲未 (京大・人環)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 L会場

T10 多様な菌類研究が生態学にもたらす可能性

企画者:白水貴(筑波大・菅平センター),西田貴明(京都大・生態研)

目的:

菌類研究から見えてくる生態学の新たな可能性を模索する

概要:

カビ、キノコなどで知られる菌類は、古くから生態系の物質循環における分解者(腐性菌)としての役割に注目されてきた。一方、近年になって分解以外の菌類の機能にも焦点が当てられ、生態系における共生者(菌根菌)や捕食寄生者(病原菌)など、菌類の様々な役割とその重要性が明らかになってきた。また、近年の技術の進歩によって、従来困難であった微生物の分類・同定作業にかかる負担は大きく軽減され、さらに個体認識や定量化の精度が向上したことで、微小な菌類を植物や動物で発展してきた生態学と同じ土台で議論することが可能になりつつある。その結果、現在では、菌類が物質循環のみならず、生物の群集形成や適応進化などの理解に重要な役割を果たす可能性が指摘されている。本企画集会では、菌類の様々な機能群、すなわち木材腐朽菌、菌根菌、植物病原菌を扱った生態学的な研究を紹介し、菌類研究が生態学にもたらす可能性について議論したい。

コメンテーター:

(菌学、生態学の分野からそれぞれ1名ずつ)

- T10-1 菌根共生が植物の被食防衛に果たす役割 ~植物を介した地上 地下部の生物間相互作用 ~ 西田貴明 (京都大・生熊研)
- T10-2 媒介昆虫と病原菌の伝搬様式と相互作用を探る ~ナラ類集団枯損のマイクロサテライト多型解析~

高橋由紀子(東京大・農)

T10-3 木材を分解する担子菌類はどのように多様化してきたのか? ~アカキクラゲ類をモデルとした一考察~

白水貴(筑波大・菅平センター)

T10-4 外生菌根菌はどのように多様になったか ~トリュフ型キノコを例とした考察~ 木下晃彦 (東京大・アジアセンター)

企画集会 3月18日 17:30-19:30 会場 N会場

T11 北東アジアにおける放牧地生態系の再生と持続的利用に向けて:個体群から地域スケールまで

企画者:大黒 俊哉 (東京大・農), 吉原 佑 (東京大・農)

中国内蒙古からモンゴルにかけて広がる北東アジアのステップ地域では、市場経済化の進展や畜産物に対する需要増加にともない、従来の放牧システムが変容し、草原の荒廃化や生物相の改変が急速に進行してい

る。乾燥地での人間活動は、草原を主体とする生態系の提供する各種サービス(食料・家畜飼料の供給、土壌保全、水資源の供給等)に大きく依存している。したがって、草原の荒廃防止と持続的な生産活動を両立させるためには、生態系サービスの安定的な供給が可能となるような、生態系機能の再生と、それらの持続的管理が不可欠であり、放牧地生態系の持続的利用に向けた科学的知見の集積と統合が求められている。本集会では、植物の個体群スケールからリモートセンシングを用いた地域スケールまで様々な空間スケールからこの問題にアプローチしている若手研究者を中心に、持続的放牧地管理への応用を志向した実証的研究を紹介する。そして、得られた知見とその問題点等を議論し、現場へのフィードバックと今後の研究の方向性を模索していきたい。

なお、当企画集会の情報は、東京大学緑地創成学研究室 HP (http://www.es.a.u-tokyo.ac.jp/lep/) で提供する。

- T11-1 **潅木ステップの機能を探る**:**潅木による** facilitation のマルチスケール評価 吉原 佑 (東京大・農)
- T11-2 持続的牧畜経営にむけた大規模野外実験からみえてきたもの 進藤 和政(国際農林水産業研究センター)
- T11-3 衛星リモートセンシングによる草地植生変動と土地劣化の把握 川村 健介 (広島大・国際協力)
- T11-4 生態学理論に支えられる生態学的基準:モンゴルの放牧地生態系の持続的管理に向けて 佐々木 雄大 (東京大・農)
- T11-5 牧民の意思決定とゲルの空間配置を考慮した持続的放牧地管理のためのマルチエージェントモデル 岡安 智生 (東京大・農)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 A会場

T12 アグロエコロジー研究会 11 "冬期湛水"は水田生物多様性の再生に貢献しうるか

企画者: 嶺田拓也(農研機構・農工研), 日鷹一雅(愛媛大・農)

日本最大の湿地環境である水田において、里地の生物多様性の再生への貢献が期待され、つい最近ラムサール条約会議で水田決議が承認されたのは記憶に新しい。しかし、水田は我が国の基幹的な食糧自給生産の場であり続けてきたため、農業生産向上のために乾田化や合成化学物質の濫用など、多様な生物種の生息環境に対し負の影響を与えてきた側面も大きい。1990年代から、乾田化された水田において、非湛水期間の活用で生産プロセスと自然環境保全を時間的に切り離すことによって、営農と生物多様性保全の両立をねらった「冬期湛水」の試みが数多く報告されるようになった。最近では、有機農業と結びついて環境保全型栽培技術の一つとして捉えられ、農林水産省の生物多様性国家戦略の中で、代替技術の基幹であるかのに様に取り上げらている。しかし、生物多様性に及ぼす冬期湛水の効果の科学的検証については、まだ始まったばかりであり、「冬期湛水」への冷静な評価は重要であろう。そこで、今回のアグロエコロジー研究会では、水田の"冬期湛水」への冷静な評価は重要であろう。そこで、今回のアグロエコロジー研究会では、水田の"冬期湛水、技術に注目し、果たして生物多様性向上や営農条件改善に効果があるのかについて、その効果をまさに検証しようとしている研究者に参集いだだき、最新の報告をしていただく。また実際の農業現場からの視点も入れ、農生態学から総合的にみた本技術の可能性と問題点について総合的に議論する。なお、本集会は、日本農業・農村工学会の農村生態工学部会との共催という意味も含んでいる。

司会:日鷹一雅・嶺田拓也

コメンテータ予定:

- 1. 冬水田んぼの先進地である地元東北から実践農家から
- 2. 農学だけではなく衛生医学の側面からの評価について

- T12-1 冬期湛水水田は水田生物の多様性が高いのか? 東淳樹(岩手大・農)
- T12-2 生態系保全に配慮した水田におけるトンボ幼虫の生息状況 若杉晃介(農研機構・農村工学研究所)
- T12-3 環境保全型水田における土着天敵を利用した害虫被害防除のための空間生態学的研究 高田まゆら、高木俊、吉岡明良(東大院・農)、岩渕成紀(NPO 田んぼ)、小林徹也(東北農研)、 鷲谷いづみ(東大院・農)
- T12-4 冬期湛水の取り組み実態とその課題 嶺田拓也(農研機構・農村工学研究所)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 B会場

T13 Matter Flow and Ecosystems: "Satellite Ecology" for ecosystem function study from plot to region.

企画者:村岡裕由(岐阜大・流域圏セ),大塚俊之(岐阜大・流域圏セ)

The growing requirements to ecosystem science are to reveal mechanistic and integrated understanding on the ecosystem structure and function in various terrestrial ecosystems. The plot scale studies by ecological process research, eddy covariance measurements and mathematical modelling have been providing us with the information ranging from hourly to yearly scales. In order to extend these understandings to the broader spatial scale from plot to landscape and regional scales, remote sensing has a great role to measure the spatial distribution of ecosystems and to monitor the seasonal and yearly changes of the ecosystem structure. This seminar aims to share the current questions on landscape scale ecosystem functioning, and to discuss how we could integrate the disciplines and observational data. [This seminar is partly supported by 21st Century COE program (JSPS) and A3 Foresight Program (JSPS, KOSEF, NSFC)].

- T13-1 Introduction
 Hiroyuki Muraoka (Gifu Univ.)
- T13-2 Analyzing terrestrial carbon exchanges from plot to regional scale by using remote sensing observation and biosphere model.

 Takahiro Sasai (Nagoya Univ.)
- T13-3 Ecological and remote sensing/GIS studies of carbon sequestration in forest ecosystems in South Korea.

 Yowhan Son (Korea Univ., Korea)
- T13-4 Remote sensing and ecological research to monitor forest canopy processes. Shin Nagai (Gifu Univ.)
- T13-5 CO2 and heat exchange analyses by tower flux measurements and spatial scaling by modeling at landscape scale.

 Taku M. Saitoh (Gifu Univ.)
- T13-6 Networking of research communities: JapanFlux-JaLTER-JAMSTEC-JAXA. Kenlo N. Nasahara (Univ. Tsukuba)

T14 ニセアカシアの生態学

企画者: 崎尾均(新潟大・農)

ニセアカシア(Robinia pseudoacacia L.)、別名ハリエンジュは、北アメリカ原産のマメ科の落葉高木で街路樹、砂防樹種や海岸防災林として日本中で広く植栽された。当初は山地緑化など森林の修復に大きな役割を果たしたが、その後、ニセアカシアは分布を拡大し続け、河畔林の群落構造に大きな影響を与えただけでなく、景観や生物多様性にも大きな変化を引き起こしている。河川周辺では除去のための公共事業やボランティアによる刈り取りも行われ、特定外来種としての検討が行なわれている。その一方、日本に導入されてから100年以上経ったニセアカシアは養蜂業の主要な蜜源だけでなく木材資源としても利用されているため、日本の生態系の中に受け入れてほしいという声もあがっている。このように最近話題の豊富なニセアカシアに関して除去方法に関する研究は数多くあるものの、その生態に関してはそれほど知られていない。本企画集会ではニセアカシアの歴史的役割や生態系に与える影響を振り返るとともに、種子の動態や種子による分布拡大のメカニズム、光合成特性に関する最近の研究を紹介する。

T14-1 ニセアカシアの生態を探る

崎尾均 (新潟大・農)

- T14-2 ニセアカシアの光と陰-小坂鉱山煙害地緑化に果たした役割と海岸マツ林への侵入 * 蒔田明史(秋田県立大・生資),田村浩喜(秋田県森技セ)
- T14-3 赤川河川敷におけるニセアカシアの分布拡大に関わる種子の役割 * 小山浩正・高橋 文 (山形大・農)
- T14-4 ニセアカシアは河川敷では実生で増えているのか 福田真由子(日本自然保護協会)
- T14-5 異なる光環境下におけるニセアカシアの光合成と窒素利用特性 の季節変化 *森本淳子,兼俊壮明,小池孝良(北大院農)
- T14-6 ニセアカシア人工林における植物種の多様性 * 眞坂一彦, 山田健四(北海道立林業試験場)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 D会場

T15 伊豆諸島の生物地理と生物間相互作用

企画者:栗山武夫,長谷川雅美

生態学の歴史には島を舞台とした重要な研究がいくつも見出される。特に火山活動によって生み出される 海洋島の生物相は、生態学的な空白状態から多様化していくため、生物相の形成規則や、生物間相互作用と 群集の構築の研究に重要な機会を与えてくれる。

伊豆諸島はフィリピン海プレート上に形成された南北に連なる9つの有人島とその周辺の無人島で構成される海洋島である。本土から数100kmほどしか離れていないため、種の供給地となったであろう日本本土の生物相との比較も行いやすい。この集会では、伊豆諸島の生物相をモデルとして、まずクモ類とハチ類を用いた種数一面積、種数一距離の関係を紹介し、生物相の形成規則の理解を深める。次に、本土からの生物の移住史をヤマガラとシマヘビを例に、集団遺伝学的な解析により推定した研究を紹介する。最後に、生物間相互作用が構成種の進化に与えた影響を明らかにした研究例として、オカダトカゲとその捕食者の被食ー捕食系、シマクサギ・クサギとその送粉昆虫の花ー送粉者系を紹介し、島嶼における生物間相互作用のダイナミクスに迫る。

コメンテーター 川上 和人(森林総研)

- T15-1 伊豆諸島における節足動物(クモ類とハチ類)の生物相 種数ー面積ー距離の関係 *深澤悟(東邦大・理),仲條竜太(東邦大・理)
- T15-2 伊豆諸島のその周辺本土におけるヤマガラの集団構造 *藤田薫(東邦大・地理生態),西海功(科博),山口典之(東大・農・生物多様性),樋口広芳(東 大・農・生物多様性)
- T15-3シマヘビの系統地理と体サイズの進化*Matt Brandley (イエール大), 長谷川雅美 (東邦大・理)
- T15-4 オカダトカゲの色彩パターンー捕食者に対応した地理的変異ー * 栗山武夫(東邦大・理), 森本元(立教大・理), 宮地和幸(東邦大・理), 杉本雅純(東邦大・理)
- T15-5 伊豆諸島における花形態の進化ークサギとシマクサギの訪花昆虫相から見えたことー *水澤玲子(東邦大・理)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 E 会場

T16 樹木の一斉開花の生態と進化

企画者: 立木 佑弥 (九大・シス生)

樹木の繁殖の頻度は多彩である。毎年コンスタントに繁殖する種から隔年で繁殖する種、3年から5年間隔といった長い間隔をあけて繁殖する種、さらには熱帯などでは1年の間に何度か繁殖を行う種まで存在する。一斉開花(豊凶・マスティング)とは樹木が数年に一度、一斉に繁殖する現象を指し、空間的に数100kmにもわたって同調する。これは日本のブナ林やミズナラ林をはじめ、世界中の森林で観察されている。この現象は樹木という生産者が引き起こすため、栄養段階の上位に位置する種子捕食者や散布者、送粉者など森林に棲む多くの動物に対して強い影響を与える。また東南アジア熱帯林では、異なる樹種の間でも同調して開花する genelal flowering が観察されている。一斉開花現象の生理機構や時空間動態、進化学的意義などについてはこれまで森林生態学の中心的課題の一つとして精力的に研究がすすめられてきており、多くの事実が明らかになってはきているものの、未解明な点も多々残っている。

本企画集会では、一斉開花現象についてフィールドと理論の両面から近年の発展を総括し、一斉開花現象の理解をさらに深めたい。

講演者のみならず、来場者にも積極的に発言をしていただき、今後の発展につながることを期待したい。

- T16-1 ミズナラ豊凶を引き起こす気象トリガーの検証 今 博計 (北海道林試)
- T16-2 **熱帯の植物フェノロジー**: 多様な開花頻度はどのように説明できるのか 酒井 章子 (地球研)
- T16-3 理論的観点から見た一斉開花結実の進化 * 立木 佑弥(九大・シス生), 巌佐 庸(九大・理)

会場 F会場

T17 サロベツ湿原の保全再生にむけた泥炭地構造の解明と湿原変遷モデルの構築

企画者: 冨士田裕子(北大・植物園)

企画集会

国立公園にも指定されている北海道北部のサロベツ湿原では、排水や農地開発の影響で湿原環境の悪化と湿原植生の退行が顕在化し、平成17年1月に発足した自然再生協議会で再生事業にむけて議論が進められている。事業の実施のためには、調査研究によって、1)長期的な環境や生物相の変化とその関係の理解、2)現在確認される生態系の変化の機構解明とそれに対する人為的影響の程度の評価、3)1および2の情報をもとにした今後の変化予測、4)1から3をもとにした具体的な再生目標の設定と再生・管理技術の提案が不可欠である。本集会では、サロベツ湿原で実施しているプロジェクト成果として、湿原の形成過程と環境・植生変動、湿原の構造を支配する泥炭生成のメカニズムと水文環境という、千年単位の湿原の変化について報告し、近年問題となっているササ群落の拡大という数十年の変化、そして湿原内の各地点で集められている様々な現地調査データを空間的に評価し、今後の広域的・長期的な変化予測に結びつけるという研究成果について報告する。そして、湿原生態系の解明に何が重要で、湿原生態系の修復・維持管理技術の開発へどのように寄与できるのか、参加者とともに議論したい。

コメンテーター: 鷲谷いづみ (東大・農学生命科学)、岩熊敏夫(北大・環境科学)

- T17-1 趣旨説明: 泥炭地湿原の形成過程とその構造の解明への取り組み 富士田裕子(北大・植物園)
- T17-3 サロベツ湿原の水質と湿地溝の形成 岡田 操 (水工リサーチ)・橘 治国 (北海道水文気候研究所)
- T17-4 ササ群落拡大の要因と微気象環境への影響 藤村善安(北大・植物園)・高橋英紀(北海道水文気候研究所)
- T17-5 リモートセンシングと GIS からみた湿原環境因子の空間分布構造 高田雅之(北海道環境科学研究センター)・井上 京(北大農学院)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 G 会場

T18 1+1 ≠ 2 メタ個体群アプローチが解き明かす生態現象

企画者:熊谷直喜(千葉大・理学),黒江美紗子(東大・農・生物多様性),小泉逸郎(NOAA)

本集会では、メタ個体群の概念や有用性を整理し、実際の野外個体群研究への適用について議論する。 メタ個体群構造の特徴は、局所個体群同士が低頻度の移動分散によってゆるいつながりを持つことである。 このつながりによって、単なる局所個体群の足し合わせからは予測できない相乗・相殺的な現象が生じる。 この現象を解き明かすことこそがメタ個体群アプローチを研究に取り入れることの醍醐味である。また、メ タ個体群研究の有用性は、近年は保全生態学においても一躍注目を浴びており、分断化を受けた生息地にお ける絶滅リスク評価などに威力を発揮している。

しかしメタ個体群生態学は、概念自体は広く知られているものの、国内での実証研究は非常に少ない。多数の野外個体群を調査する困難さに加え、大半の野外個体群が絶滅 - 再新生をともなう狭義のメタ個体群に当てはまらないことが大きな理由である。

本企画集会では、メタ個体群構造によりもたらされる現象として、個体数の底上げ効果(黒江、陸生哺乳類)、絶滅率の低下(熊谷、海産無脊椎動物)、個体群の安定化(山村、実験昆虫)、局所適応の抑制(小泉、

河川魚類)を紹介する。また、各演者が実際にメタ個体群研究に用いている Incidence Function Model (Hanski 1994) などの有効な研究手法についても解説する。さらに、絶滅-再新生をともなう狭義のメタ個体群に限らず、ある程度の空間構造をもつ個体群の研究にはメタ個体群アプローチが有効であることを議論していく。

*コメンテーター:

齊藤隆(北大・フィールド科学)、宮下直(東大・農・生物多様性)

- T18-1 メタ個体群構造がもたらす個体数の底上げ効果とその景観依存性 黒江美紗子(東大・農・生物多様性)
- T18-2 移動過程と生活史の特性がメタ個体群存続性に影響する 熊谷直喜(千葉大・理学)
- T18-3 局所個体群の不安定性こそがメタ個体群の安定性を生成する 山村光司 (農環研)
- T18-4 メタ個体群内における生活史形質の分化: 自然選択 vs. ドリフト vs. ジーンフロー 小泉挽郎 (NOAA)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 H会場

T19 生態系の保全・再生を生態学と人文社会科学から考える一湖沼を事例として

企画者:西廣淳(東大・農学生命科学), 高村典子(国環研)

生態系の健全性の維持・回復のためには、生態系と人間社会を相互に深く結びついたシステムとして捉え、生態系が健全に維持されやすい社会的な仕組みをつくりだす必要がある。そのためには、自然科学的なモニタリングと評価、技術開発に加えて、人々の考え方や行動選択と生態系の関係についての理解や、システムの動態を総合的に表現できるモデルの開発が不可欠である。本集会では、生態系再生が強く望まれている生態系である「湖沼生態系」を事例として取り上げる。湖沼の保全はこれまで主に水質の保全として取り組まれてきたが、生態系の保全・再生のためにはそれだけでは不十分である。本集会の講演者らは、湖沼生態系と人間社会のシステムを、生物多様性、生態系機能、人と湖沼のかかわり、湖沼の環境改善の人間社会への効果といった多様な側面から評価するとともに、これらの要素をカップリングするモデルを開発する共同研究を進めてきた。集会ではその研究成果の一部を報告するとともに、生態系一社会システムの健全化に向けた研究上の課題について議論する。

趣旨説明 高村典子 コメント 長谷川眞理子 (総研大) 司会 西廣淳

- T19-1 湖沼の保全・再生に必要な視点ー湖沼の場合 高村典子(国環研)
- T19-2 湖沼の生物多様性の評価 西廣淳(東大・農学生命科学)
- T19-3 湖沼生態系の環境経済評価 三谷羊平(コロラド大学・学振)
- T19-4 かかわりの視点からの人文・社会科学的な湖沼環境評価 二宮咲子・鬼頭秀一(東大・新領域)
- T19-5 生態系動態とヒトの選択動態の結合ダイナミックス 巌佐庸(九大・理院・生物)

企画集会 3月19日 17:30-19:30

会場 I 会場

T20 里山イニシアティブをめざした生物多様性と生態系サービスの評価

企画者:杉村 乾(森林総研),牧野俊一(森林総研),前藤薫(神戸大・農),吉田謙太郎(筑波大・工)

自然との共生のモデルを世界に提案することで、地域ごとの自然や社会条件に応じた持続可能な社会づくりに貢献することが、生物多様性国家戦略にある「里山イニシアティブ」である。しかし現実には、天然林が人工林に置き換えられる一方で、管理が行き届かない二次林も増えてきた。この現状を"人間活動と森林との関わり"として総合的にとらえ、生物多様性、生態系サービス、経済評価といった形で示すことが問題解決に向けてのツールになりうると考え、4つのプロジェクトを結びつける方向で模索している。

まず、(1) 生態系サービスの基盤として、人工林や天然林、異なる発達段階の森林を比較することによって、人間活動で改変されるか、管理が行き届かなくなった森林等における生物多様性を評価した事例を紹介する。(2) 森林が農地に隣接することによって、送受花や害虫制御といった調整サービスをもたらしていると考えられるが、このような働きをする昆虫の生息環境である森林の役割評価についての研究を紹介する。(3) ランドスケープの変化が森林利用や社会的ニーズとどのように連動してきたか、いくつかの事例を示す。(4) 上記のような研究成果をもとに、どのような手法で生物多様性がもたらす生態系サービスを経済的に評価することができるか、手法の比較を論じるとともに、新たな試みを紹介する。

最後に、以下の論点を中心にディスカッションしていきたい。(a) ランドスケープの変化が生物多様性と 生態系サービスに与える影響、(b) 生物多様性と生態系サービスの関係、(c) 生態系サービスの評価手法

コメンテータ予定:中静透(東北大学・生命科学研究科)

- T20-1 **里山林の生態系機能の評価** 田中浩、牧野俊一、岡部貴美子(森林総研)
- T20-2 林から農へ: 里山ランドスケープ機能の持続的な発揮 滝久智(森林総研),前藤薫(神戸大・農)
- T20-3 資源利用から文化的サービスへ-生態系サービスの劇的な変化 宮本麻子,田中伸彦(森林総研)
- T20-4 生物多様性と生態系サービスの経済評価の課題 大床太郎 (森林総研), 吉田謙太郎 (筑波大・工)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 K 会場

T21 気候変動と生態系:フェノロジーを介した生物間相互作用への影響

企画者: 土居秀幸 (University Oldenburg), 工藤岳 (北大・地球環境)

人間活動による温暖化ガスの排出によって進行しつつある地球温暖化が、生物の生存、生態系の成立を脅かす大きな問題になっている。IPCC (2007) によると、地表面の平均気温が 2-3 度が上昇することによって、生物の 30%が絶滅に瀕すると予測されていると同時に、最悪のシナリオでは地球表面の平均気温が 2100 年までに 6.4 度上昇すると予測されている。地球温暖化による気温上昇の影響は、広く生物全般に拡がりつつあり、フェノロジー(生物季節)、生息域、生物群集の変化、ひいては被食捕食関係などの生物間ネットワークの変化までその影響が波及しつつある。また近年、長期観測データの蓄積や実験的研究により、気候変動による生態系への影響とそのメカニズムがしだいに明らかに なってきた。フェノロジーは、生態系構造の時間的変動を作り出す重要な生態系構成要素である。しかしながら、気候変動によるフェノロジー変化が生態系機能へどのような影響をもたらすのかについての知見は非常に少ない。

本企画集会では、フェノロジーから生物群集、食物網などの生物間ネットワークにいたる、さまざまな段

階での気候変動の影響についての最新の研究を紹介する。特に、フェノロジー変化とそのメカニズム、そしてさらにフェノロジーの変化を介した食物網動態についての研究例を紹介する。最後に総合討論として、今後予測される急激な気候変動の生態系への影響について、どのように研究・評価すべきかを議論する場を提供する。

コメンテーター:仲岡雅裕(北大・フィールドセンター),佐竹暁子(北大・創成科学共同研究機構),小野田雄介(Macquarie University)

- T21-1 気候変動と植物・動物フェノロジー変化:地球規模・日本での変化傾向 土居秀幸(University Oldenburg)
- T21-2 森林植物群集のフェノロジカルシンドローム:そのメカニズムと気候変動の影響工藤岳*,井田崇(北大・地球環境)
- T21-3 海況変動による動物ー植物相互作用系のフェノロジー変化と群集動態 堀正和(水研セ・瀬戸内海区)

企画集会 3月19日 17:30-19:30 会場 N会場

T22 アジア・太平洋地域の植生の分布と分化 IV

企画者:中村 幸人(東京農大・地域環境),村上 雄秀(IGES 国際生態学センター)

副題:日本に分布する熱帯・亜熱帯植生

司会:中村 幸人

日本の植生を客観的に位置づけし、その系譜を探るためには近接したアジア・太平洋地域の植生の広域比較研究が不可欠である。前回の福岡大会の企画集会ではコケモモートウヒクラス以北の北方系の植生の系譜を探る企画で実施したが、今回はヤブツバキクラスの位置づけの鍵を握る日本の熱帯・亜熱帯系の植物群落の系譜を探る。

ヤブツバキクラスはそれと類縁の深い熱帯山地生のブナ科・クスノキ科林をみても熱帯低地生のフタバガキ科林と植生帯として直接接続している。またフタバガキ科林中にも低頻度ながらブナ科、クスノキ科常緑樹が混生し、照葉樹林と熱帯林が植生として直接の類縁性を持つことも明らかである。照葉樹林の北限域に相当する日本のヤブツバキクラス域には海岸生あるいは土地的な植生として熱帯と共通、あるいは類縁の深い群落が多数分布する。植生帯としての照葉樹林域の位置づけに資することを目的に、日本の熱帯・亜熱帯系植生の実態を探ってみたい。

- T22-1 はじめに-日本に生育する熱帯系植生-村上 雄秀 (IGES 国際生態学センター)
- T22-2 日本の熱帯・亜熱帯性海岸植生とフロラ 中西 弘樹 (長崎大学・教育)
- T22-3 東南アジアのマングローブ林の植生地理 佐々木 寧 (埼玉大学・大学院)
- T22-4
 イヌビワーアカメガシワオーダーの植生地理

 鈴木 伸一 (IGES 国際生態学センター)

企画集会

T23 野外データに潜む自己相関と偽反復 -他人事では済まされない統計解析の罠-

企画者: 玉井玲子(琉球大・理工), 入江貴博(琉球大・熱生研), 角谷拓(東大・農)

地表面上で定量化されたデータは、しばしば観測地点の位置に依存して互いに独立ではない(例:互いに位置が近いほど観測値が似る)。従って、野外でデータを採るすべての研究者は、このような観測値の空間的自己相関(spatial autocorrelation)との直面を強いられると言える。データ間の自己相関に無自覚で、独立性の仮定を無視した統計解析(推定・検定・モデル選択)を回避し、研究の信頼性を上げるためには、正しい知識に基づく研究計画の立案が必須である。本企画集会では、これから統計解析の勉強を始める学生にも内容の理解が可能となるように、まず統計解析における偽反復(pseudoreplication)の概念を数式を一切提示せずに説明する(麻生)。次に、野外実験おける blocking を例に分散分析モデルでの要因の意味をデータの独立性の点から説明する(玉井)。入江は、データ間の相関を多次元分布によってモデル化することで有効サンプル数を推定し、自由度を調整した検定を行う方法について紹介する。後半ではより応用的な実例として、空間パターンを生み出す過程を積極的にモデル化するアプローチについての講演をお願いする。山北は、空中写真から定量化したアマモの時間変動に見られる空間的な同調性を統計モデルを用いて記述した事例について話をする。最後に、外来種の分布拡大を例にベイズ統計学に基づく統計的・数値計算的な分析手法に関する話題提供する(角谷;see http://tombo.sub.jp/bayes.html)。仲岡雅裕氏(北大)をコメンテータに交えて、内容に関する全体討論を予定している。

- T23-1 Pseudoreplication とは? 麻生一枝 (成蹊大学・理工)
- T23-2 実験デザインを反映した分散分析モデルとその意味 * 玉井玲子 (琉球大・理工), 酒井一彦 (琉球大・熱生研)
- T23-3 有効標本数と自由度調整で対処する空間的自己相関 入江貴博 (琉球大・熱生研)
- T23-4 空間自己相関を考慮に入れたアマモ類の広域動態の解析 山北剛久(千葉大・理)
- T23-5 移動分散を考慮した空間データの分析:外来種の分布拡大を事例に 角谷拓(東大・農)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 B会場

T24 博物館の生態学・生態系インタープリター協働企画 ~生態学の社会教育への新展開~

企画者:金尾滋史(多賀町立博), 佐久間大輔(大阪自然史博), 日鷹一雅(愛媛大農・共通教育部会), 鈴木まほろ(岩手県博)

日本生態学会では生態学教育専門委員会を中心に、生態学の適切な教育事業を展開し、主に高校教育、大学教育への普及を進め、今後の生態学の発展を占う上でも重要な役割を果たしてきた。しかし、ひとくちに生態学教育といっても、幅広い主体を対象にした社会教育あるいは初等教育など、社会構造の裾野に及ぶ生態学教育の展開は生態学会関連でも展開されておらず、これからの課題であるといえる。

一方で近年は生態学を基盤とする活動が学校教育機関のみならず、多様な主体で増加しており、生態学を広く地域の社会教育・生涯学習に組み込む重要性が増している。生態学教育機関としての博物館、大学、そして NPO へのニーズは今後一層高まるだろう。

そこで本集会では、幅広い社会教育・生涯学習を展開している先駆的な生態学教育活動について、その理論と実践について紹介いただき、相互交流を進めると同時に、生態学教育の現状課題を抽出、共有する。重

ねて、生態学教育の場としての博物館、大学、NPO の位置づけとあり方についても議論したい。

なお、会場には各博物館の学習グッズ(ツール、ワークシートやパンフレットなど)の陳列、および各館の教育普及関係の出し物やグッズ紹介も予定している。

コメンテーター:

西脇亜也(宮崎大農)生態学教育専門委員会から

日鷹一雅(愛媛大農・共通教育部会)愛媛大における環境 ESD の展開

- T24-1 生態学は社会教育にどうせまる? ~自然史系博物館の役割~ * 金尾滋史(多賀町立博), 佐久間大輔(大阪自然史博)
- T24-2 地域社会の要としての エコミュージアムの深化 * 浜本麦, * 浜本奈鼓 (重富干潟小さな博物館・くすの木自然館)
- T24-3 サケが切り身で泳ぐ日 ~博学連携による生涯学習の普及と人材育成~ 朝日田卓(北里大・海洋生命)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 E 会場

T25 捕食・被食系の新しい展開

企画者:舞木昭彦(九大・理)

捕食ー被食は、生物相互作用の骨格であり、行動、進化、個体群、群集など生態学の様々な側面から研究されてきた。種間相互作用ネットワークを構成する最小モジュールの一つとして、その安定性や共進化の議論はいまだに絶えない。また、複数の捕食ー被食モジュールが結びついた食物網についても同様に議論がある。

各生物種の生活史、行動、形態などの形質にみられる適応的な振る舞い、個体群動態、形質の進化と異なる時間スケールで生じる現象はしばしば各階層において個別に研究されてきた。また、1 捕食・1 被食系、第 3 種を含んだ系といった食物網の基本モジュールの研究とそれらモジュールから構成される食物網全体の研究も個別に扱われてきたといえる。こうした個別の理解を統合していくことは生態学におけるひとつの方向性である。

本集会では、食物網の部分としての1捕食・1被食系の新しい見方から、部分と食物網全体を結びつける新しい見方まで最新の理論研究を紹介し、統合的研究の方向性を議論する。

- 1. 舞木昭彦(九大/理)はじめに
- 2. 舞木昭彦(九大/理)捕食・被食系と対抗的表現型可塑性
- 3. 難波利幸 (大阪府立大/理) 食物網のモジュールの動態:捕食・被食系から3種系へ
- 4. 近藤倫生(龍谷大/理工)栄養モジュールを組み立てて安定な食物網をつくる
- 5. 斎藤隆(北大/農) コメント
 - T25-1 捕食・被食系と対抗的表現型可塑性 舞木昭彦(九大・理)
 - T25-2 食物網のモジュールの動態: 捕食・被食系から3種系へ 難波利幸(大阪府立大・理)
 - T25-3 栄養モジュールを組み立てて安定な食物網をつくる 近藤倫生(龍谷大・理工)

T26 東北地方のチョウ類の衰亡と保全活動

企画者:藤井恒(日本チョウ類保全協会)

東北地方は自然環境が比較的よく保全されている地域だが、実際には、地域絶滅した種や個体群は少なくない。例えば、オオルリシジミやオオウラギンヒョウモンはその代表である。一方で、チョウセンアカシジミやギフチョウ類などでは、以前から保護活動が行われており、成果をあげている一方で問題点も指摘されている。

この集会では、東北地方のチョウ類とその生息環境を取り巻く現状について概観し、東北地方で行われている保護・保全活動のうち、ギフチョウ・ヒメギフチョウの混棲地がある鮭川村の事例、チョウセンアカシジミの保護活動、青森県のゴマシジミなどの衰亡と保護について、演者に解説してしていただく。更に、実際の保全活動を行う際に、研究者はどのような形で関わっていけるか、また、関連する法令や条例についても、専門家に解説していただく。

最後にコメンテーターの石井実氏(大阪府立大学大学院)に問題点などを整理していただき、総合討論を 行って、今後の保全活動を行うにあたっての方向性を見つけ出したい。

- T26-1 東北地方のチョウ類とその生息環境 ~その現状と衰亡~ 藤井 恒 (日本チョウ類保全協会)
- T26-2 岩手県のチョウセンアカシジミをとりまくもの 尾形洋一 (チョウセンアカシジミの会)
- T26-3 チョウセンアカシジミの遺伝的分化 永幡嘉之(日本チョウ類保全協会)
- T26-4 鮭川村でのギフチョウ保全の仕組みづくり ~地域住民の視点から~ 高橋 淳 (鮭川村自然保護委員会)
- T26-5 青森県におけるゴマシジミの現状と保全工藤 忠 (日本チョウ類保全協会)
- T26-6 研究者にできること ~地域の活動のバックアップ~ 林田光祐(山形大学農学部)
- T26-7 チョウ類の保全活動に関係する法令・条例:現状と課題 鎌田邦彦(日本チョウ類保全協会)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 G 会場

T27 生態ネットワーク - 水田水系を中心に実践・保全から理論まで

企画者: 箱山 洋(中央水産研究所/東京海洋大学)

水田水系を話題の中心にして、生態ネットワークの重要性について理論・実証・保全の観点から議論する。一般に、メタ個体群の持続可能性はその構成(生息域の連結・大きさ)によって著しく変化することから(Hakoyama & Iwasa, 2005)、生息地ネットワークのデザインが個体群の存続を大きく左右する。しかしながら、具体的な水生生物の生息地ネットワークに関する研究は少なく、生物の生息地間の回廊についての理論的な背景も充分とはいえない。魚類などの生息地利用・分断化・ネットワーク修復について PVA(population viability analysis:個体群存続リスク分析)で評価する方法論を扱う。

T27-1 湖沼・水田水系におけるフナ類の生態ネットワークと PVA

箱山 洋(中央水研/東京海洋大)

- T27-2 複雑ネットワークと生物の保全:湖沼・水田水系への応用を目指して 佐藤一憲(静岡大)
- T27-3 水田水域における魚類の保全-水田生態工学の視点から-守山拓弥 (農村環境整備センター)
- T27-4 湖沼・水田水系におけるフナ類の繁殖地好適性:稚魚密度、稚魚サイズ、移動に着目して 小関右介(中央水研)
- T27-5 湖沼・水田水系における外来魚の移動パターンと捕食ポテンシャル 川之辺素一(長野水試)
- T27-6 湖沼水系における在来魚生息地ネットワークの好適性評価:安定同位体を用いた魚類の移動推定 * 柴田淳也, 苅部甚一, 大石麻美子, 山口真奈, 合田幸子, 奥田昇(京大・生態研セ)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 H会場

T28 迅速な適応性-新しい次元の進化生態学

企画者:嶋田 正和(東大・総合文化・広域)

迅速な適応性-新しい次元の進化生態学

企画者:嶋田 正和 (東大・総合文化・広域)

進化生態学では、遺伝子発現の調節や脳ー神経系が司る学習行動や表現型可塑性の生理的適応は、従来、至近要因として片づけられ、進化生態学は究極要因(適応度と自然選択による進化)を研究する学問である、と教えている教科書もある。しかし最近、遺伝的同化説(West-Eberhard 2003)や促進的表現型変異説(Kirschner and Gerhart 2005)が台頭してきた。これらは、行動的適応や生理的適応が遺伝システムの中に取り込まれる生物学的メカニズムに基づく説明であり、20世紀前半に活躍したBaldwinやSchmalhausenからWaddingtonを経た系譜である。学習行動や表現型可塑性に基盤を持つ迅速な適応性は、引いては表現型を支える遺伝的変異に自然選択がかかることで、突然変異ー自然選択だけの古典学説よりも、ずっと速い進化的適応をもたらすようになる。

このように、「適応性」にはさまざまな時間スケールの生物学的機構が関与している。学習行動や表現型可塑性と適応進化の両方を取り込んだ個体群動態や進化の理解が必要となるだろう。今回は4人の講演者が迅速な適応性のご自身の研究を紹介し、新しい次元の進化生態学の意義を、聴衆も含めて討論してみたい。

- (1件の講演25分+質疑応答5分=計30分)
 - T28-1 迅速な適応性:新しい次元の進化生態学ー趣旨説明 嶋田 正和 (東大・総合文化・広域)
 - T28-2 社会性昆虫のコロニーの迅速な適応:階級分化と労働分業の可塑性 柴尾 晴信(東大・総合文化・広域)
 - T28-3 捕食者と被食者の迅速な適応: 両棲類幼生の表現型可塑性 岸田 治 (京大・生態研)
 - T28-4 迅速な適応が生みだす相互作用の変化とその影響:プランクトン性藻類の事例 吉田 丈人 (東大・総合文化・広域)

3月21日 12:00-14:00 会場 [会場

T29 ミレニアム生態系評価里山里海サブグローバル評価

企画者:夏原由博(京都大学),中村浩二(金沢大学)

2001 年から 2005 年までの間に実施された国連ミレニアム生態系評価 (MA) は、95 カ国から 1360 人以上 の専門家によって作業がなされ、地球温暖化 IPCC に匹敵するような生態系に関する最初の世界的規模の総 合評価として成果を上げた。MA の中で世界の34 地域でサブグローバル評価(SGA) が実施されたが、日 本は含まれていなかった。そこで 2007 年より国連大学高等研究所が事務局となり、CBD/COP10 への貢献を 視野に入れた、日本における SGA の取り組みを開始した。日本の SGA の特色として、里山里海に焦点をあて、 生態系管理に関する伝統的知識を将来世代に引き継ぎ、自然資源の持続可能な利用を国際コミュニティに紹 介することと、評価のプロセスを通じて研究者と政策立案者の協力を強化することが期待されている。しか し、里山里海が現代の持続可能社会とモデルとなり得るのか、我が国の特殊な社会・環境システムとも言え る里山里海を国際的に通じる言語で翻訳可能なのか、里山里海を含めた我が国の生態系サービスを評価する ための指標は何なのか、十分明らかにはされていない。本集会では、生物多様性と生態系サービスや人間の 福利との関係を明らかにする日本の SGA の成果を地域で活かし、世界へ発信する上での方法、期待と問題 点を議論する。

T29-1 企画主旨説明

夏原由博(京都大学)

- T29-2 里山の生物多様性が支えている生態系サービス 湯本貴和(総合地球環境学研究所)
- T29-3 生物・文化の多様性とバイオマス資源の持続的利用 高橋佳孝(近畿中国四国農業研究センター)
- T29-4 生物多様性の評価を現場でどう活かすか 嘉田良平 (横浜国立大学)
- T29-5 国際社会から見た里山里海 あん・まくどなるど (国連大学高等研究所)
- T29-6 まとめ 中村浩二(金沢大学)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 K会場

T30 里地里山域に残存する半自然草地の多様性とその現状

企画者:楠本良延(農環研),山本勝利(農環研)

かつて各地の農村に広く分布していた半自然草地は、1950年代には国土の10%を上回る面積を維持して いた。しかし、今や全国土面積の2,3%にも満たないと見積もられ、草原性依存の生物が絶滅の危機に瀕し ている。その現存する草地の多くは九州の阿蘇や島根県三瓶に代表される主に山地の野草地であり、研究の 蓄積も多く、各地で草原再生の試みも始まっている。これに対して、平野部の半自然草地については、急激 な都市化や農業形態の変化に伴い、分布面積の減少、種組成の劣化、外来種の侵入などの影響で急激な衰退 しているにも係わらず、これまで省みられなかった。

本企画集会ではかつては大面積で維持されていた里地里山の半自然草地がどのように衰退していったのか を整理し、残存する半自然草地の現状、ならびにその多様性と維持機構について、各地で実施されている研 究事例を紹介し、これからの保全・再生・管理のありかたや方向性について参加者と議論を深めたい。

コメンテーター: 高橋佳孝 (農研機構近中四農研センター・全国草原再生ネットワーク会長)

- T30-1 歴史的農業景観閲覧システムでみる関東における半自然草地の変遷 岩崎亘典, David, SPRAGUE (農環研)
- T30-2 歴史性は里地里山に残存する半自然草地に影響を及ぼす 楠本良延,平舘俊太郎,森田沙綾香,山本勝利(農環研)
- T30-3 平野部農村地域に残存する線状生育地における草原性植物の分布状況 小柳知代(東大院・農)
- T30-4 茶草場として維持されている半自然草地の多様性 稲垣栄洋(静岡県農林技術研究所),加茂綱嗣(農環研)
- T30-5 **盛岡市近郊に残存する農耕地周辺の半自然草地** 島田直明(岩手県立大学)

企画集会 3月21日 12:00-14:00 会場 N会場

T31 植物機能的性質の統合に向けて

企画者:黒川紘子(横国大・環境情報),小野田雄介(Macquarie Univ.)

生態学的現象の広域的な理解や、環境変動に伴う植生動態や生態系機能の変化の予測には、植物の機能的性質のデータを広範囲に渡ってまとめる必要がある。それらを目的としたデータベース構築・メタ解析が1990年代初頭から世界的に行われてきた。しかし、これらの活動に日本を含むアジア地域は殆ど含まれていないのが現状である。日本における植物の機能的性質のデータベース構築は、世界のデータベースにアジア地域からのデータを提供するだけでなく、亜熱帯から冷帯(亜寒帯)を含む日本の特色を生かし、植物の機能的性質に関する新たな仮説を検証する研究にも繋がるはずである。今回の企画集会では、海外におけるネットワーク研究の状況を紹介するとともに、国内で様々な植物種の比較研究を行っている研究者に彼らの研究を紹介していただく。その上で、日本における植物の機能的性質のデータベース構築の可能性や今後の研究展開について議論していきたい。

司会・総合討論:黒川紘子(横国大・環境情報)、小野田雄介(Macquarie Univ.) コメンテータ:小池文人(横国大・環境情報)

T31-1 趣旨説明

黒川紘子 (横国大・環境情報)

- T31-2 国際ネットワーク研究の紹介、葉の力学プロジェクトを例に 小野田雄介(Macquarie Univ.)
- T31-3 気象庁・生物季節データセットからみえる温暖化の植物フェノロジーへの影響 土居秀幸(University Oldenburg)
- T31-4 光合成関連データの意義とデータベース化での問題点 石田厚(森林総研)
- T31-5 植物リター分解に関するデータベース構築の展望と課題 大園享司(京大・生態研)

Time

Room B

Yamate Univ.), Numata, H.

(Osaka City Univ.)

Room E

Room G

Room H

英語(分野は不問)

保全

物質循環

植物個体群

B1-01 Circatidal activity 14:15 rhythm in the mangrove cricket Apteronemobius asahinai and its synchronization with the artificial tides. *Satoh, A. (Univ. of the Rvukvus). Yoshioka, E. (Kobe

E1-01 モニタリングサ イト1000里地調査 市 民による里地生態系 の総合評価 *高川晋 (日本自然保護協 会),福田真由子 (同左),廣瀬光子 同左),開発法子 (同左)

G1-01 西シベリア・チャ ニー湖における生産者 から魚食魚までの食物 網構造解析 金谷弦 (東北大・東北アジ ア), E., Yadrenkina E. Zuykova (ロシア科 学アカデミー・動物分 類生態研),菊地永 祐, 鹿野秀一(東北 大・東北アジア)

H1-01 シイ林における天然林と社寺林 および都市公園の現状 小林悟志(新 領域融合研究セ)

B1-02 Past Land use 14:30 explains the current distribution of Myrsine seguinii at the northern limit. *Vega, L. (Yokohama National Univ.), Koike, F. (Yokohama National Univ.), Suzuki, M. (Tokyo Univ. Forest in Chiba)

E1-02 草原性植物の 種特性とRDB種指定 傾向に基づく希少性 との関係 *小柳知代 (東大院),楠本良 延(農環研),北川 淑子(東大院),山 本勝利(農環研), 武内和彦(東大院)

G1-02 安定同位体から見 た熱帯雨林の食物網の構 造 兵藤不二夫 (SLU),松 本崇(京大・人間環 境),竹松葉子(山口 大・農),鴨井環(愛媛 大・農),福田大介(京 大・生態研),中川弥智 子(名大・農),市岡孝 朗(京大・人間環境)

H1-02 森林における被陰ネットワークの 構造解析 *近藤健太(龍大・理工), 近藤倫生(龍大・理工)

B1-03 Forest 14:45 Regeneration after Multiple Disturbances in an Alpine Dwarf Bamboo-Fir Complex. *Cornman, A. (Akita Pref. Univ.)

E1-03 刈取り時期の 違いが阿蘇地域にお ける半自然草原の植 生に及ぼす効果 小路 敦(九州沖縄 農業研究センター 現在:北海道農業研 究センター)

G1-03 炭素·窒素安定同 位体比を用いた浅い富栄 養湖伊豆沼の底生動物の 餌資源解析 安野翔(東北 大・院・生命), 鹿野秀 - (東北大・東北アジア 研),嶋田哲郎(伊豆沼 内沼環境保全財団),進 東健太郎(伊豆沼内沼環 境保全財団),*菊地永 祐(東北大・東北アジア 研)

H1-03 ウリハダカエデの性転換の方向 性-22年間の観察から- * 丑丸敦史 (神戸大),加藤元海(京大),松 井淳(奈良教育大)

B1-04 From 30m to 15:00 3000m alt.: Initiating demographic census of Arabidopsis kamchatica subsp. kamchatica over altitude. *Yoshihiko Onda, Kenta Tanaka (Sugadaira MEC, Tsukuba Univ.)

E1-04 遺伝的多様性 に配慮した希少植物 の保全―岡山のサク ラソウを例に '下野綾子(国環 研),本城正憲(東 北農業研究セン ター),上野真義,津 村義彦(森林総 研),池田博(東大 博物館)

G1-04 Influence of environmental factors on carbon stable isotope discrimination in photosynthesis by aquatic macrophytes. *Matheus Carvalho de Carvalho, Ken-ichi Hayashizaki, Hisao Ogawa

H1-04 Distribution of edible wild taro on the different alitudes in eastern Java: agroforestry benefits. *Kurniawan Puji Wicaksono (Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan); Brian Rahardi (Faculty of Mathematics and Natural Sciene, Brawijaya University, Indonesia); Eko Murniyanto (Coordinative Bureau of Central Java Private University, Semarang, Indonesia); Nobukazu Nakagoshi (Graduate School for International Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan)

15:15 B1-05 Foliage-age mixing increases the fitness of a generalist caterpillar within balsam fir. *Johns, R (Hokkaido For. Inst.), Quiring, D (Univ. New Brunswick), Lapointe, R (Can. For. Serv.), Lucarotti, C (Can. For. Serv.)

E1-05 絶滅危惧植物 レブンアツモリソウの 個体群動態 *河原孝 行(森林総研北海 道),山下直子(森 林総研関西),北村 系子,永光輝義(森 林総研北海道)

G1-05 沿岸域にある好 漁場における植物プラ ンクトンの光合成特性と -次生産 加藤元海 (京都大学)

H1-05 Crown shape dynamics of crowded mangrove Kandelia obovata stands at Manko Wetland in Okinawa Island. *Kangkuso Analuddin (Graduate School of Engineering and Science, University of the Ryukyus), Rempei Suwa, Akio Hagihara (Faculty of Science, University of the Ryukyus)

	口頭発表 3月18日(水)(Oral Presentation, 18 March, Wednesday Afternoo			ternoon)	
Time	Room I	Room K	Room L	Room M	Room N
	フェノロジー	生態系管理	外来種	数理	行動
14:15	I1-01 デジタルウェブカメラの画像解析によるフェノロジーの把握*井手玲子,小熊宏之(国立環境研究所)	K1-01 エゾシカの食害による樹木更新への影響評価*杉本豊彦(横浜国大・環),久保田康裕(琉球大・理),森章(横浜国大・環),松田裕之(横浜国大・環)	L1-01 近縁種の競争排除をもたらすり 争排除をもたらすり のはなにか:花粉田隆 の効き方*西西西 (京大農),博自 (大の力量では、高倉研 (大阪神で、大阪神で、大阪神で、大阪神で、 (大下で、大下で、 (大下で、大下で、 (大下で、大下で、 (大下で、大下で、 (大下で、) (大下で、)、 (大下で、)、 (大下で、)、 (大下で、)、 (大下で、)、 (大下で、)、 (大下で、) (大下で、) (大下で)、 (大下で、) (大下で) (大下で	M1-01 大きなステップの突然変異は進化の様相を変える: 縄張りを巡る非対称ゲームを例に*巌佐庸,上原隆司(九大・理・生物)	N1-01 スーパーコロニーを形成する在来種、エゾアカヤマアリの寛容な巣仲間識別:体表炭化水素で対する感覚子の原体表炭化水素に対するで変に対するではがいません。 (城所) 親子のは、理)、環境をは、現かい、環境をは、地では、関係をは、は、関係をは、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、
14:30	I1-02 近赤外デジタルカメラによる植生フェノロジー観察について*小熊宏之、中路達郎、井手玲子(国立環境研究所)、日浦勉(北海道大学)	K1-02 ヤクシカの食害から保全すべき種の選定と林床植物の種の関係性評価*中尾龍太(横浜国大・環),松田裕之(横浜国大・環)	L1-02 繁殖 中部 ・	M1-02 血縁者に対する協力行動と近親 する協力行動と近親 交配回避 — 2つの ゲームを組み合わせ たモデル *上原隆司 (九大・理),大 槻久(JSTさきが け)	N1-02 Dead or Alive? -アシナガグモ における鋏角を介し た雌雄間の対立-馬 場を希,谷川明男, 高田まゆら(東末 院・農)、二見恭 医)
14:45	I1-03 マレーシア・低地 熱帯雨林における樹木 の肥大成長と環境要因 の関係性 *坂口麻理 (高知大・農),市栄 智明(高知大・農), 中川弥智子(名古屋 大・農),酒井章子 (地球研)	K1-03 ヒグマの人に 対する反応を考慮し た順応的管理方法 太田海香(海洋 大・海洋環境)	L1-03 外来種トウネズミモチの侵入・成長に対する人為的撹乱の影響*伊藤千恵,藤原一繪(横浜国大・院・環境情報)	M1-03 森林伐採の ゲーム理論:社会的 ジレンマの解決に向 けて 佐竹暁子(北 大/PRESTO), Antonio Rogrigues (EPFL), Heinz Koeppl (EPFL), 大槻久(東工大 /PRESTO)	N1-03 ロウソクギン ポ雌の非独立型の 配偶者選択:野外に おけるコピー戦術の 実証 松本 有記雄, 竹垣毅(長大・ 院・生産)
15:00	I1-04 熱帯山地林におけるMedinilla属8種の開花・結実の季節性と気候条件との関係*木村一也(金大),湯本貴和(地球研),菊沢喜八郎(石川県立大),北山兼弘(京大・生態セ)	K1-04 空間最適化を 用いたオニヒトデの 駆除管理 *管家千 誠,松田裕之(横 浜国大・院・環境 情報学府)	L1-04 移入種である カラマツが在来の生物多様性に及ぼす 影響 尾崎研一,佐 山勝彦,上田明良 (森林総研北海 道),廣永輝彦 (地域環境計画)	M1-04 樹木の資源 配分と花粉制限が結 実動態の二型を促 進する*秋田鉄也, 松田裕之(横浜国 立大学,環情情 報)	N1-04 お熱いのがお 好き:カワトンボの交 尾相手選択 椿 宜 高(京大生態研セ ンター)

15:15
I1-05 Flowering phenology and competition for bumblebee pollinators in alpine plant communities. *Kawai Y, Kudo G. (Hokkaido Univ.)

K1-05 ダムからの排砂が砂州上の樹木の成長促進に与える影響 *坂本健太郎(建設技術研究所),川嶋郎,六田切宗一ト、清高三,浅枝隆工)

L1-05 ヌートリアが 引き起した池生態系 の攪乱と捕獲の効果 森生枝(岡山県自 然保護センター)

M1-05 多層構造系 の二種共存安定解 析*高田壮則(北 大・地球環境),中 島久男(立命館 大),甲山隆司(北 大・地球環境) N1-05 殻上にイソギンチャクを付着させるウスカワイトカケ(翼舌目:イトカケガイ科) 柳研介,*村田明久,立川浩之(千葉県中央博・海の博物館)

Time

Room B

英語(分野は不問)

Room E

Room G

Room H

植物個体群

B1-06 Dynamics of N 15:30

and P in the feces of the millipede Parafontaria laminata. A field experiment. *Lucero Mariani, Nobuhiro Kaneko

E1-06 ニホンザル屋 久島個体群のPVAと 保全 早石周平(琉 球大・教育セ)

保全

G1-06 豊川における底 生動物食物起源の上下 流変化 *小林草平,赤 松史一,中西哲,尾嶋百合香,中田和義,天 野邦彦(土木研究所)

物質循環

H1-06 干潟形状と塩生植物フクドの繁 殖の関係*荒木悟(島根大・汽水域研セ),國井秀伸(島根大・汽水域研 セ),陶山俊一(総合技研)

15:45

B1-07 A comparison of GPP by two forest stands, Fagus crenata and Alnus japonica. *Nakano (Ishikawa Univ), Koyama (Ishikawa Univ), Moriyama (Ishikawa Univ), Toda (Ishikawa Univ), Kikuzawa (Ishikawa Univ)

E1-07 生息適地モデ ルを用いた関東山地 ニホンジカ個体群の 生息分布の変化とそ の要因の定量的解析 *大橋春香(東京農 工大・連大),星野 義延(東京農工大・ 農),梶光一(東京 農工大・農)

G1-07 流域圏生態系 サービス解明のための 森林物質循環モデ ル:CN-Ise 大場真, 村 上正吾,王勤学,木幡 邦男 (国立環境研究

送粉

H1-07 アゲハチョウはたよれるやつ か? 一訪花昆虫の選択的排除から送 粉貢献度を推定する一*坂本亮太,川 窪伸光(岐阜大学・応用生物)

16:00 the Growth and Physiology to Salt Stress in Hydropically Cultured Salix psammophila and Salix matsudana Cuttings. Mao H.P., Okada Y.,

B1-08 Responses of

Michimata S., Yamamoto F.

E1-08 イヌワシの採 餌環境再生を目指し た列状間伐は餌動物 ノウサギを誘引できる か? *石間妙子,関 島恒夫 (新潟大学・ 自然科学)

G1-08 暖温帯二次林の フラックス観測による炭 素蓄積量推定とその問 題点 *小南裕志(森総 研関西),上村真由子 (農環研),牧田直 樹,安宅未央子,松本 晃(神戸大),深山貴 文(森総研関西),壇 浦正子(京都大),金 澤洋一(神戸大)

H1-08トウダイグサ科オオバギ属にお ける送粉共生系の進化 石田千香子 河野真澄(京大・生態研),岡島秀 治(東農大・農),*酒井 章子(地 球研)

B1-09 Effect of 16:15 Magnesium on the Calcification of Charophytes. *Gomes, PIA (Saitama Uni.). Asaeda, T. (Saitama Uni.)

E1-09 絶滅危惧種 ブッポウソウの個体 群管理について 飯田 知彦(広島希少鳥類 研究会)

G1-09 森林池沼におけ るオタマジャクシの栄養 塩回帰効果 *岩井紀 子,加賀谷隆(東大・ 森林動物),Ross A. Alford (James Cook Univ.)

H1-09 小笠原諸島固有種オガサワラボ チョウジ(アカネ科)の二型花柱性とその 繁殖:ポリネーターシフトによる片方向 への送粉 *渡邊謙太(沖縄高専),加 藤朗子,岩崎貴也,小早川三輪,菅 原敬(首都大・牧野標本館)

Time	Room I	Room K	Room L	Room M
	植物生理生態	生態系管理	外来種	数理

I1-06 樹木個体呼吸の新しいス 15:30 ケーリング *森茂太(森林総 研),諏訪錬平(琉球大),山 路惠子(筑波大), A.T.M. Rafiqul Hoque , 萩原秋男 (琉球 大),S.G.Prokushkin, O.V. Masuyagina, O.A. Zyranova, A.P. Abaimov (スカチョフ森林研), 上田龍四郎(北海道ダルト ン),大澤晃(京都大) 健,金城勝(沖縄研森林資源 研),石田厚,西園朋広,梶本 卓也,千葉幸仁,松浦陽次郎, 藤間剛,荒木眞岳,川崎達郎 (森林総研),小池孝良(北 大), Marjnah Umari (ムラワル マン大学)

K1-06 樹林化が進 行中の砂州上の樹 木の洪水時ので *村形和也,川嶋 崇之,浅枝理工と院 玉大院・理工を 田英祐,坂技術研究 郎(建設技術研究 L1-06 小笠原の新 規侵入地における オオヒキガエルの 餌メニュー *岸本年郎(自然 研)八院・環境明 大院・環境情 報)・森英田 橋洋生・戸田 (自然研) M1-06 costbenefitモデルを用 いた葉寿命の最適 戦略基準の検討 *吉田智彦(北 大・環境科学 院),高田壮則 (北大・地球環境 科学研究員) N1-06 Cheat cheats:寄生者による不正直な信号 *田中 啓太 (理研BSI/学振PD),森本 元 (立教 大・院・理),上田 恵介 (立理 大・理・生命理

行動

Room N

15:45
I1-07 Seasonal change in size-dependence of the aboveground respiration of mangrove trees Kandelia obovata. *Hoque,
A.T.M.R. (Graduate Sch. of Eng. and Sci., Univ. of the Ryukyus),
Sharma, S. (Graduate Sch. of Eng. and Sci., Univ. of the Ryukyus),
Suwa, R. (Fac. of Sci., Univ. of the Ryukyus),
Mori, S. (Forestry and Forest Products Research Institute,
Tsukuba), Hagihara, A. (Fac. of Sci., Univ. of the Ryukyus)

K1-07 河川敷の薮 化進行と火入れ効 果 *佐々木 寧 (埼玉大学大学 院) L1-07 小笠原諸島 におけるグリーンア ノールの産卵特性 *戸田光彦,中川 直美,鋤柄直純 (自然環境研究セ ンター),小松謙 之(シーアイ シー)

M1-07 異形世代交 代と同形世代交代 の進化〜海藻の生 活環と季節適応〜 *別所和博, 巌佐 庸(九大シス生)

16:00
I1-08 Litter production of mangrove Kandelia obovata stand at Manko Wetland, Okinawa Island.
*Sahadev Sharma, Kangkuso Analuddin, A.T.M. Rafiqul Hoque (Graduate Schoolof Engineering and Science, University of the Ryukyus), Rempei Suwa (Faculty of Science, University of the Ryukyus, Okinawa 903-0213, Japan), Akio Hagihara (Faculty of Science, University of the Ryukyus)

K1-08 年一回刈取 りによるチガヤの 増加とセイタカアワ ダチソウの抑圧 西脇亜也・岡田久 美子・水口亜樹 (宮崎大・農) L1-08 外来二枚貝 コウロエンカワヒバ リガイが在来種に 及ぼす影響につい て:人工護岸壁の 場合 岩崎敬二 (奈良大学教養 部) M1-08 北大西洋漁 業資源の時系列解 析から密度依存的 個体群制御の曖昧 さを計量する *丹羽洋智(水研 セ・水産工学研)

N1-08 Influence of the Qinghai-Tibetan railway on seasonal migration of Tibetan antelope. S. Ganzorig (Hokudai, Vetmed), H. Buho (Rakuno Gakuen), Z. Jiang (WMO), C. Liu (Inst. Zoology, Shaanxi, China)

16:15 I1-09 マングローブ植物3種(オ ヒルギ・ヤエヤマヒルギ・ヒルギ ダマシ)の根圏酸化機能 井上 智美(国環研) 野原精ー (国環研) 橋爪雅彦(川平 ファーム) 高木拓之(川平 ファーム) 安西康晴 松本勝 美(川上農場) 松本幸子 (川上農場) K1-09 タコノアシを 用いた個体群レベ ルにおける除草剤 の生態リスク評価 *池田浩明,相田美 喜(農業環境技術

M1-09 格子空間上 の個体群ダイナミク スにおける侵入速 度について 佐藤一 憲 (静大・工) Time

Room B

英語(分野は不問)

Room E

Room G 物質循環 Room H

16:30

B1-10 Cold-Induced Photoinhibition and Seedlings of Two Canopy Trees Species in Hokkaido, Japan. Bontempo e Silva, E.A.(Hokkaido Univ.) 保全

G1-10 温暖化に伴う土 壌呼吸速度の地域度の地域的 中井人史,高橋本保 (国(北大)),中,中 (国(北大)),中,市中 (成大・生),中,由, (広大・生), (本大・農)、 (本大・農)・理 (本大・農)・理 (本大・農)・理・ (本大・農)・ (本大 H1-10 ブナ科樹木優占林における菌根 共生—地上部と地下部の調査から*傳 寶知恵(京大院・農),谷口武士 (鳥取大・乾地研),竹内祐子(京 大院・農),二井一禎(京大院・ 農)

菌類

16:45
B1-11 Origin and distribution of polyploids in northwestern populations of Arabidopsis lyrata ssp. petraea. J. Brodie, *T. Kenta, M. Mannarelli & T. Burke (Sheffield

Univ.)

E1-11 工事現場に偶然加入したシオマネキ:生息決定要因の解明*河井崇,大田直友(阿南高専・建設システム工)

G1-11 土壌表層の団粒 を潰すとどうなるか? -小型節足動物の多様性 と物質循環-*廿楽法, 金子信博 (横浜国大院・環境情報), 日浦 勉 (北大・苫小牧研究林),村上正志 (千葉大・理),豊田 鮎 (自然研) H1-11 インドネシア・スマトラ島南部のアカシア植林地および周辺林分におけるリグニン分解菌類による落葉定着と分解*萩原佑亮(京大院・農・森林生態),大園享司(生態研センター)

17:00

E1-12 遺伝子組換え 作物の生物多様性影響評価、5年間の実態と今後の課題 白井洋一(農環研)

H1-12 亜熱帯林の落葉分解においてリ グニン分解性菌類が窒素動態に与える 影響 *保原 達 (酪農大環境システム),大園享司(京大生態研)

Time	Room I	Room K	Room L	Room M	Room N
	植物生理生態	生態系管理	外来種	数理	動物生活史
16:30	I1-10 マテバシイ属シリブカガシ塊根の生態的特性*米田健(鹿児島大・農),木下裕子(静岡大・農),木下裕子(鹿児島大・農),岩壁千智(鹿児島大・農),舘野隆之輔(鹿児島大・農)	K1-10 毒性試験とマイクロコスに基づく非標散に基づくま標散を 物への生態影響を ・谷地俊(横に、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、	L1-10 愛媛県の自 然水域で進行して いるドジョウの遺伝 的攪乱 *清水孝 昭,高木基裕,大山 昭代,村上裕	M1-10 被食者の表現型変化が個体響動態に及し(総研・出道真の大・学の大・学の大・総体は、とは、大・学の、・総の大・生の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、	N1-10 西表島におけるカエル類の年齢と年齢推定法の有効性*戸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
16:45	I1-11 Allelopathic effect of kudzu (Pueraria montana Lour.) on selected species. *M. H. Rashid, Takashi Asaeda	K1-11 都市内残存 湿地の植生モニタ リングと市民参加 型管理 相澤章仁 (千葉大院・自然 科学),田代順孝 (千葉大院・園芸 学)	L1-11 外来カワリスマエビス分布来の侵セスト 大田野環境との関係をののでは、大田野球境のでは、大田野球がでは、大田のでは、大いでは、大いでは、大いでは、大いでは、大いでは、大いでは、大いでは、大い	M1-11 なわばりを 巡るタカ・ハトゲー ムの個体ベース個 体群動態 * 高須夫 悟 (奈良女子大 理), Ake 理), Ake Brannstrom (Umea University, Sweden)	N1-11 オオタカの 採食動物の季節、 性別、個体差 *大堀 聰(早大自 然環境),内田 博(比企野生生物 研)
17:00		K1-12 変動環境下 の土地利用:私有 か共有か? 山村則男(地球研)	L1-12 琵琶湖におけるコイヘルペスウイルスの分布と季節変化源利文,本庄三恵,川端善一郎(地球研)		N1-12 リッチなメス は性転換しな い?ーツマジロモ ンガラの性転換の 数理モデルー *山口幸(奈文 大院・関さと女 化), 関さと子 (WDB株式会良女 院・人間文化)

	口頭発表 3月21日(土)(Oral Presentation, 21 March, Saturday Morning)					
Time	Room B	Room E	Room F	Room G	Room H	
	動物群集	動物個体群	古生態	景観生態	群落	
09:15	B2-01 市民参加による 干潟底生動物の調査 2. 種類の判別と結果 の評価*鈴木孝男 (東北大院・生命科 学),佐々木美貴 (日本国際湿地保全 連合)	E2-01 キシャヤスデの 2008年度大発生ーそ の状況と問題点一 藤山静雄、平田歩(信 州大理生物)	F2-01 栗駒山山地帯 上部の泥炭層で発見 された大量の完全なブナ葉片ー最終氷期に も山地帯にブナ林が存 在していたのか?ー *若松伸彦(東京農 大・地域環境),池 田重人,岡本透(森 林総研)	G2-01 インドネシア西 カリマンタン州の文化 的景観の創出 *中越 信和, Karuniawan Puji Wicaksono (広島 大・国際研), Hadi Susilo Arifin (ボゴー ル農科大)	H2-01 環日本海地域に 分布するハルニレ林の 群落分類体系 *大野啓 ー (横国大・院・環 情),宋鍾碩 (韓国・ 安東大),Yakubov, Valentine (Inst. of Biol. & Soil Sci., Rossia),Krestov, Pavel (Inst. of Biol. & Soil Sci., Rossia)	
09:30	B2-02 淡水二枚貝(イシガイ類)の微生息環境、寿命、および移動*根岸淳二郎,佐川志朗,真田誠至,营場、イガー,久米学,木哲也 (独)士研究センター	E2-02 シーボルトミズ の系統地理学的研究 *南谷幸雄(愛媛大・院・連合農), 福田 達哉(高知大・農)	F2-02 栗駒山山地帯 上部の花粉分析から みた晩氷期以降のブ ナの消長*池田重 人,岡本透(森林総研),岡本松伸彦(東京農大・地域環境)	G2-02 伝統的木造民家の構成樹種は何秀の構成樹種は何秀物語るか?*井田秀行(信大・教・声)自然研),一次の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の一方の	H2-02 中国保証 (田大戸(研) (学明男的 ない) は、	
09:45	B2-03 有明八代海域 における天然カキの遺 伝生態学的調査 *野田圭太,飯塚祐輔 (島根大・汽水研), 水戸鼓(鳥取大・連 合農学),荒西太士 (島根大・汽水研)	E2-03 系統地理学的アプローチからツキリワグマの分布拡大問題をさぐる*木大関をさぐるがが出た。 程をさぐる研り、一個では、 経験があるが、では、 経験があるが、では、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、 に、	F2-03 日本周辺に分 布する主要カバノキ属 樹木の分布生態 沖津 進 (千葉大学園 芸学研究科)	G2-03 閉鎖ゴルフ場に おける植生変化 *齊藤修(早大・高等 研),宮崎卓(相模 原市立博物館)	H2-03 焼畑の環境と雑草群落 津田智 (岐阜大・流域圏セ)	
			分子			
10:00	B2-04 有明海域にお	E2-04 長期餌資源制	F2-04 コノハクラゲの	G2-04 地形スケール	H2−04 出現植物の類	

10:00 B2-04 有明海域にお けるスミノエガキの集 団遺伝構造解析 *田中智美,飯塚祐輔, 野田圭太,荒西太士 (島根大・汽水研)

E2-04 長期餌資源制 限がニホンジカの生活 史特性へ及ぼすフィー ドバック効果の可能性 *梶 光一(東京農工 大・農),高橋裕史 (森林総研・関西)

F2-04 コノハクラゲの 遺伝的分化と分布拡 大プロセス*小林亜玲 (京大・院・理),五 箇公一(国環研),久 保田信(京大・瀬戸 臨海)

G2-04 地形スケール での不連続植生分布 パターンに関する理論 と実証-モンゴルの森 林草原移行帯を例とし て石井励一郎(地球フロンティア)・藤田昇(京都大・サ 研),鈴木力英(地 球フロンティア)、 和田英太郎 (地球フ ロンティア)

H2-04 出現植物の類 似性からみた河川と農 地の連続性 一沖積平野における景観スケー ル解析ー *石田真也 (新大院・自然科 学・学振DC),高野瀬 洋一郎(新大・超域 研究機構),紙谷智彦 (新大院・自然科 学)

口頭発表 3月21日(土)(Oral Presentation, 21 March, Saturday Morning)

	口頭発表 3月21日(土)(Oral Presentation, 21 March, Saturday Morning)						
Time	Room I	Room K	Room L	Room M	Room N		
	植物生理生態	動物と植物 の相互関係	遷移•更新	社会生態	進化		
09:15	12-01 ミヤコグサの窒素ではける空素を得における空素をのエコ望にを変異、*中院・場合の表別では、一般の	K2-01 炭素・リンコストのパランス:ミジンコ類のパランス:ミジンコ類の関値餌密度に対する餌のC:P比の影響*岩渕翼、占部城太郎(東北大・生命)	L2-01 熱帯ヒース林に おける優占種3種の実 生の形態的特性 *宮本和樹(森林総研 四国),Reuben Nilus(サバ森林研究 センター)	M2-01 ハイガシランコウマルバラシュウマルバランになる手伝い行うがの大大に、本江で、東、田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田	N2-01 ゲノム重複による種分化*清水健大・ の種分化*清水性大・ 理(チューリヒ大・ 理)、稲継)理恵 (チューリヒ大学・ 理,京大・生態研)		
09:30	12-02 高CO2下におけるダイズ群落のLAIの決定要因としての窒素動態と個葉平の炭素取主、及川真物学、大・一ルド・農・幸命(中心、大・原・生樹、大・原・生樹料・・原瀬際食料・・原瀬際、農業開発)	K2-02 地形・土壌水の の勾配を 物の種多様性にの る家畜の 長食田の をる。影響の をる。影響の をる。影響の をででに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のでに対する のではいいが、 のでいる ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、 ので、	L2-02 富士山火山荒原 におけるシモフリゴケコ ロニーの樹木実生発 芽・定着促進効果 南 佳典(玉川大・ 農),大竹小百合 (玉川大・農)	M2-02 ヤマトシロア リのカースト決定に 対する一次生殖虫 の影響の及ぼし方 *豊田真梨子,北出 理(茨城大・理・ 生物)	N2-02 ツガザクラ属植物における種間雑種の形成と定着 亀山慶晃(東農大・地域環境), 工藤 岳(北大・地球環境)		
09:45	12-03「小春日和」は冬の到来を加速した?- 南極海の植物プランクトンの光合成ストレスから-*工藤 栄(極地研・総研大),田邊優貴子(総研大)	K2-03 グンバイがセイタカアワダチソウ上の 昆虫群集に及ぼす影響*秋山賢太、近藤 倫生(龍谷大・理 エ),安東義乃(京都大・生態研センター)	L2-03 積雪環境傾度に ともなうコメツガの実生 生残パターンのちがい 一富士山、早池峰 小幡平の事例一 杉田久志(森林総研 東北),高橋利彦(木 工舎「ゆい」)	M2-03 ヤマトシロアリ属初期コロニーでのカスト生産〜生殖虫除去の影響〜神田紘美(茨城大院・理工),北出理(茨城大・理)	N2-03 左利きホモはどのように消えていくか 一魚類左右性多型の不和合性の進化 井上由美子子(岡本里花,川堀道雄(京大),*高橋智(奈良女)		
10:00	12-04 コウヤマキ若齢 林における物質生産と 光合成-ヒノキとの比 較-*小林 元(信大 農・AFC), 吉田 藍 (JA小松)	K2-04 病原菌ツボカビを介した動物と植物の相互関係 *鏡味麻衣子(東邦大・理), Van Donk, E. (NIOO)	L2-04 北方針広混光林 林冠下における稚樹の 成長特性と光環境 *中馬美咲,梶幹男 (東京大学農学生命 科学研究科付属演習 林)	M2-04 永遠の命を得た女王:単為生殖によるシロアリの女王位継承 松浦健二(岡大・院・環境・昆虫生態), Edward L. Vargo (North Carolina State Univ.), 辻和希(琉球大学・農)	N2-04 潮間帯カサガイ Patelloidalにおける特 異な生息地への機能 的適応 * 中井静子, 若山央央,千葉聡 (東北大院・生命科 学)		

口頭発表 3月21日(土)(Oral Presentation, 21 March, Saturday Morning)

T:				ch, Saturday Morni	
Time	Room B	Room E	Room F	Room G	Room H
	動物群集	動物個体群	分子	景観生態	群落
10:15	B2-05 有明八代海域 におけるマガキの集団 遺伝構造解析*飯塚 祐輔,野田圭太(島 根大・汽水研)・連合 農学),荒西太士 (島根大・汽水研)	E2-05 コナリの超年 対象を関係を はます。 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、	F2-05 両側回遊型ヌマ エビにおける日本列島 集団と琉球列島集団 間の遺伝的分化 池田 実,相原翔一 (東北大院農),古 東北(豊平藤和 (旭川高等看護学 院)	G2-05 葉緑体DNAを 用いた絶滅危惧植物 ハナノキの空間遺伝構 造の解明*佐伯いく 代,村上哲明(首都 大・牧野)	H2-05 草地における小面積当たり植物種数の分布*塩見正衛(茨城大),陳俊(西北農林科技大・動),山村靖夫(茨城大・理)、限通(茨城大・理)
10:30	B2-06 九州沖縄海域 におけるカキ礁生態系 の比較遺伝学的調査 *岩崎健史(島根大・ 汽水研),水戸鼓(島 取大・連合農学),飯 塚祐輔・荒西太士 (島根大・汽水研)	E2-06 ハクセンシオマネキの左右性の遺伝システムのモデル*小林美苑(奈良女大・人間文化),局橋智(奈良女大・人間文化),堀道雄(京都大・理)	F2-06 ヒゲナガケンミジンコmtCOI塩基配列の「中途半端な」種内変異 牧野渡(東北大・生命科学)	G2-06 豊川における 流下有機物の炭素呈 定同位体比の流で *赤松中のでは大小本で が、小木でで、大大が、大大が、大大が、大大が、大大が、大大が、大大が、大大が、大大が、大	H2-06 土壌微生物の 多様性は植物の共存を 促進するか?一植物一 微生物一土壌フィード バックモデル 三木健 (國立台湾大學海洋 研究所)
10:45		E2-07 有性生殖・無性生殖の共存:10年スケールでの有性型・無性型フナの個体群構造の変化*箱),小関カイ(中央水研),小関リカイ(中央水研),が野中央、原田・大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大の、大		G2-07 屋上薄層緑化 の試み*新穂千賀子, 大上兵真,樫原美香, 大田恵理,長田英美, 尾関由衣,入端隆二 (兵庫県立大)	H2-07 アセンブリー ルールで未知の極相林 を予想する:本州内陸 部中間温帯と都市孤立 林*小池文人・小林慶 子・加藤浩次(横浜 国立大学)
11:00		E2-08 高知県四万十 川におけるウナギ資源 変動 *立川賢一,中 島敏男(流域総合研 究会)			

Time	Room I	Room K	Room L	Room M	Room N
	植物生理生態	動物と植物 の相互関係	遷移•更新	動物繁殖	進化
10:15	12-05 暖温帯稚樹の受 光体制の種間比較:現 存量成長と翌年の受 光量のつながり*宮沢 良行,大槻恭一(九 大演習林)	K2-05 種子食昆虫に よる発芽援助:その一 般性および種子サイ ズ・食害度との関係 *津田みどり(九大 院・農), S. Buranapanichpan (Chiang Mai Univ.), Z. Basky (Plant Prot. Inst., HAS)	L2-05 あがりこ型樹形 を持つケヤキ林の林分 構造と形成過程 *鈴木和次郎,菊地賢 (森林総研)	M2-05 オオコオイム シは本当に自分の 子を背負っているの か?*稲田勝重, 森野浩(茨城大・ 理)	N2-05 食物のC/N比と シロアリにおける利他 行動の進化*小林 豊 (フロリダ大), Paul Bardunias(フ ロリダ大), Nan-Yao Su(フロリダ大)
10:30	12-06 マレーシア熱帯 雨林における樹木の 葉の気孔形態と林内 環境の関係*市栄智 明,高橋成美(高知 大・農),田中憲蔵 (森林総研)	K2-06 シダハバチ類の 食相シダ植物の長野 県における分布と種構 成*井坂友一(信州 大・院・総工),内 藤親彦(神戸大),中 村和夫(宇都宮大・ 性藤利幸(理・生物)	L2-06 風倒跡地の植生 回復 (北海道大学農学 研究院)	M2-06 コウモリダンゴでの交尾に関するオスとメスの駆け引き*杉田典正(立教大院・理),上田恵介(立教大・動物生態)	N2-06 病原体と宿主 免疫系の共進化の確 率予測:次に流行する 系統は? (総研大・ 葉山高等研)
10:45	I2-07 コナラ林冠における当年生シュートの成長*右田千春,千葉幸弘(森林総研)	K2-07 ブナを利用する 植食性昆虫群集の地 理的変異 *中村誠 宏,稲荷尚記,日浦 勉(北大苫小牧)	L2-07 アオサギの集団 繁殖地での植物への撹 乱とその後の遷移:植 物種の生態的特性を考 慮した解析 *上野裕介 (北大院・水産), 野田隆史(北大院・ 環境科学院), 環境科学院)研	M2-07 単体性サンゴ の双方向性転換 *酒井一彦(琉球大・ 熱生研),Y. Loya (テルアビブ大・動 物)	N2-07 社会性昆虫におけるおばあちゃんか果:ヨシノミヤアブラムとの繁殖終了個体よるコロニー防衛・権松圭吾(東大の大変を出り、深津武馬工を出り、柴尾晴信、県広域システム)

11:00 12-08 常緑広葉樹におけるシュート構造と通導機能*吉村謙一(神戸大自然科学), 池田武文(京都府大農),石井弘明(神戸大農)

L2-08 関東地方の照葉 樹林における都市化の 影響ー周辺土地利用 の変遷に伴う種組成の 変化-*窪山恵美,藤 原ー繪(横国大・ 院・環境情報) N2-08「科学的進化 論」と「種言語・種社 会・種文化」水幡正蔵 (在野の研究者)

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

植物群集

- PA1-001# 青森県八甲田山における森林土壌の花粉分析に よる後氷期のオオシラビソ林の変遷 * 中村琢磨(横浜国大院・環境情報), 大野啓一(横浜国大院・環境情報), 高原光(京都府立大院・生命科学)
- PA1-002# 富士山北斜面における森林限界の動態一空中写真による最近 27 年間の変化の解析 芹澤守也(茨城大学大学院 理), 山村靖夫(茨城大学 理), 安田泰輔(山梨県環境科学研究所)
- PA1-003# 落葉樹皆伐跡地における5年間の群落構造変化 と種特性 *志津庸子, 大塚俊之(岐大・流研セ)
- PA1-004# 光、土壌及び森林構造が浅間山山麓コナラ林の下層植生に及ぼす影響 *馬場 俊介(早稲田大・教育), 坂巻義章(早稲田大・理工総研), 友常 満利(早稲田大・教育), 吉竹 晋平(早稲田大・院・先進理工), 小泉 博(早稲田大・教育)
- PA1-005# 落葉広葉樹林における林冠構成種の違いが林床 の光環境と植物種組成に及ぼす影響 *大山拓郎(新潟大・ 農), 斉藤時子(新潟大・農), 紙谷智彦(新潟大院・自然科学)
- PA1-006# 瀬戸内地方の常緑広葉樹林における環境の変化 に伴う群落の推移 *村中 希望,藤原 ー繪(横国大・環境情報)
- PA1-007# 屋久島における温度環境と植生分布の関係 * 瓦 井秀憲、大澤雅彦(東大院・新領域)
- PA1-008# 中国半乾燥地における灌木・高木植栽の看護効果 宮森映理子,宮坂隆文,大黒俊哉,武内和彦(東大院・農),趙哈林,趙学勇(寒区旱区環境工程研)
- PA1-009# 火山荒原上の植物分布に対する非在来カラマツ と在来ダケカンバの樹冠効果の比較 * 斎藤達也(北大・環境), 露崎史朗(北大・地球環境)
- PA1-010# 北上山地におけるブナ林の落葉落枝量の変動 *櫻井悠,中野洋亮, 竹原明秀(岩手大・人文社会科学)
- PA1-011# 蛇紋岩地における植生への重金属の影響は地形 により異なるか? *松江大輔, 岸田周, 武生雅明, 中村幸 人(東京農大・地域環境)
- PA1-012# 浅間山麓の冷温帯広葉樹林における炭素・窒素 量と群落構造の関係 *友常満利(早稲田大・教育), 吉竹晋 平(早稲田大・院・先進理工), 馬場俊介(早稲田大・教育), 坂巻義章(早稲田大・理工総研), 小泉博(早稲田大・教育)
- PA1-013# 札幌市藻岩山の落葉広葉樹林における種組成と 微地形との関係について * 横山卓巳, 並川寛司(北教大・ 札幌・生物)
- PA1-014# 美ヶ原高原塩くれ場アースハンモック植生の群 落構造及び立地環境との関係 *金子敦志(信州大・農), 大窪久美子(信州大・農),藤田淳一(環境アセスメントセン ター)
- PA1-015# 河川域において植物種多様性のホットスポットが形成される条件一植物種多様性が高いワンドと低いワンドー *齊藤瑛璃香(新大·農),石田真也(新大·自然科学・学振 DC),高野瀬洋一郎(新大·超域研究機構),紙谷智彦(新大院・自然科学)
- PA1-016# 中国雲南省菜陽河自然保護区における照葉樹林 とカバノキ科二次林の種組成および種多様性の比較ーシ ダ植物に着目して *黒田有寿茂(兵庫県大・自然研),石田 弘明(兵庫県大・自然研),橋本佳延(兵庫県博),武田義明(神 戸大大学院・人間発達),田村和也(里と水辺研究所),岩切康 二(岩切環境技研),武素功(昆明植物研究所),岩槻邦男(兵 庫県博),服部保(兵庫県大・自然研)
- PA1-017# 済州島(韓国)と対馬(日本)に分布する常緑 広葉樹林の群落分類体系の比較 * 李晟齊(横国大院環情), 大野啓一(横国大院環情),宋鍾碩(韓国安東大学),加藤正士(横 国大院環情)

- PA1-018# 内モンゴル・シリンホト草原における管理手段 によっての植生変化 李強,藤原一絵(横浜国大・環境情報)
- PA1-019# 内モンゴルホルチン砂漠における植物社会学的研究 * 鮑 娜仁高娃,藤原 一繪(横浜国大)
- PA1-020# 大興安嶺南部地域の自然林の分布と種組成 志 栄,藤原一繪(横浜国大・環境情報)
- PA1-021# Phytosociological study of deciduous Quercus forests in the warm temperate zone of China Tang Qian, Fujiwara K.(Yokohama National Univ.)
- PA1-022# 北海道日高地方に分布するコナラ林の種組成と その特徴 *永井敦,並川寛司(北教大・札幌・生物)
- PA1-023# 釧路湿原赤沼周辺の詳細植生図の作成 *川口小百合(北海道教育大・釧路), 吉野邦彦(筑波大・システム情報工学), 神田房行(北海道教育大・釧路)
- PA1-024# 栃木県茂木町における里山小集水域二次林の植生構造 *新井諭(宇都宮大・院・農), 小林良太(宇都宮大・農), 大久保達弘(宇都宮大・農), 逢沢峰昭(宇都宮大・農), 山本美穂(宇都宮大・農), 松英恵吾(宇都宮大・農)
- PA1-025# Architectural stratification, floristic composition and woody species diversity of a subtropical evergreen broadleaf forest in Dinghushan Nature Reserve, South China Wu, M.* (Univ.of the Ryukyus), S.M. Feroz (Univ.of the Ryukyus), A. Hagihara (Univ.of the Ryukyus), L. Xue (South China Agr. Univ.) and Z.l. Huang (South China Bot. Garden, Chinese Academy of Sciences)
- PA1-026# 伊豆諸島御蔵島における維管束着生植物の垂直 分布 * 林勇希 (筑波大・生物資源), 平田晶子・上條隆志 (筑 波大・生命環境)
- PA1-027# 維管束着生植物とホスト樹木の種間相互作用の 構造と特異性 *平田晶子,上條隆志(筑波大・生命環境), 齊藤哲(森林総研)
- PA1-028# 西表島仲間川のマングローブ林の森林更新:ヤエヤマヒルギとオヒルギ稚樹の生育特性の比較 *浦田悦子,藤原一繪(横浜国大・院・環境情報)
- PA1-029# 衛星リモートセンシングによる紅葉・黄葉フェ ノロジー観測手法の開発 *本岡毅, 奈佐原顕郎(筑波大・ 生命環境)
- PA1-030# モンゴルのステップにおける連続した小雨への 潅木と草本の反応 *山田義裕(岡大環境学), 廣部宗(岡大 環境学), ジャムスラン=ウンダルマ(モンゴル農大), 吉川賢(岡 大環境学)
- PA1-031 東シベリアの湿潤化に伴うカラマツ群落の変化 *飯島慈裕(地球環境観測研究センター), 矢吹裕伯(地球環境 観測研究センター), 大畑哲夫(地球環境観測研究センター)
- **PA1-032 林野火災跡地における初期植物群落の再生** 株寿則(国際生態学センター)
- PA1-033 神奈川県伊勢原市郊外にあるコナラ・クヌギが優 占する雑木林での樹木相などの変遷 櫻井一彦(成城大学 社会イノベーション学部)
- PA1-034 北東北ブナ2次林の林内光環境 年推移および 季節と場所による変動 櫃間岳*,星野大介(森林総研東北), 齋藤武史(森林総研),片山隼(岩大・農)
- PA1-035 冷温帯落葉樹林(高山サイト)における、葉面積 指数の総合的長期観測 * 奈佐原顕郎,三上寛了(筑波大), 永井信,村岡裕由(岐阜大)
- PA1-036 日本における常緑広葉樹林構成種の分布を規定する気候要因と種多様性 中尾勝洋(森林総研),松井哲哉(森林総研北海道),津山幾太郎(森林総研),田中信行(森林総研)
- PA1-037 ヤクスギ林の階層構造と群集維持メカニズムに及ぼす台風の影響 *高嶋敦史(琉球大・農), 久米篤, 吉田茂

(PA1:体育棟, PB1:3 階西側廊下, PC1:3 階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 二郎 (九州大·農),村上拓彦 (新潟大·農),加治佐剛,溝上展也 (九州大·農)
- PA1-038 木曽駒ケ岳周辺山稜に分布するハイマツ群落の立 地と種組成. *北野昌美(横国大院・環情), 大野啓一(横 国大院・環情)
- PA1-039 長野県川上村におけるイラモミ林の構造と立地環境 *清野達之,上治雄介,井波明宏(筑波大・生命環境)
- PA1-040 八ヶ岳における森林構成種の局地的分布と地理的 分布の関連性 佐野哲也 (東大院・新領域・自然環境)
- PA1-041 ブナ分布北限最前線における孤立林の分布とその 特徴 *松井哲哉(森林総研・北海道),並川寛司(北教大・札幌), 小林誠(北大・環境科学), 紀藤典夫(北教大・函館)
- PA1-042 多摩川における帰化植物群落の組成と類型 * 村 上雄秀(国際生態学センター),松江大輔(東京農大),佐々木 寧(埼玉大学)
- PA1-043 釧路地方・恋問砂丘上の海浜植物群落 神田房行 (北海道教育大・釧路),正垣喜美子(NPO 法人ネイティブく しろ),水島太郎,斎藤優,三村のり子,小舟未来(北海道教 育大・釧路)
- PA1-044 北上山地に発達する谷湿原の植生 竹原明秀(岩 手大・人文社会・生物)
- PA1-045 広島県北部の冷温帯域における放棄水田の植生 佐久間智子(西中国山地自然史研究会)
- PA1-046 管理方法の違いによる三瓶山草原の植生構造 *井上雅仁(三瓶自然館),高橋佳孝,堤道生(近中四農業研究 センター)
- PA1-047 つる植物によるスギ人工林のギャップ拡大について *三枝逸人、上條隆志、中村徹(筑波大・生命環境)
- PA1-048 アシは乾いた土壌からは十分な栄養塩吸収ができない 由良浩(千葉県立中央博物館)
- PA1-049 多雪環境下における樹木の力学的特性 3 * 目黒伸一,鈴木伸一,林寿則(国際生態学センター)

植物生理生態

- PA1-050# 光飽和しない光-光合成曲線 小山耕平・菊沢喜 八郎 (石川県立大)
- PA1-051# 熱収支から見る葉の形態の制限要因 * 岡島有規, 種子田春彦, 寺島一郎(東京大・院・理)
- PA1-052# ササが優占する落葉広葉樹林林床における光環 境と稚樹の光合成 *野田響(岐阜大・流域圏セ),村岡裕由(岐 阜大・流域圏セ)
- PA1-053# 三つの CO2 噴出地由来のオオバコにおける成長 と光合成の CO2 応答 * 市川琢己(東北大・理), 彦坂幸毅(東北大・院・生命)
- PA1-054# 低 CO2 濃度下で気孔の開口は促進されるのか? *鎌倉真依(奈良女大・共生セ),古川昭雄(奈良女大)
- PA1-055# FACE (Free Air CO₂ Enrichment) による高 CO₂ 環境下で育成した冷温帯落葉樹萌芽の成長および光 合成特性 *渡辺誠(北大院・農),北岡哲(森林総研・北海道), 渡辺陽子(北大院・農),小林真(北大院・農),上田龍四郎 (北海道ダルトン),高木健太郎(北大・FSC),日浦勉(北大・FSC),笹賀一郎(北大・FSC),小池孝良(北大院・農)
- PA1-056# 高 CO2 で生育した植物における Rubisco と RuBP 再生系間のバランス変化とその窒素利用効率に対する影響 *秋田理紗子、彦坂幸毅(東北大, 生命)
- PA1-057# コナラ稚樹における展葉に伴う硝酸態窒素の吸収と配分 *上田実希(京大・農),水町衣里(京大・情報), 徳地直子(京大・フィールド研)

- PA1-058# 日本列島におけるブナの窒素利用効率の地理変 異 * 野村遼介、日浦勉(北大・苫小牧)
- PA1-059# ヨシ、マコモにおける低酸素耐性と窒素獲得様式 * 中村元香 土谷岳令(千葉大・院・理)
- PA1-060# 熱帯林における土壌リン可給性と実生根のリン 酸分解酵素活性の関係 *藤木 泰斗(京大・生態研),北山 兼弘(京大・生態研)
- PA1-061# 蒸散が葉内水の酸素安定同位体比の日変化に与える影響 *小山晋平(京大・農),松尾奈緒子(三重大・生物資源),隠岐健児,小鹿耕平,垣本大(三重大・生物資源),大手信人(東大・農),小山里奈(京大・情報),山中典和(鳥取大・乾地研),張国盛,王林和(内蒙古農業大),吉川賢(岡大院・環境)
- PA1-062# 蒸散が葉のセルロースの酸素安定同位体比に与える影響 * 垣本大(三重大・生物資源), 松尾奈緒子, 隠岐健児, 小鹿耕平(三重大・生物資源), 小山晋平(京大・農), 大手信人(東大・農), 張国盛, 王林和(内蒙古農業大), 吉川賢(岡大・農)
- PA1-063# 葉の蒸散速度はどのように決まるのか 一気孔開口と葉内構造から考える一 *澤上航一郎, 舘野正樹 (東大・院・理・日光植物園)
- PA1-064# ダケカンバの展葉に対する低温の影響とアクアポリンとの関係 *高山縁,小野清美,隅田明洋,原登志彦(北大・低温研)
- PA1-065# 異なる場所に生育するブナの蒸散特性 立石麻紀子 (九大・福岡演習林),熊谷朝臣 (九大・福岡演習林),内海泰弘 (九大・宮崎演習林),陶山佳久 (東北大・院・農),日浦勉 (北大・苫小牧研究林)
- PA1-066# 西オーストラリアの塩害地におけるユーカリ植 林木の生長と葉の水分特性 * 齋藤隆実, 曽根恒星, 野口航, 寺島一郎 (東大院理・生物科学), 宮澤真一 (農業生物資源研), 林和典 (日本製紙森林研)
- PA1-067# 中国内蒙古自治区に生育する臭柏の成長にとも なう蒸散特性の変化 * 隠岐健児(三重大・生物), 大手信人 (東京大・農), 松尾奈緒子, 小鹿耕平, 垣本大(三重大・生物), 張国盛, 王林和(内蒙古農業大), 吉川賢(岡山大・環境)
- PA1-068# マレーシア熱帯雨林における林冠構成種の木部 構造と水利用様式 * 井上裕太(愛媛大・連合農学),田中憲 蔵(森林総研),市栄智明(高知大・農)
- PA1-069# 京都市内の都市環境と街路樹への影響 籠谷優ー (京都工芸繊維大・応生)
- PA1-070# 標高傾度に沿ったシロイヌナズナ近縁種エコタイプ間の物質分配パターン * 永野聡一郎(東北大・院・生命),森長真一(九大・院・理),彦坂幸毅(東北大・院・生命)
- PA1-071# テツカエデ稚樹の形態・資源配分に光環境と個体密度が与える影響 齊藤わか(京大農・森林生態学),河村耕史(GenHort, INRA),武田博清(同志社大・生命保全学)
- PA1-072#
 ハリエンジュ living wood fiber におけるデンプン貯蔵の季節変動 * 山田祐記子, 藤田稔, 栗野達也(京都大・農)
- PA1-073# 施肥がアカメガシワの被食防衛戦略に与える影響 山尾僚(岡理院・総情・生地), 片山昇(京大・生態研セ), 波田善夫(岡理・総情・生地)
- PA1-074# 南極湖沼における藻類群集の光環境変動への適 応戦略 *田邊優貴子(総研大・極域科学),工藤栄(極地研, 総研大・極域科学)
- PA1-075# 異なる標高の湿原植物における葉特性の戦略シフト *神山千穂, 彦坂幸毅(東北大・院・生命科学)
- PA1-076# 水位変動下におけるウラジロハコヤナギ成長の 決定要因と根の成長との関係 今田省吾,山中典和,玉井重信(鳥取大・乾燥地研)

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PA1-077# ダケカンバの幹成長の日変動に対する気象の影響 * 小池繁幸(信大院・工),高橋耕一(信大・理)
- PA1-078# 標高傾度にそった亜高山帯針葉樹の肥大成長の 将来予測 * 奥原勲(信大院・工)、安江恒(信大・農)、高橋 耕一(信大・理)
- PA1-079 異なる解除率で被陰解除された落葉広葉樹 9 種 における光合成機能の応答 田中 格(山梨森林総研・富士 吉田)
- PA1-080 シラビソ稚樹の光環境に対する光合成特性の可塑性とその限界 * 三田村理子, 山村靖夫(茨城大・理), 中野隆志(山梨県・環境科学研)
- **PA1-081 光の波長と葉内での光阻害勾配の関係** * 小口理 ー(東大・院・理), 寺島一郎(東大・院・理)
- PA1-082 高 CO2・水温上昇環境下におけるイネの光合成・ 呼吸の生育に伴う変化 *安立美奈子,常田岳志,程為国(農 環研),松島未和(千葉大),中村浩史,大川原佳伸,鮫島良次(東 北農研),岡田益己(岩手大),長谷川利拡(農環研)
- PA1-083 ダケカンバ 1 年生実生の地上部および地下部の 成長や光合成に対する生育温度の影響 * 小野 清美(北大・ 低温研), 高山 縁(北大・低温研), 原 登志彦(北大・低温研)
- PA1-084 Latitudinal change in photosynthetic nitrogen use efficiency in Fagus crenata Muller O (Hokkaido & Tohoku Univ), Nomura R (Hokkaido Univ), Hikosaka K (Tohoku Univ) and Hiura T (Hokkaido Univ)
- PA1-085 個体内の異なる光環境に応じたシュート間の不均 一な窒素分配 * 杉浦 大輔, 舘野 正樹(東大・院・理)
- PA1-086 個葉の寿命, LMA, 窒素濃度の関係が標高傾度 にそった落葉樹と常緑樹の葉の炭素安定同位体比におよ ぼす影響 *高橋耕一(信州大・理), 宮島 悠(信州大・理)
- PA1-087 冬緑性草本ヒガンバナにおける,非展葉期の窒素 吸収 *西谷里美(日本医大・生物),中村敏枝(首都大・生 命科学),可知直毅(首都大・生命科学)
- PA1-088 西表島仲良川流域のマングローブ林における生葉 と落葉の窒素含有量 榎木勉 (九州大・演習林), 安田恵子 (地 球研), 楠本聞太郎 (九州大院・生物資源)
- PA1-089 釧路湿原南部における主要草本種の養分利用特性 ・中村隆俊(東京農大・生物産業),植村滋(北大・FSC), 矢部和夫(札幌市立大・デザイン),山田浩之(北大・農)
- PA1-090 ¹⁵N トレーサー実験による生育中のイネのアミノ 酸挙動の解析 *一宮孝博,中下留美子,鈴木彌生子(首都大 院理工),佐々木由佳(山大農),伊永隆史(首都大院理工)
- PA1-091 熊野山地からの養分動態が熊野灘の内湾、岩礁海 岸のウラニン濃度に及ぼす影響 表 寿一*(近大高専・建 設システム工), 蔵本将(近大高専・建設システム工),
- PA1-092 植物の水チャネルと水利用効率・生産性との関係 半場 祐子(京都工繊大)前島 正義(名古屋大・生命農学研究科)土平 絢子(名古屋大・生命農学研究科)河津 哲(王子製紙・森林資源研究所)
- PA1-093 バイケイソウにおけるパイプモデル:パイプは実 在するか、それとも説明モデルか * 紺野 康夫, 顧 令爽(帯 広畜産大学 畜産生命科学)
- PA1-094 根と葉はつながっている:根の呼吸速度と蒸散速度の関係 *別宮有紀子(都留文科大学),坂田剛(北里大学),田中格(山梨県森林総合研究所),中野隆志(山梨県環境科学研究所)
- PA1-095 小笠原諸島父島の乾性低木林における水文気候条件とシマイスノキの蒸散量の季節変化 * 吉田圭一郎 (横浜国大・教育人間), 飯島慈裕 (地球環境観測研究センター), 見塩昌子 (岐阜大・応用生物)
- PA1-096 冬と夏の光環境変動に対する常緑樹実生の反応

- 河原崎里子 12,相川真一 1,石田厚 1,可知直毅 2,田内裕之 1 (1 森林総研,2 首都大)
- PA1-097 孤立林におけるネズミモチ・トウネズミモチの競合:異なる光環境に対する順化反応 大杉祥広,*石井弘明(神戸大院・農)
- PA1-098 石灰岩地帯に生育する常緑広葉樹の生理特性 香 山雅純(森林総研九州)
- PA1-099 オオオナモミの力学的性質における個体密度の影響 ~植物の耐"自重"・耐"風"構造~ *長嶋寿江(東北大・院・生命科学),渡利亮司,広瀬忠樹(東京農大・国際農業開発)
- PA1-100 Growth responses to soil water stress of some key plant species grown in desertificated grassland in North-East Asia. *Shoko ITO, Hideyuki SHIMIZU, Yasumi YAGASAKI, Chunjing ZOU, Zhenzhu XU, Lijun CHEN, Yuanrun ZHENG (NIES)
- PA1-101 Clarification of causal factors of Suitou Hagare-Shou in Nagasaki highlands. Effects of acidic fog with/without ozone on the growth of several cultivars of rice plants Hideyuki SHIMIZU, Shoko ITO, Hikaru SAJI(NIES), Atsuko MORI, Tetsushi FUJI(Nagasaki IERPH), Taiji WATANABE, Masafumi FUJIYAMA(Nagasaki AFES), Shinsuke FUJIHARA(NARO), Kentaro MURANO(Hosei Univ.)
- PA1-102 ヒノキ科樹木の漏脂病発症の謎 *山本福壽(鳥取大・農),小谷二郎(石川県・林試)
- PA1-103 白山の登山道(砂防新道)沿いにおけるオオシラ ビソの異常落葉 野上達也(石川県白山自然保護セ)
- PA1-104 冠水環境がヌマスギ (Taxodium distichum) の形成層活動におよぼす影響 *岩永 史子, 高橋 裕美, 山本 福壽 (鳥取大学農学部)
- PA1-105 異なる葉身サイズに対する主脈の木部の応答 種 子田春彦(東京大学・理・生物), 寺島一郎(東京大学・理・生物)

送粉・種子散布

- PA1-106# 花と送粉者の関係に選好性はあるか? *鈴木健司,大澤剛士, 丑丸敦史(神戸大・人間発達環境)
- PA1-107# 斜面に咲く花は嫌われる?:傾斜がマルハナバ チの訪花頻度に与える影響 牧野崇司(筑波大・生命環境)
- PA1-108# コロニーの日々の献立はどう決まる?:マルハナバチ『個体』が持ち帰る花粉種構成の解析 宮崎寧子、牧野崇司、大橋一晴、徳永幸彦(筑波大・生命環境)
- PA1-109# 絶対送粉共生関係をかたち作る花の匂いの化学 構成と動態 * 岡本朋子,後藤龍太郎,加藤真(京大院人環)
- PA1-110# 先んずれば花色を制す: 花種間での送粉者獲得を めぐる競争における先取の効果 *川口利奈, 大橋一晴, 徳 永幸彦(筑波大・生命環境科学), 小沼明弘(農環研・生物多様性)
- PA1-111# 栃木県高原山におけるブナ・イヌブナの9年間 の着花とその要因 *大岡智亮(宇大院農), 大久保達弘(宇 大農), 逢沢峰昭(宇大農)
- PA1-112# アリ散布植物ミヤコアオイの種子分散: 植生の違いは種子分散に影響を与えるのか? * 松井浩幸(阪教大・院),石田清(弘前大・農),濱口京子(森林総研・関西),岡崎純子(阪教大)
- PA1-113# アリの種によって異なる種子散布の意義 *大西義浩 (鹿児島大院・連合農), 鈴木 信彦 (佐賀大・農)
- PA1-114#
 人工果実を用いた陸ガニによる種子散布環境の特定

 特定
 *伊藤信一(静大・教育), 小南陽亮(静大・教育)
- PA1-115# 小笠原諸島固有木本植物オガサワラビロウの散 布体の浮遊性の種内変異 石神唯(首都大・理工), 鈴木準

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 一郎, 可知直毅
- PA1-116# サワグルミの実生定着における風散布と水散布の影響 * 五十嵐知宏, 上野直人, 清和研二 東北大学大学院農学研究科
- PA1-117# 海上の森のヒサカキにおける種子散布特性 赤松 樹,松下通也,中川弥智子(名大院生命農)
- PA1-118# 二レ科鳥散布樹木 2 種における種子食鳥イカル による散布前種子捕食:3 年間の動態 * 吉川徹朗(京大院 農),井鷺裕司(京大院農),菊沢喜八郎(石川県大)
- PA1-119# 鳥による種子散布パターンの近縁種間比較ーリスクとリターンの観点から *澤綾子(筑波大・生命環境),正木隆(森林総研),直江将司(京都大・生態研セ),井鷺裕司(京都大・農),兼子伸吾(京都大・農),鞠子茂(法政大),沼田治(筑波大・生命環境)
- PA1-120# マレーシア・ボルネオ島の焼畑休閑林における 鳥類相とその食性・排泄される種子 鴨井環 (愛媛大), Oswald Braken (Sarawak Forestry Corporation), 酒井章子 (地 球研)
- PA1-121# 温帯林の断片化は鳥の渡り期に結実する鳥散布 樹木の種子散布に影響を及ぼすか? * 直江将司(京大・生 態研), 酒井章子(地球研), 澤綾子(筑波大・生物), 正木隆(森 林総研)
- PA1-122# 種子の物理的特性が排泄時間におよぼす影響: 飼育下ニホンザルを対象として * 辻大和, 森本真弓, 松林 清明(京大・霊長研)
- PA1-123# ネズミによるトチの実の選り好み:サポニン vs. 種子サイズが貯食に与える影響 *増谷優、吉澤結子、 星崎和彦(秋田県立大・生物資源)
- PA1-124# 遺伝解析と野外観察に基づくニホンザルによる ヤマモモの種子散布特性の解明 広島大・院・国際協力
- PA1-125# ツキノワグマによる種子散布距離の推定 長距離 散布者として機能しているのか?- *小池伸介(東京農工 大),正木隆(森林総研),根本唯,小坂井千夏,梶光一(東京 農工大),山崎晃司(茨城県博),葛西真輔(知床財団)
- PA1-126# どんなドングリが生き残るのか? 非破壊成分 分析を用いたコナラ種子の形質の違いが生存過程に与え る影響の解明 * 高橋明子(京大院・農), 柴田銃江(森林総研・ 東北), 島田卓哉(森林総研・東北)
- PA1-127 花粉 1 粒の直接遺伝解析によるキシツツジ訪花 昆虫の送粉貢献度の推定 近藤俊明,中越信和(広島大・国 際研)
- PA1-128 セイヨウオオマルハナバチの侵入に伴う送粉相 互作用網の撹乱 一隠れていた種間相互作用の露見一 石 井博(富山大・理)
- PA1-129 アオモリトドマツにおける、種鱗離脱時期までの 残存について 関剛 (森林総研北海道)
- PA1-130 綾照葉樹林における鳥散布と風散布によるシード レインの分布特性 小南陽亮(静岡大・教育), 真鍋徹(北 九州自・歴博), 永松大(鳥取大・地域), 西村尚之(名古屋産 業大), 齊藤哲, 佐藤保(森林総研)

景観生態

- PA1-131# 熱海、箱根地域に分布するハコネダケ群落に関する景観生態学的研究 *加藤正士(横国大・環情),大野啓一(横国大・環情),酒井暁子(横国大・環情),服部千代子(横国大・環情),北川凉(横国大・環情),馬雁飛(横国大・環情)
- PA1-132# モウソウチク林とマダケ林の分布と拡大に対する地形の影響—滋賀県近江八幡市八幡山における事例— 鈴木重雄(立命館大・文)

- PA1-133# コシダ草原から森林への時空間的変遷 *河口剛輝,山田俊弘,奥田敏統(広島大・院・総科)
- PA1-134# 指標植物をもちいた関東地方の里地里山評価 * 菅原のえみ、小池文人(横浜国大院・環境情報)
- PA1-135# 植物の多様性をもたらす里草地の立地環境 * 植 松裕太, 丑丸敦史, 大澤剛士(神戸大院・発)
- PA1-136# 農地の生物多様性がもたらす雑草種子捕食サービスの定量化一対照的なランドスケープでの比較 *市原実(岐阜大院・連農,静岡大・農),丸山啓輔,足立行徳,山下雅幸,澤田均(静岡大・農),石田義樹,稲垣栄洋(静岡農技研),浅井元朗(中央農研)
- PA1-137# 水田生態系における景観スケールの立地区分と 植物相の対応に関する事例研究 荒金恵太, 大久保悟, 山 田晋, 北川淑子, 大黒俊哉, 武内和彦(東大院・農)
- PA1-138# 対流圏オゾンが植物個体のバイオマスに及ぼす 長期的影響 - 丹沢山地のブナ (Fagus crenata) を例と して - *諏訪広樹 (横浜国大・院・環境情報)
- **PA1-139#** ナミビアのモパネ植生帯における植生景観とヤギの放牧活動の関係 手代木功基(京都大・AA研)
- PA1-140# 熱帯植林地の鳥類多様性保全に対する残存林 の役割 藤田素子 (京大・東南ア研), Dewi Prawiradilaga (RCB-LIPI), 吉村剛 (京大・生存研)
- PA1-141# ニュージーランド高原放牧草地における羊の尿排 出場所の監視と予測 *川村健介(広島大・院・国際協力), Betteridge, K., Costall, D. (AgResearch, NZ), Sanches, I.D., Tuohy, M.P. (Massey Univ., NZ)
- PA1-142# リモートセンシングによる河川の瀬淵分布推定 手法の検討 *島崎彦人、福島路生(国環研)
- PA1-143# 風倒撹乱地における鳥類群集形成の形態学的メ カニズム: 形態は生息環境を反映するか? * 町田直樹(北 大・院・環境科学),村上正志(千葉大・理)
- PA1-144# Effect of spatial structure of seagrass vegetation on infaunal benthic community in Futtsu, Tokyo Bay: An integrated approach using field sampling and remote sensing analysis *Whanpetch, N, Yamakita, T (Chiba Univ.), Nakaoka, M (Hokkaido Univ.)
- PA1-145# 落葉広葉樹林帯におけるニホンイヌワシの採餌 環境および餌動物の分布予測マップ * 布野隆之(新潟大学 大学院・自然科学), 関島 恒夫(新潟大学大学院・自然科学), 村上 拓彦(新潟大学・農学部), 阿部 學(日本猛禽類研究機構)
- PAI-146# 時系列 ALOS データを用いた二ホンザルの生息 地把握 望月翔太 (新潟大・院・自然), 芝原知 (新潟大・院・ 自然) 村上拓彦 (新潟大・農)
- PA1-147# 新潟県新発田市におけるニホンザルによる農作 物被害発生地の環境特性 *芝原知(新潟大・院),望月 翔太(新潟大・院),村上 拓彦(新潟大・農),三浦 慎悟(早稲田大・人)
- PA1-148# 兵庫県におけるオオサンショウウオの分布推定 モデルを用いた生息地分断化の評価 *田口勇輝(京大院地環・兵庫県博)、三橋弘宗(兵庫県大・兵庫県博)、栃本武良(日本ハンザキ研究所)、夏原由博(京大院地環)
- PA1-149# 同所性コウモリ類3種のハビタット選択性と行動圏サイズ -選択性の特異性に着目して 赤坂卓美 (北大院農),赤坂宗光(国環研),中村太士(北大院農)
- PA1-150# 八ヶ岳山麓におけるキシャヤスデの分布と生息 適地の推定 * 浅沼弘人,藤巻玲路,岡井尚之,佐藤由依,金 子信博(横浜国大・環境情報)
- PA1-151# カバキコマチグモの産卵巣の分布特性 * 弘中豊, 安倍 弘 (日大院・生物資源科学・生物学)
- PA1-152 長野県における希少マルハナバチ類の分布特性

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 須賀 丈(長野県環保研),田中洋之(京大·霊長研), 丑丸敦史(神戸大·人間発達環境), 湯本貴和(総合地球環境研)
- PA1-153 西三河地方におけるサシバの生息適地モデルの構築 *橋本啓史, 仲摩恵里, 山本葉子, 高橋妹花, 新妻靖章(名城大農), 松浦俊也(森林総研), 大畑孝二(日本野鳥の会サンクチュアリ室), 横山則一(ネイチャーリサーチしらとり), 高橋伸夫, 石川均(愛知生物調査会), 東淳樹(岩手大農)
- PA1-154 海岸防災林におけるクロマツと広葉樹の生育状況 の比較 *島田和則, 坂本知己, 鈴木覚, 萩野裕章, 野口宏典, 後藤義明(森林総合研究所)
- PA1-155 手賀沼流域における水生植物の分布に景観構造が 与える影響 *富田瑞樹、齋藤康宏(東京情報大・環情), 林 紀男(千葉中央博)、原慶太郎(東京情報大・環情)
- PA1-156 湖岸形態と水温分布: 魚類への影響の考察 *山中裕樹, 神松幸弘, 源利文, 本庄三恵, 内井喜美子, 鈴木新, 川端善一郎(地球研)
- PA1-157 Land Use in The Upper Ciliwung River Watershed,
 West Java Rizki Amelgia (Graduate School for International
 Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan);
 Kensuke Kawamura (Graduate School for International
 Development and Cooperation, Hiroshima University,
 Japan); Tosliaki Kondo (Graduate School for International
 Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan);
 Nobukazu Nakagoshi (Graduate School for International
 Development and Cooperation, Hiroshima University, Japan);
 Muhammad Evri (he Agency for Assessment and Application
 of Technology (BPPT), Indonesia
- PA1-158 Landuse and Landscape Pattern in Beijing Appling Remote Sensing Technology Rong-Hua Wang, Kensuke Kawamura, Nobukazu Nakagoshi
- **PA1-159** 瀬戸内海地域における景観の変遷とその要因の分析 *太田陽子 (NPO 法人 緑と水の連絡会議)・中越信和 (広島大・院・国際協力)
- PA1-160 北海道開拓跡地における歴史的背景と植生の体系的変化の抽出 * 庄山紀久子, Ademola Braimoh (Global Land Project 札幌オフィス)
- PA1-161 バイカル湖北部,南部および中央湖岸地域における過去5万年間の植生変遷 * 志知幸治(森林総研東北),高原 光(京都府大),Sergey Krivonogov (ロシア科学アカデミー),渡邊隆広(東北大),中村俊夫(名古屋大),西村弥亜(東海大),長谷義隆(御所浦白亜紀資料館),河合崇欣(名古屋大)
- **PA1-162 釧路湿原北東部 M13 コアの微粒炭分析** 小椋純 ー (京都精華大・人文)
- PA1-163 近畿地方における完新世の植生と火事の歴史 *高原 光(京都府大・院・生命環境), 佐々木尚子(総合地球環境学研究所), 三好小百合, 西村 亮, 林 竜馬(京都府大・院・農), 井上 淳(大阪市大・院・理), 河野樹一郎(京都府大・院・生命環境), 松下まり子(奈良文化財研究所)

生態系管理・生態学教育

- PA1-164# シカの生息密度と採食圧は比例するのか〜屋久 島照葉樹林における稚樹採食頻度の地域間比較〜 *幸田 良介,藤田昇(京大・生態研)
- PA1-165# 岐阜県恵那市里山林におけるアカネズミ (Apodemus speciosus) の食性を考慮した HSI モデル の構築 大畑直史*(中部大学・応), 久保壮史(中部大学・応), 寺井久慈(中部大学・応), 南基泰(中部大学・応), 上野薫(中部大学・応), 小田原卓郎(清水建設(株)・技), 那須守(清水建設(株)・技), 米村惣太郎(清水建設(株)・技), 横田樹広(清水建設(株)・技)
- PA1-166# 有害捕獲により時空間的に変動するカワウの警 戒性 *富永光(筑波大・生物資源),藤岡正博(筑波大・農

技センター)

- PA1-167# 佐渡島における水系ネットワークの修復 ートキ採餌環境の整備に向けて一 *山下奉海(九州大・工),河口洋一(九州大・工),谷口義則(名城大・理工),鹿野雄一(九州大・工),田中亘(九州大・工),斉藤慶(新潟大・自然研),関島恒夫(新潟大・自然研),大石麻美(新潟大・自然研),石間妙子(新潟大・自然研),島谷幸宏(九州大・工)
- PA1-168# トキの採餌環境創出を目的とした水田生態系の 実験的評価 II. 安定同位体比分析を用いた食物網構造の 解明 * 武山智博, 大石麻美, 関島恒夫(新潟大・院・自然科学)
- PA1-169# 保全・復元の指標となる魚類相の時代変遷とそれを把握する試み ~琵琶湖周辺の水田地帯を事例に~*金尾滋史(多賀町博/滋賀県大院),前畑政善(琵琶湖博),沢田裕一(滋賀県大)
- PA1-170# カエル類の生息密度からみた田園環境の評価 *佐藤 直(兵庫県立大・院・環境人間)、内藤和明、池田 啓(兵庫県立大・自然研)
- PA1-171# エゾアカガエルの陸上ハビタット利用 夏季と秋 季の比較 - 永美暢久*,赤坂卓美,中村太士(北大・院・農)
- PA1-172# 岐阜県東濃地方におけるヒメタイコウチの生息 環境に関する HSI モデルの構築 * 中村早耶香、味岡ゆい、 上野薫、寺井久慈、南基泰(中部大院・応生)、横田樹広、那須守、 小田原卓郎、米村惣太郎(清水建設(株)技術研)
- PA1-173# 水辺ビオトープ管理におけるザリガニ駆除方法 の検討 石田裕子(摂南大学工学部), 江口翔・近藤稔幸・末 廣昭夫・近持崇嗣・永井孝明(国際環境専門学校)
- PA1-174# 河川底生動物群集に及ぼす亜鉛の影響:許容可能な濃度をどう決めるか? 岩崎雄一(横国大院・環境情報),加賀谷隆(東大院・農学生命),宮本健一(産総研・イノ推),松田裕之(横国大院・環境情報)
- PA1-175# Ecohydrological functions of soil water balance on the wetland ecosystems in Beijing Yun Pan (Hiroshima Univ.), Nobukazu Nakagoshi (Hiroshima Univ.)
- **PA1-176# 岩木川下流部のヨシ原保全への社会的課題** * 寺林暁良(北大・院・文), 竹内健悟(浪岡北小)
- PA1-177# ヒシの繁茂が沈水植物に与える影響 ~優占6 種の応答の違い *岡本実希(東大・院・農), 赤坂宗光, 中 川惠(国環研), 西廣淳(東大・院・農), 高村典子(東大・国 環研)
- PA1-178# 土壌撹乱と水位管理が休耕田の埋土種子組成に 与える影響 * 齋藤 友恵(新潟大·院·自然科学), 久原 泰雅(新 湯県立植物園), 石田 信也(新潟大・院・自然科学), 高野瀬 洋一郎(新潟大・超域研究機構), 紙谷 智彦(新潟大・院・自 然科学)
- PA1-179# 水位変動はため池の水生植物相の発達にどう影響するか?-埋土種子発芽実験から- *樋口伸介(神戸大・自然科学研究科),角野康郎(神戸大・理学研究科)
- PA1-180# 天竜川水系におけるツメレンゲとクロツバメシジミのハビタットへのオオキンケイギクおよび遷移の影響2 *坪井勇人(信州大院・農),大窪久美子(信州大・農)
- PA1-181# 河岸におけるつる植物の生息する土壌条件と撹 乱に対する応答 *小田切 宗一郎, 浅枝 隆, 内田 哲夫(埼 玉大院理工), 辻野 五郎丸(多摩川流域リバーミュージアム)
- PA1-182# 北海道北部の択伐が行われた天然林における森 林動態シミュレーションモデル *安田哲(北大・環境科学 院), 吉田俊也(北大・北方生物圏)
- PA1-183# 北海道北部の択伐が実施された針広混交林における林冠ギャップ動態と稚樹の定着立地特性 *宮久史(北大・農),吉田俊也(北大・北方生物圏FSC),野口麻穂子(森林総研・四国),米康充(島根大・農),小熊宏之(国環研),坂井励(北大・北方生物圏FSC),高橋廣行(北大・北方生物

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 圏 FSC), 小宮圭示 (北大・北方生物圏 FSC), 小野貴司 (北大・農), 中村太士
- PA1-184# 中国内蒙古の異なる砂丘固定技術による短・長期的な植生回復における砂丘間低地の役割 *宮坂隆文、大黒俊哉、宮森映理子(東大・農)、趙学勇、趙哈林(中国科学院沙漠研究所)、武内和彦(東大・農)
- PA1-185# モンゴル草原における放牧圧による植物生産量、 栄養量の変化と牧民の土地評価 柿沼 薫 (東大・農・生物 多様性),高槻 成紀 (麻布大・獣), ジョンジン チュルーン (牧民)
- PA1-186# 茨城県菅生沼での火入れがオギ二次草原のタチスミレに及ぼす影響 *澤田みつ子,上條隆志,中村徹(筑波大院・生命環境),小幡和男(茨城県自然博物館)
- PA1-187# 火入れ地における微地形と希少種の対応 鳥取大学 院農
- **PA1-188# 竹林拡大のリスク評価** *宮崎祐子(奈良県森技 セ),三橋弘宗(兵庫県立人と自然の博物館),大澤剛士(神戸大・院)
- PA1-189# 国道51号線沿いにおける遺伝子組換えセイヨウ アブラナの逸出状況 -2008 年度までの調査結果報告-*西沢 徹, 中嶋信美, 玉置雅紀, 青野光子, 久保明弘, 佐治 光(国立環境研 生物圏環境研究領域)
- PA1-190# 転作ネズミムギ群落とランドスケーブ構造がイネ害虫アカスジカスミカメの個体密度に及ぼす効果 * 吉岡明良、高田まゆら、鷲谷いづみ(東大院・農学生命)
- PA1-191# 暗渠排水水田における「江」の創出は生物群集 を豊かにするか? *村上比奈子(新潟大・農),石間妙子, 関島恒夫(新潟大・自然科学)
- PA1-192# 難分解性有機汚染物質の濃縮パターン解析 水か 食べ物か? - *瀬戸繭美(愛媛大学沿環研センター), 豊島沙 織(愛媛大学沿環研センター), 磯部友彦(愛媛大学沿環研セ ンター), 高橋真(愛媛大学沿環研センター)
- PA1-193# 伊豆諸島における島民の固有植物に対する意識 *中村未来(明大・農), 菊地哲理(明大院・農), 倉本宣(明 大・農)
- PA1-194# 大学ボランティアセンターを中心とした明治大学生田キャンパスにおける里山管理 *川原健(明治大・農), 鈴木雄大(明治大院・理工), 芦澤和也(明治大院・農), 川嶋雅章(明治大・理工), 倉本宣(明治大・農)
- PA1-195# 対人関係が獣害問題を深刻化させる ~ 軋轢解消 にむけた社会科学的アプローチの可能性 鈴木克哉(兵庫 県立大)
- PA1-196# 栃木県における狩猟者の配置最適化問題 *戸田春那, 梶光一, 神崎伸夫, 酒井憲司(東京農工大学・農)
- PA1-197 稲刈り時期はその後の雑草群落発達にどの程度影響を及ぼすか * 山田晋 (東京大・農), 山本勝利, 楠本良延, 徳岡良則 (農業環境技術研究所)
- PA1-198 アカマツ コナラ林におけるアズマネザサ被度に 対する植生管理の効果 *阿部聖哉、梨本真(電中研・環境)
- PA1-199 ダム湖内に生育するヤナギ林の形態的特性と環境 要因との関係について *清憲三(埼玉大院,理工),浅見和 弘(応用地質(株)),浅枝隆(埼玉大院,理工)
- PA1-200 火入れ管理によるススキ草原二十年間の動態と火 入れの評価 * 持田幸良、赤瀬悠甫(横国大・教)
- PA1-201 釧路湿原南部におけるハンノキの大きさ、現存量、 形態と年輪成長、およびその分布を調節する要因 *矢部 和夫(札幌市立大),中村隆俊(東京農大生物),山田浩之(北 大院農),石川幸男(専修大北短),植村滋(北大フィールド), 金子正美(酪農大)
- PA1-202 釧路湿原温根内地区における水質・植生と土壌分解活性 *広木幹也、野原精一、井上智美(国立環境研)

- PA1-203 ベトナム・カンザー地域のマングローブ林における水質変動特性 * 野原精一, 井上智美(国立環境研), 浅野哲美(マングローブ植林行動計画)
- PA1-204 アズマネザサの個体群構造における地上部と地下 部との関係 * 小酒井修 (横国大院・環情), 持田幸良 (横国大・教育)
- PA1-205 植生の違いが捕食性テントウムシに及ぼす影響ー アブラムシを介した植物とナミテントウの関係ー 加茂綱 嗣, 徳岡良則, 楠本良延(農環研)
- PA1-206 群れカウントによる大台ヶ原の二ホンジカ利用度 の評価 高橋裕史(森林総研関西),日野輝明(森林総研関西), 伊東宏樹(森林総研多摩)
- PA1-207 ヒノキ人工林の強度な間伐がノウサギの生息密度 に及ぼす効果 佐藤重穂,野口麻穂子, 奥田史郎, 奥村栄朗 (森 林総研四国)
- PA1-208 浚渫土を活用した干潟再生の可能性 *大田直友, 河井崇 (阿南高専・建設システム工)
- PA1-209 土砂還元の効果をあらわす指標種の可能性 * 片野泉, 佐川志朗, 根岸淳二郎, 皆川朋子 (土研・自然共生研セ), 土居秀幸 (Oldenburg 大), 萱場祐一 (土研・自然共生研セ)
- PA1-210 絶滅危惧種ノグチゲラに対する侵入病害マツ材線 虫病のエコロジカルトラップ効果の検証 小高信彦(森林 総研九州)
- PA1-211 青森県十和田市に生息する絶滅危惧種シナイモツゴの現況と今後 長船裕紀(北里生物多様性ネットワーク)
- PA1-212 トキの採餌環境創出を目的とした水田生態系の実験的評価 I. 湛水管理方法と生物多様性・生物量との関係大石麻美,武山智博,関島恒夫(新潟大・院・自然科学)
- PA1-213 福島県浜通り北部におけるトウホクサンショウウオの結節の発生状況 伊原禎雄(奥羽大)
- PA1-214 Effects of thinning intensities on soil characteristics in a Korean pine plantation, central Korea *J.M.Kim, Y.Son, S.W.Bae, J.H.Hwang,
- PA1-215 住民参加による緑地カルテ・ビオトープタイプ地 図の作成について *島田直明,佐藤文美,豊島正幸(岩手県大・総合政策)
- PA1-216
 ネパールにおける人と動物の関係
 * 核谷保之(近畿大・農・環境生態学), 高橋あずみ(JICA)
- PA1-217 行政支援によるため池-里山複合生態系保全に対する意識改革の取り組み. 1 *阿藤正樹(三重県津農林水産商工環境事務所), 東 敬義(三重県埋蔵文化財センター)
- PA1-218 行政支援によるため池-里山複合生態系保全に対する意識改革の取り組み. 2 * 東 敬義 (三重県埋蔵文化財センター),阿藤正樹 (三重県津農林水産商工環境事務所)
- PA1-219 千葉県佐倉市畔田の里山環境での、カエルを用い た環境教育 * 小島有理(東邦大・理), 長谷川雅美, 風呂田 利夫
- PA1-220 研究成果を効果的に伝えるには? 米国の科学教育プログラム (MARE と COS) の事例 * 藤田喜久(琉大・大学教育センター/ NPO 法人海の自然史研究所), 今宮則子(海の自然史研究所), 平井和也(海の自然史研究所)

動物植物相互作用

- PB1-221# クマ棚下の光環境と液果植物の結実状況 *高橋 一秋(長野大・環境ツーリズム), 高橋香織(信州大・遺伝子), 柳貴洋(長野大・環境ツーリズム), 鷲谷いづみ(東京大院・ 農学生命)
- PB1-222# 兵庫県におけるブナ科堅果類の豊凶とツキノワ

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- グマの人里への出没について *藤木大介, 横山真弓, 坂田 宏志 (兵庫県大)
- PB1-223# 異なる光・栄養塩環境下におけるシカの林床植物への影響 大規模密度操作実験による検証 *日野貴文、揚奏直樹、日浦勉(北大・苫小牧研究林)
- PB1-224# エゾシカ採食圧下におけるエンレイソウ属の個体群構造-林床植生に対する採食圧を示す指標種としての可能性-*稲富佳洋,宇野裕之,車田利夫(北海道環境研),高嶋八千代(北教大釧路),鬼丸和幸(美幌博物館)
- PB1-225# ニホンジカの採食圧下にある針葉樹人工林伐採 跡地を広葉樹林へ転換する方法の検討 *遠藤絵実(兵庫県 大・院・環境人間),藤木大介(兵庫県大・自然研),坂田宏志(兵 庫県大・自然研)
- **PBI-226#** 栄養学的環境収容力に基づくニホンジカ (Cervus nippon) の生息地評価 * 及川真里亜, 梶光一(農工大・連大)
- PB1-227# 野生下での野ネズミのタンニン馴化機構 -タンニン摂取量の季節変動と糞中タンナーゼ活性の関係 * 西井絵里子(北海道大学環境科学院), 島田卓哉(森林総合研究所東北支所), 斎藤隆(北海道大学 FSC)
- PB1-228# 埋設式巣箱を用いた野ネズミ種子消費量の推定 ー小川学術保護林における 10 年間の年変化ー * 奥村み ほ子 (新潟大 院 自然), 安田雅俊 (森林総研), 福井晶子 (日 本野鳥の会), 柴田銃江, 正木隆 (森林総研), 箕口秀夫 (新潟 大 自然科学系)
- PB1-229# カナダ, バンクーバー島に生息する Great Blue Heron の営巣活動が林床植物や土壌環境に与える影響 * 志津伶奈 (千葉大院・園), 南 佳典 (玉川大・農), 沖津 進 (千葉大院・園)
- PB1-230# 水鳥の湖岸植生に与える影響(1) 一被食圧について * 薮内喜人(滋賀県立大学大学院), 浜端悦治(滋賀県立大学・環境)
- PBI-231# 繁殖期の森林性鳥類の縄ばりと植生構造との関係 *渡邉謙二,持田幸良(横浜国大・教育人間科),
- PB1-232# マメゾウムシとその天敵寄生蜂が、ハマエンド ウの繁殖に与える影響 中井善太(北大院・農),近藤哲也(北 大院・農), 秋元信一(北大院・農)
- **PB1-233#** イタチハギマメゾウムシの体サイズに見られる **変異: 奇主サイズと体サイズの関係** * 定清 獎, 石原 道博(大 阪府大・院・理)
- PB1-234# 花色の好みの地理的変異:ゲンノショウコ胚珠 に対するゾウムシの食害パターン *土松隆志(東大広域システム),吉武啓(農環研),宇津木望(東大広域システム), 清水健太郎(チューリヒ大),伊藤元己(東大広域システム)
- PB1-235# 食草・イヌガラシの形態に依存したモンシロチョウ属の卵分布とその運命 * 恩田裕太(筑波大・生物), 渡辺守(筑波大・生物)
- PB1-236# 種子がなくても葉で増える?一餌転換を行う種子食昆虫の生活史と資源利用 *藤田真梨子,前藤薫(神大院・農)、松井淳(奈教大・生物)、寺川眞理(広大院・国際協力)、駒井古実(大芸大・環)、湯本貴和(地球研)
- **PB1-237#** シロアリの卵に化ける菌類:フェロモンでシロアリをだます仕組みを解明 *異真悟,松浦健二(岡山大·院・環境)
- PB1-238# 種子捕食寄生蜂モチノキタネオナガコバチの産 卵様式 *高木悦郎、富樫一巳(東大院・農)
- PB1-239# 種子食性送粉者の過剰産卵を罰するウラジロカ ンコノキの選択的中絶 *後藤龍太郎,岡本朋子,加藤真(京 大院 人環)
- **PBI-240#** どんなお花が食べられる? キク科植物の花食 **害を決める要因** * 小黒 芳生, 酒井 聡樹(東北大・院・生命)

- **PB1-241#** 花食性ナミシャクによるヒサカキの雄花・雌花 の選択的利用とその要因 辻かおる(京大·理), 曽田貞滋(京 大・理)
- PB1-242# リストラされる共生者 ~アリ植物オオバギの成長に伴う共生アリ量の減少~ *半田千尋(京大・人環),田中憲蔵(森林総研),大久保忠浩(京大・人環),米山仰(高知大・農),中村理志(高知大・農),坂口麻理(高知大・農),高橋成美(高知大・農),岡本真由美(高知大・農),小田あゆみ(東大・新領域),市栄智明(高知大・農),市岡孝朗(京大・人環)
- PB1-243# ヒサカキの種子散布に関わる生物間相互作用が 三宅島の森林生態系回復に果たす役割 阿部晴恵(日本モンキーセンター),山本裕(日本野鳥の会),長谷川雅美(東邦大学)
- PB1-244# 遺伝的近縁度がsagebrush (*Artemisia tridentata*) の植物間コミュニケーションに与える影響*石崎智美,大原雅(北大·院·環境科学),塩尻かおり(京大・生態研センター), Richard Karban (UC Davis・Department of Entomology)
- PB1-245# 植物の揮発性物質を介した植物間コミュニケーションが節足動物群集構造に与える影響 *米谷衣代,高林純示(京大・生態研)
- PB1-246# ミズナラにおける開花雌花数と健全堅果落下数の樹木個体間および林分間比較 *夏目暁子(名大院生命農),水谷瑞希(福井県自然保護セ), 肘井直樹(名大院生命農)
- PB1-247# 地上部の植食がブタクサの分解過程に与える影響 * 三浦和美, 大串隆之(京大 生態研センター)
- PB1-248# 分布北限のブナ林におけるスペシャリスト植食 性鱗翅目の欠如はブナの被食防御能に影響するか * 小林 誠(北大・環境科学), 日向潔美, 渡邊陽子(北大院農), 吉田 国吉(芽室町)
- PB1-249# 落葉広葉樹の誘導防御と開葉様式の関係一生理 解剖学の視点からー * 青山千穂(北大農),日向潔美,渡邊 陽子,齋藤秀之,澁谷正人,小池孝良(北大院農)
- PB1-250# How do aphids alter leaf traits of soybean and soil nutrients? *Silva, A. O. (Kyoto Univ.), Katayama, N. (Kyoto Univ.) and Ohgushi, T. (Kyoto Univ.).
- PBI-251# 里山コナラ林における shelter maker が引き起こす間接効果 佐藤通成(東大院・新領域)
- PB1-252 北陸 3 県におけるクマ大量出没予測を目的としたブナ科堅果の豊凶モニタリングの取り組み *水谷瑞希(福井県自然保護セ),野上達也(白山自然保護セ),中島春樹(富山県農総技セ),多田雅充(福井県海浜自然セ),小谷二郎(石川県林武)
- PB1-253 シカと林床植生が樹木実生の生存に及ぼす効果 *伊東宏樹(森林総研多摩), 日野輝明(森林総研関西), 高橋 裕史(森林総研関西)
- PB1-254 ムササビが利用可能な樹洞の形態と樹洞資源をめ ぐる他種との競合 *早川悟史, 林田光祐(山形大学農学部)
- PB1-255 藻食いの水鳥はなぜ地下部を好むのか? 糖類・ デンプンの分析からー *山口真玲子, 薮内喜人, 串岡航, 吉川剛明, 浜端悦治(滋賀県大)
- PB1-256 ハナホソガ属における能動的送粉行動の進化と二次的喪失 川北篤*,加藤真(京大・院・人環)
- PB1-257 植食性昆虫の糞を介した植物による窒素の再吸収 ~硝酸態窒素の視点から~ 加賀田秀樹(京大・生態学 研究センター)
- PB1-258 植物の遺伝子型によって影響される外来植物セイタカアワダチソウ上の昆虫群集〜原産地 vs. 侵入地〜*安東義乃,内海俊介, TP Craig,大串隆之
- PB1-259 簡易な結実量推定方法の開発 ~3分で見れる

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- **果実の量~** * 中島亜美 (東京農工大・農), 正木隆 (森林総研), 小池伸介 (東京農工大), 山崎晃司 (茨城県博), 梶光一 (東京農工大)
- PB1-260 森林の果実生産量と結実フェノロジーの緯度による変異 半谷吾郎(京都大・霊長研),相場慎一郎(鹿児島大・理)

種 多 様 性

- PB1-261# 種間の類似度と遺伝的距離との相関が、注目する形質によって異なるのはなぜか 伊藤洋(東大・総合文化)
- PB1-262# 共進化を考慮した食物網において移動分散が生物多様性に与える影響 *山口和香子(東北大・生命科学),近藤倫生(龍谷大・理工),河田雅圭(東北大・生命科学)
- PB1-263# 表層堆積物の粒径のばらつきが植物種多様性に 与える影響 *塩野貴之、持田幸良(横浜国大・院・環境情報)
- PB1-264# 裸地が多様性に貢献する? 河川の合流が生み出す群集ダイナミクス * 大澤剛士(神戸大·院), 三橋弘宗(兵庫県立大), 丑丸敦史(神戸大)
- PB1-265# 焼畑休閑林と原生林における分解者群集の比較 與嶋 愛 (名大), 中川 弥智子 (名大), 鴨井 環 (愛媛大), 酒井 章子 (地球研)
- **PB1-266**# **落ち葉のリンはどこへゆく?**: 渓流のシュレッ ダーによるリンの利用と放出 *佐藤竜一, 加賀谷隆(東大院・ 農学生命)
- PB1-267# 体の伸長と鰭の退化に伴う海岸間隙性ミミズハ ゼ類の多様化 *山田朋彦、川北篤、加藤真(京大院・人環)
- PB1-268# タンガニイカ湖沿岸域魚類の長期定点調査による群集構造の解明 * 竹内勇一(京大・理),越智晴基,幸田正典(大阪市大・理),堀道雄(京大・理)
- PB1-269# ため池群における魚類の多様性 *満尾世志人(農工大院・農), 角田裕志(農工大院・農), 大平充(農工大院・農), 土井真樹絵(農工大院・農), 千賀裕太郎(農工大・農)
- PB1-270# 屋久島の潮間帯岩礁域における底生魚類群集 村瀬敦宣, 須之部友基(海洋大・館山ス)
- PB1-271#
 河川底生動物におけるギルド間での群集形成の違い *森照貴(北大・環境科学), 齊藤隆(北大・FSC)
- PBI-272# 岩礁潮間帯固着生物群集における種間相互作用 網の定量的解析 * 辻野昌広,野田隆史(北大環境),山本智子(鹿大水産),仲岡雅裕(北大フィールド科学),堀正和(瀬戸内水研)
- PB1-273# 岩礁潮間帯生物群集における種のターンオーバー: 時間的・空間的変異性に注目して *田中智之(北大・環境), 野田隆史(北大・地球環境), 仲岡雅裕(北大・フィールド科学), 山本智子(鹿児島大・水産), 堀正和(瀬戸内水研), 奥田武弘(東北水研), 熊谷直喜(千葉大・自然科学), 島袋寛盛(千葉大・自然科学)
- PB1-274# 海草藻場の小型動物群集における種数ー機能群構造関係の空間変異 * 山田勝雅, 堀正和(水研セ・瀬戸水), 恵良拓哉(千葉大・自然科学), 仲岡雅裕(北大・FSC)
- PB1-275# 東北太平洋岸海域における底生生物群集の時空間変動:時間的・空間的視点でのβ多様性 *奥田 武弘,服部 努,成松 庸二,伊藤 正木(東北水研・八戸)
- PB1-276# 水田における栽培管理方法がトンボ類幼虫にあたえる影響 *中西康介(滋賀県大院・環境科学), 蒲原漠,田和康太,沢田裕一(滋賀県大・環境科学)
- PB1-277# ヒルギ林樹冠部から水面へ落下・浮遊する飛翔 性昆虫と昆虫食の魚類 *佐々木幹雄, 岩崎洋樹, 入江萩子, 滝 若菜, 青木優和, 渡辺 守(筑波大・院・生命環境)
- PB1-278# キクビアオハムシの寄主利用に関する地理変異:

- 新寄主への適応と集団の分化 * 甲山哲生(北大・院理), 松本和馬(森林総研・昆虫), 片倉晴雄(北大・院理)
- PB1-279# 同所的オオオサムシ亜属種間における体サイズ 差の生態的意義:資源分割か?生殖隔離か? *奥崎穣, 高見泰興,曽田貞滋
- PB1-280# 乗鞍岳の異なる標高地点におけるハネカクシ科 昆虫の季節的発生消長 * 淺木宏覚(信大・院), 市野隆雄(信 大・理)
- PB1-281# ヨシ焼きが鵜殿の地表性甲虫群集にあたえる影響 *藤澤貴弘、李哲敏、石井 実(大阪府大院・生環)
- **PBI-282#** アリヅカコオロギ属内におけるスペシャリスト **種とジェネラリスト種: 寄主アリに対する行動の違い** 小松 貴(信州大, 理), 丸山 宗利(九大博), 市野 隆雄(信州大, 理)
- PB1-283# 琵琶湖沿岸域におけるユスリカ相の現状―最近 約10年間の変化 * 井上栄壮(信州大・繊維), 小林貞(川 崎市), 西野麻知子(琵琶湖環境科学研究センター)
- PB1-284# パラオ諸島沿岸域および海水湖におけるカイア シ類の生物多様性 * 斉藤真一, 玉手英利(山形大・理)
- PB1-285# トカラ列島における陸産貝類相の構成とその要因 * 市川志野,中島貴幸,片野田裕亮(鹿児島大・理工研), 富山清升,山本温彦,鈴木英治(鹿児島大・理)
- PB1-286# シカが改変する土壌動物群集の空間分布:森林 ギャップからの距離依存性 * 北村 智之, 宮下 直 (東京大学・ 農・生物多様性)
- PB1-287# モンゴルの放牧地生態系における植物群集に存在する二段階の機能的冗長性 *佐々木雄大,大久保悟。岡安智生(東大・農),ジャムスランウンダルマ(モンゴル農大),大黒俊哉,武内和彦(東大・農)
- PB1-288 北海道雨竜沼湿原のにおける水生植物と池塘の地形要因の関係について *山崎真実(札幌市博・北大農学院), 高橋英樹(北大総博), 高田雅之(道環科研), 佐々木純一(雨竜沼湿原を愛する会)
- PB1-289 ホットスポットには何がいるのか? 日本産シダ の分布パターン 竹中明夫(国立環境研究所)
- PB1-290 魚類吸虫 Genarchopsis goppo の隠蔽種と第一中間宿主における特異性 浦部 美佐子(滋賀県立大学環境科学部)
- **PB1-291 隠岐諸島の陸生貝類相の生物地理学的特徴** * 高 井裕美(島根大院・環境資源),星川和夫(同)

遷移・更新

- PBI-292# 経過年数の異なる河畔林攪乱跡地の土壌の生成と十壌動物相 *大場麻衣(玉川大・農), 南佳典(玉川大・農)
- PB1-293# 富士山火山荒原における一次遷移に伴う土壌微生物群集の変化:リン脂質脂肪酸を指標として * 吉竹晋平(早稲田大・院・先進理工),藤吉正明(東海大・教養),中坪孝之(広島大・院・生物圏),増沢武弘(静岡大・理),小泉博(早稲田大・教育)
- PB1-294# 三宅島 2000 年噴火による火山灰堆積地の植生 遷移と土壌生成 *川越みなみ,上條隆志,田村憲司(筑波大・ 生命環境)
- PB1-295# 山地渓谷域における複数の支流の合流が異なる 植生ハビタットを創出する可能性 *木村誇, 菊池俊一, 丸 谷知己(北海道大・農)
- PB1-296# 谷地坊主が形成するリターの実生定着に対する 重要性 *小山明日香(北大・環境科学院), 露崎史朗
- PB1-297# 落葉広葉樹数種の Janzen-Connell 効果〜実生 定着過程における時間的変化〜 *上野真郷(東北大・農), 山崎実希,清和研二(東北大院・農)

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PB1-298# 渓畔林内の土石流堆積地に成立した稚樹バンク の組成と持続性 *沖慎司(秋田県大院・生物資源),正木隆(森 林総研),大住克博(森林総研関西),柴田銃江,星野大介(森 林総研東北),星崎和彦(秋田県大・生物資源)
- PB1-299# 山形県金目川流域におけるブナ天然林の更新初期段階の動態の地形依存性 *染谷潤一郎(宇都宮大·院·農), 逢沢峰昭(宇都宮大・農), 大久保達弘(宇都宮大・農)
- PB1-300# 林床の光環境の季節的・空間的不均一性がチシマザサー斉開花枯死後のブナ稚樹分布に与える影響 *佐藤朋華(秋田県立大学),山月融心,井上みずき,星崎和彦,阿部みどり,蒔田明史
- PB1-301# 冷温帯スギ・落葉広葉樹混交林におけるブナの 更新過程 * 國永知裕(京都府大・院・生命環境), 平山貴美子(京都府大・院・生命環境), 嵜元道徳(京大・フィールド研), 高原光(京都府大・院・生命環境)
- PB1-302# 同所的に生育するブナ・イヌブナの実生定着特性:制限要因の影響の種間差 *石塚航, 梶幹男(東大・演習林)
- PB1-303# 開放方位の異なるスギ林林縁に移植したブナ稚 樹の成長反応 *山田いずみ (新潟大・院・自然), 紙谷智彦 (新 潟大・院・自然)
- PB1-304# 雪解け時期の違いが稚樹の開葉時期および成長 量に与える影響 *伊藤公一(鳥取大・農),佐野淳之(鳥取 大・農)
- PB1-305# 林床植物における異なる生活史戦略の共存:成長-生存のトレードオフと種子-クローン生産のトレードオフの関係に着目して *小嶋智巳(東北大・院・生命),酒井聡樹(東北大・院・生命)
- PB1-306# 冷温帯における落葉樹と常緑樹の共存を考える *宮下彩奈(東大・院・理・日光植物園), 舘野正樹(東大・院・理・日光植物園)
- **PB1-307# ヒノキ・サワラ後継樹の更新様式の比較** 森田元 気 (信大農), 小林元 (信大 AFC)
- PB1-308# 管理放棄二次林におけるモミの定着条件 *沖 宗一郎, 山田 俊弘, 奥田 敏統(広島大・院・総科)
- PB1-309# 落葉広葉樹二次林皆伐後2年間の更新特性から 見た再生過程 *小山未奈(東農大),正木隆(森林総研),佐 藤明(東農大)
- PB1-310# サイズの異なる人工ギャップ創出後 15 年目の 植生と更新一ナラ枯れの影響一 * 齋藤時子(新潟大・農), 大山拓郎(新潟大・農), 紙谷智彦(新潟大院・自然科学)
- PB1-311# Early stages of secondary succession on abandoned cropland in semi-arid grassland, Mongolia *Hoshino, A., Okuro, T. (Tokyo Univ.) , Jamsran, U. (Mongolian Agriculture Univ.) , Takeuchi, K. (Tokyo Univ.)
- PB1-312# 世界遺産の動きを観る 〜白神山地ブナ林モニタリング十年の歩み〜 *石橋史朗(環境省世界遺産セ),齋藤宗勝(盛岡大短大部),蒔田明史(秋田県大),松井淳(奈良教育大),神林友広(深浦町),小関孝一,畑雅之,石澤幸人(ウォッチング青森),中静透(東北大)
- PB1-313# 太平洋側ブナ個体群の更新動態に与えた温暖化 の影響 *小出大,持田幸良(横国大・環情)
- PB1-314# 青森県猿ヶ森における埋没林の樹種組成および 生育環境の復元 *箱崎真隆(東北大・院・生命科学), 吉田 明弘, 星野安治, 大山幹成, 鈴木三男(東北大学植物園)
- PB1-315# 阿蘇外輪山北部における完新世の草原植生と火 事の歴史 *河野樹一郎(京都府大·院·生命環境), 林 貴由(京 都府大・農), 高原 光(京都府大・院・生命環境), 佐々木尚子, 湯本貴和(総合地球環境学研究所)
- PB1-316 年輪判読によって推定されたウトナイ湖北岸におけるハンノキ林の成立過程 *石川幸男(専修大道短大・みどりの総合科学)、矢部和夫(札幌市立大・デザイン)

- PB1-317 高緯度北極氷河後退域の遷移:キョクチヤナギは なぜパイオニアになれないのか? *中坪孝之(広島大・院・ 生物圏),藤吉正明(東海大・教養),吉竹晋平(早稲田大・院・ 先進理工),内田雅己(極地研)
- PB1-318 シイノキにおける発芽タイミングの地域変異と気候要因との関係 山田浩雄(森林総研・林育セ関西)
- PB1-319 樹木の決定論的な新規加入と生活史特性のシンドローム: 渓畔林の多種共存にもたらす影響 *星崎和彦(秋田県立大)・正木隆(森林総研)・大住克博(森林総研関西)・高橋和規(森林総研)・松根健二(住友林業)・鈴木和次郎(森林総研)
- PB1-320 ブナ実生の生残と光環境との関係 西本 孝 (岡山県自然保護センター)
- PB1-321 光・密度・ネズミ類の被食を制御した実験系におけるブナ当年生実生の生残過程と死亡要因 北限域での例- *並川寛司,渡辺直樹(北教大・札幌・生物),松井哲哉(森林総研・北海道),小林誠(北大・環境科学)
- PB1-322 大峯山脈前鬼における植生変化と実生・稚樹バン クの再生 松井淳、堀井麻美、柳哲平(奈教大)、辻野亮(地球研)、幸田良介(京大・生態研)、今村彰生(京都学園大)、 高田研一(森林再生支援センター)
- PB1-323 森林に隣接した耕作放棄地における樹木実生・成木の分布 *徳岡良則(広島大院・国際協力,農環研),大東健太郎,楠本良延,山本勝利(農環研),中越信和(広島大院・国際協力)
- PBI-324 本州中部における亜高山帯針葉樹林の森林構造と その更新動態 *池田圭吾(信大院・工),井田秀行(信大・教), 高橋耕一(信大・理)
- PB1-325 道路沿いの亜高山帯針葉樹林におけるニホンジカ の剥皮と競争が更新に及ぼす影響 長池卓男(山梨県森林 研),高橋一秋(長野大),高野瀬洋一郎(新潟大)
- PB1-326 紀伊半島温帯針葉樹林における樹木群集動態に及 ぼす地形の影響 * 中森由美子(和歌山県林試), 星野大介(森 林総研・東北), 鳥丸猛(ウメオ大), 西村尚之(名産大)
- PB1-327 地形が規定する森林の構造―侵食作用が卓越する 丹沢山地の例― 酒井暁子,藤巻玲路,北川涼(横国・環境 情報),川崎昭如(国連大学)
- PB1-328 照葉樹人工林の林分構造の解明 *宮内大策(横国大・院・環境情報),藤原一繪(横国大・院・環境情報)
- PB1-329 カツラマルカイガラムシ被害林の林分構造変化 *上野満、斉藤正一(山形森林セ)
- **PB1-330** 東北タイにおける落葉フタバガキ林下の植物珪酸体化石群 *江口誠一(千葉中央博), 岡田直紀(京都大), Somkid Siripatanadilok, Teera Veenin (カセサート大)

動物群集

- PC1-331# 森林の遷移が食物網に与える影響:捕食者であるクモ類の群集比較から * 原口 岳, 陀安 一郎 (京大 生態 研センター)
- PC1-332# 近畿地方の二次林における植物ダニ群集の樹種 間比較 * 須藤正彬(京大・人環), 西田佐知子(名大博物館), 市岡孝朗(京大・人環)
- PC1-333# 湖岸の空間構造が底生動物群集に及ぼす影響 ヨシ帯と砂質帯の比較 * 苅部甚一(京大・生態研), 岡田直紀(京大・農), 陀安一郎(京大・生態研)
- PC1-334# 繁殖資源を共有するタンガニイカ湖産シクリッド4種の共存 *太田和孝(京大院理),幸田正典(大阪市大院理),佐藤哲(長野大・環境ツ)
- PC1-335# 湖沼メソコスムにおける体サイズ構成と生態系

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- メタボリズム:捕食者の栄養カスケード効果 *福森香代子(京大生態研),酒井陽一郎(京大生態研),兎本博介(龍谷大理工),陀安一郎(京大生態研),奥田昇(京大生態研)
- PC1-336# 山岳湿原のユスリカ群集;移入・分散と局所群集 構造 * 冨樫博幸, 鈴木孝男, 占部城太郎(東北大・生命科学)
- PC1-337# 湖沼堆積物に記録された Daphnia の柔軟な生活 史変化:八幡平湖沼と琵琶湖の例 * 槻木(加) 玲美, 王婉 琳(東北大・生命), 谷幸則(静岡県立大・環境研), 小田寛貴(名 大・年代測定センター), 松田智之, 占部城太郎(東北大・生命)
- PC1-338# 八幡平湖沼の動植物プランクトンの長期動態: 高山湖沼で何が起きているか? 王婉琳, 槻木(加) 玲美(東北大・生命), 谷幸則(静岡県立大・環境研), 小田寛貴(名大・年代測定センター), 松田智幸, 占部城太郎(東北大・生命)
- PC1-339# 山形県畑谷大沼における Daphnia 「群集」の時空間動態 * 阿部周,野村篤之,牧野渡,占部城太郎(東北大・生命)
- PC1-340# 山形県白鷹湖沼群における Daphnia 種の分布と 種間関係 *野村篤之,阿部周,牧野渡,占部城太郎(東北大・ 生命)
- PC1-341# 山形県畑谷大沼における Daphnia 複数種の長期変化: Hybrid はいつから形成されたか? * 栗野将, 槻木(加) 玲美, 牧野渡, 松島野枝, 河田雅圭(東北大・生命), 小田寛貴(名 大・年代測定センター), 占部城太郎(東北大・生命)
- PC1-342# ヤマトオサガニ個体群における左右性比率の変動 寺西肇(京大院・理), 堀 道雄(京大院・理)
- PC1-343# 温度の違いが土壌線虫の群集動態に与える影響 〜室内実験による検証 * 丹羽慈, 竹本周平, 岡田浩明(農 環研)
- PC1-344# 根と葉の分解にともなうトビムシ群集の遷移 *藤井佐織(京大院・農),武田博清(同志社大・理工)
- PC1-345# 東南アジア熱帯におけるハムシ類の非季節的個 体数変動について * 岸本圭子(地球研), 市岡孝朗(京大)
- PC1-346# 多雪地冷温帯林におけるヤチネズミ・アカネズ ミ・ヒメネズミの林分利用特性 *松本 幸二(新潟大学 農) 箕口 秀夫(新潟大学 自然科学系)
- PC1-347# 里山におけるシカ被食圧分布 *磯崎昌代, 小池 文人(横浜国立大学・環境情報学府)
- PC1-348# 小学校プールに生息するトンボ幼虫の現状は? ~都市の自然再生へ向けて~ 森川政人(千葉大院・園芸), 小林達明(千葉大院・園芸)
- PC1-349# 栃木県奥日光におけるコテングコウモリのねぐ らの空間構造 *渡邉眞澄(東京農工大・農), 吉倉智子, 上 條隆志(筑波大・院・生命環境), 安井さち子(つくば市並木)
- PC1-350# 安定同位体を用いたカワウ季節移動の検証 * 棗田孝晴, 坂野博之, 鶴田哲也(中央水研), 大森浩二(愛媛大・CMES), 井口恵一朗(中央水研)
- PC1-351# 中海水域における魚類の出現動態 「ます網」漁 獲物からの解析 - *横尾俊博(島根大・汽水研),佐々木正(島 根水技セ),岩崎健史,飯塚祐輔,野田圭太,田中智美,荒西 太士(島根大・汽水研)
- PC1-352# 同所的イトヨ2型における繁殖場所分岐:捕食 リスクと遡上コストとの関連について * 久米学(土研自然 共生セ),北野潤(FH 癌研究セ),森誠一(岐阜経済大),鈴木 規慈(三重大院・生資)
- PC1-353# 国指定天然記念物西湖コウモリ穴における翼手 類の生息状況 *中村光一朗(明大・農),中川雄三(山梨県 希少動植物保護員),倉本宣(明大・農)
- PC1-354# 栃木県奥日光における樹洞棲コウモリ3種の夏季ねぐらの比較 * 吉倉智子(筑波大・院・生命環境),渡邉 真澄(東京農工大・農),上條隆志(筑波大・院・生命環境),

安井さち子 (つくば市並木)

- PC1-355# ニホンジカの高密度化が鳥類群集に与える影響 *奥田圭 (宇都宮大・農), 小金澤正昭 (宇都宮大・演習林)
- PC1-356# ニホンジカがノウサギにおよぼす影響について *木村太一(宇都宮大院・農), 小金澤正昭(宇都宮大・附属 演習林)
- PC1-357# 囲い込み実験によるカエル類幼生3種の種間競争の検証 *豊田大輔,藤岡正博(筑波大・院・生命環境)
- PC1-358# 水田生態系における生物多様性と水域ネットワークの指標としてのゲンゴロウ類 *西原昇吾(東大・農学生命科学), 角谷拓(東大・農学生命科学), 鷲谷いづみ(東大・農学生命科学)
- PC1-359# 寄生者を介した森から川へのエネルギー補償と その場所的変異 *佐藤拓哉(奈良女共七), 徳地直子・鎌内 宏光(京大フィールドセンター), 新妻靖章(名城大農), 渡辺 勝敏(京大院理), 金岩 稔(東農大), 山田英幸・山本裕典・原 田泰志(三重大院生資)
- PC1-360# ソテツ上に発生するカイガラムシとアリの興味 深い分布パターン *田中 宏卓, 大西一志, 辻 和希 (琉球大学農学部)
- PC1-361 東南アジア熱帯林におけるキノコ食昆虫の群集構造 山下 聡 (京大), 市岡 孝朗 (京大)
- PC1-362 自動撮影法から明らかになったタイ南部の孤立林 における地上性哺乳類・鳥類の種多様性 * 北村俊平(立 教大学・理)、Siriporn THONG-AREE(タイ王立森林局)、 Sitichai MADSRI(タイ王立森林局)、Pilai POONSWAD(マ ヒドン大学・理)
- PC1-363 渡良瀬遊水地の繁殖鳥類の密度分布を景観要素から説明できるか? * 永田尚志, 武田知己(国環研・生物)
- PC1-364 スナガニ類の巣穴が干潟堆積物中の小型生物の分布に与える助長効果 嶋永 元裕 (熊大沿岸域センター)
- PC1-365 隠岐諸島における大雨による土砂が河川昆虫群集 に及ぼす影響 藤原淳一(島根大生資),*沼田京子(島根大 院生物生命)
- PC1-366 大隅諸島における汽水・淡水産貝類相及びカワニナ Semisulcospira libertina の系統解析 * 片野田 裕亮,中島 貴幸,市川 志野(鹿児島大・理工研),浅見 崇比呂(信州大・理),富山 清升(鹿児島大・理)
- PC1-367 小河川上流域における魚類の流程分布と種間競争 *大平充(東京農工大・農),満尾世志人,土井真樹絵,角田 裕志,千賀裕太郎
- PC1-368 諏訪湖における魚類群集動態要因の解析 * 小関右介,原田祐子,箱山洋(中央水研)
- PC1-369 西表島における水田環境の変遷とゲンゴロウ類の 生息状況の関わり * 唐真盛人(東海大院,人間環境)・水谷晃・ 崎原健・河野裕美(東海大,沖縄地域研究センター)・北野忠・ 内田晴久(東海大,教養)
- PC1-370 稲田における養魚密度が生物群集の動態に与える 影響 * 鶴田哲也, 井口恵一朗, 棗田孝晴, 武島弘彦(中央水研), 小池亮人(東海大)
- PC1-371 津軽十三湖のヤマトシジミを中心とした食物網動態とそれを支える懸濁物の起源 *伊藤真(東北大・生命), 岩田智也(山梨大),東信行(弘前大),鈴木孝男(東北大・生命), 占部城太郎(東北大・生命)
- PC1-372 スギ人工林渓流の底生動物群集と魚類の流下餌資源の特性 *加賀谷隆,小松香野子,奥田青州,古江正明(東大・農学生命・森林動物)
- PC1-373 冷温帯スギ林における地表徘徊性甲虫群集の日周 期活動と種間相互作用 滝 若菜,渡辺 守(筑波大・院・生 命環境)

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PC1-374 温暖帯における薪炭林施業によるアリ群集への影響 * 吉村真由美(森林総研・関西)
- PC1-375 農法の違いが水田節足動物群集に及ぼす影響 1. 二毛作と一毛作の比較 *森本信生(農研機構・中央 農研), 西城洋, 鈴木芳人
- PC1-376 農法の違いが水田節足動物群集に及ぼす影響 2. 環境保全型と慣行型の比較 *西城洋(農研機構・中央 農研),森本信生,鈴木芳人
- PC1-377 **踏圧がトビムシの棲息に与える影響** 伊藤良作*・ 長谷川真紀子*・松永雅美*・萩原康夫*・桑原ゆかり*・本 郷哲郎**(*昭和大学富士吉田教育部**山梨県環境科学研 究所)

動物個体群

- PC1-378# 多型を構成する morph 間の対抗性 *井川拓也 (北海道大・院・水産科学), 岸田治(京都大・生態研セ), 西 村欣也(北海道大・院・水産科学研究)
- PC1-379# 真社会性アブラムシを用いた可塑的形質の遺伝 的変異の検出 *服部充(信大・理),岸田治(京大・生態研セ), 市野隆雄(信大・理)
- PC1-380# Genetic diversity of Solidago altissima increases aphid density through supporting metapopulation structure *Utsumi, S (CER, Kyoto Univ.), Ando, Y (CER, Kyoto Univ.), Craig, T (Minnesota Univ.), Ohgushi, T (CER, Kyoto Univ.).
- PC1-381# 同所的な近縁種のハビタット分割:カワトンボ 属における日照環境の重要性 * 鮫島由佳, 椿宜高(京大・ 生態学研究センター)
- PC1-382# イワフジツボの個体群動態:増加率に影響する プロセスの時空間的変動 *深谷肇一(北大環境), 野田隆史 (北大地球環境), 仲岡雅裕(北大 FSC), 山本智子(鹿大水産), 堀正和(瀬戸内水研), 奥田武弘(東北水研), 熊谷直喜, 島袋 寛盛(千葉大自然科学)
- PC1-383# 薩南諸島におけるチャイロマイマイ Phaeohelix submandarina の種内変異の生物地理学的研究 * 中島貴幸,市川 志野, 片野田 裕亮 (鹿児島大・理工研), 浅見 崇比呂 (信州大・理), 冨山 清升 (鹿児島大・理)
- PC1-384# 巻貝の左右二型集団における形と頻度の時空変動 * 中寺由美, 浅見崇比呂 (信州大・理), Somsak Panha, Chirasak Sutcharit (Chulalongkorn Univ.)
- PC1-385# 東京湾干潟におけるカイヤドリウミグモの出現 *鈴木竜太郎(東邦大学・理), 多留聖典(東邦大学東京湾生 態系研究センター), 風呂田利夫(東邦大学教授)
- PC1-386# 炭素安定同位体比の異なるオオユスリカ幼虫個 体間の脂肪酸組成の違い *安野翔(東北大・院・生命), 山中寿朗(岡山大・理・地球科学), 鹿野秀一, 菊地永祐(東北大・東北アジア研)
- PC1-387# アカネズミ個体群はダイオキシン汚染耐性を獲得しているのか? 遺伝子型頻度からみた汚染の影響評価 *石庭寛子, 関島恒夫(新潟大学・院・自然科学)
- PC1-388# 奥日光におけるニホンジカが野ネズミ類に与える影響について *大谷道生(宇都宮大学 大学院), 小金沢正昭(宇都宮大学 農学部附属演習林)
- PC1-389# 奥羽山系のブナ天然林におけるアカネズミとヒ メネズミの遺伝子流動 * 高野雄太, 井上みずき, 藤晋一, 星崎和彦(秋田県立大・生物資源)
- PC1-390# 文献資料に基づいた東北地方におけるニホンジ カの過去の生息状況 *伊藤愛(新潟大・院), 箕口秀夫(新 潟大・農), 三浦慎悟(早稲田大・人)
- PC1-391# 餌資源の質と量によるエゾシカの牛息地評価

- 〜対照的な二地域、知床岬・洞爺湖中島の比較〜 *山本悠子(東京農工大・農)、宮木雅美(道環境研)、高橋裕史(森林総研関西)、梶光一(東京農工大・農)
- PC1-392# 東京郊外におけるタヌキとハクビシンの食性比較 * 立脇隆文(麻布大・獣医), 笹岡直子(東大・農・生物 多様性), 高槻成紀(麻布大・獣医)
- PC1-393# 千葉県で捕獲されたイノシシの妊娠と体重の時間変動 * 斎藤昌幸(中央農研/横国大),百瀬浩,仲谷淳(中央農研),浅田正彦(千葉県生物多様性センター),植松清次(千葉農総研)
- PC1-394# チャイロキツネザル種間雑種個体群の遺伝分析 *田中美希子、田中洋之、平井啓久(京大・霊長研)
- PC1-395# 北海道のタンチョウ個体数は将来どうなるか? *正富欣之(北大院・環境科学),正富宏之(タン保研)
- PC1-396# 田で食う鷺も好き好き:サギ類食性のコロニー 間種内変異 * 益子美由希(筑波大・生物),徳永幸彦(筑波大・ 生命共存)
- PC1-397# 相互につながりを持つカワウのねぐら・コロニーの個体数変化 *熊田那央,山口典之(東大・農),加藤ななえ(NPO法人バードリサーチ),金井裕((財)日本野鳥の会),藤田剛,樋口広芳(東大・農)
- PC1-398# 個体数変化と標識データに基づくマガンの個体 群パラメータ推定 *森口紗千子(東大・農・生物多様性), 天野達也(農環研), 牛山克巳(宮島沼水鳥・湿地センター), 藤田剛(東大・農・生物多様性), 樋口広芳(東大・農・生物 多様性)
- PC1-399# フラクタルに分散することは対補食戦略となるか? *堀部直人(東大·総合文化),嶋田正和(東大·総合文化)
- PC1-400# 地理的分布境界におけるウシガエルのメタ個体 群構造 *武田勇人、宮下直(東大・農・生物多様性)
- PC1-401# 景観構造と局所環境がウシガエル・メタ個体群 に与える影響 *川崎菜実、宮下直(東京大・農・生物多様性)
- PC1-402# 密度との関係性から見たアユの縄張り形成と崩壊 *田中裕美(兵庫県大・院環境人間学),中桐斉之(兵庫県大・環境人間),井口恵一朗(中央水研),泰中啓一・吉村仁(静岡大・創造院)
- PC1-403# 水田水域ネットワークにおける淡水魚類の空間 分布 *宮崎佑介,角谷 拓,鷲谷いづみ(東大院・農)
- PC1-404# 環境変化における最小生存個体数と絶滅: 雌雄 同体を考慮したモデル 由田太一(兵庫県立大環境人間), 中桐斉之(兵庫県立大環境人間), 吉村仁(静岡大創造院), 泰 中啓一(静岡大創造院)
- PC1-405 コウイカ類の形態における左右非対称性とその比率の動態 * 平尾隆, 堀道雄(京大・理)
- PC1-406 安定同位体比からみた亜寒帯河口干潟域のアサリ の餌環境 宇田川 徹(北海道区水産研究所)
- PC1-407 カワバタモロコの初期増殖速度と個体群動態 *田中哲夫(人と自然博),藤田茂宏(北攝オーデイオ),谷本 卓弥(伊丹北高),山科ゆみ子(ホトケドジョウを守る会),三 浦靖弘(藤井寺工高)
- PC1-408 淡水ハゼ科魚類では栄養段階のサイズ依存性は時間的に一定ではない * 仲澤剛史(台湾大・海洋研), 酒井陽一郎(京大・生態研セ), 謝志豪(台湾大・海洋研), 小板橋忠俊(京大・生態研セ), 陀安一郎(京大・生態研セ), 山村則男(地球研), 奥田昇(京大・生態研セ)
- PC1-409 東海地方沿岸部におけるハゼ科ウキゴリ属魚類 4 種の生息環境 底質粒径との関わり- * 鈴木陽介(東海大院・人間環境), 荒尾一樹(環境科学研究所), 北野忠, 内田晴久(東海大・教養)
- PC1-410 ウミガメ上陸数のベイズ統計モデリング * 久保

(PA1:体育棟、PB1:3階西側廊下、PC1:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

拓弥, 重田麻衣(北大・地球環境), 亀崎直樹(日本ウミガメ協議会)

- PC1-411 屋久島におけるニホンザルの群れの消滅 杉浦秀 樹 (京都大・野生動物),早川祥子(京都大・霊長研)
- PC1-412東北地方に生息するニホンイノシシ Sus scrofaleucomystax の遺伝的背景* 貝津光依 (山形大・理工学),玉手英利 (山形大・理)
- PC1-413 ミジンコ (Daphnia) 2種の温度勾配分布と消費型競争への温度影響 松田智幸,*占部城太郎,八神遥介(東北大学生命科学)
- PC1-414 神奈川県愛川町尾山耕地におけるモートンイトトンボの生息状況 1. 水田ごとの個体数 * 松村和音(東海大院・人間環境)、大木悦子(あいかわ自然ネットワーク)、田島文忠(昭和環境システム)、北野忠、内田晴久(東海大・教養)
- PC1-415 神奈川県愛川町尾山耕地におけるモートンイトトンボの生息状況 2. 水質との関わり *田島文忠(昭和環境システム)、松村和音(東海大院・人間環境)、大木悦子(あいかわ自然ネットワーク)、北野忠、内田晴久(東海大・教養)
- PC1-416 南西諸島における大型ゲンゴロウ類の生息環境 *北野忠(東海大・教養)、田島文忠(昭和環境システム)、苅 部治紀(神奈川県生命の星・地球博)
- PC1-417 管理の異なる林地におけるルイスオサムシの個体 群動態 *山下英恵(東大院・農学生命),桐谷圭治(伊東市), 富樫一巳(東大院・農学生命)
- PC1-418 飛ばない昆虫: オオヒラタシデムシの飛翔筋 2 型 * 白石恭輔, 廣田忠雄(山形大学・理)
- **PC1-419** 放牧がチャマダラセセリの幼虫に及ぼす影響 吉田信代(東北農研センター)
- PC1-420 **笹食蝶類の個体群動態に対する笹の一斉枯死の影** 響 井出純哉(京大院・農・昆虫生態)
- PC1-421 ヤナギマルタマバエの密度に対する落枝と寄生蜂 の影響 * 倉地耕平, 大串隆之(京大・生態研)

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

植物個体群

- PA2-422# ヒノキアスナロ天然林の遺伝変異 *三嶋賢太郎, 高田克彦(秋県大 木高研),平尾知士,渡邉敦史(森総研 林育セ)
- PA2-423# 一回繁殖型植物オオウバユリの繁殖特性が集団 遺伝構造に与える影響 *西澤美幸,大原雅(北大・院・環 境科学)
- PA2-424# チュウゴクザサの一斉開花個体群を対象とした 遺伝的多様性解析 *松尾歩, 陶山佳久(東北大・農), 齋藤 智之(森林総研木曽), 住吉千夏子, 斎藤誠子, 井鷺裕司(京大・ 農), 柴田昌三(京大・フィールド研), 鈴木準一郎(首都大・ 理工), 西脇亜也(宮崎大・農), 蒔田明史(秋田県立大・生資)
- PA2-425# ケヤキ天然集団の更新過程における遺伝的動態: 成木, 実生, 稚幼樹段階における遺伝変異 * 岩泉正和, 高橋誠, 武津英太郎, 矢野慶介, 宮本尚子, 生方正俊(森林総研林木育種センター)
- PA2-426# 栃木県太平洋側の低地に分布するブナ集団のマイクロサテライトマーカーによる遺伝構造の分析 *稲永路子,数金真理子,小林幹夫(宇都宮大・農・森林)
- PA2-427# 栃木県に残存する太平洋側低地ブナ集団の PCR-RFLP 法によるハプロタイプの検討 *数金 真理子(字都 宮大院・農)、小林 幹夫(字都宮大・農)
- PA2-428# 気候変動はハリギリの分布・遺伝的多様性にどのように影響するか 最終氷期・現在・地球温暖化後 * 阪口翔太(京大院・農), 櫻井聖悟(京府大院・生命環境), 竹内やよい, 山崎理正, 井鷺裕司(京大院・農)
- PA2-429# 落葉低木ユキヤナギの地域間での形態変異 * 芦澤和也 (明治大院・農), 倉本宣 (明治大・農)
- PA2-430# 都市化による生育地分断化がタチツボスミレ個 体群に与える遺伝的影響 *畑中佑紀(京都大・院・農),橋 本啓史(名城大・農),井鷺裕司(京都大・院・農)
- PA2-431# 近親交配は稚樹個体群のデモグラフィーに影響を与えるか?アカエゾマツ孤立個体群の全個体遺伝子型解析 *富田基史,陶山佳久(東北大・院・農),杉田久志(森林総研東北)
- PA2-432# ケヤキにおける紅葉フェノロジーの産地間変異 -国内分布域を網羅した産地試験の結果- *矢野慶介, 高橋誠, 岩泉正和(森林総研林木育種センター)
- PA2-433# 鬼怒川中流域の河畔林におけるスイカズラの登 攀様式と植生構造の関係 * 中村満理恵, 二階堂洋, 柴田吉男, 西尾孝佳(宇都宮大・雑草セ)
- PA2-434# 栄養塩と水が空間的に不均質に分布する環境に おけるクローナル植物カキドオシの成長 * 張替鷹介,可 知直毅,鈴木準一郎(首都大・理工)
- PA2-435# 栄養塩が不均質に空間分布する環境におけるクローナル植物のジェネット間競争様式の解析 *松嶋麻由子,可知直毅,鈴木準一郎(首都大・理工)
- PA2-436# 土壌中の物理的障害物のサイズがホソムギとナガハグサ個体の成長に及ぼす影響 中村亮二,可知直毅,鈴木準一郎(首都大・理工)
- PA2-437# 渇水後, クロモはなぜ増加したのか? 一照度との関係― * 吉川剛明, 浜端悦治(滋賀県立大学)
- PA2-438# 水分供給の時間的不均質性が植物成長におよぼ す影響の種間比較 * 萩原陽介, 可知直毅, 鈴木準一郎(首都 大・院・理工)
- PA2-439# ナスにおける自己・非自己認識機構の実験的検 討 *水谷紘菜,可知直毅,鈴木準一郎(首都大・理工)
- PA2-440# ツバメオモトにおける個体群構造の時空間的解析 * 吉間綾子、大原雅(北大・院・環境科学)

- PA2-441# 北八ヶ岳縞枯れ林の空間構造の発達とそのプロット間のばらつき *鈴木智之,可知直毅,鈴木準一郎(首都大院・理工)
- PA2-442
 フタバガキ科 Shorea 属 2 種の遺伝的変異と集

 団プロセス
 *竹内やよい(京大農),清水健太郎(チューリッヒ大)
- PA2-443 消雪時期がもたらす局所的な開花フェノロジーの 変動が高山性カタクリの集団構造に与える影響 *山岸洋 貴(北大・院・環境科学), Taber D.Allison (Massachusetts Audubon Society), 大原雅(北大・院・環境科学)
- PA2-444 一斉開花後 28 年間にわたるチシマザサ実生由来 個体群のクローン動態 *齋藤智之(森林総研木曽),陶山佳 久(東北大・農),西脇亜也(宮崎大・農),鈴木準一郎(首都大・ 理工),蒔田明史(秋田県立大・生資)
- PA2-445 東日本におけるブナとイヌブナの水平・垂直分布 とこれを規定する環境・歴史要因 原正利(千葉中央博)
- PA2-446 照葉樹林の台風撹乱後の回復:稚樹の量的要因と成長反応との比較解析 *齊藤哲,佐藤保(森林総研),小南陽亮(静岡大・教育),真鍋徹(北九州自・歴博),永松大(鳥取大・地域),西村尚之(名古屋産業大)
- PA2-447 湿地性低木ヘビノボラズの個体群構造に及ぼす水 環境と光環境の影響 山口久美子,鈴木一恵,安藤裕子, *肥後睦輝(岐阜大・地域)
- PA2-448 林床草本ミヤコアオイの分布と繁殖に及ぼすスギ・ヒノキ植林の影響 *石田清(弘前大学・農学生命科学)
- PA2-449 多年草レンゲショウマの個体群動態と休眠 * 鈴木まほろ (岩手県博), 木村恵 (東大ア生セ)
- PA2-450 本州東部におけるチシマザサの潜在分布域の予測 と気候変化の影響評価 *津山幾太郎(森林総研),松井哲哉 (森林総研・北海道),小川みふゆ(森林総研),小南裕志(森 林総研・関西),田中信行(森林総研)
- **PA2-451 被食環境での植物の他種への防御作用** *鈴木亮(首都大・ツーリズム),鈴木智之(首都大・理工)
- PA2-452 輪作水田における雑草動態モデル:変動環境での 個体群動態と埋土種子の持続性 * 浅井元朗(中央農研), 秋田鉄也, 松田裕之(横浜国大・環境情報)
- PA2-453 岡山県におけるトウカイコモウセンゴケの形態 一岡山にコモウセンゴケはあるか? 近藤弘幸(岡山理大), 星野卓二(岡山理大),*片岡博行(津黒いきもの)
- PA2-454 シルビアシジミの保全に関する研究 山口祥伸(神戸大・院・人間発達)、武田義明(神戸大・人間発達)

菌類・微生物

- PA2-455# 波崎海岸に生育するコウボウムギと根圏微生物 の相互作用の解明 * 松岡宏明・山路恵子・小林勝一郎(筑 波大・生命環境)
- PA2-456# 青森県北津軽郡におけるヒバ実生の生長に関与 する内生菌の影響 * 原和良, 山路恵子, 小林勝一郎 (筑波大・ 生命環境), 森茂太 (森林総研)
- PA2-457# 植物の誘導抵抗性の発現に関わる菌根共生 * 西 田貴明(京大生態研)、大串隆之(京大生態研)
- PA2-458# 木材腐朽性担子菌アカキクラゲ綱菌類の樹種選択性と材分解力 * 白水貴, 徳増征二
- PA2-459# ブナ粗大枯死材の分解に関わる菌類群集の動態 と機能 深澤遊(トトロのふるさと財団)
- PA2-460# 細菌相利共生系の成立初期における適応的表現型変化 *細田一史(阪大・情), 森光太郎(阪大・生命), 柏木明子(弘前大・農), 山内義教(阪大・生命), 城口泰典(阪大・

(PA2:体育棟、PB2:3 階西側廊下、PC2:3 階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 情), 四方哲也(阪大・情)
- PA2-461# 汽水域底土における硫酸還元細菌群集構造の実験的解析 *村岡歩(東北大・院・生命)、金谷弦(東北大・東北アジア研)、鹿野秀一(東北大・東北アジア研)
- PA2-462#
 カシノナガキクイムシに関連する菌類の生理学的形質の比較 *遠藤力也(京大院・農,理研 BRC-JCM), 鈴木基文(理研 BRC-JCM), 辨野義己(理研 BRC-JCM), 二井一禎(京大院・農)
- PA2-463# 小笠原諸島のアーバスキュラー菌根菌 * 坂田益朗 (東大院・新領域),小嶋禎夫(小笠原亜熱帯農セ),可知直毅(首都大院・理工),福田健二(東大院・新領域)
- PA2-464# 中心珪藻 (Cyclotella meneghiniana) の粘液 糸放出器官における表現型可塑性 *城川祐香,嶋田正和(東 大・理), 狩野賢司, 真山茂樹(東京学芸大・生物)
- PA2-465# 印旛沼におけるツボカビを含めた真菌類の検出 天野陽介(東邦大・理)
- PA2-466 マツタケのシロにおける外生菌根の分布 * 菊地 淳一(奈教大·教), 片岡良太(京大·農), 安藤正規, 野崎愛(京 都林試)
- PA2-467 アーバスキュラー菌根菌は窒素供給によって植物 生育を促進する 早津雅仁(農環研),高西伊吹(東大院農生), * 齋藤雅典(農環研,現・東北大)
- PA2-468 空気中における変形菌類の出現とその季節変化 *加茂野晃子,小島久弥(北大・低温研),松本淳(福井総合植 物園),河村公隆,福井学(北大・低温研)
- PA2-469 植生の違いが湿原泥炭層における微生物群集の分 布特性に及ぼす影響 * 秋山 克, 清水 了, 石島洋二 (幌延地 圏環境研究所), 長沼 毅 (広島大院・生物圏科学)

進 化

- PA2-470# 植物集団における隠蔽変異蓄積量と生育地環境 との関係 *山口正樹(神戸大・院理・生物),工藤洋(京大・ 生態研センター)
- PA2-471# 屋久島の渓流帯と林床におけるホソバハグマとキッコウハグマの遺伝的、生理生態的分化一浸透性交雑の検証と光合成特性の比較解析 *三井裕樹(京大・人環), 野村尚史(地球研), 井鷺裕司(京大・農), 戸部博(京大・理), 瀬戸口浩彰(京大・人環)
- PA2-472# 表現型可塑性の遺伝的変異: イカダモにおける 誘導防衛 山口聖智, 吉田丈人(東大・総合文化)
- PA2-473# 日本列島におけるマムシグサ群の多様化と交雑 * 柿嶋聡, 東馬哲雄, 邑田仁(東大・院・理・植物園)
- PA2-474# 最終氷期を通して異なる歴史を経たツリバナ集 団の接触帯における挙動 *岩崎貴也(首都大·牧野標本館), 青木京子(京都大・院・人環), 瀬尾明弘(地球環境研), 村上 哲明(首都大・牧野標本館)
- PA2-475#
 好き嫌いによる種分化は何度も生じた -極端 な食草変更が導く適応放散 *松林圭(北大・院理・自然史),

 Sih Kahono (LIPI), 片倉晴雄 (北大・院理・自然史)
- PA2-476# 異なる食草を利用する能力間の正の遺伝相関が 食草範囲に与える影響:現食草への適応は新食草への前 適応をもたらすか * 新田尚吾(北大・院理),藤山直之(北 教大・旭川),片倉晴雄(北大・院理)
- PA2-477# テトラヒメナと大腸菌からなる実験室内共生系の構築 *森光太郎(阪大院生命機能),冨田憲司,細田一史(阪大院情報科学),四方哲也(阪大院情報科学・生命機能・ERATO)
- PA2-478# 熱帯雨林に生息する植物共生アリの系統分化 ~寄主植物に影響された分化か?地理的分化か?~ *片

- 岡陽介(信大·理), 乾陽子(大教大·教育), 市岡孝朗(京大· 人環), Swee-Peck Quek (FAS Center for Systems Biology, Harvard Univ.), 上田昇平(信大·理), 市野隆雄(信大·理)
- PA2-479# 飛翔能力・生息地の不連続性は地理的分化にど う影響するか〜ヒラタシデムシ亜科の例〜 池田紘士(京 大・理), 久保田耕平(東大・農), 曽田貞滋(京大・理)
- PA2-480# ニホンホホビロコメツキモドキにおける大顎の 左右非対称性と寄主植物サイズの関係 *土岐和多瑠,富樫 一巳(東大院・農)
- PA2-481# アオモンイトトンボの雌における体色と生活史 形質の表現型相関 * 高橋佑磨, 渡辺 守(筑波大·院·生命環境)
- PA2-482# メダカにおける配偶行動および性淘汰の緯度間 変異 *藤本真悟,山平寿智(新潟大・院・自然科学)
- PA2-483# 再交尾抑制戦術を巡る雌雄間での拮抗的共進化; 対抗適応できない雌(には悲劇が起こる!! *日室千尋, 藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
- PA2-484# ゲンジボタル Luciola cruciata の発光周期変異 と nos 遺伝子発現 * 大槻朝(東北大・生命科学),横山潤(山形大・理),大場信義(大場蛍研究所),近江谷克裕(北大・医),河田雅圭(東北大・生命科学)
- PA2-485# 近畿地方に分布するオオオサムシ亜属 4 種の種 分化と遺伝子浸透 * 長太伸章(京都大·理), 久保田耕平(東京大・農生), 八尋克郎(琵琶湖博), 曽田貞滋(京都大・理)
- PA2-486# 現在進行形の適応的種形成:琵琶湖固有魚類に おけるケーススタディ * 小宮竹史,藤田彩理,渡辺勝敏(京 都大・院理・動物生態)
- PA2-487# 左右極性の量的変異が母親を淘汰する * 宇津野 宏樹, 浅見崇比呂(信州大・理)
- PA2-488# オスの振る舞いは性比を変えうるのか?:セク ハラが働く場合の性配分モデル *川津一隆, 奥慎太郎(京 大院・農・昆虫生態)
- PA2-489# 遺伝子制御ネットワークモデルを用いた表現型 可塑性の進化モデル * 津田真樹, 河田雅圭(東北大・生命科 学)
- PA2-490# 隠れた遺伝的変異と可塑性から進化する新規表 現型 *岩嵜航,津田真樹,河田雅圭(東北大・生命)
- PA2-491# グッピー (Poecilia reticulata) における LWS オプシン遺伝子が個体の光感受性に与える影響 *村田和 人(東北大・生命)、笠木聡(東大・新領域)、河村正二(東大・ 新領域)、松島野枝(東北大・生命)、河田雅圭(東北大・生命)
- PA2-492#
 ガ類の音響交信の進化 感覚便乗モデルの検証

 - *中野亮(東大・農学生命), 高梨琢磨(森林総研), Niels Skals (南デンマーク大), Annemarie Surlykke (南デンマーク大), 石川幸男(東大・農学生命), 田付貞洋(東大・農学生命)
- PA2-493# 協同繁殖様式の多様性に関する齢依存的競争能力を考慮した数理的解析; Diversity in Patterns of Cooperative Breeding: focusing on age-specific competitive ability *西澤裕文(北大・環境科学院), 高田壮則(北大・地球環境科学研究院)
- PA2-494 渓流沿い植物の葉形態変異と分断化淘汰:ハビタット構造と自然選択 野村尚史(地球研),藤原健人(東大),伊藤元己(東大),瀬戸口浩彰(京大),高相徳志郎(地球研)
- PA2-495 ケショウヤナギの系統地理:北海道と長野に隔離 された集団の由来 *永光輝義,河原孝行(森林総研北海道), 戸丸信弘(名古屋大)
- PA2-496 ヤスデ類の複雑な交尾器形態進化 *田辺力(熊本大・教育),曽田貞滋(京大院・理)
- PA2-497 アズキゾウムシにおける発育速度と温度定数の関係 * 奥慎太郎(京都大・農),池本孝哉(帝京大・医),本間淳(京都大・理),藤崎憲治(京都大・農)

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PA2-498 アオモンイトトンボにおける幼虫の環境選択が雌 二型維持に及ぼす影響 *澤田 浩司(香椎高校), 粕谷 英一(九 大・理・生物)
- PA2-499 ニホンリスにおける遺伝的多様性の地域差 *田村典子(森林総研),株文男(首都大)
- PA2-500 シギゾウムシ写真展 東樹宏和 (産総研)

数理・分子生態

- PA2-501# 個体ベースによる空間個体群動態 *皆藤千穂(奈良女院人間文化),高須夫悟(奈良女 理)
- PA2-502# 植物個体群動態のネットワーク構造解析 * 中河 嘉明(筑波大),横沢 正幸(農環研),鞠子 茂(法政大),原 登志彦(北大)
- PA2-503# 道路分断化による個体群動態シミュレーション - シデコブシを用いて - * 水野雄介, 塚田隆明, 重永幸哉(名 工大 都市社会)
- PA2-504# 植物の最適防御スケジュールとそれに対する植 食者の最適発生時刻 * 高橋大輔(京大・生態研センター), 山内淳(京大・生態研センター)
- PA2-505# 環境条件が関係を換える?寄生と相利の間の曖昧な線引き *福井 眞,山内 淳(京大・生態研センター)
- PA2-506# 鳥類育児寄生者のホスト乗換え仮説に関する数 理的研究 *川添のぞみ (奈良女大院・人間文化),高須夫悟 (奈良女・理)
- PA2-507# 右も左もわからないへど: 情報利用能力の制約 と最適採餌戦略がもたらす非同調的な共進化機構 細 将 貴(東北大・生命科学)
- PA2-508# 勝ち癖と負け癖への数理的アプローチ 萱島隆一 (九大・理),上原隆司(九大・理),巖佐庸(九大・理)
- PA2-509# 富栄養化による2種藻類競争系のレジームシフト *川口喬(立命・理工),中島久男(立命・理工)
- PA2-510# 生態化学量論を考慮した食物網構築モデル * 加藤聡史、占部城太郎、河田雅圭(東北大・生命科学)
- PA2-511# 最上位捕食者の分散能力が食物連鎖長に与える 影響 *長田穣, 宮下直 (東大・農)
- PA2-512# 土壌の低温保存が線虫群集構造に及ぼす影響— PCR-DGGE (変性剤濃度勾配ゲル電気泳動法) による評価— 竹本周平, 丹羽慈, 岡田浩明 (農環研・生物生態機能)
- PA2-513# 日本産イモリ属2種の遺伝的多様性と系統地理 *富永篤(国立環境研),松井正文(京大人環),林光武(栃木県博),西川完途(京大人環),太田英利(琉球大熱生研)
- PA2-514# インドレフュージア仮説の検証 1. ツムギアリ *朝香友紀子(北大・院・環境), 東典子(北大・院・水産), 平田真規(北大・院・環境), 東正剛(北大・院・環境)
- PA2-515# グッピーの色覚の多様性の維持機構の解明 手 塚あゆみ(東北大・院・生命科学), 笠木聡(東大・院・新領域), 河村正二(東大・院・新領域), Cock van Oosterhout (University of Hull), 松島野枝(東北大・院・生命科学), 河田雅圭(東北大・ 院・生命科学)
- PA2-516# ヒルムシロ属における高温ストレス応答〜熱ショック転写因子 hsf が高温馴化能を決めるのか?〜 *天野百々江(神戸大・院・理),飯田聡子(神戸大・内海域),小菅桂子(神戸大・遺セ)
- **PA2-517#** イブキ・ハクサンハタザオの適応的分化:ゲノミックアレイ解析から高地適応に迫る *森長真一(九大・院理),永野惇(京大・院理)
- PA2-518# 阿蘇くじゅう国立公園内草原に生育するハルリンドウの遺伝的多様性は低い 味岡ゆい、沼田早都希、南

- 基泰(中部大院・応生), 矢原正治(熊本大院・薬)
- PA2-519# マイクロサテライトマーカーを用いたミョウガガイの矮雄間競争の解明 *尾崎有紀(奈良女子大・院・人間文化),岩口伸一,遊佐陽一(奈良女子大・理)
- PA2-520# 交尾時刻が異なるウリミバエ2系統間における 時計遺伝子の解析 * 渕側太郎, 宮竹貴久(岡山大院・環境・ 進化生態)
- PA2-521# 関東地方におけるブナ科常緑樹の遺伝的変異 *田代正徳,中村達夫,藤原一繪(横国大・院・環情)
- PA2-522# 既発表データによる、日本の里山種の地理的変 異パターンのメタ解析 *飯田晋也(横国大・環情),小池文 人(横国大・環情),平塚和之(横国大・環情)
- PA2-523# 低温に対する開花応答性の自然変異とその遺伝 的基盤 *杉阪次郎(京大生態研センター),清水健太郎(チューリヒ大),角谷徹仁(遺伝研),工藤洋(京大生態研センター)
- **PA2-524 推定値をデータのように使ってデータ解析するとき** 粕谷英一(九大・理・生物)
- PA2-525 ペンギンが潜水を決める時と林冠ギャップで木が 急成長する時 * 島谷健一郎 (統数研), 高橋晃周 (極地研), 久保田康裕 (琉球大)
- PA2-526 生態系の融合―多様性と食物網構造への影響― *吉田勝彦(国立環境研・生物),時田恵一郎(阪大・サイバー)
- PA2-527 オプション理論を用いた変動環境下の繁殖準備コストの解析 *大泉嶺(北大環境科学院), 高田壮則(北大地球環境科学院)
- PA2-528 絶滅が食物網構造に与える影響: 進化的タイムスケールからの考察 * 広永良(京大・生態研), 山村則男(地球研)
- PA2-529 モンゴル国 Hovd 県の生態系に遊牧パターンが 与える影響のモデルシミュレーション *長谷川成明(地球研),石井励一郎(地球フロンティア),上村明(東京外大), 山村則男(地球研)
- PA2-530 高山植物ミヤマキンバイにおける多起源的なエコタイプの分化パターン *平尾章(信大・山岳研),下野嘉子(畜産草地研),池田啓(京大・人間環境),和田直也(富山大・極東地域センター),工藤岳(北大・地球環境)
- PA2-531 東アジア産ナガマルハナバチ亜属の DNA 分類 *田中洋之(京大霊長研), 伊藤誠夫(北大博物館), 湯本貴和(地 球研)
- PA2-532 日本列島におけるオイカワの系統地理と国内移 殖の実態 早川明里(岐阜大地域),高村健二(国立環境研), 中島淳,河口洋一(九大院工),鬼倉徳雄(九大院農),*向井 貴彦(岐阜大地域)
- PA2-533 マイクロサテライト分析に基づくカワヤツメ回遊型集団間の遺伝子流動 *山崎裕治・長井輝美(富大院理工)・横山良太・後藤晃(北大 FS セ)
- PA2-534 琵琶湖からの導入による関東河川における淡水魚 地理系統の混在 -オイカワとウグイの比較- *高村健 二、中原真裕子(国立環境研・生物)

動物繁殖・社会生態

- PA2-535# 思川河口域におけるゴカイ科の生殖行動 浜本麦 (重富干潟小さな博物館)
- PA2-536# 黒潮・親潮混合域の季節な環境変化に対応した オオミズナギドリの採餌利用海域の変化 *山本誉士(総研大),高橋晃周(極地研),勝又信博(東大海洋研),佐藤克文(東大海洋研),岡奈理子(山階鳥研),Philip Trathan(英国南極局)

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PA2-537# 岩手県花巻市におけるサシバの繁殖生態— N-CCD 画像解析による給餌動物と食物資源量— *河端 有里子(岩大·院·農),糸川拓真(岩大·農),東 淳樹(岩大・農)
- PA2-538#
 アカネズミにおける multiple paternity (複数 文性) *若林紘子 (北大・環境科学院), 野田悟志 (北大・環境科学院), 齊藤隆 (北大・北方圏 FSC)
- PA2-539# イチジクコバチにおける繁殖構造と近交弱勢の 推定 * 片渕正紀(東北大・生命), 横山潤(山形大・理), 中 静透(東北大・生命)
- PA2-540# 母親による調節:寄生バチ Melittobia の極端に 雌偏向な産卵時性比とコンスタントな雄生産スケジュー ル *安部 淳(岐阜大・応用生物)、上村佳孝(慶応大・生物)、 Stuart West(エディンバラ大・進化生物)
- PA2-541# オスの求愛時間への投資戦略〜雌雄間の血縁度 に注目して〜 *布施名利子(九大・理), 粕谷英一(九大・理)
- PA2-542# ヨツモンマメゾウムシにおける交尾抑制 山根隆 史・宮竹貴久(岡山大学大学院環境学研究科)木村吉伸(岡山 大学大学院自然科学研究科)
- PA2-543# アジアイトトンボの交尾器形態と受精嚢内にお ける精子除去機構 *田島裕介,渡辺守(筑波大·院·生命環境)
- PA2-544# アゲハ類の雄が生産する精包量と精子数のトレードオフ * 佐々木那由太,渡辺守(筑波大・院・生命環境)
- PA2-545# ハラヒシバッタにおける隠蔽 vs. 繁殖;なぜ無紋 オスが存在するのか * 鶴井香織 (京大院・農・昆虫生態)・ 西田隆義 (京大院・農・昆虫生態)
- PA2-546# 飼いならされたアリモドキゾウムシは繁殖競争 に有利か? -大量累代飼育系統と野生系統での交尾行 動の違い- *城本啓子,熊野了州,栗和田隆(琉球産経), 原口大(沖縄病害虫防除セ)
- PA2-547# クワヒョウタンゾウムシ両性型と単為型の比較-系統関係と繁殖生態 - *多田泰紘(北大院・理), 小林憲生(北 大・総合博物館), 片倉晴雄(北大院・理)
- PA2-548# early male 産卵による女王間の闘争―ツブハ ダカアリの処女雌に産卵チャンスはあるのか?― *吉澤 樹理(岐阜大院・応用生物)、山内克典(岐阜大学名誉教授)、 Heinze Jurgen (Universitat Regensburg)、土田浩治(岐阜大・ 応用生物)
- PA2-549# クサアリ亜属 5 種の形態分類と CHC 組成の比較 * 遠藤真太郎(信州大院・理・生物), 市野隆雄(信州大・理・生物)
- PA2-550# シダクロスズメバチの巣仲間認識機構 *佐賀達 矢, 土田浩治 (岐阜大・昆虫生態)
- **PA2-551#** フタモンアシナガバチにおける居候一他巣に移動したワーカーは何をしているかー *山下大輔, 粕谷英一(九大・理・生態)
- PA2-552# 社会性アブラムシの労働分業:行動の可塑性を 調節するメカニズム * 奥村友佳子,植松圭吾(東大・総合 文化),沓掛磨也子,深津武馬(産総研),柴尾晴信,嶋田正和(東 大・総合文化)
- PA2-553# タカサゴシロアリの前兵蟻分化に伴う防衛器官 の形成と Distal-less 遺伝子の発現パターン * 栂浩平(富 山大院・理), 北條優(農生研), 三浦徹(北大院・地球環境), 前川清人(富山大院・理)
- PA2-554# ヤエヤマシロアリの遺伝的カスト決定機構 *星 真大, 北出 理 (茨城大・理・生物)
- PA2-555# シロアリ補充女王の繁殖順位は遺伝的に決まる 山本結花(岡大・院環境・昆虫生態), 松浦健二(岡大・院環境・ 昆虫生態)
- PA2-556# ヤマトシロアリの前兵蟻分化に影響を与える生態的要因 *渡邊 大, 前川清人(富山大院・理・生物)

- PA2-557# コアシナガバチのワーカー繁殖に関する生理・ 生態学的研究 *山崎和久,土田浩治(岐阜大・昆虫生態)
- PA2-558# ヤマトシロアリの王と女王の繁殖コンフリクト: 女王は王がいるのに単為生殖卵を産む * 中野裕子(岡大・ 院環境・昆虫生態), 松浦健二(岡大・院環境・昆虫生態)
- **PA2-559#** おせっかいなシロアリ〜ヤスデ卵への保護行動 〜 * 矢代敏久, 松浦健二 (岡大院・環境)
- PA2-560 サクラマスにおける繁殖形質の個体群内変異 山本俊昭(日獣大)、北西滋(北大)
- PA2-561 ヒメオオアリ亜属における多女王制・分巣繁殖の 進化 *川島佑貴子(東京農工大・農), 廣田忠雄(山形大・理), 佐藤俊幸(東京農工大・農)
- PA2-562イチジクコバチの性比に他種(寄生種)が与える影響木下智章(佐賀大・農), Jaco Greeff (Univ. of Pretoria)
- PA2-563 競争者存在下におけるヨツボシモンシデムシの雄の繁殖行動 * 岸田竜, 鈴木信彦(佐賀大・農)

動物生活史

- **PA2-564# マルカメムシの味見行動** *清水加耶, 乾陽子(大教大・教養)
- PA2-565# オオタバコガ幼虫の体色決定要因と色彩多型の 適応的意義 *山崎梓(京大院・農・昆虫生態),藤崎憲治(京 大院・農・昆虫生態)
- PA2-566# どんなまゆなら食われない?~ヒロヘリアオイラガのまゆ隠蔽コストの検出~ *坪井助仁,西田隆義,藤崎憲治(京大院・昆虫生態)
- PA2-567# キアゲハの春型はなぜ小さい?休眠のコストが 体サイズに及ぼす影響 *川喜多愛,石原道博(大阪府大院・ 理)
- **PA2-568#** メダカの成長速度の緯度間変異におけるクレード内およびクレード間パターンについて *阿部真和, 山平寿智(新潟大学)
- PA2-569# メダカにおける摂餌量と捕食脆弱性の緯度間変 異に関する研究 *鈴木雄也、山平寿智(新潟大・理)
- PA2-570# ヤゴの存在がサンショウウオの共食いに与える 影響 *大野綾佳(北大・水産), 岸田治(京大・生態研セ), 西村欣也(北大・水産科学)
- PA2-571# 生息環境の異なる複数のため池におけるカワバ タモロコの生活史変異〜個体群動態を中心として *鈴木 規慈,原田 泰志 (三重大院生資),前畑 政善 (琵琶博),畠山 絵美, 高久 宏佑 (三重大院生資)
- PA2-572# 分布北限息におけるヒメイカの生態 ~越冬の 成功とそれによる変化~ *佐藤成祥(北大院・環境), 宗原 弘幸(北大 FSC)
- PA2-573# シオマネキにおける生活史特性の地域間変異 徳島、熊本、沖縄の比較から * 青木美鈴,渡邊陽子(奈良女子大・理),今井秀行(琉球大・理),鎌田磨人(徳島大・工),和田恵次(奈良女子大・理)
- PA2-574# 「産みの苦しみ」をいかに和らげるか: 形態的制 約が卵の形に与える影響 *鈴木紀之, 西田隆義(京大院・農・ 昆虫生態)
- PA2-575# 犬上川下流域に生息するハリヨの非繁殖期における生息場所利用 *上野篤史(滋賀県大), 金尾滋史(多賀町博/滋賀県大院), 久米学(土研自然共生研究セ), 近雅博(滋賀県大)
- PA2-576# 異なる食草への適応が引き起こす季節的隔離 *富樫朱美(北大院理), 松本和馬(森林総研), 片倉晴雄(北 大院理)

(PA2:体育棟、PB2:3 階西側廊下、PC2:3 階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PA2-577# ナガカメネジレバネにおける異性寄主への寄生 様式 中瀬悠太,加藤真(京大・人環)
- PA2-578# ウナギの胃に寄生する線虫 Heliconema longissimumの生態 *片平浩孝, 水野晃秀, 海野徹也, 長 澤和也(広大・生物圏)
- PA2-579# 集群性アミ類ヒメオオメアミの遺伝構造 *阪本 真吾(筑波大・生命環境),井鷺裕司,兼子伸吾(京大・農), 青木優和(筑波大・生命環境)
- PA2-580# 概日時計の変異したアズキゾウムシ:遺伝的基 礎および発育時間との関係 原野智広(九大院・理・生態科 学),宮竹貴久(岡山大院・環境・進化生態)
- PA2-581# 連結打空産卵を行なうノシメトンボの翼面荷重 と卵生産 * 須田大祐, 岩崎洋樹, 渡辺守(筑波大・院・生命環境)
- PA2-582# オンブバッタの排泄行動:後脚でフンをける *田中陽介(九大・システム生命), 粕谷英一(九大・理・生物)
- PA2-583# もっと光を! 低温条件下で成長を促進する ための日光浴行動 - * 秋山耕治, 西田隆義(京大院・農・昆 虫生態)
- PA2-584# 巣材の表面粗さに応答するトビケラの分泌物量 岡野淳一(東北大学生命科学研究科), 菊地永祐(東北大学 東北アジア研)
- PA2-585# 足尾山塊における GPS テレメトリー法による ツキノワグマの秋期の土地利用解析 *根本唯(東京農工大 学)、小坂井千夏(東京農工大学)、小池伸介(東京農工大学)、 中島亜美(東京農工大学)、山崎晃司(茨城県自然博物館)、梶 光一(東京農工大学)
- PA2-586# ツキノワグマは縄張りを持つのか? 関香菜子, 掛札小夜子, 許勢文郁, 加藤祐子, 山本俊昭(日獣大), 玉谷宏夫, 田中純平, 小山克, 大江久美子(NPO法人 picchio)
- PA2-587# 浦幌地域におけるヒグマの餌資源量の変動と食性 *早船琢磨,金井知行,山崎聡子,南山依里,八木議大(北大ヒグマ研究グループ)
- PA2-588 Evolution of polyphenism: Role of density and relative body size on morph determination *Wakano, JY (Meiji Univ.) , Whiteman, HH (Murray State Univ.)
- PA2-589
 アズキゾウムシによる階層的 Y-model の検証

 *柳真一(九大・博物館),津田みどり(九大・生防研)
- PA2-590 ウミホタルガクレの繁殖生態 松原史(熊本大・院・ 自然科学), 逸見泰久(熊本大・沿岸域センター)
- **PA2-591** テレメトリーによるトウホクサンショウウオの生 活圏解析 太田 宏(東北大 生命科学)
- **PA2-592** ヤノナミガタチビタマムシの生態とそれを利用した防除 大澤正嗣(山梨森研)
- PA2-593 アナジャコと生きる一宿主の異なるマゴコロガイ の成長 *伊谷行(高知大·教育),山田ちはる(高知大·黒潮圏), 楪葉顕信,岩田洋輔(高知大·教育)
- **PA2-594 捕食者誘導型の表現型可塑性は適応的か?** 半杭淳一,若原正巳(天使大学),*道前洋史(北里大・薬)
- PA2-595 カシノナガキクイムシの飛翔後穿入までの生息場 所 衣浦晴生(森林総研関西)
- PA2-596 齢集団間にみられる栄養状態の格差-長距離渡り はリスクになるかー 岡 奈理子(財 山階鳥類研究所・鳥学 研究室)
- **PA2-597** オキナワマドボタルの繁殖戦略 *名護ほたる(琉大・農), 辻和希(琉大・農)

外来種・都市

- PA2-598# 空間最適化によるアライグマの対策目標の検討 *石井宏昌, 松田裕之(横浜国大・院・環境情報)
- **PA2-599# 釧路湿原におけるアメリカミンクとエゾクロテンの環境選択 ***竹下毅(北大・院・文)
- PA2-600# 茨城県宍塚大池におけるウシガエルの食性 * 竹田千尋(筑波大・生物資源),門脇正史(筑波大・生命環境)
- PA2-601# 北海道における外来両生類トノサマガエルの分 布拡大 高井孝太郎(北大環境科学院), 岩熊敏夫
- PA2-602# 茨城県宍塚大池における在来種クサガメと外来 種ミシシッピアカミミガメの生息状況 *川口健一(筑波大・ 生物資源), 門脇正史(筑波大・生命環境), 竹田千尋(筑波大・ 生物資源)
- PA2-603# 九州における国内移入魚ハスの定着メカニズム の解明 *佐藤真弓(九大・院工),河口洋一(九大・院工), 中島 淳(九大・院工),向井貴彦(岐大・地域),鬼倉徳雄(九 大・院農)
- PA2-604# モニタリングデータから探るチャネルキャットフィッシュの在来魚類群集と生態系サービスへの影響 * 松崎慎一郎(東大,農),高村典子(国環研/東大),荒山和則(茨城県内水試), 冨永敦(茨城県内水試), 岩崎順(茨城県内水試), 鷲谷いづみ(東大,農)
- PA2-605# mtDNA 分析により検討した中国産力ワリヌマエビ属の侵入 *遠山裕子,池田 実(東北大院・農),丹羽信彰(六甲アイランド高校),大高明史(弘前大・教育), Wang Hong-Zhu, Yongde Cui (Chinese Acad. Sci.), Wang Zhi-yong, Chen Rongbin (Jimei Univ.),西野麻知子(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター)
- PA2-606# 外来雑食者と系外流入が引き起こす群集の非線 形動態 *西嶋 翔太 (東大・農・生物多様性), 瀧本 岳 (東邦 大・理), 宮下 直 (東大・農・生物多様性)
- PA2-607# スクミリンゴガイに対する捕食者の影響―野外 での操作実験― *山西陽子(奈良女・院), 吉田和弘(鳥大・ 院), 遊佐陽一(奈良女・理)
- PA2-608# 侵略的外来種アシナガキアリの森林への侵略に 及ぼす道路の影響 *諏訪部真友子, 辻和希 (琉球大農)
- PA2-609# 外来植物ブタクサは外来昆虫ブタクサハムシに 対して進化しているのか *深野祐也, 矢原徹一
- PA2-610# Distribution of mtDNA haplotypes against non-reciprocal hybridization between species. *Wiwegweaw, A (Shinshu Univ.) , Asami, T. (Shinshu Univ.)
- PA2-611# 生育確率予測モデルを用いた侵略的外来植物の 駆除方法の検討 - 鬼怒川におけるシナダレスズメガヤを例 に - *一瀬克久,石井潤,西廣淳,鷲谷いづみ(東大院・農・ 保全生態)
- PA2-612# 小笠原諸島におけるセンダンの遺伝的攪乱の可能性 一自生/植栽個体間での交雑の検証一 * 須貝杏子, 森啓悟, 村上哲明, 加藤英寿(首都大・牧野標本館)
- PA2-613# 小笠原諸島における外来木本種モクマオウのリターの堆積が在来木本種の発芽と実生の定着に及ぼす影響 *畑憲治(首都大院・理工・生命)、宗芳光(小笠原亜熱帯農セ)、加藤英寿(首都大院・理工・生命)、可知直毅(首都大院・理工・生命)
- PA2-614# 複数の外来種が生息する池沼における希少種保全:食物網構造からの提案 * 三宅もえ、宮下 直(東大・農・ 生物多様性)
- PA2-615# 輸入穀物に混入する除草剤抵抗性雑草ボウムギ -抵抗性をもたらす遺伝変異の有無 *下野嘉子(畜草研), 小沼明弘(農環研)

(PA2:体育棟、PB2:3 階西側廊下、PC2:3 階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PA2-616# 河川における水質と流域植物の関係 境・大岡川 を事例として - *三浦佳林(横浜国大・院・環), 藤原一繪(横 浜国大・院・環), 渡邉浩一郎(帝京科学大・環)
- PA2-617# 都市化地域における河川の有機汚濁に対する硝化作用の影響 * 小倉亜紗美(広島大・院・生物圏, JSPS 特別研究員 DC), 竹田一彦, 中坪孝之(広島大・院・生物圏)
- PA2-618# 市街地に見られるシダ植物は温暖化指標生物に なりうるか? *村上健太郎(きしわだ自然資料館),森本幸裕(京都大学大学院・地球環境学堂),堀川真弘(森林総合研究所・ 植物生態研究領域)
- PA2-619# 河川工法によるタコノアシ個体群保全の可能性 * 比嘉基紀 (東京学芸大学), 師井茂倫, 大野啓一 (横浜国大・院・環情)
- PA2-620# スラムが森を破壊する:ナイロビ近郊林の攪乱 と指標種群の分布 古川拓哉,藤原一繪(横国大・環情), S. Kiboi, P.B.C. Mutiso (Univ. of Nairobi)
- PA2-621# 矢田川子どもの水辺ワンドビオトープの創出 - 外来種の排除は成功するのか - 伊藤弓恵, 伊藤絵里, 八 木洋至(名工大・社会工学)
- PA2-622 外来植物オオハンゴンソウの繁殖可能サイズと侵 入環境の関係 西尾孝佳,中村昌代,小笠原勝(宇都宮大・ 雑草セ)
- PA2-623 外来植物の侵入による植物相の地域固有性の喪失 橋本佳延(兵庫県立人と自然の博物館)
- PA2-624 二セアカシア河畔林を伐採した後の更新・成長過程 *黒河内寛之、當山啓介、宝月岱造(東大院・農)
- PA2-625 外来草本種 Clidemia hirta の半島マレーシア・パソー森林保護区への侵入パターン *藤沼潤一(北大・環境科学), Rhett D Harrison (University of Miami)
- PA2-626 Vegetation change in floodplain originated by urban river restoration in Jungnang River, Seoul *Lee, H-J (Hiroshima Univ.) , Nakagoshi, N. (Hiroshima Univ.)
- PA2-627 Intergration of Environmental Consideration into Urban Planning
 Nobukazu Nakagoshi

 *Giang Vu Nguyen, Toshiaki Kondo,
- PA2-628 都市近郊樹林地における樹洞木の分布及び樹洞営 巣性鳥獣類による樹洞利用 *保母桂志(明治大・院・農), 倉本宣(明治大・農)
- PA2-629 特定外来生物キョンによる採食がスダジイ林の次世代構造に与える影響 郡 麻里(国環研・環境リスク)
- PA2-630 市民活動による外来哺乳類対策は可能か? ため 池管理によるヌートリア根絶の論理と倫理 *立澤史郎(北 大・文・地域), 小林勝志(里山獣研), 鈴木康良(加西市役所)
- **PA2-631 知床半島における外来アライグマの侵入状況と今後の対策** * 池田 透 (北大·文·地域システム), 島田健一郎 (北大・文・地域システム)
- PA2-632 撮影記録 1995-2008 から見た野尻湖魚類の変遷 * 北野聡, 樋口澄男(長野環保研), 近藤洋一(野尻湖博), 山川篤行, 酒井昌幸, 酒井今朝重, 深瀬英夫(野尻水草研)
- PA2-633 沖縄本島に定着したタイワンハブの生息状況と対策 寺田考紀(沖縄県衛生環境研究所)
- PA2-634 アカミミガメとクサガメの潜水行動の比較:種間 競争と種内競争の観点から *森貴久,小島歩(帝京科学大学)
- PA2-635 異なる水域に生息する外来カメ類と在来カメ類の 捕獲方法 *佐藤方博(生態工房), 庭野裕(生態工房), 林真帆(生態工房)
- PA2-636 外来昆虫の移入地環境への適応:ブタクサハムシ における光周性の変化 田中幸一(農環研),村田浩平,松 浦朝奈(東海大・農)

- PA2-637 著しい色彩多型を示す外来種スイセンハナアブの 分子同定 * 須島充昭, 伊藤元己 (東大・総合文化)
- PA2-638 キボシカミキリ成虫の発生期間に及ぼす都市化の 影響 佐々木将人、*富樫一巳(東大・院農)
- PA2-639 アリー効果と外来生物の個体数増加警報 東邦大 学・理・生物

植物繁殖・生活史

- PB2-640# クリの花粉・果皮・実生の DNA 分析による花粉・ 種子散布パターンの解析 *長谷川陽一, 陶山佳久, 清和研二 (東北大院・農)
- PB2-641# シデコブシの交配様式と後期近交弱勢の集団間 変異:集団サイズと集団の孤立が集団の存続に及ぼす影響 *玉木一郎(名大院生命農),石田清(弘前大農),鈴木節子、戸丸信弘(名大院生命農)
- PB2-642# サクラソウの受粉から結実までに働く近交弱勢の関与遺伝子座数とその効果の解析 * 北本尚子(筑波大・生命環境),本城正憲(東北農研),吉田康子(筑波大・生命環境),上野真義,津村義彦(森林総研),鷲谷いづみ(東大・環境生命),大澤良(筑波大・生命環境)
- PB2-643# オオバナノエンレイソウにおける雄性不稔個体 が集団の繁殖様式に与える影響 * 久保田渉誠、大原雅(北 大・院・環境科学)
- PB2-644# ミチタネツケバナにおける雄蕊数変異の要因: 気温の影響の解析 * 松橋彩衣子(東北大·生命),工藤洋(京 大・生態研),酒井聡樹(東北大・生命)
- PB2-645# 異なる光条件下に生育する雌雄異株ヤマウルシ の繁殖投資とコストにおける雌雄差 *松山周平(京大院 農), 嵜元道徳(京大フィールド研)
- PB2-646# 柱頭葯長多型を示すジンリョウユリの受粉過程: 先行自殖とハナバチ・ガによる他殖 * 横田静香, 矢原徹一 (九大・理・生物)
- PB2-647# シデコブシの雌性繁殖成功と訪花昆虫の関係 鈴木節子(名大院生命農),石田清(弘前大農),戸丸信弘(名 大院生命農)
- PB2-648# 雌性両全異株性植物ナデシコ科 Silene vulgaris における性比が自殖率に与える影響一実験集団による 検証 *三宅(村山)恵子(新潟大学女性研究者支援室), Matthew S. Olson (University of Alaska Fairbanks, USA)
- PB2-649# サクラソウの個体群構造と種子生産の空間的不 均一性 *田中良典, 鷲谷いづみ (東大・農学生命)
- PB2-650# 北限ユキツバキ集団の種子生産 ポリネーター 活動とクローン構造の視点から - *渡辺洋一, 星崎和彦, 藤晋一, 井上みずき(秋田県立大, 生物資源)
- PB2-651# エゴノキ属 2 種の種子生産における樹木個体間 変異 * 長瀬ほなみ(名古屋大・生命農), 梶村恒(名古屋大・ 生命農)
- PB2-652# イヌガシの散布前種子の死亡要因 中北ねり、松 井淳(奈良教育大学)
- **PB2-653#** キンラン・ギンラン・ササバギンランの生活史 のちがい 寺井学 (大林組技術研究所)
- PB2-654# ウバユリとオオウバユリの発芽特性と実生の成長:個体サイズの逆転 *谷友和, 舘野正樹 (東大日光植物園)
- PB2-655# 林床性多回繁殖型多年草ヤマブキソウ(ケシ科) の生活史とデモグラフィー 今井宏昭, 小林幹夫(宇都宮大・農・森林)
- PB2-656# ツル植物の個葉形態と窒素含有量の種間比較 分 布の地形依存性とよじ登り様式 - * 楠本聞太郎(九大生資),

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

榎木勉 (九大農), 久保田康弘 (琉大理)

PB2-657# 栄養繁殖を主とする植物の生活史 * 冨田美紀 (静岡大学理学部大学院), 増沢武弘 (静岡大学理学部)

- PB2-658# 水辺に生育するヤナギ科樹木実生の根の伸長に 対する水位低下の影響 * 指村奈穂子, 井出雄二 (東大・農・ 森圏管理)
- PB2-659# 中栄養湿原におけるハンノキの樹高成長 * 志田 祐一郎, 中村太士(北大院農)
- PB2-660 インド・ミゾラム州に分布するタケ (Melocanna baccifera) の一斉開花・更新時を対象とした分子生態学 的解析 *陶山佳久 (東北大・農), 齋藤智之 (森林総研木曽), 西脇亜也 (宮崎大・農), 蒔田明史 (秋田県立大・生資), 柴田昌三 (京大・フィールド研)
- PB2-661 一回繁殖型多年草カワラノギクの種子発芽に及ぼ す父親と母親の遺伝的効果 *加賀屋美津子,谷享(環境科 学技術研究所),可知直毅(首都大学東京)
- **PB2-662** 自殖の資格 ~有害遺伝子の挙動を追う~ 中山 新一朗(東大・院・理)
- PB2-663 開花遺伝子の生態学的役割 小林正樹(チューリヒ大・理)、清水健太郎(チューリヒ大・理)
- PB2-664 北方林樹木グイマツの花芽形成における LEAFY 相同遺伝子の機能 *岩崎(葉田野)郁(岡山生物研),内山和子(北海道林試),小野清美(北大・低温研),渡辺一郎,八坂通泰,来田和人(北海道林試),原登志彦(北大・低温研),小川健一(岡山生物研)
- PB2-665 雄株花粉の繁殖成功度は両性株花粉より高いのか: 雄性両性異株マルバアオダモ花粉の発芽率と花粉管伸長の性差 *岡崎純子,笹村由貴,塩崎勇喜(大阪教育大・教員養成),石田清(弘前大・農)
- PB2-666 オウレンにおける雌機能不全花の生態的意義 *笠木哲也(金沢大),谷友和(東大),中村浩二(金沢大)
- PB2-667 雌雄異株植物コウライテンナンショウの空間分布 と結実との関係 *大松ちひろ,大原雅(北海道大学環境科 学院生物圏科学専攻生態遺伝学講座)
- PB2-668標高の違いがブナの結実特性と豊凶周期に与える影響 *小谷二郎(石川県林試),鎌田直人(東大秩父演習林)
- PB2-669 厳しい環境条件下でより顕著に認められる受粉から種子形成までの兄弟間競争 *松下通也,戸丸信弘(名大院・生命農)
- **PB2-670 奥多摩のミズナラ、コナラ、クリの結実変動** 森 広信子 (所属無)
- **PB2-671** 資源制限が植物の繁殖に与える影響:光環境や食害による葉の遺失は資源利用パターンを変える? *井田崇(北大地球環境), Lawrence D. Harder (カルガリー大),工藤岳(北大地球環境)
- **PB2-672** スズサイコの生育地と生活史 大橋賢(明治大·院·農)
- PB2-673 標高の違いがアカエゾマツの針葉形態・生理・遺 伝構造に与える影響 * 飯島勇人(北大院農), 北村系子(森 林総研北海道), 石塚航, 後藤晋(東大院農)
- PB2-675 樹形の違いは機能の違いか? * 饗庭正寛(北大・ 苫小牧研究林),中静透(東北大・生命科学)

物質生産・物質循環

- PB2-676# 現地調査に適した海草生長量の推定方法 *細川 真也(港空研),中村由行(港空研),西村大司(名古屋技調), 長谷川雅弘(中部地整)
- PB2-677# 二次遷移初期の冷温帯落葉広葉樹林を構成する 6 樹種に対するバイオマス推定法の検討 *大土直哉, 小 泉博(早稲田大・教育)
- PB2-678# モンゴルステップにおける放牧停止が GPP に及ぼす影響 *浦野忠朗(筑波大·生命環境),川田清和(筑波大·生命環境),及川竹久(筑波大·生命環境),杉田倫明(筑波大·生命環境),鞠子茂(法政大・社会)
- PB2-679# 竹林拡大に伴う現存量と純生産量の変化 * 臼井 伸章 (京大・農), 小川遼, 福島慶太郎 (京大院・農), 徳地直子 (京 大フィールド研)
- PB2-680# 冷温帯カラマツ林における林床クマイザサ群落 の炭素固定量 *酒井翔平,尾崎正紘(早稲田大・院・先進理 工)、小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-681# チベット高山草原における標高傾度に伴う低木 (金露梅) 群落と生態系 CO2 フラックスの変化 *八代裕 一郎, 志津庸子(岐阜大・流セ), 廣田充(筑波大・菅セ), 大 塚俊之(岐阜大・流セ), 下野綾子, 沈海花(国環研・生物), 杜明遠(農環研・大気), 唐艶鴻(国環研・生物)
- PB2-682# シバ草地における温暖化操作実験 ―装置の開発と現存量・生態系 CO2 フラックスの比較― * 関根有哉(早稲田大・教育),八代裕一郎(岐阜大・流域研),小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-683# 茅場ススキ草原における CH4 フラックスの時間 変動 *山本昭範(筑波大・院・生命環境), 廣田 充(筑波大・ 菅平セ), 鞠子 茂(法政大・社会), 濱 健夫(筑波大・院・生 命環境)
- PB2-684# 冷温帯カラマツ林における土壌 CO2 フラックス *尾崎正紘(早稲田大・院・先進理工), 酒井翔平(早稲田大・院・先進理工), 小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-685# 樹木伐採が土壌の N₂O flux に与える影響 樹 幹からの距離に着目して - *仁科一哉, 竹中千里(名大院生 命農), 谷貝勇樹(名大農), 石塚成宏(森林総研)
- PB2-686# 冷温帯放牧草原における土壌呼吸速度の時空間 変動 * 井上智晴(早稲田大・院・先進理工), 小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-687#
 土壌呼吸構成要素の環境要因依存特性
 鈴木あづさ(玉川大・院)、関川清広(玉川大・農)
- PB2-688# 富士北麓冷温帯アカマツ林における土壌呼吸に 占める根呼吸の推定 *根岸正弥(茨城大・理), 廣田充(筑 波大・菅平センター), 中野隆志(山梨・環境研), 大塚俊之(岐 阜大・流域圏センター), 山村靖夫(茨城大・理)
- PB2-689# 北極ツンドラ生態系における厳冬期の土壌呼吸 の行方 * 菅尚子(総研大・極域),内田雅己(極地研),小泉 博(早稲田大・教育),神田啓史(極地研)
- PB2-690# Simulating soil carbon for Pinus densiflora using Yasso and RothC models *A.R.Lee, N.J.Noh, Y.Son, Y.S.Cho, W.K.Lee
- PB2-691# 落葉・土壌混食者の生息履歴と森林土壌の有機 物蓄積様式一土壌改変効果からの考察一 * 藤巻玲路(横 浜国大), 陀安一郎(京都大学), 浅沼弘人, 岡井尚之, 佐藤由 依, 金子信博(横浜国大)
- PB2-692# 寒冷放牧シバ草原における地下部バイオマスの 季節変化 * 木野麻子(早稲田大・教育), 高瀬博子(早稲田大・教育), 小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-693# 日本農耕地の土壌有機物分解における温度依存

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 性の逆推定 *上村真由子(農環研),横沢正幸(農環研),米 村正一郎(農環研),白戸康人(農環研),飯泉直之丞(農環研)
- PB2-694# 火入れ地における土壌中の炭素蓄積量の定量化 *米川修平(鳥取大・農),佐野淳之(鳥取大・農)
- **PB2-695# 落葉分解における CN 比と樹種の違い** 京大・フィールド研
- PB2-696# 熱帯林土壌分解系における微生物の活性はリン 律速か? - 異なる基質のインプットと分解系の反応 -* 喜多智, 今井伸夫, 北山兼弘(京大生態研セ)
- PB2-697# 洞窟生態系における動物バイオマス, 微生物バイオマス及びデトリタスの分布と相互関係 *新部一太郎, 星川和夫(鳥取大院・生物環境)
- PB2-698# Mixing effect in a detritus-based stream: Does mixing of senescent and green leaves show nonadditive effect on leaf decomposition? *Kaori Kochi (Research Fellow JSPS), Takashi Kagaya (Univ.Tokyo), Dai kusumoto (Univ. Tokyo)
- PB2-699# 針葉樹の縮合タンニンが土壌栄養塩可給性の変化を介して樹木実生の成長率に与える影響:熱帯山地林での植物-土壌フィードバック *潮雅之,北山兼弘(京大・生態研センター)
- PB2-700# 落葉・土壌混食者の団粒形成が土壌に与える影響 CO2・N2O・CH4 フラックスの変化 *佐藤由依、藤巻玲路、岡井尚之、浅沼弘人、花井義道 (横浜国大)、楊宗興、木庭啓介 (農工大)、金子信博 (横浜国大)
- PB2-701# 冷温帯アカマツ林・ミズナラ林におけるリター 分解呼吸の測定とその制限要因の解明 * 南雲亮(筑波大・ 院・生命環境), 廣田充(筑波大・菅セ), 鞠子茂(法政大・社会)
- PB2-702# 土地利用と水質が有田川水系の水質に与える影響 * 白濱圭通(京大・農)、福島慶太郎(京大院・農)、徳地直子(京大・フィールド研)
- PB2-703# 寒冷シバ草原における放牧牛の糞の分布と分解 *五月女皓海(早稲田大・教育),小泉博(早稲田大・教育)
- PB2-704# 土壌団粒が銅の生物摂取可能性に及ぼす影響ー 団粒の有無や形成に伴う銅の挙動の変化ー *藤井芳一, 金子信博(横浜国大院・環境情報)
- PB2-705# 森林伐採が窒素流出に与える影響の評価 降雨時 観測のススメ - 小田智基 (東大院農),大手信人 (東大院農), 鈴木雅一 (東大院農)
- PB2-706# 沿岸域における脱窒活性の時空間変動特性 * 千 賀 有希子(立正大・地球), 奥村 稔, 清家 泰(島根大・総合理工)
- PB2-707# 河川食物網は年代の異なる炭素を混合している ~ ¹⁴C 天然存在比を用いた研究~ *石川 尚人(京大・ 生態研),内田 昌男(国立環境研),柴田 康行(国立環境研), 陀安 一郎(京大・生態研)
- PB2-708# 河口干潟における物質循環に対するスナガ二類 の役割:何をどれくらい摂食しているか? *中尾拓貴, 佐々 木晶子(広島大・院・生物圏), 吉竹晋平(早稲田大・院・先 進理工), 中坪孝之(広島大・院・生物圏)
- PB2-709# 安定同位体比を用いた外来性巻貝サキグロタマッメタの餌資源推定-アサリだけでは食べていけない? *金谷弦(東北大・東北アジア研究セ),鈴木孝男(東北大・院・生命),菊地永祐(東北大・東北アジア研究セ)
- PB2-710 落葉樹稚樹の物質生産に対するフェノロジー・シュート角度の影響:機能的・構造的樹木モデルによる解析 *梅木清(千葉大・園芸), 菊沢喜八郎(石川県立大・環境科学)
- PB2-711 新しい森林群落高表現法 中井太郎(北大低温研), *隅田明洋(北大低温研),兒玉裕二(北大低温研),原登志彦(北 大低温研),太田岳史(名大院生命農)
- PB2-712 冷温帯シバ型放牧草地における総生産量の推定

- * 横山誠, 小泉博(早稲田·教育)
- PB2-713 壮齢コジイ二次林の生産力の年々変動について *佐藤保(森林総研),齊藤哲(森林総研),野宮治人(森林総研九州),荒木眞岳(森林総研九州),田中浩(森林総研九州)
- PB2-714 常緑広葉樹二次林における流域レベルでの純生産 の推定 *宮田義規(宮大・農), 上村直之(宮大・農), 高木 正博(宮大・農)
- PB2-715 家畜の被食が制御するチベット高山草原の生態系構造と炭素循環 *廣田充(筑波大・菅平セ),大塚俊之(岐阜大・流圏セ),古松(中科院・西北高原),八代裕一郎,志津庸子(岐阜大・流圏セ),下野綾子,沈海花(国環研・生物),杜明遠(農環研・大気),唐艷鴻(国環研・生物)
- PB2-716 多雪地域冷温帯林における冬季積雪面二酸化炭素 フラックスの経時観測. -岩手県安比高原ブナ二次林にお ける事例 - 小野賢二,安田幸生,森下智陽,金子真司,平 井敬三(森林総合研究所)
- PB2-717 「衛星生態学」による山岳地流域圏生態系の機能 評価 * 村岡裕由(岐大・流域圏セ), 吉野純(岐大・工), 斎藤琢, 永井信, 石原光則, 野田響, 児島利治, 玉川一郎, 大塚俊之(岐大・流域圏セ), 安田孝志(岐大・工)
- PB2-718 広葉樹二次林におけるメタン放出について * 橋本太郎 (神戸大大学院),深山貴文,小南祐志 (森林総研関西支所),金澤洋一 (神戸大学)
- PB2-719 樹木伐採が土壌の CO₂、CH4 flux に与える影響 樹幹からの距離に着目して *谷貝勇樹(名大農), 仁科一哉, 竹中千里(名大院生命農)
- PB2-720 土壌 CO2 フラックス空間依存性の森林と草地で の比較 * 橋本徹, 三浦覚(森林総研)
- PB2-721 Forest soil respiration in six temperate coniferous and broad-leaved deciduous forests, Korea and Japan *Lee, M-S., Son, Y. (Korea Univ.), Koizumi, H. (Waseda Univ.)
- PB2-722 暖温帯性二次林のコナラにおける枯死根からの分解呼吸の評価 * 松本晃(神戸大・農学研究科), 小南裕志(森林総研), 金澤洋一(神戸大)
- PB2-723 降雨の季節性が土壌呼吸に与える影響 *堀田紀 文(東大院農), 奈良康平(東大農)
- PB2-724 2 年間休耕後の植生と土壌炭素量の変化 下田星 児 (農研機構・近中四農研)
- PB2-725 冷温帯における粗大木質リター (CWD) の炭素 動態 *八木周一(岐阜大・院・応用生物), 廣田充(筑波大・ 菅平センター), 大塚俊之(岐阜大・流域研)
- PB2-726 常緑広葉樹二次林における微地形に対応した CWDの動態 *高木正博,宮田義規,上村直之(宮崎大・農)
- PB2-727 ミミズによる森林土壌の炭素蓄積パターンの変化 - ¹⁴C 天然存在比を用いた解析 * 豊田鮎(自然研), 陀安一郎(京大生態研), 藤巻玲路, 金子信博(横浜国大), 内田昌男, 柴田康行(国環研), 日浦勉(北大苫小牧)
- PB2-728 熱帯雨林の地下部現存量推定と細根量の補正 *新山馨,梶本卓也,松浦陽次郎(森林総合研究所),山下多聞 (島根大学),Azizi Ripin,Abd. Rahman Kassim, Nur Supardi Noor(マレーシア森林研究所)
- PB2-729 ミズナラとササの細根生産速度と根呼吸速度の 季節変化 福澤加里部 (京大・フィ), 壇浦正子 (京大・農), 兼光修平 (京大院・農)
- **PB2-730** 天然 CO2 噴出地における落葉の分解過程 *長田典之・彦坂幸毅(東北大院・生命科学)
- PB2-731 落葉広葉樹林におけるリター分解の空間分布の評価 安宅未央子(神戸大・農), 小南裕志(森林総研), 上村真由子(農環研), 金澤洋一(神戸大・農)
- PB2-732 黒ボク土に立地するカラマツ林の養分制限 中原

(PA2:体育棟、PB2:3 階西側廊下、PC2:3 階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- 治(北大農),花田健太郎(北大農),竹内史子(北大地環研), 永田修(北農研),杉戸智子(北農研),高橋正通(森林総研), 波多野隆介(北大農)
- PB2-733 根からの炭素供給が土壌生態系に与える影響 金田哲(農環研), 金子信博(横浜国大)
- PB2-734 Nutrient supply by biennial fruiting Myristica iners to the Cambodian lowland evergreen forest. *Ito, E (FFPRI), Tith, B. (FWSRI, FA, Cambodia), Kanzaki, M. (Kyoto Univ.), Araki, M. (FFPRI)
- PB2-735 立山高山帯のハイマツ樹冠による降雨遮断 * 上原佳敏(富山大・理・生物圏), 久米篤(九州大・農・演習林), 朴木英治(富山市科学博物館), 張勁, 佐竹洋(富山大・理・生物圏)
- PB2-736 ヒノキ人工林の荒廃が土壌中の物質動態に与える 影響 *高崎洋子, 竹中千里, 仁科一哉, 肘井直樹 (名大院・ 生命農), 吉田智弘 (東農工大)
- PB2-737 鳥取砂丘における窒素の分布:空間的・時間的変動について *小山里奈(京大・情報),浅田将大,山中典和(鳥取大・乾地研)
- PB2-738 都道府県における農業生産での余剰窒素・リン酸 の空間分布と環境影響 *三島慎一郎・秋山博子・八木一行・ 神山和則(農環研)
- PB2-739 竹林におけるケイ素の動態 *梅村光俊(名大院生命農), 竹中千里(名大院生命農)
- PB2-740 標高の異なる 2 地域における土壌の窒素資源に 対するヒノキの窒素利用様式 * 稲垣善之(森林総研),宮 本和樹,奥田史郎,野口麻穂子,伊藤武治,野口享太郎(森林総 研四国)
- PB2-741 スギ緑葉の分解における窒素固定の役割-間伐に よる林内環境変化の影響- *平井敬三,小野賢二(森林総 研東北),金子智紀(秋田県森林技セ),山中高史,金子真司, 高橋正通(森林総研),野口享太郎(森林総研四国)
- PB2-742 生態系における酸化還元力循環:温泉微生物マット群集をモデルにした解析 大滝宏代(首都大・生命),久保響子(首都大・生命),現 Max-Planck-Inst.),春田伸(首都大・生命),花田智(産技研・生物機能/首都大・生命),可知直毅(首都大・生命),*松浦克美(首都大・生命)
- PB2-743 亜熱帯の砂質干潟とサンゴ礁潮間帯における底生 微細藻類分泌粘液量の比較 *田村 裕(琉球大・理工),土 屋 誠(琉球大・理)
- PB2-744 ヒトの血清における炭素・窒素安定同位体比およびメチル水銀濃度と魚介類摂取量との関係 中下留美子、鈴木彌生子、一宮孝博(首都大院・理工)・原田浩二(京大・医)・蜂谷紀之(国立水俣病研究センター)・小泉昭夫(京大・医)・伊永隆史(首都大院・理工)

行 動

- PC2-745# ツマグロバッタのオスは他オスに応じて鳴き方を変える *等々力成史(京大院・農・昆虫生態),福井昌夫(京大院・農・昆虫生理),藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
- PC2-746# ミヤマカワトンボのオスによる左利きの精子掻き出し行動 *土屋香織, 林文男(首都大)
- PC2-747# チャバネクロタマゴバチの雄は兄弟同士で闘争 する * 馬場成実, 上野高敏(九大院・生防研)
- PC2-748# 視覚の操作:オオニワシドリのあずまや構造と 飾りの関係 *遠藤千尋(京大・生態学研究センター),江口 和洋(九大・理),上田恵介(立教大・理)
- PC2-749# ヨツモンマメゾウムシの幼虫競争タイプは射精 戦略に影響するのか? * 香月雅子 (岡大院・進化生態), 徳

- 永幸彦(筑波大), 宮竹貴久(岡大院・進化生態)
- PC2-750# Eavesdropping: 鳥類における盗聴を介した他 者なわばりの利用 * 坂本信介(慶應・生物,首都大・理工), 宮澤絵里(首都大・都市教養),鈴木惟司(首都大・理工)
- PC2-751# カノコガ亜科 (Syntominae) の配偶行動にお ける視覚情報 近藤勇介 (岐阜大・応生), 中秀司 (鳥取大・農), 安藤哲 (農工大・BASE), 土田浩治 (岐阜大・応生)
- PC2-752# 成虫シーズン初期に出現すれば配偶縄張りを持てる! ~チョウの雄性先熟のメカニズム~ 竹内剛 (広島大・生物圏科学)
- PC2-753# ノネコオスの配偶行動;求愛投資は一繁殖期内 でどう変わるのか *山本宇彦(九大·生態),粕谷英一(九大· 生態)
- PC2-754# メスの浮気性がオスの繁殖戦略に与える影響 *松田亜希子, 北村亘, 小島渉, 山口典之, 樋口広芳(東大・農・ 生物多様性)
- PC2-755# 野外プレイバック実験をもちいたアブラゼミ雄 の同種と他種の鳴き声に対する反応の解析 遠藤 暢(京大 院・農・森林生態)
- **PC2-756#** カブトムシの闘争における学習行動 北中將之(信州大院・工)
- PC2-757# 新潟県粟島におけるオオミズナギドリの飛翔行動に関する研究 *山口まどか(名大院・環境),綿貫豊(北大院・水産),山本麻希(長岡技大・生物),依田憲(名大院・環境)
- PC2-758# カダヤシ科魚類における行動の左右性と形態の 反対称性 松井彰子(京都大・理)
- PC2-759# 異なる時間スケールの解析で明らかになる begging の機能 * 北村亘,藤田剛,樋口広芳(東大・農・生物多様性)
- PC2-760# 働かないアリどうしのケンカ -アミメアリ種 内社会寄生者間の繁殖競争 *森英章(自然研),千葉聡(東 北大・生命科学), 辻和希(琉球大・農)
- PC2-761# 交雑する近縁ヤモリ 2 種における社会行動の比較 城野哲平 (京大・理)
- PC2-762# **卵寄生リスクの記憶と産卵場所選択** *平山寛之, 粕谷英一(九大・理・生態)
- PC2-763# ホソヒメヒラタアブの"ためらい行動"は捕食 者回避に有効か *横井智之, 藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
- PC2-764# 死にまねで本当に捕食者から逃げられるのか? コクヌストモドキとコメグラサシガメの場合 *中山 慧,宮竹貴久
- PC2-765# 室内実験で観察された魚類の捕食行動、逃避行動の左右性 * 八杉公基, 堀道雄(京大院・理)
- PC2-766# オオカズナギの卵保護様式 *森川太郎(熊本大・院・自然科学), 逸見泰久(熊本大・沿岸域センター)
- PC2-767# ホオズキカメムシの対卵寄生蜂戦略 *中嶋祐二,藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
- PC2-768#
 アカネズミの採餌行動に捕食リスクが及ぼす影響: Giving-up density を用いたアプローチ * 松田尚子, 坂本信介, 鈴木惟司(首都大・理工)
- PC2-769# アカネズミによるマツ類の球果の採食行動 * 武智玲奈, 林 文男(首都大・生命)
- PC2-770# 潜葉虫のマインパターンに対する葉の栄養学的・ 解剖学的影響 *綾部慈子(名大・森林保護)
- PC2-771# 巣を持たないハチによる中心点採餌行動〜ツチバチの雄に見られる生息地帰還習性について〜 *谷聡一郎、上野高敏(九大院 生防研)
- PC2-772# 可塑的防衛行動はいつも適応的か?:魚捕食の

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- ない冬期のフサカ日周鉛直移動 * 永野真理子 (東大・総合文化),八木明彦 (愛工大),吉田丈人 (東大・総合文化)
- PC2-773# 掃除魚のサイズ依存的な寄生戦略"安定同位体 分析からの検証"*豊原広隆(高知大院・農), 奥田昇(京大・ 生態研), 福森香代子(京大・生態研), 長澤和也(広大院・生 物圏科学), 山岡耕作(高知大院・黒潮圏科学)
- PC2-774# 異なる時空間構造をもつ食物分布に対するジェネラリストの集合反応 * 片山直樹(東大・農), 天野達也(農環技研), 藤田剛, 樋口広芳(東大・農)
- PC2-775# アメンボ卵寄生蜂における潜水が産卵行動に与 える影響 *片山潤史,藤崎憲治(京大院・農・昆虫生態)
- PC2-776# ヤマトシロアリ属に感染するイリデッセントウイルスについて * 寺崎慧介, 北出理 (茨城大学大学院理工学研究科)
- PC2-777# 基盤整備後の水田や水路におけるメダカの行動 と保全 岩手大学,農学部,農林環境科学科,保全生物学研究室*南雲 穣
- PC2-778
 ヨモギをめぐるヨモギハムシとアリ・アブラムシの関係について

 *近藤泰玄(信大院·工),藤山静雄(信大·理)
- PC2-779
 ミナミマグロの行動は Levy walk にしたがうか?

 *高橋紀夫, 黒田啓行, 伊藤智幸, 境麿(遠洋水研)
- PC2-780 寄生蜂ゾウムシコガネコバチにおける匂い学習と 採餌パターンの関係 * 石井弓美子, 嶋田正和 (東大・広域システム)
- PC2-781 虫媒性植物ウイルスの企み:感染葉へ誘引し保毒 虫を増やす 櫻井民人(東北農研)
- PC2-782 地理的プロファイリングのセイヨウオオマルハナ バチ営巣場所推定への応用 *大野(鈴木)ゆかり(東北大・ 生命科学),井上真紀(国環研・環境リスク研究センター)
- PC2-783 ツキノワグマの一年間の行動解析 * 上馬康生, 山田孝樹(石川県白山自然保護センター)
- PC2-784 ハマグリの移動分散 · · · 漁場から泳いで逃げる? * 逸見泰久(熊本大·沿岸域センター), 高日新也(熊本大· 理)
- PC2-785 カワトンボ類における左右非対称な精子掻き出し 器官の進化 林 文男(首都大・生命)
- PC2-786 ヤドカリのオスの配偶者選択 *和田哲,安良城百絵,竹下文雄(北大・院・水産)
- PC2-787 手負いの相手は御しやすいーコバネイナゴの配偶 行動におけるケガの影響 *本間淳, 鶴井香織, 西田隆義
- PC2-788 潜在的な配偶候補者数によって変化するハゼ科魚 類ヌマチチブの雌の配偶者選択性 高橋大輔(長野大・環境ツーリズム)
- PC2-789 多夫多妻制イワヒバリにおける社会的順位と精子 の質 * 舘野光輝, 酒井秀嗣, 中村雅彦
- PC2-790 マメコブシガニの巨大な精巣と配偶戦略 小林哲 (佐賀大農)
- PC2-791 半田山におけるオカダンゴムシの分布とマウント 行動の季節的推移 高橋祐衣 (岡山大・農)・宮竹貴久 (岡山大院・環境・進化生態)
- PC2-792 府大池 (大阪府堺市) に飛来するアブラコウモリ の出現パターン *林 義雄・谷田一三 (大阪府大・院理)
- PC2-793 ミゾゴイの生態 ~なぜ、夜行性の鳥と言われて きたか~ 川名国男 バードライフ・アジア
- **PC2-794** 路上等に出現するミミズ類の季節的消長 大野正 彦(東京都健安研)
- **PC2-795 ニホンジカ集団における遺伝子の経時的変化** * 岡田あゆみ (北里大・獣医), 玉手英利 (山形大・理), 南正人 (ワ

- イルドライフコミュニティ研究所), 大西信正, 高槻成紀 (麻布大・獣医)
- PC2-796 アミメアリの行動の実験的検証 * 斎藤真志, 廣田 忠雄(山形大・理・生物)
- PC2-797 小型シギ類の主食としてのバイオフィルム *桑江朝比呂 (港湾空港技術研究所), R. W. Elner (Canadian Wildlife Service)

保 全

- PC2-798# 茨城県北浦流域における谷津奥部の水田耕作放 棄地に成立した植生の保全生態学的評価 *池上佑里,西 廣淳,鷲谷いづみ(東大・農学生命科学)
- PC2-799# 耕作水田の植物の種組成に農法の違いが与える 影響 *根本真理、本間秀和(南房総ほんまる農園)
- PC2-800# 放棄年数と環境要因が休耕田の植物種組成に与える影響 休耕田に絶滅危惧種が出現する条件 *池田淳一(新大・農),石田真也(新大院・自然科学・学振 DC),高野瀬洋一郎(新大・超域研究機構),紙谷智彦(新大院・自然科学)
- PC2-801# ロゼット型沈水植物 2 種の分布の違いは説明可能か?—人工水路での栽培実験からー * 串岡航, 中田裕也, 浜端悦治(滋賀県立大学)
- PC2-802# 砂礫質河原に生育する草本植物の種特性 *山田武,小池文人(横浜国大院・環境情報)
- PC2-803# 絶滅危惧種チョウジソウの種子生産・発芽特性 一秋ヶ瀬大規模個体群の保全に向けて一 *畑中由紀, 大野啓一, 酒井暁子(横浜国大・院・環境情報)
- PC2-804# 竹林化に伴う林床植生減少の主因を探る * 久家 光晴(九大院・システム生命), 矢原徹一(九大院・システム生命), 大槻恭一(九大・福岡演習林)
- PC2-805# ALOS 衛星画像を用いた霧ヶ峰高原の草本バイオマス量の推定 *小澤奈々、渡邊修、大窪久美子(信大・農)
- PC2-806# 沈水植物群落は水質を改善するのか? 一水草と 魚と動植物プランクトンの相互作用の解明に向けて一 *鈴木寛之, 巌靖子(滋賀県立大), 辻村茂男(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター), 浜端悦治(滋賀県立大)
- PC2-807# モデル生態系における生息地破壊の影響:種数 に依存する法則 中桐斉之(兵庫県立大・環境人間), 吉村仁, 泰中啓一(静岡大・創造科学技術院)
- PC2-808# 「角館のシダレザクラ」樹勢回復事業の効果測定 と保全意識の醸成にむけての提言 *立石 真(秋田県立大・ 生物資源), 黒坂 登(仙北市教委), 蒔田 明史(秋田県大・生 物資源)
- PC2-809# 希少植物の埋土種子集団の空間分布を規定する 要因は何か?小貝川氾濫原の場合 *伊藤浩二(金沢大・地 域連携推進セ),加藤和弘(東大院・農)
- PC2-810# 野辺山高原におけるサクラソウ湿生群落におよ ぼす刈り取り処理の影響 *佐野恭子(信大院・農学研究科), 大窪久美子(信大・農)
- PC2-811# 草原性絶滅危惧植物ハナシノブの全残存集団の 網羅的遺伝解析 * 横川昌史, 兼子伸吾(京大院・農), 瀬井 純雄(阿蘇花野協会), 高橋佳孝(近中四農研), 井鷺裕司(京 大院・農)
- PC2-812# 伊豆諸島 4 島における固有種サクユリの分布比較 * 菊地哲理 (明治大・院・農), 倉本宣 (明治大・農)
- PC2-813# 斐伊川水系における準絶滅危惧種オオクグの遺 伝的多様性評価 大林夏湖,程木義邦,國井秀伸(島根大学 汽水域研究センター)

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PC2-814# 適応に関連した QTL に基づく野生サクラソウ集 団の遺伝的多様性評価 * 吉田康子(筑波大・生命環境), 上 野真義(森林総研), 北本尚子, 小玉昌孝(筑波大・生命環境), 本城正憲(東北農研), 田口由利子(森林総研), 永井美穂子, 鷲谷いづみ(東大・農学生命),津村義彦(森林総研),大澤良(筑 波大・生命環境)
- PC2-815# 地理的・地域的スケールの隔離によるケショウ ヤナギの遺伝的多様性の減少と遺伝的構造化 *長田光司 (名大院生命農),永光輝義(森林総研北海道),鈴木節子,戸 丸信弘(名大院生命農)
- PC2-816# Potential impacts of climate change on Japanese conifers *Ogawa, Y. (Oxford Univ.) , Berry, P. (Oxford Univ.) , Tanaka, N. (FFPRI)
- PC2-817# ミトコンドリア DNA コントロール領域の解析 から見えてきたサシバの遺伝的構造 (予報) *長井和哉, 東 淳樹 (岩手大・農・保全生物), 伊関文隆 (NPO 法人・希少 生物研), 樋口広芳 (東京大院・農・生物多様性)
- PC2-818# ギフチョウ属混棲地における食草 2 種の分布と 生育環境 *佐藤衣里, 林田光祐(山形大・農)
- PC2-819# 絶滅危惧種ヒヌマイトトンボの生息地として創出したヨシ群落の6年間の動態 * 寺本悠子, 渡辺 守(筑波大・院・生命環境)
- PC2-820# 里山林を伴った大学キャンパスにおける生態系 (4) 絶滅危惧種ベニイトトンボの生態と保全その2 近 畿大学農学部 環境生態学研究室*稲本雄太、桜谷保之
- PC2-821# 屋久島のシカは短足か? 一島嶼個体群間での 形態比較一 *寺田千里(北大・環境科学院),立澤史郎(北大・ 文・地域システム),齊藤隆(北大・北方生物圏フィールド科 学センター)
- PC2-822# 自動撮影カメラ調査による二ホンモモンガの樹木選択傾向 *鈴木圭(東農大院・農・野生動物)、永井靖弘(いであ株式会社)、谷口絵梨、岡本英里奈、広瀬絵美、小川博、天野卓、安藤元一(東農大・農・野生動物)
- PC2-823# 下北半島に生息するツキノワグマの遺伝的特性 *田中裕久, 奥村友梨, 高津戸望, 梶原麻友香, 鈴木恵理子, 山本俊昭(日獣大), 岡輝樹(森林総研)
- PC2-824# 神奈川県北西部から山梨県へのアライグマの生 息域拡大について * 關 義和(東京農工大・院・連合農学)、 六波羅聡(信州ツキノワグマ研究会)、河内紀浩(島嶼生物研 究所)、小金澤正昭(宇都宮大・演習林)
- PC2-825# 外来ヤモリが在来近縁ヤモリに与える影響〜環境利用の観点から〜 河合潮(京大・院・理)
- PC2-826# 東邦大学習志野キャンパスにおけるキシノウエトタテグモの分布と初期分散の一例 *中西亜耶,長谷川雅美(東邦大院・理・地理生態)
- PC2-827# 東京湾岸人工水路干潟のベントス群集 * 柚原剛, 風呂田利夫 (東邦大・理)
- PC2-828# スイゲンゼニタナゴとカゼトゲタナゴの繁殖生態 * 北村淳一(観音崎自然博物館), 阿部 司(岡山大·院·理), 中島 淳(九大・工)
- PC2-829# 圃場整備地域の水田用水路網における魚類の分 布予測 - 新潟平野の自然再生を目指して - 松島一輝(新 潟大・農),石間妙子(新潟大・自然科学),高野瀬洋一郎(新 潟大・超域研究),関島恒夫(新潟大・自然科学)
- PC2-830# 希少種ヒナイシドジョウの分布様式:流域の土 地利用が与える影響 *川西亮太, 井上幹生, 三宅洋(愛媛大・院・理工)
- PC2-831# 在来仔稚魚のゆりかご「内湖」―生息地環境と 安定同位体に基づく評価― 大石麻美子,柴田淳也,山口真 奈,合田幸子,奥田昇(京大・生態学研究センター)
- PC2-832 植生防護柵設置後の林床植生の変化 * 田川哲(九

- 州大学), 芹沢俊介 (愛知教育大学), 千葉かおり (自然環境センター), 脇山成二 (自然環境センター), 藤田卓 (日本自然保護協会), 中澤幸 (東京大学・院総合文化研究科), 矢原徹一 (九州大学)
- PC2-833 中国内蒙古自治区草原地域の農村集落(武川県五福号)における土地利用の実態と植物相 * 菅野洋((株)宮城環境保全研究所),平吹喜彦(東北学院大学・教養),蘇徳斯琴(内蒙古大学蒙古学研究中心),HAO Runmei(内蒙古師範大学地理科学学院)
- PC2-834 サロベツ湿原泥炭採掘跡地の植生回復過程 *島村崇志,宮木雅美,西川洋子(道環境研)
- PC2-835 渡良瀬遊水地の湿地再生試験地おける初期の植生 発達 *石井潤, 橋本瑠美子, 西廣淳, 鷲谷いづみ(東京大院・農)
- PC2-836 湿地化した休耕田における植物群落の回復-水位 管理と土壌撹乱による2年間の植生変化- *高野瀬洋-郎(新大・超域研究機構),石田真也(新大院・自然科学・学 振 DC),紙谷智彦(新大院・自然科学)
- PC2-837 霧ケ峰高原における外来植物の侵入、定着状況と 在来草原植生の復元の可能性 *大窪久美子(信州大・農)
- **PC2-838 干潟が減っていく一鹿児島湾沿岸の60年** 山本智子(鹿児島大・水産)
- PC2-839 河川水辺域における生物の生息・利用状況と環境 要因との関係 *宮下哲也,佐川志朗,萱場祐一,青木繁幸, 根岸淳二郎,久米学((独) 土木研究所 自然共生研究センター)
- PC2-840 Factors affecting energy consumption reduction in the manufacturing industrial sector in Hanoi Tiep Vu Nguyen (IDEC) and Prof. Nobukazu Nakagoshi (IDEC, Hiroshima University)
- PC2-841 絶滅危惧植物シラタマホシクサの開花と種子生産 パターン 増田理子(名工大・社会工学),深川忠政(名工大・ 社会工学)
- PC2-842 ヤチシャジンの遺伝的多様性の評価と保全策の検 討 増本育子(中電技術コンサルタント), 兼子伸吾(京大・院・ 農), 大竹邦暁(中電技術コンサルタント), 井鷺裕司(京大・院・ 農)
- PC2-843 キタダケソウの移動速度の推定に関する研究 名 取俊樹(国立環境研究所 生物)
- PC2-844 群馬県内の里山地域に生育する在来植物種・希少 植物種の種子発芽の温度特性 *石川真一(群馬大・社情), 高橋美絵(群馬大・社情),増田和明(群馬県・中之条小),大 森威宏(群馬県・自然史博)
- PC2-845 カワラノギクのロゼット個体密度と開花個体密度 * 倉本宣, 寺村彬 (明治大学農学部)
- PC2-846 湿地性植物の分布予測:種間・手法間比較による 空間自己相関の原因の検討 *石濱史子,小熊宏之,武田知己, 竹中明夫 (国環研)
- PC2-847 地域の生物多様性保全のあり方を,植物の種子散 布様式を通して考える 今村彰生,島田知彦,岡本奈保子, 小田さつき,黒石麻央,下田奈美子,大西信弘
- PC2-848
 EST-SSR マーカーによるミズナラ天然林の遺伝

 構造
 *松本麻子, 津田吉晃, 上野真義, 津村義彦(森林総研)
- PC2-849 巨椋池地域における現存する湿地と干拓された湿地の水生植物の散布体バンクの比較 * 今西亜友美, 今西純一, 松本仁, 森本幸裕, 夏原由博(京大院・地球環境)
- PC2-850 霧ヶ峰におけるシカの植生影響: ニッコウキスゲ の被食分布 * 尾関雅章, 岸元良輔(長野県環境保全研究所)
- PC2-851モンゴル草原に同所的に生息する有蹄類 2 種の移動パターンの違い* 伊藤健彦(鳥取大・乾燥地研究セ),B. Lhagvasuren, B. Buuveibaatar (モンゴル科学アカデミー),恒川篤史(鳥取大・乾燥地研究セ)

(PA2:体育棟、PB2:3階西側廊下、PC2:3階東側廊下 #:ポスター賞対象発表)

- PC2-852 エノキとクヌギの列状混植がオオムラサキ個体群 に及ぼす影響 小林隆人(山梨県環境科研),中静透(東北大院),北原正彦(山梨県環境科研)
- PC2-853 水田における栽培管理の違いが水生昆虫の種構成 に及ぼす影響 * 浜崎健児、田中幸一(農環研・生物多様性)
- PC2-854 水田におけるトキの餌生物の量を決める局所要因と景観要因 * 吉尾政信(1)・加藤倫之(1)・田中 亘(2)・森田 弘樹(3)・齋藤 亮司(3)・宮山 尚也(3)・生玉修一(4)・三谷泰浩(5)・河口洋ー(5)・宮下直(1)(1 東大・生物多様性,2 九州大学大学院工学府,3(株) サンワコン,4 北陸農政局,5 九州大学工学研究院)
- PC2-855 コウノトリの再導入地における餌生物量 *内藤和明(兵庫県立大・自然研),佐藤直(兵庫県立大・院・環境人間), 大迫義人,池田啓(兵庫県立大・自然研)
- PC2-856 八幡湿原自然再生事業地における両生類の産卵状況の変化 *白川勝信(高原の自然館),内藤順一(広島県立祇園北高等学校)
- PC2-857 淡水産2枚貝カワシンジュガイはどのような生 息環境を必要とするか * 長坂晶子(北海道林試), 長坂有(北 海道林試)
- PC2-858 アユ、オイカワによる摂餌が河床付着膜の性状と 一次生産に及ぼす影響 * 皆川朋子((独) 土木研究所 自然 共生研究センター), 萱場祐一((独) 土木研究所 自然共生研究 センター)
- PC2-859 海の生物多様性を測る:定期海洋観測と海鳥類センサスを同時に行う意義及びその成果活用の方向 長 雄ー・濱原和広(北海道環科研)・金子正美(酪農大・環)
- **PC2-860** シマアオジはいつ減ったのか? 玉田克巳 (道環境研)
- PC2-861 オホーツク海におけるミズナギドリ類の生息環境 ー海上分布調査と衛星画像データによる解析ー *濱原和広、長雄一(北海道環科研),金子正美(酪農大・環),齊藤誠一(北大・水産)
- PC2-862 カワウの採食場所の決定プロセス 井口恵一朗(中央水研),田中英樹(群馬水試),鶴田哲也(中央水研),小西浩司(群馬水試),棗田孝晴(中央水研),品川卓志(群馬水試),阿倍信一郎(中央水研),鈴木究真(群馬水試)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 B会場

W01 乾燥地植物の水・養分利用からみた生存戦略

企画責任者:松尾奈緒子(三重大・生物資源), 三木直子(岡山大・環境)

概要:

アジアに広がる乾燥地域では、砂漠化や土壌塩類化による生態系の劣化が深刻な問題となって久しい。これらの地域は気候変動に最も敏感に反応することが予想される地域と一致しており(Smith et al. 2003, Nature)、今後も生態系の変化は加速し続けると考えられる。こうした地域の生態系の保全・修復のためには厳しい環境に生きる植物の生理生態や物質循環との関係の理解が不可欠である。本自由集会では、アジアの乾燥地に生育する樹木の水・養分の利用について研究を行っている研究者らが話題提供し、乾燥地植物の生存戦略についてディスカッションを行う。

司会:松尾奈緒子(三重大・生物資源)

コメンテーター: 吉川賢 (岡山大・環境), 山中典和 (鳥取大・乾燥地研)

ウズベキスタン・キジルクム砂漠に生育する樹木の水利用と耐塩性 松尾奈緒子(三重大・生物資源)

中国毛鳥素沙地に生育する臭柏(Sabina vulgaris)の水利用と成長 三木直子(岡山大・環境)

中国毛烏素沙地における臭柏 (Sabina vulgaris) の更新様式と水利用の関連 大手信人 (東京大・農), 吉川賢 (岡山大・環境)

中国黄土高原の半乾燥地における樹木の窒素利用の違いが窒素循環へ与える影響 舘野隆之輔(鹿児島大・農)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 C 会場

WO2 化学物質の生態影響パート3:影響を見てどうすれば良いかを考える

企画責任者:加茂将史(産総研),池田浩明(農環研)

昨年に引き続き、化学物質の生態影響について議論を行う。昨年までの自由集会は、現在の影響およびリスクの評価システムが生態学的に妥当であるかどうかに論点を絞り、議論を行ってきた。本年の自由集会では、現場での影響を紹介し、評価システムの妥当性について議論を行い、生態系を適切に管理してゆくにはどのような手法や考え方があるのかについて、皆様と考えたい。生態リスク評価の観点からは、評価の結果がすなわち結論であり、リスクの有無を伝えることが研究の目的である。一方、生態学的な観点からすると、評価の結果はただの仮説にしかすぎず、検証が必要と考える。しかしながら、検証がなされることはほとんどない。今年はまず、リスクの有無が注目されている重金属と農薬の生態影響を、野外で観測されている方に講演いただく。次に、その他の生態系に対する人為負荷の影響についても紹介いただき、最後に生態系管理と化学物質による利便性をはかりにかける際に必要となる環境経済学の知見についても紹介していただき、現実的な管理のあり方について議論を行う。

コメンテーター 田中嘉成

はじめに

加茂将史 (産総研)

アブラハヤを指標とした重金属類の影響評価 *棟方有宗(宮城教育大学),宮本健一(産総研)

農薬の生態影響とその評価 北條敏彦 (エスコ)

放射線生態影響評価の現状 川口勇生(放医研)

影響を見てどうすれば良いかを経済学者が考える 岸本充生(産総研) 自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 D会場 WO3 遺伝・発生・生態から探るシロアリのカースト分化と社会性

企画責任者: 北出 理 (茨城大・理), 前川 清人 (富山大院・理工)

「遺伝・発生・生態から探るシロアリのカースト分化と社会性」

個体の間に形態や行動が異なる階級(カースト)の違いがあることが、シロアリを含む社会性昆虫とその生態の大きな特徴である。階級分化の機構に関して、シロアリでは体内の幼若ホルモン(JH)の濃度が兵蟻の分化に影響することが古くから指摘されてきた。近年、カースト分化に伴う JH 量の変動や、兵蟻分化への JH 結合性タンパク質の関与など、発生制御の至近的機構の新たな理解の上に JH の働きと形態形成が再検討されつつある。また、フェロモンのみによって制御されると思われていたワーカー(職蟻)の分化に関して、性染色体上の遺伝子座が階級分化を強く規定する、遺伝的階級決定の存在も明らかになった。一方、階級分化とも強く関連するシロアリの単為生殖現象については、その生態的意義に関わる興味深い新事実が明らかにされつつある。

本自由集会では、大きな変化を迎えつつあるシロアリの階級分化・生態研究の最新の状況を4名の演者に講演していただき、これをふまえてシロアリ社会と昆虫の社会性の研究の新たな方向性を議論したい。

ヤマトシロアリのカースト分化と形態変化 前川清人(富山大院)

オオシロアリのカースト分化における幼若ホルモンの役割 Richard CORNETTE (農生研)

ヤマトシロアリにおけるカースト決定要因 林 良信 (農生研)

シロアリの女王位継承システムにおける単為生殖の機能 松浦健二 (岡山大院)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 E 会場 W04 データ解析で出会う統計的問題 -- GLM から始める統計モデリング 企画責任者: 粕谷英一 (九州大・理) , 久保拓弥 (北海道大・地球環境)

生態学におけるデータ解析において、観測データにあわせて解析者自身が注意ぶかく統計モデルを構築・推定・評価していくことはいよいよ重要になっている。個体差や場所差をうまく表現できる一般化線形混合モデルやベイズ統計モデルといった新しい方法論を使いこなすためにも、統計モデルの基本といえる一般化線形モデル(generalized linear model; GLM)をよく理解する必要がある。この自由集会では、参加者とともに GLM(とその拡張モデル)をデータ解析に応用するときに注意すべき点を議論したい。話題提供としては、まず久保が復習のために GLM の基本要素をひとつひとつ紹介し、さらに「脱」割算な統計モデリングのための offset 項わざを紹介する。次に粕谷が GLM での交互作用項の解釈と注意点について説明し、分散分析での交互作用の使われかたとも比較検討する。

自由集会の URL: http://hosho.ees.hokudai.ac.jp/~kubo/c

GLM の部品: 確率分布 , link 関数 , 線形予測子 , deviance, offset 久保拓弥 (北海道大)

GLM の使用注意: 交互作用の意味 粕谷英一(九州大)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 F会場

W05 琵琶湖の生物多様性は維持できるのか?—レジームシフト進行中の古代湖—

企画責任者:西野麻知子(琵琶湖環境科学研究セ),佐々木寧(埼玉大・工)

琵琶湖は、古琵琶湖から数えて 400 万年、現在の湖が成立してからでも 40 数万年という世界でも有数の古代湖で、水生動植物の種数は分かっているだけで千数百種、固有種は 60 種以上にのぼる。しかし魚類漁獲量は長期的に減少傾向にあり、とくに 1990 年以降の減少が著しい。また滋賀県レッドデータブック 2005 年版では、絶滅危惧種、絶滅危機増大種および希少種に指定された固有種が全固有種の 62%にのぼり、固有魚類では 73%にも達する。

一方、琵琶湖南湖では、1960年代から富栄養化が進行して植物プランクトンが優占していたが、1994年に観測史上最

低水位を記録して以降、沈水植物が繁茂して湖面をほぼ覆いつくし、水草優占の湖へとレジームシフトが起こったと考えられている。ただ南湖ではオオクチバス、ブルーギルが優占しており、南湖本来の豊かな在来生態系が回復したわけではない。

今後さらに固有種や在来種が減少し、外来生物が増加していけば、40数万年かけて形成されてきた琵琶湖の生態系が不可逆的に変化し、豊かな生物多様性が永久に失われる可能性が極めて高い。

この自由集会では、琵琶湖の生態系や生物多様性の現状をどう認識し、今後どのように保全、再生を考えていけばよいかについて、湖岸植生、水草、底生動物、水鳥および食物網の変化等の視点から議論したい。

- 1. 西野麻知子(琵琶湖環境科学研究センター)趣旨説明
- 2. 佐々木寧(埼玉大学・工)湖岸植生からみた琵琶湖の環境変遷
- 3. 浜端悦治(滋賀県立大学)南湖での沈水植物帯の拡大とレジームシフト
- 4. 奥田昇(京大生態研センター)高次捕食者から見た琵琶湖生態系:生物多様性のプロキシとしての食物連鎖長
- 5. *井上栄壮(信州大)・小林貞・西野麻知子:琵琶湖沿岸域におけるユスリカ相の現状―最近約10年間の変化
- 6. 橋本啓史(名城大学)最近20年間における琵琶湖の湖岸域で越冬する水鳥の変遷

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 G 会場

WO6 次世代 DNA シーケンサーの生態学へのインパクト

企画責任者:田中健太(筑波大・菅平セ),清水健太郎(チューリッヒ大)

新しい原理による次世代 DNA シーケンサーが数社から市場に投入され、大きな注目を集めている。その特徴は、迅速・安価に大量の塩基配列を解読できることにある。バクテリアのゲノムが 4 時間で決定されたり、ネアンデルタール人や 氷漬けマンモスのゲノムが解読されるなど、すでに生物学に大きなインパクトを与えている。

この方法は、進化生物学や生態学の分野にも以下の点で強力なツールになりうる。一番目に、生態学的に重要な遺伝子を同定するための、非モデル生物を対象としたゲノム解析と発現解析が可能になる。二番目に、微生物群集を対象としたメタゲノミクスが効率的に行える。三番目に、これまで遺伝マーカー・ベースで行われていた集団遺伝学的解析が、はるかに情報量の多いシーケンス・ベースのものに移行していくと予想される。

このような理由から、海外では進化生物学者・生態学者が次世代シーケンサーを利用した研究プロジェクトをいくつも開始しているが、国内の出足は早いとは言えない。そこでこの自由集会では、次世代シーケンサーの概略の紹介、これを活用することでどんな研究が可能になるのかの議論、どんな機種がどこの施設でどれくらいの費用で使えるのかといった実際的な情報交換を行いたい。

コメント: 進化生態学における次世代シーケンサーの光と陰 嶋田正和 (東大)

ぞくぞくと始まる生態学への応用 田中健太(筑波大・菅平セ)

技術革新の背景と将来展望 清水健太郎 (チューリッヒ大)

The power of association genetics: いもち病菌-イネ相互作用の解析を例に 寺内良平(岩手牛工研)

微生物群集多様性の解析:熱帯食虫植物ウツボカズラと内部バクテリアの関係 竹内やよい(京大)

どれを使う?次世代シークエンサーの性能・コスト比較 永野 惇 (京大)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 H会場

W07 生態学の進展に寄与する計測技術とは?

企画責任者: 沼田真也 (JST), 中村亮二 (JST)

近年、「地球観測の推進戦略」(H16、総合科学技術会議)において生態系を含む地球観測の重要性が主張されるなど、国を挙げた取組がなされる土台ができつつある。また、ゲノム解析技術からリモートセンシングまで、様々な計測技術が開発され、生態学研究や生態系観測においても多数利用されてきた。科学の先端を切り拓いていくためには、先端的な計測技術を研究に十分に活用しながら、研究が計測技術の発展そのものにも寄与できるような協働体制を創り上げていくことが重要である。しかし、このような協働の実現には、今後の科学者の取組に期待するところが大きい。そこで、

本自由集会では、演者の方々に、生態学研究や生態系観測において現在利用されている計測技術についてご報告いただき、科学の革新的な進歩に必要な計測技術について議論する。これらの議論を通じて、生態学研究や生態系観測における多様なニーズを把握し、どのような計測技術を推進すればこれらの研究の進展に寄与するのかを見極め、わが国の研究開発戦略へとつなげていくことを目指す。

自由集会では、計測技術開発の現状やアンケート調査の結果を紹介しながら、生態学で用いる計測技術についての話題提供をいただきます。これらを話題に、会場の皆様と自由に議論したいと思います。

イントロ:生態学の進展に寄与する計測技術とは? 沼田真也 (JST),中村亮二 (JST)

植物研究における計測 村岡裕由(岐阜大)

動物研究における計測 小泉透(森林総研)

生態系観測における計測 中塚武(名古屋大)

計測技術に期待すること 中静透(東北大)

コメント 松田裕之 (横浜国大)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 I 会場

W08 生態学者よ、街へ出よ! Part5 企業環境報告書を読む-生物多様性企業活動ガイドラインとの連動

企画責任者:石川真一(群馬大・社会情報),可知直毅(首都大院・理工),足立直樹((株)レスポンスアビリティ)

福岡大会で学会法人化WGの企画集会として開催した際に、参加企業から生態学研究者に対して具体的な提言や連携を望む声が多数聞かれた。特に、専門的な観点から企業の環境活動に対しての意見を求める要望が多く、そのためには各企業の発行している環境報告書に基づいて、企業の行っている環境保全活動、とりわけ生物多様性の保全に関する活動に関して対話を進めることが効果的であると考えられる。

そこで今回は、学会に所属する研究者に事前に複数企業の環境報告書を、生物多様性関連の部分を中心に事前に読んでいただき、企業の方を交えて討論を行う。折しも環境省では、生物多様性企業活動ガイドラインの検討が行われているので、可能な範囲でこのガイドラインの情報もご提供いただき、学会、企業、行政とのラウンドテーブル形式で、具体的な連携方法を模索する場をつくっていきたい。

環境報告書、企業の発表をもとに、指定討論と総合討論に主として時間を割いて、企業側の観点(現状における課題、将来展望など)、および研究者側の観点(専門的知見との整合性、さらなる改善方法など)をお互い持ち寄って、今後の協働の道をつくりあげたい。

指定討論

(1) 環境報告書にみる企業の環境活動

企業と生物多様性イニシアティブ (JBIB) 会員企業 (交渉中)、石川真一 (群馬大・社会情報)、他

- (2) 生物多様性に関する企業活動において、企業が学界に望むこと 足立直樹(株式会社レスポンスアビリティ)、他
- (3) 環境省ガイドラインとの連動 可知直毅(首都大院・理工)、他

総合討論

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 K 会場

W09 大台ヶ原の自然再生と生態学

企画責任者:横田岳人(龍谷大・理工), 日比伸子(橿原市昆虫館), 岸本年郎(自然環境研究センター)

紀伊半島の台高山脈に位置する大台ヶ原は、ほぼ西限にあたるトウヒ群落や規模の大きな太平洋型ブナ林などの原生

林が広がることで古くからよく知られているが、近年はニホンジカの増加による下層植生の消失・森林更新の阻害や、トウヒ林の崩壊、ミヤコザサ草原の拡大等、様々な生態学的問題が生じている。

そのような状況を踏まえ、平成14年度から環境省による自然再生の検討が行われ、平成16年度には「大台ヶ原自然再生推進計画」が策定された。この計画は5年に1度を目処に見直し、改定を行うことが示されており、今年度はその見直しが行われているところである。これまでに植生タイプ別に防鹿柵を設置し、その内外での植生や動物群集のモニタリング、それに実生の定着に関する実証実験が行われている。

大台ヶ原はこれまでにも数多くの生態学者が研究対象とし、多くの成果を積み重ねてきたフィールドである。それらの成果を踏まえ自然再生事業という課題に活用するためにも、はば広く開かれた議論が必要と考えている。本集会ではこれまで5年間の自然再生の試みを紹介しつつ、大台ヶ原の自然再生における現状・問題点を共有し、今後の展望について参加者の方々と議論できる場とし、出来るだけ多くの方にご参加頂きたい。

趣旨説明 日比伸子(橿原市昆虫館)・佐久間大輔(大阪自然史博)総合討論コーディネーター 村上興正(同志社大)

大台ヶ原のシカ・森林・生態系 柴田叡弌 (名大院・生命農学)

大台ヶ原自然再生事業~過去から現在~ 環境省近畿地方環境事務所・岸本年郎(自然環境研究センター)・樋口高志(KANSO テクノス)

自然再生の課題と展望 横田岳人(龍谷大・理工)

自由集会 3月17日 15:00-17:00

会場 L会場

W10 進化生態学のための分子系統樹の推定と応用

企画責任者:田辺晶史(東北大・院・生命科学), 奥山雄大(岩手生物工学研究センター)

進化生態学において、系統関係を無視した研究はあり得ない。そのため、我々はしばしば分子データを用いた系統樹の推定を行い、その解釈に頭を悩ませることとなる。しかし、分子系統樹の推定法は未だ発展途上にあり、1 ユーザーが適切な系統推定を行うことは容易ではない。さらに、得られた系統樹の解釈を正しく行うには、対象生物群と系統樹に対する深い理解を必要とする。そのため、ともすれば必ずしも信頼のおけない系統樹に基づいて議論がなされたり、系統樹が誤って解釈されてしまう場合もありうるだろう。苦労して得たデータから正しく最大限の情報をとり出すにはどうすればよいだろうか?

本集会では、まず田辺が系統推定に使われる分子進化モデルとその選択法、今のところ最も優れた最尤系統樹探索法と言われている Likelihood Ratchet を概説した上で、系統樹上での分子進化速度の変化を検出する方法を述べる。次に奥山が実際のデータ例から複数遺伝子座を用いてより高解像度の種の系統樹を得る試み、および系統樹を用いて適応形質を支配する遺伝子を探索する試みについて述べる。

講演では適宜ソフトウェアを用いた実演を交えながら説明する。さらに実際のデータを用いて、生物の多様性や適応 進化の謎に迫るために系統樹がどのように応用可能かについても、企画者の思いつく限り多方面から紹介し、その上で、 進化生態学における系統樹推定の現状と課題について参加者と共に議論したい。

進化モデル選択と Likelihood Ratchet、系統樹から進化速度の変化を検出する 田辺晶史(東北大・院・生命科学)

種の系統樹と遺伝子の系統樹、そして表現形質から適応進化を考える 奥山雄大(岩手生物工学研究センター)

自由集会 3月17日 15:00-17:00 会場 N会場

W11 生物群集の統一中立理論を楽しむ方法

企画責任者:村上正志(千葉大・理),島谷健一郎(統数研),平尾聡秀(北大・苫小牧研究林)

Stephen P. Hubbell によって提唱された統一中立理論は、これまでニッチ理論で強調されてきた種間の機能的な違いを考慮しなくても、さまざまな群集構造を説明できることを示し、近年、群集生態学の発展に大きな影響を与えています。 Hubbell の中立理論は発表以来、強い批判にさらされました。しかし、その批判の多くは中立性の仮定のみを問題にしており、このような批判の陰に隠れて、中立理論に多くの注目すべき側面があることが置き去りにされていると考えます。中立理論の特徴として、1)確率論的動態理論であること、2)データに基づいて検証することのできるサンプリング理 論であること、3) 分散制限や種分化のプロセスを組み込んだ理論でもあることを挙げることができます。つまり、群集生態学における中立理論の意義は中立性の仮定ではなく、これまでの理論では十分に考慮されてこなかったこれらの要素の重要性を示したことにあります。この自由集会では、中立理論の概念や理論的発展のレビューを紹介すると共に、個別研究を紹介します。そして、今後の群集生態学の研究に中立理論のこのような特徴をどのように生かしていけるのか議論したいと考えています。発表者は、村上正志(千葉大学)、島谷健一郎(統計数理研究所)、平尾聡秀(北海道大学)を予定しています。

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 B会場

W12 生態学における FOSS4G 利用の最前線

企画責任者:岩崎亘典(農環研)

生態学における地理情報システム (GIS) の利用は広がっている.しかし,「誰でも使えるツール」かといえば, そうではない.原因として, GIS ソフトが高価な点と,技術の習得が困難な点があげられる.

ここで近年注目されているのが、オープンソースで開発が進められている各種の GIS ソフトである. これらのソフトは FOSS4G(Free and Open Source Software for Geospatial)と総称され、無料で利用でき、ソフトの改良や再配布が可能である. また、開発が「オープン」でありソフト自体の検証可能なことも、科学研究に重要な点である。機能も一般に販売されている GIS ソフトに劣るものではない.

しかし、日本国内における FOSS4G の認知や利用は十分とはいえず、生態学における GIS の利用も限られているのが現状である。そこで本自由集会では、生態学分野において FOSS4G を利用している若手研究者を中心にその活用法を紹介してもらい、生態学での FOSS4G の可能性について論議する。各発表の要旨等は

http://www.osgeo.jp/foss4g-in-esj56/

で公開予定である。

タダのソフトって「安かろう悪かろう」じゃないの? いいえ,違います! 岩崎亘典(農環研)

「自由」な GIS ソフトウェア・FOSS4G の紹介 森亮 (OSGeo 財団)

FOSS を使った衛星生態学

奈佐原(西田)顕郎(筑波大・JAXA)

GRASS と R を用いたリモートセンシング情報と家畜の空間行動情報の統合と解析 川村健介 (広島大)

ArcGIS と歴史的農業環境閲覧システムを利用した「牧」の歴史的変遷 宮本万理子(東大・新領域)

UMN MapServer を利用した農業生物情報登録システム(ABDIS)の開発 嶺田拓也(農工研)

5 分でできる(?)FOSS4G 2008 LiveDVD 岩崎亘典(農環研)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 C会場

W13 小笠原の世界遺産申請に向けての外来種研究の現状と研究者の社会的責任

企画責任者:可知直毅(首都大院・理工・生命科学), 堀越和夫(NPO法人笠原自然文化研)

小笠原諸島では、2010 年秋のユネスコ世界遺産委員会への登録申請書の仮提出にむけて、小笠原の生物多様性の持続的な保全を担保する施策が急ピッチで進んでいます。外来種対策はその最重要課題です。世界遺産科学委員会など研究者による提言が施策に反映されるしくみがつくられ、研究成果が外来種対策事業に活かされる事例も増えています。小笠原では、科学的な情報を提供する以上の社会的責任が研究者に求められています。

この自由集会では、小笠原における外来種問題に関する最新の研究例を紹介するとともに、研究の将来展望について、研究者が果たすべき社会的責任をふまえて議論します。小笠原に関心をもつ会員だけでなく、研究者が研究の場とするフィールドの地元や社会・行政とどう向き合うかに関心をもつ方々の参加を期待します。

*当日、雑誌「地球環境研究 2009 vol. 14」の特集号「小笠原における外来種対策とその生態系影響」を 50 名まで無料配布予定です(販売価格 2000 円)。

小笠原諸島におけるクマネズミ根絶の現状 橋本琢磨(自然環境研究センター)

クマネズミ根絶を踏まえた小笠原の生態系の今後 牧野俊一・田中信行(森林総合研究所)

グリーンアノール防除の実践~外来生物駆除から自然再生へ~ 戸田光彦(自然環境研究センター)

地元研究機関による地域密着型研究の成果と課題 堀越和夫・佐々木哲朗・鈴木 創(NPO法人小笠原自然文化研究所)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 D 会場 W14 特定外来生物カワヒバリガイの分布拡大および被害の現状と将来 企画責任者:中野大助(電力中央研究所),小林卓也(電力中央研究所)

特定外来生物のカワヒバリガイは、様々な利水施設に被害をもたらすとともに、在来の生物相に対しても大きな影響を与える危険性を持っている。また、カワヒバリガイを中間宿主とする寄生虫は、魚類に寄生し、一部では致死的な魚病を引き起こすことが知られている。そのため、カワヒバリガイは侵入による社会的・環境的リスクの非常に高い外来生物である。現在、カワヒバリガイは、淀川・木曽三川・矢作川・天竜川・利根川の各水系で確認され、更なる分布の拡大が懸念されている。

本集会では、カワヒバリガイとその寄生虫の分布、拡大経路、生態特性、社会的・環境的リスクに関する知識・情報の共有化を図り、今後のカワヒバリガイの分布・被害拡大の予測および防除・管理策につながる議論を行いたい。

利水施設を管理する行政・企業関係者から一般の団体・市民に至るまでカワヒバリガイに興味・関心のある方のご参加をお待ちしています。

コメンテーター:中井克樹 (琵琶湖博物館)

利根川水系におけるカワヒバリガイの生息状況と被害拡大 伊藤健二(農業環境技術研究所)

カワヒバリガイに寄生する腹口吸虫-琵琶湖への侵入と分布拡大の可能性-馬場孝・浦部美佐子(滋賀県立大学大学院)

矢作川におけるカワヒバリガイの大繁殖,大量死,そして現在 白金晶子・内田朝子(矢作川研究所)

大塩貯水池におけるカワヒバリガイ大量発生原因ならびに分子生物学的手法を用いた系統解析と検出技術開発の試み 中野大助・小林卓也・坂口勇・松木吏弓・藤永愛・野方靖行・遠藤紀之 (電力中央研究所)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 E会場 W15 樹木は水をどのように輸送しているか - 樹種, 木部構造, 季節変化 -企画責任者: 岡田直紀(京大・農学研究科), 清野達之(筑波大・生命環境)

樹幹における水輸送は葉における光合成と密接に関係し、生態系でのその樹種の生活戦略を規定する重要な要因となる。根から葉への水移動は、蒸散によって生じる上下の水ポテンシャルの差に基づく、いわば受動的な過程と言える。しかしこの過程には、気孔の開閉による調節、通導組織の構造など、樹種ごとの特徴が反映される。本集会では、樹木が水をどのように輸送しているかを、樹種ごとの木部構造・機能の違い、日変化と季節変化、生育環境への適応といった点から考える。それぞれの発表の要旨と最新情報は以下のサイトから参照できる(http://www.geocities.jp/web_seino/research/esi56/ecoanatomy4.html)。

コメンテーター 小池孝良(北海道大学)

日本産広葉樹の樹幹における水分通道様式 梅林利弘 (東京大学 / 九州大学)

コナラとシラカンバにおける水分通導度の日変化 *小笠真由美,三木直子(岡山大学) 広葉樹の樹液流速 -樹種の違いと季節変化-籠谷泰行(滋賀県立大学)

小笠原に成育するキバンジロウ(移入樹種)とウラジロエノキ(在来樹種)の水分通導の比較 *石田厚, 矢崎健一(森林総研)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 F会場

W16 湖に面した水田の特性をさぐる一魚の目線から眺める一

企画責任者:前畑政善(琵琶博), 牧野厚史(琵琶博), 大塚泰介(琵琶博)

国内各地の平野部の水田でそうであったように、琵琶湖でも、かつては湖からやってきたフナ類(ニゴロブナ、ギン ブナ)、コイ、ナマズなどが水田に入って産卵していた。水路-水田間落差が大きくなった現在では、魚が水田へ侵入 できなくなっているが、今なお、これらの魚が水田めざして遡上している。私たちは、2007年から「湖に隣接する水田 地帯の特性の解明」と題した研究を行っている。本研究では、琵琶湖と人間が永年にわたって造ってきた水田(水田地 帯)を行き来する、琵琶湖を代表する魚・ニゴロブナ(琵琶湖固有亜種)を媒体として、湖畔にある水田地帯の特性の 解明をめざしている。このフナのように、湖と水田地帯という異なる環境を行き来する生き物にとっての水田(水田地 帯)の意義、機能を解明することは、これまで明らかにされてこなかった水田生態系と湖沼生態系の関係性を紐解くヒ ントになる。さらに水田地帯を「生き物」と「人」との関わりの場として重層的にとらえ、学際的側面からアプローチし、 統合化することは、今後の水田生態系を維持、保全していく上でも重要と考えられる。

本集会では、本研究で明らかにされたニゴロブナをめぐる水田、水路、琵琶湖に関わるいくつかの知見、そして人の 水田利用にかかわる特徴的な事例を紹介し、湖ー水田生態系研究のさらなる進展を図る契機としたい。併せて、国内外 における水田生態系研究の今後のあり方についても議論する場としたい。

司会:前畑政善・牧野厚史 コメント:端 憲二(秋田県大生物資源)・日鷹一雅(愛媛大農) 総合計論

ニゴロブナの接岸と農業用水路への遡上要因の検討 水野敏明 (琵琶博)

魚を水田に遡上させる試み―魚のゆりかご水田 小川雅広 (琵琵博)

水田におけるニゴロブナ仔稚魚の成長 金尾滋史(多賀町博/滋賀県大院)

共同利用空間としての水田地帯 牧野厚史 (琵琶博)

3月17日 17:15-19:15 自由集会

会場 G 会場 W17 微生物がつなぐ土壌生態系と地上部生態系-北大苫小牧研究林を中心として

企画責任者:大舘智氏(北大),金子信博(横浜国大),日浦勉(北大),笠原康裕(北大)

今まで地上部生態系(緑色生態系)と土壌生態系(腐食生態系)は別個に研究されることが多かった、しかしながら 土壌生態系の大元の物質供給源は陸上生態系であり、また地上部生態系は土壌生態系による栄養塩の供給などで成り立 っており,この2系は不可分のものである,この2つの生態系をつなぐものものとして微生物の果たす役割は高い.こ の集会では、北海道の苫小牧研究林を中心に行われているいくつかの操作実験系の成果を微生物を仲介として、文字通 り有機的に結びつけた論議を行いたい.

ミミズ類アバンダンスの変動パターンと物質動態

*豊田鮎(自然研),川口達也(横浜国大),岩島範子(島根大),金子信博(横浜国大)

シカによる林床植生と土壌生態系への影響

日野貴文, 揚妻直樹(北大), 豊田鮎(自然研), 日浦勉(北大)

十壌生熊系における捕食者(トガリネズミ)の役割 南波興之(北大)

高次捕食者(トガリネズミ)の土壌微生物相への影響 山本佳奈(北大)

土壌生態系と陸上生態系と結ぶ微生物の役割 笠原康裕(北大)

なぜ, つなぎたいのか? 一総合討論の導入として一 金子信博(横浜国大)

司会

日浦勉(北大)

企画代表・進行係 大舘智氏(北大)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 H会場

W18 開花・結実の生理生態~炭素と窒素の分配をめぐって~

企画責任者: 谷 友和 (東大日光植物園),宮沢 良行 (九大・熱帯農学研セ),小口 理一 (東北大・院・生命科学), 鍋嶋 絵里 (東京農工大)

植物の種子生産量や繁殖成功と、外部環境や植物自身の生活型との関係は、個体の適応度を理解する上で、解明されるべき重要なテーマである。そしてこうした関係は、樹木で観察される、マスティング現象や熱帯雨林での一斉開花現象など、興味深い現象の背景でもあると考えられ、その研究の意義は大きい。

本集会では植物の繁殖成功を決定する資源制限に着目し、冷温帯から熱帯にかけて繁殖器官への資源供給を調べた研究を取り上げたい。繁殖器官へ分配される資源のうち、窒素と炭水化物は特に重要である。炭水化物についてはさらに個体内の貯蔵物質と繁殖期間中の光合成産物に分別できる。これらの資源の動態分析に基づき、繁殖の制限要因について評価をおこなった研究を通じて、繁殖器官への物質分配の生理生態学的な仕組みを紹介したい。

生活型や外部環境の違うさまざまな植物で得られた、個々の資源による繁殖制限の結果を比較するとともに、繁殖投資について生理的メカニズム(至近要因)と適応戦略(究極要因)の両面から幅広い議論ができるものと考える。

コメンテーター 日浦勉(北大・苫小牧研究林),工藤岳(北大・地球環境)

種子への窒素投資と種子生産

衣笠 利彦 (鳥取大・農)

冷温帯落葉広葉樹林における林床植物の資源利用特性:光環境の季節性が作り出す炭素分配の多様性 *井田 崇,工藤 岳(北大地球環境)

冷温帯落葉広葉樹種ハクウンボクの豊作年における繁殖器官への炭素資源分配特性

*宮崎 祐子(奈良県森技セ),日浦 勉(北大・苫小牧研究林),船田 良(東京農工大)

フタバガキ科巨大高木のマスティングのメカニズム

市栄 智明(高知大農)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 I 会場

W19 天然林施業の実行可能性-過去の失敗分析に基づいた新たな森林施業研究へ向けて-

企画責任者: 久保田康裕(琉球大学), 佐藤謙(北海学園大学), 島谷健一郎(統計数理研究所), 長池卓男(山梨林 業試験場), 吉田俊也(北海道大学)

日本の現林政では、自然林を対象とした林業からは撤退するということになっています。いま問題となっている国有林乱伐は、その残滓とも言えるでしょう。この集会の企画者は、収奪的林業が森林生態系に及ぼした影響を科学的に検証することが、重要と考えています。国際的な森林資源の流通動態を考えると、将来的には木材資源も戦略的生物資源になる可能性もあります。したがって、過去の天然林施業の失敗を分析し、自国の自然林を持続的に利用するための管理策を考えることは、超長期的な視点からも意義があります。また最近では、生態学会の自然保護委員会で「国有林伐採問題」が議論されています。私達は、自然保護問題としての自然林伐採と施業研究は、同じ次元で議論されるべき問題と考えています。本集会では、問題告発型の現状報告と、今後、生態学という学問の範疇で行うべき研究テーマのマッチングを試みます。北海道から沖縄までの自然林伐採の実態を認識し、各森林施業における仮定の生態学的な妥当性を検証し、森林施業の生態リスクの評価手法を議論します。

自然林伐採の生態学的問題点 久保田康裕(琉球大学) 森林施業によって激減・絶滅した北海道の植物種 佐藤謙(北海学園大学)

択伐後の回復過程に及ぼす林分構造・種多様性の効果-北海道北部の天然生針広混交林-吉田俊也(北海道大学)

1987年知床半島伐採を年輪時空間データで再検討する * 島谷健一郎 (統計数理研究所), 久保田康裕 (琉球大)

過去の失敗分析に基づいた森林施業研究へ向けて 長池卓男(山梨林業試験場)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 J会場

W20 ダーウィニズム清算へ、「科学的進化論 (新今西総合説)」決起集会!

企画責任者:水幡 正蔵(在野の研究者)

昨年の本学会総会にて、「ダーウィニズム清算と科学的進化論採択決議」動議他が提出された。この動議が指摘した「ダーウィニズムの根源的誤り」は、明確な事実である。生物学者もマイア以降、「生物学的種定義」を認めている。これを言い換えれば、「種」は「交配上のルールが同じ生物集団」、すなわち「種=交配集団(交配共同体)=種社会」となる。そして「種」が定義された瞬間、「種は定義できない」ことを前提に立論されたダーウィン「自然選択説」は、全面崩壊する。「種が変わること」すなわち進化とは、「交配集団を束ねるルールが変わること」と、明確に説明できるからだ。実はダーウィンが選択する主体を不明のまま「性選択」でごまかした進化は、正しくは「種社会選択」だった。何が交配集団内において、特定形質を交配優先(>好み)基準として選択しているかと言えば、それは「交配集団=種社会」を束ねるルール(MPR = Mating Priority Rule)だからだ。

さて、時代は「国家」ではなく、「ヒト種」単位での共同体、すなわち「人類社会(ヒト種社会)」を求めている。地球環境保全も、核廃絶も、「国際社会」の枠組みでは、国益の壁に阻まれている。また、今の「第二次大恐慌」を収束させるには、ドル基軸にとって変わる「人類社会通貨」創設しかない。しかしながら、ダーウィニズムの支配がある限り「人類社会」は、言葉にすらならない。破局に向かう「近代国家の時代」に終止符を打ち、「人類社会の時代」を切り開く為に、志ある研究者・市民は、本自由集会に結集し、決起しよう!

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 K会場

W21 群落談話会-群落学的な視点からとらえた外来植物群落が在来植物群落に与える影響

企画責任者:神戸大院・人間発達環境学研究科

2007 年に改訂された第 3 次生物多様性国家戦略の中で生物多様性に与える 3 つの危機が挙げられている。その内のひとつが人為的に持ち込まれた外来種による影響である。昔から有用な植物として意図的に導入され、また、意図せずに持ち込まれたものが野外に逸出し、それが広がり在来の生態系は植物群落に大きな影響を与えている。外来種に関する種生態学的な研究は多く行われているが、群落学的な視点からの研究は少ないように思われる。本集会では外来種群落の現状を報告してもらい、それが在来種群落にどのような影響を与えているのか、共存は可能なのか、駆除する必要があるのかその方法などを議論し、今後の研究の方向性を展望したい。

塩湿地に侵入したスズメノナギナタの生態と塩湿地植生への影響 木村奈穂子,澤田佳宏(淡路景観園芸学校)

木曽川中流域の礫河原におけるオオキンケイギクの分布状況と在来植物群落の再生を目指した植生管理実験について 畠瀬頼子(国土交通省国土技術政策総合研究所・自然環境研究センター),小栗ひとみ(国土交通省国土技術政 策総合研究所),松江正彦(国土交通省国土技術政策総合研究所)

河川敷におけるニセアカシア群落の成立による在来植生形成阻害 橋本佳延(兵庫県立人と自然の博物館)

外来植物の選択的除去と在来植物の種多様性との関係 川田清和(筑波大・北アフリカ研究センター) 自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 L会場

W22 チョウノスケソウの昔、今、未来

企画責任者: 増沢武弘 (静岡大・理)

過去何回かの氷期に北極域から日本列島へ分布を広げて来た植物群は周北極要素の植物と言われている。バラ科のわい性低木であるチョウノスケソウ(Dryas octopetala)はその代表的な植物である。この植物は氷河の移動とともに分布の拡大・縮小を繰り返したため、ドリアス期と氷期の名前にもなっている。

日本列島におけるチョウノスケソウの発見は、岩手県が生んだ須川長之助の功績によるものであるが、その学問的基礎を与えたマキシモビッチの貢献も多大なものである。ここでは須川長之助がたどった植物学への道とロシアの植物学者マキシモビッチの人物像について解説を行う(泉舘、須田)。これをふまえ、現在の北極圏から日本列島に至るまでのチョウノスケソウの分布、およびその群落構造と特徴について解説し総合的な討論を行う(佐藤、和田、増沢)。

協力およびコメンテーター: 吉田勝一(岩手大ミュージアム)

はじめに

増沢武弘 (静岡大・理)

須川長之助の生い立ち

泉舘重雄 (須川長之助顕彰会)

須川長之助とマキシモビッチ 須田数(出土・名誉教授)

須田裕(岩手大・名誉教授)

チョウノスケソウの分布 佐藤謙 (北海学園大)

チョウノスケソウの生態学的特性

和田直也(富山大・理)

南限のチョウノスケソウ群落

増沢武弘(静岡大・理)

総合討論

増沢武弘(静岡大・理)

自由集会 3月17日 17:15-19:15 会場 N会場

W23 だれでもできる外来生物の分布拡大シミュレーション

企画責任者:小池文人(横浜国大),岩崎敬二(奈良大学)

近年は多くの重要な外来生物が野生化して分布拡大中であり、分布調査も盛んに行われています。このデータをもとに将来の地理的分布拡大を予測したり、また分布拡大を阻止するための戦略を立てるには分布拡大シミュレーションが必須です。しかし学会で発表を聞いたり論文を読むだけでは、フィールドの研究者にとっては敷居が高い面もありました。そこで生物の分布拡大シミュレーションの諸手法を解説し、またテストデータとソフトウェアを配布して実際に自分のパソコンを操作してシミュレーションを行う実習を企画しました。今後は多くの方が自分で調べたデータを使って自分で分布拡大予測を行うようになるのが望ましいと思われます。空間生態学の研究者のほか、環境コンサルタント勤務の方やアマチュア研究者、行政担当者の方の参加も歓迎します。

「在・不在データをもとにした簡単なモデル」では(a)都道府県レベルの分布拡大パターンの多種比較による統計的な方法と、(b)在・不在の空間地図をもとにしたメタ個体群的な分布拡大予測、の2つの方法を扱います.

「資源分布や個体群動態を含んだ詳細なモデル」は3次メッシュを単位とし、出生、死亡、分散過程を組み込んだ格子モデルによる,さまざまな資源分布や駆除圧での分布拡大予測で,根絶事業の成功確率の計算も可能です.

当日参加もできますが、事前に申し込まれた先着30名の方には机と電源コンセントを集会の主催者が確保します.なるべくフル充電したノートパソコンをご持参ください. 事前参加申込先:koikef@ynu.ac.jp

在・不在データをもとにした簡単なモデル

* 小池文人(横浜国立大学)・森本信生(中央農業総合研究センター)・岩崎敬二(奈良大学)

資源分布や個体群動態を含んだ詳細なモデル

*藤田剛·宮下直(東京大学)

自由集会 3月20日14:30-16:30 会場 ₩会場

W24 海洋大形動物の空間利用を個体の移動軌跡から理解する

企画責任者:綿貫豊(北大水産),佐藤克文(東大・海洋研)

動物の環境利用は、ある瞬間の動物の分布とその時間変化を調べる方法と個体の行動を追跡する方法がとられ、これらのデータにハビタットの分布などを重ね合わせることで解析されてきた。動物の分布とハビタットを様々なスケールで分析することで、景観構造に応じた環境利用が研究されている。そういった環境利用パタンがみられるメカニズムを探るための一つの有力な方法は、個体の移動と行動を様々なスケールで解析することである。海洋大形動物は直接観察が困難であり、それゆえバイオテレメトリー技術やバイオロギング技術による追跡が試みられている。そのため結果的に陸上動物以上に微少な時空間スケールでしかも広範囲に長時間の個体の移動データが得られてきている。この自由集会では、カメ、海鳥、海獣などを材料として個体の移動データの取得と解析技術について紹介していただく。その上で、個体の移動軌跡の研究が構造を持った海洋景観における動物の環境利用の理解にどう役立つか議論したい。

地磁気コンパスと速度を使って慣性航法的に水中での3次元移動行動を推定し、動物の遊泳行動や採食行動を探る。 GPS 移動軌跡から海鳥の移動スケールを解析する。海鳥の南北長距離渡りをメソスケールで測定しその海洋環境利用を 解析する。

地磁気加速度データロガーを用いたウミガメ類の三次元行動解析 楢崎友子,佐藤克文,宮崎信之(東大海洋研)

潜水経路の再現によるエンペラーペンギンの潜水戦略の個体差の解明 塩見こずえ(京大)

GPS を用いたオオミズナギドリの行動追跡 依田憲(名大・環境学)

海洋環境の季節変動に対応したオオミズナギドリの利用海域の変化 山本誉士(国立極地研),高橋晃周,岡奈理子,勝又信博,佐藤克文,Philip Trathan

自由集会 3月20日14:30-16:30 会場 X 会場

W25 フェノロジー研究会「花生態の多様さと面白さ」

企画責任者:大野啓一(千葉県立中央博物館)

花生態の研究、とりわけその進化生態学的な検討は近年めざましい進展を見せているが、一方、日本の多様な植物で花生態が明らかにされた種や現象は記載レベルでもごく一部であり、まだまだ、分からないこと、面白いが詳しい検討を要する現象は多々ある。多くの種についていろいろな現象を発見・記載することと、現象の意味を進化生態学的に吟味することは、花生態研究の両輪であろう。今回は、お一人である程度多くの種や、いろいろな視点で見てこられた御経験をお持ちの以下の方々に話題提供をいただく。面白い事例や視点を持ち寄る形で楽しく議論し、今後どのように花生態の研究を展開していくかを考える機会としたい。

「植物の性表現と開花フェノロジー」 岡崎純子(大阪教育大・教員養成)

「両性花植物における個々の花への性分配」 石井博(富山大・生物圏環境科学)

「花の左右相称性がもたらす形質進化」 丑丸敦史(神戸大・発達科学)

自由集会 3月20日14:30-16:30 会場 Y会場

W26 大型水鳥を支える里地生態系の構造、機能、再生技術

企画責任者:武山智博(新潟大院・自然科学),大石麻美(新潟大院・自然科学)

本集会では、水鳥の生息環境という視点から、里地の再生を考えたい。現在、大型の水鳥をシンボルとしたいくつかの自然再生の研究プロジェクトが進められており、これらは水鳥の生息環境としての生態系の回復だけでなく、農業などの人間活動との共生(関わり合い)を考慮した方向性を持っている。生態学的アプローチから大型水鳥の生息地としての里地再生を進めている各演者より、鳥類からみた水田生態系、水田生態系の構造や機能の評価、生態系の復元技術に関する話題を提供してもらい、生息環境評価の方法やその応用といった里地再生のポイントを共有し議論を行う。また、各地域間やプロジェクト間の将来における連携の可能性についても検討したい。

コメンテーター:宮下直(東大・農・生物多様性)・藤岡正博(筑波大・生命環境科学)

茨城におけるチュウサギの水田利用様式~複数の空間スケールに着目して~ *片山直樹(東大・農), 天野達也(農環研), 藤田剛, 樋口広芳(東大・農)

佐渡におけるトキの採餌場所創出の実験的検証

*武山智博,大石麻美,関島恒夫(新潟大院·自然科学)

宮城におけるマガン越冬地・蕪栗沼周辺水田における稲作技術の開発研究

*高田まゆら,吉岡明良,高木俊 (東大院・農),岩渕成紀 (NPO 田んぼ),小林徹也 (東北農研),鷲谷いづみ (東大院・農)

豊岡におけるコウノトリの生息環境としての里地の再生

*内藤和明(兵庫県立大·自然研),佐藤直(兵庫県立大·院·環境人間),大迫義人,池田啓(兵庫県立大·自然研)

能登におけるトキの野生復帰を目指した里地の再生

*中村浩二(金沢大・環日本海域環境研究センター・里山プロジェクト)

自由集会 3月20日14:30-16:30 会場 Z会場

W27 3.8%の吸収源はいつまで維持できるか?~温暖化実験から~

企画責任者:梁 乃申(国環研), 高木健太郎(北大・北方生物圏), 中根周歩(広大院・生)

我が国の森林面積は国土面積の約70%を占めるとともに、適切な森林管理によるCO2 吸収源として年間約1300万tCの蓄積能力があると評価されている。これは我が国の基準年排出量の3.8%に相当する。一方、IPCC第4次レポートによれば、大気中のCO2濃度を200ppmほど上昇させた場合、森林の生産(NPP)は約20~25%増加するとともに、落葉・落枝・枯死根などが増加することにより土壌有機炭素が徐々に増える。また、気温上昇に伴い、土壌有機炭素の分解が促進され、現在吸収源となっている陸域生態系は2050年以降に放出源に転換する場合があることが予測されている。

世界の森林土壌に比べて、日本の森林土壌の炭素貯蔵量は明らかに多く、我が国の森林土壌有機炭素放出に及ぼす地球温暖化の影響は大きいと考えられる。そこで、本集会では、現場の温暖化操作実験、全国レベルの土壌インキュベーション実験及び最新のオープントップチャンバー実験の結果を基に温暖化に伴う土壌有機炭素放出の反応を議論する。

コメンテータ: 及川武久 (筑波大学)

趣旨説明:土壌呼吸に及ぼす温暖化の影響

梁 乃申 (国環研)

野外温暖化操作実験による土壌呼吸の地域的特性の解明 高木健太郎(北大・北方生物圏)

全国レベルの森林土壌インキュベーション実験

角張嘉孝 (静大・農)

大型オープントップチャンバーを用いた高温・高 CO2 が土壌呼吸に及ぼす影響評価中根周歩(広大院・生)

参加登録者一覧

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
K1-11 相澤 章仁	千葉大院・自然科学	○ 安渓 遊地	山口県大
PB2-675 饗庭 正寛	北大・苫小牧研究林	PB1-258 安東 義乃	京大生態研
PA2-573 青木 美鈴	奈良女子大学・院	PB2-673 飯島 勇人	北大院農
PB1-249 青山 千穂	北大農	PA1-031 ○ 飯島 慈裕	地球環境観測研究センター
S03-2 赤石 大輔	金沢大学	E1-09 () 飯田 知彦	広島希少鳥類研究会
PA1-149 ○ 赤坂 卓美	北大院農	S03-4 飯田 真一	森林総合研究所
S02-4 ○ 赤坂 宗光	国環研	PA2-522 飯田 晋也	横浜国立大学大学院
PA1-117 赤松 樹	名大院生命農	B2-05 飯塚 祐輔	島根大汽水研
G2-06 ○ 赤松 史一	(独) 土木研究所	家原 敏郎	森林総合研究所
PA1-056 秋田 理紗子	東北大学 生命科学研究科	PA1-116 ○ 五十嵐 知宏	東北大学大学院農学研究科
M1-04 ○ 秋田 鉄也	横浜国立大学環境情報	PC1-378 ○ 井川 拓也	北海道大・院・水産科学
K2-03 秋山 賢太	龍谷大学理工学部	S23-2 生玉 修一	農林水産省北陸農政局
PA2-583 ○ 秋山 耕治	京大院・農・昆虫生態	PC2-862 井口 恵一朗	中央水研
PA2-469 秋山 克	幌延地圏環境研究所	PC2-798 池上 佑里	東京大学大学院
○ 秋山 吉寛	水産工学研究所	PB1-324 池田 圭吾	信州大学院・工学系研究科
PA2-452 浅井 元朗	中央農業総合研究センター	PC2-800 ○ 池田 淳一	新潟大学農学部
T08-5 ○ 浅枝 隆	埼玉大学院理工	PA2-631 ○ 池田 透	北大・文・地域システム
PA2-514 朝香 友紀子	北大・院・環境科学	T06-1 ○ 池田 啓	京都大 人間・環境
PB1-280 ○ 淺木 宏覚	信大・院・地球生物圏科学	K1-09 ○ 池田 浩明	農業環境技術研究所
PA1-150 浅沼 弘人	横浜国大院・学環境情	PA2-479 〇 池田 紘士	京大・院理・動物生態
T24-3 朝日田 卓	北里大学海洋生命科学部	F2-05 池田 実	東北大学大学院農学研究科
○ 浅見 崇比呂	信州大・理・生物	池田 和子	自然環境研究センター
PA2-518 味岡 ゆい	中部大大学院	F2-02 ○ 池田 重人	森林総合研究所
PA2-429 芦澤 和也	明治大学大学院農学研究科	K2-06 ○ 井坂 友一	信州大・院・総工
S07-4 T12-1 ○ 東 淳樹	岩手大・農・保全生物	809-1 ○ 井鷺 裕司	京都大学農学研究科
T23-1 麻生 一枝	成蹊大学 理工学部	PC2-835 石井 潤	東京大学農学生命科学
PB2-731 安宅 未央子	神戸大学森林資源学研究室	PA1-097 石井 弘明	神戸大学院・農
足立 直樹	株)レスポンスアビリティ	PA1-128 石井 博	富山大学理工学研究部
PA1-082 ○ 安立 美奈子	農環研	PA2-598 ○ 石井 宏昌	横浜国大・院・環境情報
PA1-217 阿藤 正樹	三重県津農林水産商工環境	PC2-780 ○ 石井 弓美子	東大院・広域システム
PA2-540 ○ 安部 淳	岐阜大・応用生物	G2-04 石井 励一郎	地球環境フロンティア
PA1-198 ○ 阿部 聖哉	(財) 電力中央研究所	PA1-115 石神 唯	首都大学東京大学院
S09-4 ○ 安部 哲人	森林総研九州	PB2-707 ○ 石川 尚人	京大・生態研
PB1-243 ○ 阿部 晴恵	日本モンキーセンター	PC2-844 ○ 石川 真一	群馬大学社会情報学部
PC1-339 ○ 阿部 周	東北大生命	PB1-316 ○ 石川 幸男	専修大北海道短大
PA2-568 ○ 阿部 真和	新潟大学大学院	PB1-244 ○ 石崎 智美	北大・院・環境科学
阿部 将己	横浜国立大学大学院	T31-4 ○ 石田 厚	森林総合研究所
PA2-516 ○ 天野 百々江	神戸大・院・理	PA2-448 ○ 石田 清	弘前大学農学生命科学部
PA2-465 天野 陽介	東邦大学理学部	H2-04 ○ 石田 真也	新大院・自然科学
PC2-770 綾部 慈子	名大・森林保護	L1-09 ○ 石田 惣	大阪市立自然史博物館
PA1-024 新井 諭	宇都宮大・院・農	H2-02 石田 弘明	兵庫県立大・自然環境研
PA1-137	東大院・農・緑地創成	PA1-173 ○ 石田 裕子	摂南大学工学部
H1-06 荒木 悟	島根大・汽水域研セ		鳥大農
○ 荒牧 遼太郎	玉川大学生態科学領域	PB1-302 〇 石塚 航	東大・演習林
PC1-341 ○ 粟野 将	東北大・生命	PC1-387 〇 石庭 寛子	新潟大学・院・自然科学
○ 安渓 貴子	山大医非常勤	PB1-312 石橋 史朗	環境省世界遺産センター
		PC2-846 ○ 石濱 史子	国環研

発表	懇	名	i 前	所属	発表	懇	名	前	所 属
T02-5	-	石原	道博	大阪府大院・理・生物科学	PA1-076	0			鳥取大学乾燥地研究センタ
E1-08	0	石間	妙子	新潟大・自然科学	PC2-849		今西	亜友美	京大院・地球環境
S18-4		伊勢	武史	海洋研究開発機構	PC2-847		今村	彰生	京都学園大学バイオ環境
PC1-347		磯崎	昌代	横浜国立大学	T23-3		入江	貴博	琉大瀬底実験所
PB2-671	\circ	井田	崇	北海道大学地球環境	G1-09		岩井	紀子	東大院・農・森林動物
G2-02		井田	秀行	信大・教・志賀自然研	PA2-425		岩泉	正和	森林総研林木育種センター
T09-3		伊谷	行	高知大学教育学部	S23-3		岩浅	有記	環境省
PA2-593 12-06	0		智明	高知大学	T19-5 M1-01	0	巌佐	庸	九州大学・理院・生物
PB1-285			志野	鹿児島大・理工研	L1-08		岩崎	敬二	奈良大学教養部
PA1-053			琢己	東北大学理学部生物系	PA2-474		岩崎		首都大・牧野標本館
PA2-611		一瀬	克久	東大院・農・保全生態	B2-06		岩崎		島根大汽水研
T05-2	0	市橋	隆自	東大・理・日光植物園	T30-1	0	岩崎	亘典	農業環境技術研究所
PA1-136		市原	実	岐阜大院・連農	PA1-174	0	岩崎	雄一	横国大院・環境情報
PA1-090		一宮	孝博	首都大院理工	PA2-490	0	岩嵜	航	東北大学生命科学研究科
PC1-420	\circ	井出	純哉	京大院・農・昆虫生態	PB2-664		岩崎	(葉田野) 郁	岡山県生物科学総合研究所
I1 - 01		井手	玲子	国立環境研究所		0	岩田	繁英	静岡大学
PC1-390	\circ	伊藤	愛	新潟大学大学院	S24-6		岩田	洋佳	中央農研
S19-2	\circ	伊藤	昭彦	国立環境研究所	PA1-104		岩永	史子	鳥取大学農学部
T01-4	\circ	伊東	明	大阪市大・院理	K2-01	0	岩渕	翼	東北大学生命化学研究科
PB2-734	\circ	伊藤	江利子	森林総合研究所	PC2-783		上馬	康生	石川県白山自然保護セ
T02-1	\circ	伊藤	桂	JST 高知 / 高知大・農	PA1-057		上田	実希	京都大学大学院農学研究科
PB1-304	\circ	伊藤	公一	鳥取大学農学部	PA2-575	\circ	上野	篤史	滋賀県大環境生態
PC2-809		伊藤	浩二	金沢大・地域連携推進セ			上野	薫	中部大学 応用生物学部
PA1-100	\circ	伊藤	祥子	国立環境研究所	PB1-297	0	上野	真郷	東北大学農学部
PA1-114		伊藤	信一	静岡大学教育学部			上野	真耶	石川県立大学
PC2-851		伊藤	健彦	鳥取大乾燥地研究センター	PB1-329		上野	満	山形県森林研究センター
L1-03	0	伊藤	千恵	横浜国大・院・環境情報	L2-07	0	上野	裕介	北大院・水産
PB1-253	0		宏樹	森林総研多摩	PB2-674				東北大・院・農
PB1-261		伊藤		東大・総合文化	M1-02		上原	-	九大・理
PC1-371		伊藤		東北大学 生命科学研究科	PB2-735		上原		富山大・理・生物圏
PA2-621			弓恵	名工大・社会工学	N2-07				東大院・広域システム
PC1-377				昭和大学	PA1-135		植松		神戸大院・発
T30-4			栄洋	静岡県農林技術研究所	PB2-699		潮雅		京大・生態研センター
PB2-740				森林総研	H1-03		丑丸		神戸大・人間発達環境学
M2-05 PB1-224				茨城大・理	PB2-679 PC1-406			伸章	京大・農
PA2-426			佳洋 路子	北海道環境研 宇都宮大学農学研究科				'I 1版 喜美子	北海道区水産研究所総合地球環境学研究所
PC2-820				近畿大学大学院	PA2-487				信州大・理・生物
102 020	_	乾陽		大阪教育大・教養	PC1-380		内海		京大生態研
PB1-283			ッ) 栄壮	信州大・繊維	S17–3		宇野		北海道環境研
PB2-686				早稲田大・院・先進理工	PB2-710	\bigcirc			千葉大・園芸
11-09			智美	国立環境研究所	S06-1			77 千恵子	総合地球環境学研究所
PA1-046	0			島根県立三瓶自然館	PB2-739		梅村		名古屋大学大学院
PA1-068			裕太	愛媛大・連合農学			浦上		鳥取大学 農学部
PA1-213				奥羽大	PA1-028			•	横浜国大・院・環境情報
S14-2			伸夫	京都大生態学研究センター				忠朗	筑波大・院・生命環境
PB2-655		今井	宏昭	宇都宮大学大学院	PC1-413				東北大学生命科学
S20-5	0	今治	安弥	東北大・院・農	PB1-290	0	浦部	美佐子	滋賀県立大学環境科学部

発表 懇	名 前	所属	発表	愁	名	前	所属
M2-01 O	江口 和洋	九大院・理・生物	H2-01		大野	啓一	横国大大学院環境情報
PB1-330	江口 誠一	千葉中央博	PB1-292	\circ	大場	麻衣	玉川大・農
PA1-088	榎木 勉	九州大学演習林	G1-07	0	大場	真	環境研アジア自然共生G
PB1-225	遠藤 絵実	兵庫県大院 環境人間	E1-07	\circ	大橋	春香	東京農工大・院・連合農学
PA2-549 O	遠藤 真太郎	信州大院・理・生物	PB2-672		大橋	賢	明冶大・院・農
PC2-748	遠藤 千尋	京大・生態学研究センター		\circ	大橋	一晴	筑波大・生命環境
PC2-755 O	遠藤 暢	京大院・農・森林生態	PA1-165		大畑	直史	中部大学応用生物学研究科
	遠藤 美香	兵庫県立大学	PC2-813	\circ	大林	夏湖	島根大学汽水域研セ
PA2-462	遠藤 力也	京大院・農		\circ	大原	雅	北大・院・地球環境
12-02	及川 真平	京工繊大・生物資源	PC1-367		大平	充	東京農工大学農学部
PB1-226	及川 真里亜	東京農工大学連大	N1-11	0	大堀	聰	早稲田大学自然環境調査室
	王 けい	弘前大学農学生命科学部	PB2-667	0	大松	ちひろ	北海道大学環境科学院
	王 仁卿	中国山東大学生命科学学院	T09-2		大森	浩二	愛媛大学沿岸センター
PC1-338 O	王 婉琳	東北大・生命科学	PA1-005	0	大山	拓郎	新潟大・農
T08-2	大石 哲也	土木研究所	PB2-665	0	岡崎	純子	大阪教育大学教員養成
PC2-831	大石 麻美子	京大・生態学研究センター	PA1-051	0	岡島	有規	東京大・院・理
PA1-212	大石 麻美	新潟大・院・自然科学	T17-3		岡田	操	株式会社 水工リサーチ
PA2-527 O		北大環境科学院	T26-2		尾形		チョウセンアカシジミの会
PA1-111	大岡 智亮	宇都宮大学・院・農	PC2-795	0	岡田	あゆみ	北里大学獣医学部
_	大串 隆之	京大・生態研			岡田		京都大・農
PC2-837	大窪 久美子	信大・農	PA2-596	0			財)山階鳥類研究所
	大黒 俊哉	東京大学	PA2-584		岡野	· -	東北大学生命科学研究科
S10-5	大河内 直彦	海洋研究開発機構	PA1-109	0	岡本		京大院 人環
PB1-264 O		神戸大・院				奈保子 	京都学園大学
PA2-592	大澤 正嗣	山梨県森林総合研究所	PA1-177		岡本		東大・院・農
S20-2 T31-5	大園 享司	京大生態研セ	T11-5	0	岡安		東大農
K1-03	太田 海香	東京海洋大		0		安紀子	国立環境研究所
PC1-334 O	太田 和孝	京大院理	DO0 010		小川		滋賀県立琵琶湖博物館
S03-3 O	太田 謙	岡山理科大院総情数理環境	PC2-816		小川		Oxford Univ.
PA1-208 🔾	大田 直友	阿南高専・建設システム工	PA1-067 PB1-298	\circ	隠岐		三重大学生物資源学部
PA2-591	太田 宏	東北大学生命科学研究科	PB1-308	O	沖宗		秋田県立大学院遺伝資源 広島大・院・総科
PA1-159 🔾	太田 陽子	NPO 緑と水の連絡会議		\circ	沖津	•	千葉大学園芸学研究科
0	大竹 邦暁	中電技術コンサルタント	PA2-497				京都大農
0	大舘 智志	北大低温研	PB1-279	0	奥崎	· · ·	京大・院・理・動物生態学
S02-5	大谷 雅人	森林総合研究所	PC1-355	\cap			宇都宮大・農
PC1-388 O	大谷 道生	宇都宮大学 大学院	PB1-275			_	(独) 東北区水産研究所
S07-2 O	大塚 泰介	滋賀県立琵琶湖博物館	101 270	_	奥田		京大生態研
S03-5	大塚 俊之	岐阜大学	PA1-081				東京大学理学系研究科
PA2-484	大槻 朝	東北大・生命科学	PA1-078		奥原		信州大院・工
PB2-677 O	大土 直哉	早稲田大・教育	11-02		小熊		国立環境研究所
S10-1	大手 信人	東大農学生命科学	•=	0	奥村		森林総研・四国支所
T20-4	大床 太郎	森林総合研究所	PB1-228			みほ子	新潟大 院 自然
	大西 尚樹	森林総研・関西				友佳子	東大・総合文化
	大西 義浩	鹿児島大学大学院連合農学	_		奥山		岩手生物工学研究センター
PA2-570 O	大野 綾佳	北大水産	PA2-617			亜紗美	広島大・院・生物圏
P00 70:	大野 啓一	千葉県立中央博物館	PA1-162			純一	京都精華大学人文学部
PC2-794	大野 正彦	東京都健康安全研セ	PB1-240		小黒	芳生	東北大・院・生命
PC2-/82 O	大野(鈴木)ゆかり	果北大・生命科学					

発表 懇	名 前	所属	発表 懇	名 前	所属
PC2-859 O	長 雄一	北海道環科研	T09-1 O	加藤 真	京大・地球環境
PB2-684	尾崎 正紘	早稲田大・院・先進理工	PA1-131 O	加藤 正士	横国大大学院環境情報
PA2-519 O	尾崎 有紀	奈良女子大学大学院	G1-05	加藤 元海	京都大学
L1-04 O	尾崎 研一	森林総研北海道支所		加藤 珠理	岐阜大応用生物
T05-1 PB2-730	長田 典之	東北大院・生命科学	S02-2 T23-5	角谷 拓	東大・生圏システム
PA2-511 O	長田 穣	東大・農・生物多様性	T24-1 PA1-169	金尾 滋史	多賀町立博/滋賀県立大院
PA1-211 O	長船 裕紀	北里生物多様性ネット	PB2-709	金谷 弦	東北大・東北アジア研究セ
PC2-805	小澤 奈々	信大・農	PA1-014	金子 敦志	信州大・農
PC2-850	尾関 雅章	長野県環境保全研究所	S09–3 O	兼子 伸吾	京大・院・農学
PB2-705	小田 智基	東京大学大学院	S19-6 O	金子 信博	横浜国大・環境情報
PA1-083	小野 清美	北大・低温研	T01-5	金子 有子	琵琶湖環境科学研センター
PB2-716	小野 賢二	森林総合研究所東北支所	0	金子 与止男	岩手県立大総合政策
S04-4 T31-2	小野田 雄介	Macquarie University	PB2-733	金田 哲	農環研
PA1-091	表 寿一	近大高専	PB2-695 O	鎌内 宏光	京大・フィールド研
PB1-309	小山 未奈	東京農業大学造林学研究室	PA1-054	鎌倉 真依	奈良女大・共生センター
B1-04 O	恩田 義彦	筑波大・菅平セ	T26-7 O	鎌田 邦彦	日本チョウ類保全協会
PB1-235 O	恩田 裕太	筑波大・生物	0	上村 了美	国総研
PC1-412	貝津 光依	山形大. 理工学. 生物	PA1-075	神山 千穂	東北大・院・生命科学
PA2-501 O	皆藤 千穂	奈良女子大学大学院	N1-07 O	亀田 佳代子	滋賀県立琵琶湖博物館
PB1-257	加賀田 秀樹	京大・生態学研究センター	N2-02 O	亀山 慶晃	東京農大・地域環境
K2-04 O	鏡味 麻衣子	東邦大学理学部	PA1-205 🔾	加茂 綱嗣	(独)農業環境技術研究所
PC1-372	加賀谷 隆	東大・農学生命・森林動物	0	加茂 将史	産総研・安全科学
PB2-661	加賀屋 美津子		PA1-120	鴨井 環	愛媛大学
PA2-473	柿嶋 聡	東大・院・理・植物園	PA2-468	加茂野 晃子	北大 低温研
PA1-185 🔾	柿沼 薫	東大院・農	PA2-508 O	萱島 隆一	九州大学数理生物学研究室
PA1-062	垣本 大	三重大学生物資源学部	PA1-098	香山 雅純	森林総合研究所九州支所
PA1-069 O	籠谷 優一	京都工芸繊維大・応生	PC1-333 O	苅部 甚一	京大・生態研
	籠谷 泰行	滋賀県立大学環境科学部	PC2-825 O	河合 潮	京大 院 理
PB2-666 O	笠木 哲也	金沢大学環日本海	E1-11 O	河井 崇	阿南高専・建設システム工
	笠原 康裕	北大・低温研	I1-05	川合 由加	北大・環境科学
E2-04 O	梶 光一	東京農工大・農	PA2-567	川喜多 愛	大阪府大院・理
PA2-524 O	粕谷 英一	九大・理・生物	PB1-256 O	川北 篤	京大・院・人環
T29-4 O	嘉田 良平	横浜国立大学	PA2-602 O	川口 健一	筑波大学生物資源学類4年
PA2-453 O	片岡 博行	津黒いきものふれあいの里	PA1-133 O	河口 剛輝	広島大・院・総科
PA2-478 O	片岡 陽介	信大・理	PA1-023	川口 小百合	北海道教育大釧路生物学
PA1-209	片野 泉	独法土研・自然共生研セ	PA2-509 O	川口 喬	立命館大学・理工学
PC1-366	片野田 裕亮	鹿児島大・理工研	G1-12	川口 達也	横浜国大院・環境情報
PA2-578 O	片平 浩孝	広大・生物圏	0	河口 洋一	九州大学工学研究院
PA2-539	片渕 正紀	東北大・生命	PA1-110 O	川口 利奈	筑波大·生命環境科学
PC2-775 O		京大院・農・昆虫生態	PB1-294 O	川越 みなみ	筑波大・生命環境科学
PC2-774 O	片山 直樹	東大・農・生物多様性	PC1-401 O	川崎 菜実	東京大院・農・生物多様性
0	可知 直毅	首都大院・理工・生命科学	PA2-561	川島 佑貴子	東京農工大学
PC2-749	香月 雅子	岡大・院・進化生態		川添 のぞみ	奈良女大院・人間文化
	加藤 輝代子	東京環境工科専門学校	PA2-488 O	川津 一隆	京大院・農・昆虫生態
0	加藤 賢太	筑波大学生物学類	PC2-793		バードライフ・アジア
PA2-510 O	加藤 聡史	東北大・生命科学	0	川那部 浩哉	琵琶湖博物館
S09-5	加藤 英寿	首都大学東京・牧野標本館	PC2-830 O	川西 亮太	愛媛大・院・理工

発表 懇	名 前	所属	発表	懇	名 前	所属
PB1-315 O	河野 樹一郎	京都府大・院・生命環境	PC2-801		串岡 航	滋賀県立大学
T27-5 O	川之辺 素一	長野県水産試験場諏訪支場	PB2-656	\circ	楠本 聞太郎	九大生資
S06-2 O	川端 善一郎	地球研	T30-2	\circ	楠本 良延	農環研
PA2-537 O	河端 有里子	岩大・院・農	T21-2	\circ	工藤 岳	北大・地球環境
PA1-194	川原 健	明治大・農	12-03	\circ	工藤 栄	極地研・総研大
E1-05	河原 孝行	森林総研北海道	T26-5		工藤 忠	日本チョウ類保全協会
T11-3 PA1-141	川村 健介	広島大学国際協力研究科	S08-1	0	工藤洋	京大生態研センター
PA1-007	瓦井 秀憲	東大院・新領域	S08-4	_	国武 陽子	城西国際大学
PA1-096	河原崎 里子	森林総合研究所	PB1-301	0	國永 知裕	京都府大・院・生命環境
PB2-689 O	菅 尚子	総研大・極域	PC1-410		久保 拓弥	北大・地球環境
PA1-043	神田 房行	北海道教育大・釧路		0	久保田 渉誠	北大・院・環境科学
M2-03	神田 紘美	茨城大院	S05-4		久保田 康裕	琉球大学理学部
PC2-833	菅野 洋	(株)宮城環境保全研究所	L2-08	0		横国大・院・環境情報
PA2-476 🔾	菊田 尚吾	北大・院理・自然史	T18-2	0	能容 直喜	千葉大学理学研究科
G1-03	菊地 永祐	東北大・東北アジア研	PG1-397		熊田 那央	東大・農・生物多様性
PA2-466	菊地 淳一	奈良教育大学教育学部	DO1 2E2	O	久米 篤	九州大学足寄演習林
PC2-812	菊地 哲理	明治大・院・農	PC1-352	\circ	久米 学	土研自然共生研究セ
T28-3 O	岸田 治	京大生態研センター	PC1-421	O	久家 光晴	九大院・システム生命
PA2-563 O	岸田 竜	佐賀大・農		\circ	倉地 耕平	京大・生態研
PC1-345	岸本 圭子	総合地球環境学研究所	PC2-845 T15-4	O	倉本 宣 栗山 武夫	明治大学農学部 東邦大学・理・生物
L1-06	岸本 年郎	自然環境研究センター	T18-1	\cap	黒江 美紗子	東大・農・生物多様性
PB2-696 O	喜多 智	京大生態学研究センター	S08-5			
	北川 淑子	東大農学生命科学研究科	T31-1	0	黒川 紘子	横国大・環境情報
0	北出 理	茨城大学理学部	PA2-624	0	黒河内 寛之	東大院・農
PC2-756	北中 將之	信州大学院・工学系研究科	PA1-016		黒田 有寿茂	兵庫県立大学
PC1-416 O	北野 忠	東海大・教養	PC2-797		桑江 朝比呂	(独) 港湾空港技術研究所
PA1-038	北野 昌美	横浜国立大学大学院環境	T16-1	0	今 博計	北海道立林業試験場
PA2-632	北野 聡	長野環保研			顧 令爽	帯広畜産大学環境生態
PC2-828	北村 淳一	(社) 観音崎自然博物館	PA1-077		小池 繁幸	信州大院・工
PC1-362 O		立教大学理学部	S04-3		小池 孝良	北大院農
PB1-286 O		東大・農・生物多様性			小池 文人	横浜国立大学
PC2-759 O		東大・農・生物多様性			小池 伸介	東京農工大
PB2-642 O	北本 尚子	筑波大学生命環境科学	T18-4		小泉 逸郎	NOAA
	北山兼弘	京大生態研	200 0		小泉 透	森林総合研究所
	鬼頭 秀一	東京大学新領域創成科学研			小泉 博	早稲田大・教育
T17-2	紀藤 典夫	北海道教育大学函館校			小出 大	横国大・環情
PA2-595	衣浦 晴生	森林総研関西	S11-6		香坂 玲	名古屋市立大学
PP0 000 ○	衣笠 利彦	鳥取大・農			幸田 良介	京大・生態研センター
PB2-692 O		早稲田大・教育	PB2-698		河内 香織	学術振興会特別研究員
T10-4	木下 晃彦	東京大学アジアセンター			甲山 哲生	北大 院理 自然史
PA2-562 O		佐賀大学農学部			郡麻里	国環研・環境リスク
S06-4	金再奎	琵琶湖環境科学研究センタ	S13-1		古賀 庸憲	和歌山大・教育・生物
11-04 DD1 205	木村 一也	金大環日本海域研究セ	ra 1-204		小酒井 修	横国大院・環情・環境生命
PB1-295 S07-1	木村 誇	北海道大学農学院			越田 智恵子	自然環境研究センター
	木村 眞人	名古屋大学 宇都宮大学農学研究科	PB1-305		小島 覚小嶋 智巳	北方生態環境研究学房東北大・院・生命科学
	木村 幹子	北大・院・環境科学	PA1-219		小島 有理	東邦大・理
	木村 勝彦	祖島大・理工	T07 4			
310-3	小竹川附后	佃	PC1-368	0	小関 右介	中央水産研究所

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
T03-1 DA1-210 ○ 小高 信彦	森林総研九州	PA2-444 齋藤 智之	森林総研木曽
FAI-210	7	PC1-393 ○ 斎藤 昌幸	中央農研 / 横国大
PA1-181 小田切 宗一郎	埼玉大学大学院	PA1-071 齊藤 わか	京大農・森林生態学
PB2-668 小谷 二郎	石川県	G2-03 齊藤 修	早稲田大学高等研究所
甲山 隆司	北海道大学地球環境	T13-5 斎藤 琢	岐阜大学・流域圏
PB1-239 ○ 後藤 龍太郎	京大院 人環	PA1-009 斎藤 達也	北大・環境
F2-04 小林 亜玲	京大・院・理	PB1-310 ○ 齋藤 時子	新潟大学農学部
PC2-790 ○ 小林 哲	佐賀大学農学部	PA2-467 ○ 齋藤 雅典	東北大学大学院農学研究科
H1-01 ○ 小林 悟志	情報・システム研究機構	G2-05 佐伯 いく代	首都大学東京牧野標本館
G1-06 ○ 小林 草平	土木研究所	PA1-047 三枝 逸人	筑波大生命環境科学研究科
12-04 ○ 小林 元	信州大学農学部附属AFC	PA2-550 ○ 佐賀 達矢	岐阜大学 応用生物科学部
PB1-248 小林 誠	北海道大学環境科学院	PB1-327 ○ 酒井 暁子	横国大・院・環境情報
PB2-663 ○ 小林 正樹	チューリヒ大	M2-07 ○ 酒井 一彦	琉球大・熱生研
○ 小林 万里	東京農業大学	T16–2	
E2-06 ○ 小林 美苑	奈良女大・院・人間文化	H1-08 酒井 章子	総合地球環境学研究所
N2-05 小林 豊	フロリダ大学	PB2-680 酒井 翔平	早稲田大・院・先進理工
N1-01 小林(城所)碧	神戸大・理	酒井 ゆう子	トヨタ自動車(株)
PC2-852 ○ 小林 隆人	山梨県環境科研	酒井 佳美	森林総研
小林 卓也	(財)電力中央研究所	PA2-428 ○ 阪口 翔太	京都大学大学院農学研究科
S17-1 ○ 小平 真佐夫	知床財団	I1-03 坂口 麻理	高知大学農学部
PB1-282 ○ 小松 貴	信州大学大学院	S17-4 坂田 宏志	兵庫県立大
G1-08 小南 裕志	森総研関西	PA2-463 ○ 坂田 益朗	東京大学大学院・新領域
PA1-130 小南 陽亮	静岡大・教育	PA1-094 坂田(別宮)有紀子	都留文科大学
PA2-486 ○ 小宮 竹史	京都大・院理・動物生態	PA2-579 ○ 阪本 真吾	筑波大・生命環境
小柳 智恵	日本大学生物学研究室	PC2-750 ○ 坂本 信介	慶應大学 商学部
T30-3 E1-02 ○ 小柳 知代	東大院農	H1-07 坂本 亮太	岐阜大学院 応用生物
PB1-296 小山 明日香	北大・環境科学院	K1-05 坂本 健太郎	建設技術研究所
PA1-050 ○ 小山 耕平	石川県立大・植物生態学	E1-10 佐川 志朗	自然共生研究センター
PA1-061 小山 晋平	京大・農	T14-1 ○ 崎尾 均	新潟大・農・FC 佐渡
T14-3 小山 浩正	山形大学農学部	○ 佐久間 大輔	大阪市立自然史博物館
S24-5 小山 泰弘	長野県林総セ	PA1-045 ○ 佐久間 智子	西中国山地自然史研究会
PB2-737 小山 里奈	京大・情報	PA1-033 ○ 櫻井 一彦	成城大学・社イノ
H1-02 近藤 健太	龍谷大学理工学研究科	PC2-781 櫻井 民人	東北農業研究センター
近藤 高貴	大阪教育大学	PA1-010 櫻井 悠	岩手大・院・人文社会科学
PA1-127 ○ 近藤 俊明	広島大・院・国際研	PA1-216	近畿大・農・環境生態学
○ 近藤 博史	国士舘大学	T13-2 佐々井 崇博	名古屋大学
T25-3 ○ 近藤 倫生	龍谷大学理工学部	N2-06 ○ 佐々木 顕	総研大・葉山高等研
PC2-778 近藤 泰玄	信大院・工	T11-4 PB1-287 ○ 佐々木 雄大	東大・農学生命
PC2-751 ○ 近藤 勇介	岐阜大学・応生・昆虫生態	PA2-544 ○ 佐々木 那由太	筑波大・院・生命環境
PA1-093 紺野 康夫	带広畜産大学環境生態	PB1-277 佐々木 幹雄	筑波大・院・生命環境
S11-5 サーカー アシュトシュ	横浜国立大学・環境情報	T08-1	
PC1-376 ○ 西城 洋	農研機構・中央農研	T22-3 佐々木 寧 K1-07	埼玉大学
PA1-015 ○ 齊藤 瑛璃香	新大・農	PB2-658 指村 奈穂子	東大・農・森圏管理
PA2-446 齊藤 哲	森林総合研究所	T02-2 PB1-233 ○ 定清 奨	大阪府大・院・理
PB1-284 斉藤 真一	山形大学院理工学研究科	M1-03 ○ 佐竹 暁子	北海道大学
○ 齊藤 隆	北大フィールド科学センタ	B1-01 佐藤 綾	琉球大学理学部
PA1-066 ○ 齋藤 隆実	東大院理・生物科学	PC2-818 佐藤 衣里	山形大・農
PA1-178 齋藤 友恵	新潟大・院・自然科学	T27-2 M1 00 佐藤 一憲	静大・工
		M1-09	hT/\ _L

発表	愁	名	前	所属	発表	懇	名	前	所属
	\circ	佐藤	克文	東大海洋研	PC1-364	0	嶋永	元裕	熊大沿岸域センター
	\circ	佐藤	謙	北海学園大学工学部	PC2-834		島村	崇志	道環境研
PA1-207		佐藤	重穂	森林総研・四国	PA2-564	0	清水	加耶	大阪教育大学
S13-2		佐藤	琢	水研セ西海区水研石垣	N2-01	0	清水	健太郎	University of Zurich
PC1-359	\circ	佐藤	拓哉	奈良女・共セ	L1-10		清水	孝昭	愛媛栽培資源研
PB2-713		佐藤	保	森林総合研究所	PA1-101		清水	英幸	国立環境研究所
PB1-300		佐藤	朋華	秋田県立大学		\circ	清水	愛美	茨城大学 理工学研究科
PA1-170		佐藤	直	兵庫県立大・院・環境人間			下田	勝久	畜産草地研究所
		佐藤	尚衛	成蹊高等学校	PB2-724		下田	星児	農研機構•近中四農研
PA2-572		佐藤	成祥	北大院・環境			下田	奈美子	京都学園大学
S18-3		佐藤	永	(独) 海洋研究開発機構	PA2-615	\circ	下野	嘉子	畜草研
PA2-603		佐藤	真弓	九州大学工学研究院	E1-04	\circ	下野	綾子	国立環境研究所
PB2-700		佐藤	由依	横浜国立大学	E1-03		小路	敦	北海道農業研究センター
PB1-266		佐藤	竜一	東大院・農学生命	PC2-761	\circ	城野	哲平	京大・理
S21-3		佐藤	愼司	東京大学	PB2-693	\circ	上村	真由子	農業環境技術研究所
PA2-635		佐藤	方博	生態工房	PA1-160		庄山	紀久子	北海道大学
PB1-251		佐藤	通成	東京大学大学院新領域	S12-1	\circ	Jon N	lorberg	Stockholm University
PC2-810		佐野	恭子	信州大学大学院農学研究科	E1-12		白井	洋一	農業環境技術研究所
	\circ	佐野	淳之	鳥取大学農学部 FSC	PC1-418		白石	恭輔	山形大学理工学研究科
PA1-040		佐野	哲也	東大院・新領域・自然環境	PC2-856	\circ	白川	勝信	高原の自然館
S14-4	\circ	鮫島	弘光	京大生態研	S22-6		白戸	康人	農業環境技術研究所
PC1-381		鮫島	由佳	京大・生態学研究センター	PB2-702		白濱	圭通	京大・農
PA1-119		澤移	经	筑波大・生命環境			白山	義久	京大フィールド研瀬戸臨海
PA1-063		-		東大・院・理・日光植物園	T10-3 PA2-458	\circ	白水	貴	筑波大・菅平センター
PA2-498				香椎高校	PA2-464	0	城川	祐香	東京大学理学系研究科
PA1-186	_			筑波大学・院・生命環境		0	城田	徹央	北海道大・農
PA1-020	0	志弟	\$	横浜国大・院・環境情報	PA2-546		城本		琉球産経(株)
			さとみ	京大・生態学研究センター	T11-2		進藤	和政	国際農研
PB1-263				横浜国大・院・環境情報	PA1-152		須賀	丈	長野県環境保全研
H2-05	0	塩見		茨城大学名誉教授	PA2-612	0	須貝	杏子	首都大学東京・牧野標本館
G1-01			秀一	東北大・東北アジア研	PA2-427		数金	真理子	宇都宮大学院農学研究科
PP0 050				茨大理学部	K1-04		管家	千誠	横浜国大・院・環境情報
PB2-659				北大院農	PA1-134		菅原	のえみ	横浜国大院・環境情報
PA1-161				森林総研東北	PA1-085	\circ	杉浦	大輔	東大・院・理・日光植物園
PA1-003			庸子	岐阜大学	PC1-411		杉浦	秀樹	京都大・野生動物
PB1-229			伶奈 味信	千葉大学院園芸学研究科	PA2-523		杉阪	次郎	京大生態研センター
T28-2				東大院・総合文化	M2-06	\circ	杉田	典正	立教大院・理
T27–6 S21–1	O	柴田	英昭	京大生態研センター 北大・北方生物圏セ	T07-4 L2-03	\circ	杉田	久志	森林総合研究所東北支所
021 1	\circ			森林総研東北支所	T03-4	\bigcirc	杉村	彭	森林総合研究所
PA1-147		-		新潟大学大学院	K1-01			豊彦	横浜国大・環境情報
PA1-142			彦人	国立環境研究所	S04-5			修一	弘前大学農学生命科学部
PA1-154			_		PB2-687			あづさ	玉川大・院
S20-7				森林総研・東北	PA1-195	\circ			兵庫県立大
					PC2-822	_	鈴木		東農大 農 野生動物
PA1-215				岩手県立大学・総合政策	PA1-106			· 健司	神戸大・人間発達環境
		嶋田		東大・総合文化・広域	PA2-441	\circ			首都大院・理工
PA2-525	0	島谷	健一郎	統計数理研究所	PA1-132	_		重雄	立命館大・文
S23-1	0	島谷	幸宏	九州大学工学研究院				= -	

発表を	名 前	所属	発表	懇	名	前	所属
T22-4	鈴木 伸一	国際生態学センター	T03-3 PA1-037		高嶋	敦史	琉球大・農
PB2-647	鈴木 節子	名古屋大学	M1-11	0	高須	夫悟	奈良女子大・理
B2-01	鈴木 孝男	東北大院生命科学	T17–5		高田		北海道環境科学研究C
) 鈴木 信彦	佐賀大・農	T12-3	0		まゆら	東大院・農・保全生態
T02-4 PA2-574	命木 紀之	京大院・農・昆虫生態	M1-05	0	高田	壮則	北大・地球環境
PC2-806	鈴木 寛之	滋賀県立大学環境科学部	PC1-389	0	高野	雄太	秋田県立大・生物資源
PA2-449 C) 鈴木 まほろ	岩手県博	PC2-836	0	高野	頼 洋一郎	新潟大学超域研究機構
PA2-569 C	鈴木 雄也	新潟大・理	PA1-126	0	高橋	明子	京大院・農
PC1-409 C	命木 陽介	東海大院・人間環境	PB1-221	\circ	高橋	一秋	長野大・環境ツーリズム
T01-3 PA2-451	鈴木 亮	首都大・ツーリズム	N2-03		高橋	智	奈良女子大・人間文化
PC1-385	鈴木 竜太郎	東邦大学理学部	T26-4		高橋	淳	鮭川村自然保護委員会
L2-05	鈴木 和次郎	森林総研	PA2-504	0	高橋	大輔	京大・生態研センター
	鈴木 観	首都大・生命	PC2-788	0	高橋	大輔	長野大学環境ツーリズム
S05-5 C	命木 準一郎	首都大・理工・生命	PC2-779		高橋		遠洋水研
PA2-571 C) 鈴木 規慈	三重大院生物資源	S24-3	0	高橋		森林総研林育セ
PA2-581 C	須田 大祐	筑波大・院・生命環境	PC2-791	_	高橋		岡山大学農学部
PA2-637	須島 充昭	東大・総合文化	PA2-481	0	高橋		筑波大・院・生命環境
PC1-332 C	須藤 正彬	京大・人環	T10-2			由紀子	東大院・農
PB2-711 C) 隅田 明洋	北大低温研	T29-3	0	高橋	-	近中四農研センター
PB2-660 C	陶山 佳久	東北大・農	PA1-086		高橋		信州大学理学部
PA1-138	諏訪 広樹	横浜国立大学大学院	PA1-206 PA1-163		高橋 高原		森林総研関西 京都府大・院・生命環境
PA2-608	諏訪部 真友子	琉球大・農・亜熱帯動物	PA2-534				国立環境研・生物
PA1-199	清 憲三	埼玉大学理工学研究科	T19-1		高村		国立環境研究所
PA1-039 C)清野 達之	筑波大・生命環境	PA1-064		高山高		北大・低温研
S20-1 C	清和 研二	東北大学	PC2-832	0	田川		九州大学・院・理
PA2-586	関 香菜子	日本獣医生命科学大学	T20-2		滝 久		森林総研・森林昆虫
PA1-129 C		森林総研北海道	PC1-373	\bigcirc	滝岩		筑波大・院・生命環境
PC2-824 C		東京農工大学大学院	PA2-639		瀧本		東邦大学・理・生物
)関川 清広	玉川大学農学部		0	瀧本	宏昭	玉川大学農学部生
)関島 恒夫	新潟大学大学院自然科学	S14-3	0	武生	雅明	東京農大・地域環境
)関根 有哉	早稲田大・教育	PA1-148	0	田口	勇輝	京大院地環・兵庫県博
)瀬戸 繭美	愛媛大学 CMES	PA2-442		竹内	やよい	京都大学大学院農学研究科
	芹澤 守也 1 千賀 有希子	茨城大学大学院 理 立正大学地球環境科学部	PB1-268	\circ	竹内	勇一	京都大学理学部動物生態
) 工具 有布丁) 五月女 皓海	早稲田大・教育			竹内	祐子	京都大・院・農
PB1-299	染谷 潤一郎	宇都宮大・院・農	PC2-752	\circ	竹内	剛	広島大・生物圏科学
PA1-021 C		横浜国大・院・環境情報	PA2-599		竹下	毅	北海道大・文
	高井 孝太郎	北大環境科学院	S23-4			純一	里地ネットワーク
PB1-291	高井 裕美	島根大院・環境資源	PC1-400	0	武田	勇人	東大・農・生物多様性
С)高垣 重和	京都大学学術出版会			武田		神戸大院人間発達環境
E1-01 C	高川 晋一	日本自然保護協会	PA2-600	0	竹田	千尋	筑波大・生物資源
PB1-238 C	高木 悦郎	東大院・農・森林動物	PC2-769				首都大・理工・生命科学
	高木 健太郎	北大・北方生物圏	PB1-289				国立環境研究所
T02-3	高木 俊	東大院・農・生物多様性	PA1-044				岩手大・人文社会・生物
PB2-726	高木 正博	宮崎大学農学部	PA2-512			周平	農業環境技術研究所
L1-02	高倉 耕一	大阪市環科研	PA1-168			智博	新潟大・院・自然科学
PB2-736	高崎 洋子	名古屋大学大学院	PC1-415			–	昭和環境システム
			PA2-543	\bigcirc	出島	行り「	筑波大・院・生命環境

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
PA2-521 田代 正徳	横国大・院・環情	S05-1 S05-2 ○ 辻和希	琉球大学農学部
多田 満	国立環境研究所	S16-1 辻 誠一郎	東京大学新領域創成科学
PA2-547 ○ 多田 泰紘	北海道大学大学院理学院	PB1-272 辻野 昌広	北大・環境科学院
T16-3 ○ 立木 佑弥	九大院 シス生	PA1-122	京都大学霊長類研究所
橘 治国	北海道水文気候研究所	K2-05 ○ 津田 みどり	九大院・農
E2-08 ○ 立川 賢一	流域総合研究会	H2-03 ○ 津田 智	岐阜大流域圏センター
PA2-630 ○ 立澤 史郎	北大院・文・地域	PA2-489 ○ 津田 真樹	東北大・生命科学
PB1-237 異 真悟	岡山大・院・環境	S11-3 ○ 津田 吉晃	森林総合研究所
PA1-065 立石 麻紀子	九州大学福岡演習林	T06-2 PR1 224 ○ 土松 隆志	東大・広域システム
PC2-808 ○ 立石 真	秋田県大・生物資源	PD1-234	
PC2-789 舘野 光輝	上越教育大学生物	PC2-746 ○ 土屋 香織	首都大
PC1-392 立脇 隆文	麻布大学獣医学部	G1-11 廿楽 法	横浜国大環境情報学府
N1-06 ○ 田中 啓太	理研 BSI/ 学振 PD	N1-04 ○ 椿 宜高	生態研センター
B1-11 ○ 田中 健太	筑波大学・菅平セ	T09-4 () 椿 玲未	京大院 人・環
PA2-636 田中 幸一	農業環境技術研究所	PA1-180 坪井 勇人	信州大院・農
S11-4 田中 貴宏	広島大学大学院工学研究科	PA2-566 ○ 坪井 助仁	京大院・昆虫生態
PA1-079 田中 格	山梨森林総研富士吉田	\$24-1 ○ 津村 義彦	森林総合研究所
PC1-407 田中 哲夫	人と自然の博物館	PA2-450 津山 幾太郎	森林総合研究所
B2-04 田中 智美	島根大汽水研	PA2-545 鶴井 香織	京大院・農・昆虫生態
PB1-273 田中 智之	北大・環境	PC1-370 鶴田 哲也	中央水研
T08-6 田中 規夫	埼玉大学大学院	鄭 培明	中国山東大学生命科学学院
PC1-360 ○ 田中 宏卓	琉球大学農学部	PA1-139 ○ 手代木 功基	京都大・AA研
PC2-823 田中 裕久	日本	PA2-515 〇 手塚 あゆみ	東北大・院・生命科学
PA2-531 田中 洋之	京都大学霊長類研究所	PB2-653	大林組技術研究所
PC1-394 田中 美希子	京都大学・霊長類研究所	PA1-124 ○ 寺川 眞理 PC2-776 ○ 寺崎 慧介	広大院 国際協力 茨城大学大学院
田中美那	金沢大学	PA2-633	沖縄県衛生環境研究所
○ 田中 悠希 PC1-402 ○ 田中 裕美	鳥大農	PC2-821 ○ 寺田 千里	北大・環境科学院
	兵庫県立大学 国立環境研究所	PC1-342 ○ 寺西 肇	京大院・理
	国立	PA1-176	北大・院・文
PB2-649 田中 良典 T20-1 田中 浩		PC2-819 ○ 寺本 悠子	筑波大・院・生命環境
PA2-582 ○ 田中 陽介	森林総合研究所九州支所 九大・システム生命	H1-10 傳寶 知恵	京大院・農
〇 田辺 晶史	東北大・院・生命科学	T01_1	
PA2-496 田辺 力	熊本大教育	T31-3 ○ 工店 旁辛	University Oldenburg
PA1-074 ○ 田邊 優貴子	総研大 極域科学	T06-4 PA2-500 東樹 宏和	産総研・生物機能工学
PC2-771 谷 聡一郎	九大院 生防研	PC1-369 ○ 唐真 盛人	東海大院・人間環境
PB2-654 ○ 谷 友和	東大日光植物園	T06-5 ○ 遠山 弘法	九大・理・生態
S20-3 ○ 谷口 武士	鳥取大学	PA2-605 遠山 裕子	東北大学大学院農学研究科
PA1-105 種子田 春彦	東京大学・理・生物	PA2-553 ○ 栂 浩平	富山大院・理・生物
T23-2 玉井 玲子	琉球大院・理工	PA2-576 ○ 富樫 朱美	北大 院理 自然史科学
PB2-641 玉木 一郎	名大院生命農	PA2-638 富樫 一巳	東大・院農
PC2-860 ○ 玉田 克巳	道環境研	PC1-336 冨樫 博幸	東北大・院・生命科学
PA2-499 田村 典子	森林総合研究所・多摩	N1-10 戸金 大	明治大・院・農学
PB2-743 ○ 田村 裕	琉球大・理工	PA2-480 ○ 土岐 和多瑠	東大院・農・森林動物
○ 陀安 一郎	京大・生態研センター	PB1-323 ○ 徳岡 良則	農環研
L2-04 中馬 美咲	東大・演習林	803-6 徳地 直子	京都大学
PC1-337 ○ 槻木(加) 玲美	東北大・生命	PA1-196 戸田 春那	東京農工大学・農
PB1-241 ○ 辻 かおる	京大・理・動物生態	L1-07 ○ 戸田 光彦	自然環境研究センター

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
S19-5 戸田 求	北大低温研	PC2-815 長田 光司	名大院生命農
PC2-745 ○ 等々力 成史	京大院・農・昆虫生態	12-01 中田 望	首都大学東京大学院・理工
○ 戸丸 信弘	名大院生命農	PA2-485 ○ 長太 伸章	京都大・院・理
PB2-657 冨田 美紀	静岡大学理学部大学院	PC1-363 ○ 永田 尚志	国環研・生物
PA1-155 富田 瑞樹	東京情報大・環情	○ 永津 雅人	自然環境研究センター
PA2-431 ○ 富田 基史	東北大・院・農	PB1-317 ○ 中坪 孝之	広島大・院・生物圏
○ 富田 啓介	名古屋大・院・環境	PC1-384 ○ 中寺 由美	信州大学・理
S21-2 富永 修	福井県立大学	PC2-826 ○ 中西 亜耶	東邦大院・理・地理生態
PA1-166 ○ 富永 光	筑波大・生物資源	PB1-276 ○ 中西 康介	滋賀県大院・環境科学
PA2-513 ○ 富永 篤	国立環境研究所	T22-2 ○ 中西 弘樹	長崎大学教育学部
冨山 清升	鹿児島大学・理・地球環境	〇 中根 周歩	広島大学生物圏科学研究科
PA1-012 ○ 友常 満利	早稲田大・教育	PA1-070 ○ 永野 聡一郎	東北大・院・生命
PB2-727 ○ 豊田 鮎	自然環境研究センター	中野 大助	電力中央研究所
M2-02 ○ 豊田 真梨子	茨城大・理・生物	S10-3 中野 孝教	総合地球環境学研究所
PC1-357 ○ 豊田 大輔	筑波大・院・生命環境	B1-07 中野 智代	石川県立大学
PC2-773 ○ 豊原 広隆	高知大院・農	PA2-558 ○ 中野 裕子	岡大・院環境・昆虫生態
PC2-855 内藤 和明	兵庫県立大・自然研	PC2-772 ○ 永野 真理子	東大・総合文化
PA1-121 ○ 直江 将司	京大・生態学研究センター	PA2-492 中野 亮	東大・農学生命
PA1-022 永井 敦	北教大・札幌・生物	T26-3 永幡 嘉之	日本チョウ類保全協会
PC2-817 長井 和哉	岩手大・院・農	PB2-732 中原 治	北大農
中井 咲織	立命館宇治高校	805-3 ○ 中丸 麻由子	東京工業大学大学院
№-04 ○ 中井 静子	東北大院 生命科学	PA2-495 ○ 永光 輝義	森林総研北海道
T13-4 永井 信	岐阜大流域研	PA1-171 ○ 永美 暢久	北大・院・農
PB1-325 長池 卓男	山梨県森林研	803-7 中村 克典	森林総合研究所東北支所
PB1-232 中井 善太	北大・農	PC1-353 中村 光一朗	明治大学農学部
PA1-036 中尾 勝洋	森林総合研究所	T29-6 中村 浩二	金沢大学環日本海域センタ
PB2-708 ○ 中尾 拓貴	広島大・生物圏	PA1-172 中村 早耶香	中部大院・応生
T04-1 ○ 仲岡 雅裕	北大フィールド科学セ	PA1-089 ○ 中村 隆俊	東京農業大学生物産業学部
K1-02 中尾 龍太	横浜国立大学 環境情報	PA1-001 ○ 中村 琢磨	横浜国大院・環境情報
PA2-502 中河 嘉明	筑波大学大学院	K2-07 ○ 中村 誠宏	北大苫小牧研究林
○ 中川 弥智子	名古屋大学・生農	PA2-433 中村 満理恵	宇都宮大学・雑草セ
PB2-652 ○ 中北 ねり	奈良教育大学	PA1-193 中村 未来	明大・農
PC2-807 ○ 中桐 斉之	兵庫県立大・環境人間	PA1-059 中村 元香	千葉大学大学院理学研究科
62-01 ○ 中越 信和	広島大・院・国際協力	T07-2 中村 幸人	東京農業大学地域環境
PC2-857 長坂 晶子	北海道立林業試験場	PA2-436 ○ 中村 亮二	科学技術振興機構
永澤 拓也	日大・生物資源	PB1-326 中森 由美子	和歌山県林試
PC1-408 ○ 仲澤 剛史	台湾大学・海洋研	PB2-662 ○ 中山 新一朗	東大・院・理
中澤美沙	京都学園大学	PC2-764 ○ 中山 慧	岡大院 環境学
\$15-1 中静 透	東北大学	PC2-777 () 南雲 穣	岩手大学農学部
PB2-744 中下 留美子	首都大院・理工	PB2-701 南雲 亮	筑波大・院・生命環境
PB1-259 中島 亜美	東京農工大・農	PA2-597 名護 ほたる T13-6 女佐原 照朝	琉大・農
長島 啓子 PC1-383 中島 貴幸	九州大学農学研究院 鹿児島大・理工研	PA1-035	筑波大学・JAXA
PA1-099 長嶋 寿江	展兄島人・珪工研 東北大学大学院生命科学	T29-1 ○ 夏原 由博	京都大学
PC2-767 ○ 中嶋 祐二	京大院・農・昆虫生態	PB1-246 夏目 暁子	名古屋大学院生命農
仲條 竜太	東邦大学地理生態学研究室	PC1-350 ○ 棗田 孝晴	中央水産研究所
PB2-651 長瀬 ほなみ	名古屋大・生命農	PC2-843 名取 俊樹	国立環境研究所
PA2-577 ○ 中瀬 悠太	京大・人環	鍋嶋 絵里	東京農工大
Of the leave	/1// / / X/K	PB1-321 並川 寛司	北教大・札幌・生物

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
S01-4 成田 聡子	農業生物資源研究所	PB2-718 橋本 太郎	神戸大大学院
T25-2 ○ 難波 利幸	阪府大院・理・生物科学	\$08-6 ○ 長谷川 雅美	東邦大学
	筑波大学 下田臨海	PA2-529 ○ 長谷川 成明	地球研
PB2-697 新部 一太郎	鳥取大院・生物環境	804-1 ○ 長谷川 利拡	農業環境技術研究所
G2-07 ○ 新穂 千賀子	兵庫県立大学	長谷川 奈美	入間市役所
PB2-728 ○ 新山 馨	森林総合研究所	S14-5 長谷川 元洋	森林総研木曽
PB1-227 ○ 西井 絵里子	北海道大学環境科学院	PB2-640 ○ 長谷川 陽一	東北大院・農
PA2-622 西尾 孝佳	宇都宮大・雑草科学セ	PA2-613 ○ 畑 憲治	首都大院・理工・生命
\$08-3 ○ 西川 潮	国立環境研究所	S21-5 ○ 畠山 重篤	気仙沼・牡蠣の森を慕う会
PA1-189 西沢 徹	国立環境研・生態遺伝	PC2-803 ○ 畑中 由紀	横国大・院・環境情報
PA2-493 ○ 西澤 裕文	北大地環研	PA2-430 ○ 畑中 佑紀	京都大学森林生物学研究室
PA2-423 ○ 西澤 美幸	北大・院・環境科学	PC1-379 ○ 服部 充	信大・理・生物
PA2-606 ○ 西嶋 翔太	東大・農・生物多様性	PA1-004 馬場 俊介	早稲田大学教育学部理学科
T10-1 DA2_457 ○ 西田 貴明	京大生態研	○ 馬場 孝	滋賀県立大・院・環境科学
FAZ=407		PC2-747 馬場 成実	九大院・生防研
L1-01 ○ 西田 隆義	京大農昆虫生態	N1-02 ○ 馬場 友希	東大院・農・生物多様性
PA1-087 西谷 里美	日本医科大学	PC2-853 浜崎 健児	農環研・生物多様性
PB2-685 仁科 一哉	名大院生命農	○ 浜端 悦治	滋賀県立大学
L1-11 西野 麻知子 PC1-358 ○ 西原 昇吾	琵琶湖環境科学研究センタ	PC2-861 濱原 和広	北海道環科研
	東大・農学生命科学	T24-2 ○ 浜本 奈鼓	重富干潟小さな博物館
T19-2 ○ 西廣 淳 PB1-320 ○ 西本 孝	東大・農学生命科学	PA2-535 ○ 浜本 麦	重富干潟小さな博物館
	岡山県自然保護センター	E1-06 早石 周平	琉球大・教育セ
	宮崎大学農学部	○ 早川 明里	岐阜大学地域科学部
T19-4 ○ 二宮 咲子 PC1-343 ○ 丹羽 慈	東京大学大学院博士課程	PB1-254 早川 悟史	山形大学農学部
M1-08	水研セ・水産工学研	早崎 博之	東京都立江北高等学校
PC1-365 沼田 京子	島根大院生物生命	\$11-1 ○ 林 岳彦	国立環境研究所
沼田 真也	JST-CRDS	PA1-032 林 寿則	国際生態学センター
70	自然共生研究センター	PC2-785 林 文男	首都大・理工・生命
PB2-688 根岸 正弥	茨城大・理	PA1-026 ○ 林 勇希	筑波大・生物資源
PC2-799 根本 真理	(人)从人 生	PC2-792 林 義雄	大阪府大・院理
PA2-585 〇 根本 唯	東京農工大学大学院	林 良信	生物研
PA1-103 野上 達也	石川県白山自然保護セ	T26-6 林田 光祐	山形大学農学部
B2-03 野田 圭太	島根大汽水研	PA2-587 早船 琢磨	北大・理
T04-2 ○ 野田 隆史	北大地球環境	PA2-456 原 和良	筑波大学 生命環境
PA1-052 ○ 野田 響	岐阜大学・流域圏センター	原 登志彦	北海道大学低温科学研究所
PA1-203 ○ 野原 精一	国立環境研究所	PA2-445 原 正利	千葉県立中央博物館
PC1-340 ○ 野村 篤之	東北大生命	PC1-331 ○ 原口 岳	京大生態研センター修士
PA1-058 野村 遼介	北海道大学環境科学院	PA2-580 ○ 原野 智広	九大院・理・生態科学
PA2-494 ○ 野村 尚史	地球研	PA2-434 ○ 張替 鷹介	首都大・院・理工
H1-11 萩原 佑亮	京大院・農・森林生態	PB1-242 ○ 半田 千尋	京大院・人環
PA2-438 ○ 萩原 陽介	首都大・院・理工	PA1-092 ○ 半場 祐子	京都工芸繊維大
PB1-314 ○ 箱崎 真隆	東北大学・院・生命科学	PB1-260 ○ 半谷 吾郎	京都大学霊長類研究所
T27-1	中央水産研究所	日浦 勉	北大・苫小牧研究林
EZ-07		PA2-619 ○ 比嘉 基紀	東京学芸大学
橋本 琢磨	自然環境研究センター	東正剛	北海道大学
PB2-720 橋本 徹	森林総研	PA1-218 東 敬義	三重県埋蔵文化財センター
PA1-153 () 橋本 啓史	名城大学農学部	PA1-179 樋口 伸介	神戸大学理学部生物学科
PA2-623 ○ 橋本 佳延	兵庫県博	S19-3 彦坂 幸毅	東北大・生命科学

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
PA2-447 肥後 睦輝	岐阜大・地域	PA1-140 藤田 素子	京大・東南アジア研究所
肘井 直樹	名大院・生命農・森林保護	PA1-220 ○ 藤田 喜久	琉大・大学教育センター
807-3 〇 日鷹 一雅	愛媛大・農・農山漁村	PA2-625 藤沼 潤一	北大・環境科学
PA1-034 櫃間 岳	森林総研東北	803-1 ○ 藤原 道郎	兵庫県大/淡路景観園芸
PB1-223 日野 貴文	北海道大学 苫小牧研究林	PB2-691 藤巻 玲路	横浜国大
S20-6 日野 輝明	森林総研関西	T17-4 藤村 善安	北大フィールド科学セ
日比 伸子	橿原市昆虫館	藤本 理子	横浜国立大学植生学研究室
PA2-483 ○ 日室 千尋	京大院・農・昆虫生態	PA2-482 藤本 真悟	新潟大・院・自然科学
G1-02 〇 兵藤 不二夫	スウェーデン農科大学	E2-01 藤山 静雄	信州大学理学部生物科学
PB2-741 ○ 平井 敬三	森林総研東北	○ 藤原 一絵	横浜国大環境情報研究院
PA2-530 ○ 平尾 章	信州大・山岳研	藤原 学	龍谷大理工
PC1-405 平尾 隆	京大院理動物生態	PA2-541 布施 名利子	九大・理・生態
平尾 聡秀	北大・苫小牧研究林	PA2-520	岡山大院・環境・進化生態
○ 平木 夏樹	鳥大農	PA1-145 ○ 布野 隆之	新潟大学
PA1-027 〇 平田 晶子	筑波大・生命環境	降幡 和弘	横浜国立大学大学院
平田 亜也	高知大学大学院	PA2-620 ○ 古川 拓哉	横国大・環情
S19-4 平田 竜一	農環研	M1-07 ○ 別所 和博	九州大学システム生命
S22-5 ○ 平舘 俊太郎	農業環境技術研究所	PC2-784 逸見 泰久	熊本大学沿岸域センター
平塚 明	岩手県立大学総合政策学部	PA1-019 ○ 鮑 娜仁高娃	横浜国大,環境情報学府
PC2-762 ○ 平山 寛之	九大・理・生態	PA2-554 ○ 星 真大	茨城大・理・生物
PA1-202 ○ 広木 幹也	国立環境研	PB1-319 ○ 星崎 和彦	秋田県立大・生物資源
PB2-715 廣田 充	筑波大・菅平センター	PB1-311 ○ 星野 亜季	東大院・農・生圏システム
PC2-796 廣田 忠雄	山形大・理・生物	N1-09 星野 仏方	酪農学園大学
PA1-151 ○ 弘中 豊	日大院・生物資源・生物学	T08-3 ○ 星野 義延	東京農工大学
PA2-528 ○ 広永 良	京大・生態研	PA2-507 ○ 細 将貴	東北大・生命科学
○ 福田 秀志	日福大健康	PB2-676 細川 真也	港湾空港技術研究所
T15-1 深澤 悟	東邦大学	S01-5 ○ 細川 貴弘	産総研・生物機能工学
PA2-459 ○ 深澤 遊	トトロのふるさと財団	PA2-460 ○ 細田 一史	阪大情報
S01-2 ○ 深津 武馬	産業技術総合研究所	PB2-723 堀田 紀文	東大院農
PA2-609 () 深野 祐也	九大・理・生物	H1-12 保原 達	酪農大環境システム
PC1-382 ○ 深谷 肇一	北海道大学環境科学院	PA2-628 保母 桂志	明治大学・院・農
PA2-505 ○ 福井 眞	京大・生態研センター	○堀翔	筑波大学生物学類
PB2-729 福澤 加里部	京大・フィールド研	T21-3 (堀 正和	(独) 水産総合研究セ
T14-4 福田 真由子	(財) 日本自然保護協会	堀 良通	茨城大学理学部生態研
PC1-335 福森 香代子	京大生態研センター	堀越 和夫 PC1-399 ○ 堀部 直人	小笠原自然文化研究所
S22-3 ○ 藤井 一至 PC1-344 藤井 佐織	京大院農	PC2-787 () 本間 淳	東京大学大学院・総合文化
PC1-344 藤井 佐織 S09-2 藤井 紀行	京都大学農学研究科 熊本大・院・自然科学	○ 前川 清人	京大・理・動物行動
T26-1 藤井恒	日本チョウ類保全協会	前迫ゆり	富山大院理 大阪産大・人間環境
PB2-704 藤井 芳一	横浜国大院・環境情報	前藤 薫	神戸大学大学院農学研究科
PB1-222 藤木 大介	兵庫県大・自然研	前畑 政善	琵琶湖博物館
PA1-060 藤木 泰斗	京大・生態研	T14-2 ○ 蒔田 明史	秋田県立大・生資
PB1-281 ○ 藤澤 貴弘	大阪府大院・生環	牧野 厚史	滋賀県立琵琶湖博物館
T15-2 藤田 薫	東邦大・地理生態研	○ 牧野 俊一	森林総合研究所
藤田剛	東大・農・生物多様性	PA1-107 〇 牧野 崇司	筑波大・生命環境
K2-02 藤田 昇	京大・生態研セ	F2-06 ○ 牧野 渡	東北大学
T17-1 富士田 裕子	北海道大学植物園	T14-6 ○ 真坂 一彦	北海道立林業試験場
PB1-236 ○ 藤田 真梨子	神大院・農	803-8 ○ 正木 隆	森林総合研究所

発表 懇 名 前	所属	発表 懇 名 前	所属
PC1-395 正富 欣之	北大院・環境科学	○ 箕口 秀夫	新潟大学自然科学系
PC1-396 ○ 益子 美由希	筑波大・生物	PA2-422 三嶋 賢太郎	秋田県立大学 木高研
PA1-187 ○ 増井 太樹	鳥取大 院 農	PB2-738 ○ 三島 慎一郎	(独)農業環境技術研究所
増沢 武弘	静岡大学理学部	T15-5 水澤 玲子	東邦大・院・理
増田 和明	中之条町立中之条小学校	PA2-439 ○ 水谷 紘菜	首都大・院・理工
増田 真佑	筑波大学生物資源学類	PB1-252 ○ 水谷 瑞希	福井県自然保護セ
PC2-841 増田 理子	名工大・社会工学	PA2-503 水野 雄介	名古屋工業大学
PC2-842 〇 増本 育子	中電技術コンサルタント	N2-08 水幡 正蔵	在野の研究者
PA1-123 ○ 増谷 優	秋田県立大・生物資源	T19-3 三谷 羊平	コロラド大学
PA1-143 ○ 町田 直樹	北大環境科学院	PA1-080 三田村 理子	茨城大学大学院・理工
PB1-322 ○ 松井 淳	奈良教育大学	PA2-594 ○ 道前 洋史	北里大学薬学部
PC2-758 松井 彰子	京都大学理学部	PA2-471 ○ 三井 裕樹	京大 院 人環
PA1-041 松井 哲哉	森林総研・北海道	PB1-269 満尾 世志人	農工大院・農
PA1-112 ○ 松井 浩幸	大阪教育大学大学院	PC2-858 皆川 朋子	土木研究所自然共生セ
PB2-742 松浦 克美	首都大・生命科学	南 基泰	中部大学
M2-04 ○ 松浦 健二	岡山大・院環境・昆虫生態	L2-02 南 佳典	玉川大学農学部
PA1-011 松江 大輔	東京農大・地域環境	E2-02 ○ 南谷 幸雄	愛媛大・院・連合農
PA2-424 ○ 松尾 歩	東北大学大学院農学研究科	L1-12 ○ 源 利文	総合地球環境学研究所
松尾 奈緒子	三重大・生物資源	T12-4 ○ 嶺田 拓也	農研機構・農工研
松岡 かおり	東京農工大・連合農学	三村 真紀子	横国大・環境情報
PA2-455 松岡 宏明	筑波大学 生命環境	PA1-183 ○ 宮 久史	北海道大学農学研究院
○ 松木 悠	京大・院・農	PB1-328 ○ 宮内 大策	横国大・院・環境情報
PA2-604 ○ 松崎 慎一郎	東京大学 農学生命科学	PA2-614 ○ 三宅 もえ	東大・農・生物多様性
PB2-669 松下 通也	名大院・生命農学研究科	PB2-648 三宅(村山)恵子	新潟大学女性研究者支援室
PC2-829 松島 一輝	新潟大学農学部	PA1-184 宮坂 隆文	東京大学
松島 野枝	東北大学・院・生命科学	PA1-108 宮崎 寧子	筑波大・生命環境
PA2-435 ○ 松嶋 麻由子	首都大・院・理工	PA1-188 宮崎 祐子	奈良県森林技術センター
PC2-754 ○ 松田 亜希子	東大・農・生物多様性	PC1-403 宮崎 佑介	東大院・農・保全生態
PC2-768 〇 松田 尚子	首都大・生命	12-05 宮沢 良行	九大演習林
S15-4 ○ 松田 裕之	横浜国大・環境情報	PB1-306 ○ 宮下 彩奈	東大・院・理・日光植物園
PB2-644 松橋 彩衣子	東北大・院・生命	○ 宮下 直	東大・農・生物多様性
PA2-475 ○ 松林 圭	北大・院理・自然史	PC2-839 宮下 哲也	自然共生研究センター
PA2-590 松原 史	熊大院 自然科学	PB2-714 宮田 義規	宮大・農
S13-4 ○ 松政 正俊	岩手医大共通教育センター	○ 宮竹 貴久	岡山大院・環境・進化生態
PC1-414 ○ 松村 和音	東海大学大学院	L2-01 宮本 和樹	森林総研四国
○ 松村 俊和	神戸大・院・人間発達環境	T20-3 宮本 麻子	森林総研
PB2-722 松本 晃	神戸大・農学研究科	PA1-008 宮森 映理子	東大院・農・緑地創成学
PC2-848 松本 麻子	森林総研	\$02-3 ○ 宮脇 成生	建設環境研究所
PC1-346 松本 幸二	新潟大学農学部	PA2-532 ○ 向井 貴彦	岐阜大学地域科学部
N1-03 ○ 松本 有記雄	長崎大学大学院生産科学	○ 向井 宏	京都大学フィールド研
PB2-645 ○ 松山 周平	京大院農	S24-4 向井 譲	岐阜大学応用生物科学部
○ 真野 浩行	環境研リスクセンター	\$13-3 村井 実	
丸山 温	森林総研北海道	T13-1 PB2-717 ○ 村岡 裕由	岐阜大・流域圏センター
PB1-247 ○ 三浦 和美	京大 生態研センター	PA2-461 ○ 村岡 歩	東北大・院・生命
PA2-616 三浦 佳林	横浜国大・院・環	K1-06 村形 和也	埼玉大学院理工学研究科
H2-06 ○ 三木 健	國立台湾大學海洋研究所	村上 興正	同志社大学工学研究科
三木 直子	岡山大学院環境	PA2-618 村上 健太郎	きしわだ自然資料館
12-07 右田 千春	森林総研	PA1-191 ○ 村上 比奈子	新潟大・農
		· - · -	

発表	狠	名 前	所属	発表	懇	名	前	所 属
		村上 正志	千葉大理	PA2-432	\circ	矢野	慶介	森林総研林木育種センター
T22-1 PA1-042		村上 雄秀	国際生態学センター	S15-2	0	矢原	徹一	九大理生物
PB1-270		村瀬 敦宣	東京海洋大学	PB1-230		薮内	喜人	滋賀県立大学大学院
N1-05	С	村田 明久	千葉県中央博・海の博物館	PA1-201				札幌市立大学デザイン学部
PA2-491		村田 和人	東北大・生命科学研究科			山内	· -	京都大学・生態研センター
PA1-006		村中 希望	横国大・環境情報	S02-1		山浦	-	森林総研・昆虫生態
	\sim	室山 泰之	兵庫県立大学	PA1-073				岡山理科大学
PA1-049		目黒 伸一	国際生態学センター	PA2-443	0	山岸	洋貴	北大・院・環境科学
T25-1	С	舞木 昭彦	九州大学大学院理学研究院	T23-4		山北		千葉大・理
PA1-200	С	持田 幸良	横浜国大・教育人間科学部	N1-12		山口	•	奈良女大院・人間文化
PA1-146	\sim	望月 翔太	新潟大学・院・自然科学	PA2-470	0			神戸大・院理・生物
PA1-029 (\sim	本岡 毅	筑波大・生命環境	PA2-472			聖智	東大・総合文化
S11-2		森章	横浜国立大学・環境情報	PC2-757				名大院・環境
L1-05	\subset	森 生枝	岡山県自然保護センター	PB1-255	0		真玲子	滋賀県立大学
PA2-477	C	森 光太郎	阪大院生命機能	PB1-262			和香子	東北大学生命科学研究科
11-06		森 茂太	森林総研	PA2-454				神戸大学人間発達学研究科
PB1-271	C	森 照貴	北大・環境科学院	PA2-565		山崎	• •	京大院・農・昆虫生態
PC2-760 C	C	森 英章	自然環境研究センター	PA2-557		山崎		岐阜大・昆虫生態
PC2-766		森川 太郎	熊本大・院・自然科学	PB1-288				札幌市博・北大農院
PC1-348		森川 政人	千葉大院・園芸	S20-4		山崎		東北大院・農
PC1-398	C	森口 紗千子	東大・農・生物多様性	PA2-533	0			富山大院理工
		盛口 満	沖縄大学人文学部	DO1 001		-	真嗣	名古屋大学生命農学研究科
PB1-307	C	森田 元気	信州大学農学部	PC1-361				京都大学・森林総合研究所
T07-3		守田 益宗	岡山理大・基礎理	PA2-551	O			九大・理・生態
		森田 沙綾香	農環研	PA1-167			奉海	九州大学大学院 工学府
PA2-517 (C	森長 真一	九大・理・生物	PC1-417			英恵	東大院・農学生命 京都大学フィールド研
PB2-670		森広 信子	なし	S21-4	\circ	山下		77.80
		森本 元	立教大・理・上田研	PB1-303				新潟大・院・自然
T14-5 L2-06	C	森本 淳子	北大農学研究院	PB1-274 PA1-197		山田		水産総合研究センター 東京大農学生命科学研究科
PC1-375	\subset	森本 信生	農研機構・中央農研	PC2-802		山田	武	横浜国大院・環境情報
T27-3	C	守山 拓弥	農村環境整備センター	T01-2	0	山田	俊弘	広島大学大学院総合科学
PA2-634	\subset	森 貴久	帝京科学大学	PB1-267		山田	朋彦	京大院・人環
	\subset	諸澤 崇裕	筑波大・院・生命環境	PB1-318		山田	浩雄	森林総研・林育セ関西
PB2-719		谷貝 勇樹	名大農学部	T03-2	0	山田	文雄	森林総研
		八木 貴信	森林総研・東北	S16-4	0	山田	昌久	首都大学東京都市教養学部
T08-4		八木澤 順治	埼玉大学理工学研究科	PA1-072		山田	祐記子	京都大学大学院農学研究科
PB2-725		八木 周一	岐阜大・院・応用生物	PA1-030		山田	義裕	岡山大学環境学研究科
T05-3	C	矢澤 佳子	北大・環境科学	PA1-156	0	山中	裕樹	総合地球環境学研究所
PB2-681	C	八代 裕一郎	岐阜大 流域圏セ	PA2-607		山西	陽子	奈良女子大・院
PA2-559 (C	矢代 敏久	岡大院・環境	PA2-542		山根	隆史	岡大院 環境学
PC2-765		八杉 公基	京大院・理学研究科	M1-10	\circ	山道	真人	総研大・生命共生体進化学
PA1-182 (C	安田 哲	北大・環境科学院	T18-3		山村	光司	農業環境技術研究所
PC1-386		安野 翔	東北大・院・生命			山村	靖夫	茨城大学理学部
	C	安元 暁子	九州大・理・生物	K1-12	\circ	山村	則男	総合地球環境学研究所
S06–3 C	C	谷内 茂雄	京大生態研センター	PB2-683		山本	昭範	筑波大・院・生命環境
K1-10		谷地 俊二	横浜国大院・環境情報	T06-3	0	山本	哲史	京都大学理学研究科
PA2-589 (C	柳真一	九州大学総合研究博物館		0	山本	勝利	農業環境技術研究所

発表 懇 名 前	所属	発表	懇	名 前	所属
PA2-536 山本 誉士	総合研究大学院大学	PB1-245	\circ	米谷 衣代	京大・生態研
PC2-753 山本 宇彦	九大・生態	PA1-017		李 晟齊	横国大大学院環境情報
PA2-560 山本 俊昭	日本獣医生命科学大学	PA1-018	\circ	李 強	横浜国大・院・環境情報
PC2-838 ○ 山本 智子	鹿児島大学水産学部	G1-10		梁 乃申	国立環境研究所
PA1-102 ○ 山本 福壽	鳥取大			六田 晴洋	日本大学生物学研究室
○ 山本 麻希	長岡技術科学大学生物系	S22-1 S22-4	0	和穎 朗太	農業環境技術研究所
PA2-555 ○ 山本 結花	岡大・院環境・昆虫生態	T12-2		若杉 晃介	農研機構 農村工学研究所
PC1-391 山本 悠子	東京農工大・院・農	PA2-588	0	若野 友一郎	明治大学
○ 遊佐 陽一	奈良女・理	PA2-538	0	若林 紘子	北海道大学環境科学院
PC2-827 柚原 剛	東邦大・理	T07-1	0	若松 伸彦	東京農大・地域環境
T29-2 ○ 湯本 貴和	総合地球環境学研究所	F2-01			
PA1-048 由良 浩	千葉県立中央博物館		0	涌井 茜	茨城大学理学部
PC2-763 ○ 横井 智之	京大院・農・昆虫生態			鷲谷 いづみ	東京大学農学生命科学
PC1-351 横尾 俊博	島根大・汽水研		0	和田 英太郎	JAMSTEC
PC2-811 ○ 横川 昌史	京大院・農	PC2-786	_	和田哲	北大・院・水産
PB2-646 ○ 横田 静香	九大・理・生物		0	渡邉 謙二	横浜国大 教育人間科
横田 岳人	龍谷大学理工学部	H1-09	_	渡邊 謙太	沖縄高専
○ 横畑 泰志	富山大学理工学研究部			渡邉 園子	広島大・国際協力
PA1-013 横山 卓巳	北教大・札幌・生物	PA2-556	\bigcirc	渡邊 大	富山大院・理・生物
PB2-712 横山 誠	早稲田大学	D14 055		渡辺肇	高岡法科大・教養
S17-2 横山 真弓	兵庫県立大学	PA1-055	\sim	渡辺 誠	北大院・農
PC2-854 ○ 吉尾 政信	東大・農・生物多様性	PC1-349		渡邉 眞澄	東京農工大・農
PA1-190 吉岡 明良	東大院・農学生命		0	渡辺守	筑波大学•生物科学系
PA2-437 ○ 吉川 剛明	滋賀県立大学・環境科学部	S23-5		渡辺 竜五	佐渡市産業観光部
PA1-118 ○ 吉川 徹朗	京都大学大学院農学研究科	PB2-650	_	渡辺 洋一	秋田県立大学
S16-2 吉川 昌伸	古代の森研究舎		\bigcirc	綿貫豊	北海道大学水産科学研究院
PC1-354 ○ 吉倉 智子	筑波大・院・生命環境	I1-07	\sim		University of the Ryukyus
PA2-548 吉澤 樹理	岐阜大院・応用生物		O	Ah-reum Lee	Korea University
PA2-526 吉田 勝彦	国立環境研・生物	S04-2			University of Illinois
PA1-095 ○ 吉田 圭一郎	横浜国立大学・教育人間		_	Alessandro Oliveira Silva	•
吉田 謙太郎	筑波大・シス情		O	Amporn Wiwegweaw	Dept. of Biol. Shinshu U.
PC1-404 〇 由田 太一	兵庫県立大学環境人間学部	S14-1	\bigcirc	Andreas Langner	FFPRI
T04-3 T28-4 ○ 吉田 丈人	東京大・総合文化	T29-5 B1-03		Anne McDonald Ari Cornman	UNU-IAS OUIK Akita Pref. Univ.
吉田 俊也	北大・北方生物圏 FSC	S10-4	_	David M. Post	Yale University
M1-06 ○ 吉田 智彦	北大・環境科学院		0	Edgard Alves	•
PC1-419 ○ 吉田 信代	東北農研センター	B1-10		Bontempo e Silva	北海道大学
PC2-814 ○ 吉田 康子	筑波大生命環境	S24-2	\bigcirc	Frederic Austerlitz	CNRS
吉田 洋	山梨県環境科学研究所	PA2-627		Giang Vu Nguyen	Hiroshima University
PB1-293 ○ 吉竹 晋平	早稲田大・院・先進理工	B1-09		Gomes P. I. A.	Saitama Uni
E2-05 吉野 元	東北大	PA2-626		Hyo-Jin Lee	Hiroshima Univ.
T11-1 吉原 佑	東大 農		0	Jeremy Fox	University of Calgary
PA2-440 ○ 吉間 綾子	北大・院・環境科学	PA1-214		Joo-mi Kim	Korea Univ.
PB1-265 ○ 與嶋 愛	名古屋大学農学部	H1-05		_	University of the Ryukyus
12-08 吉村 謙一	神戸大学 自然科学	H1-04			Hiroshima University
PC1-374 ○ 吉村 真由美	森林総合研究所・関西支所		0	Leeann Reaney	QMUL
○ 依田 憲	名古屋大学	B1-06		Lucero Mariani	Yokohama Nat University
PB2-694 ○ 米川 修平	鳥取大学 農学部	B1-02		Luis Alberto Vega Isuhuaylas	Yokohama National Univ.
11-10 ○ 米田 健	鹿児島大学農学部				

発表	懇	名 前	所 属
B1-08		Mao HuiPing	Tottori University
G1-04		Matheus Carvalho de Carvalho	Kitasato U. Mar. Biosc.
T15-3		Matt Brandley	イエール大
S18-2	\bigcirc	Matthew Potts	UC Berkeley
11-11	\bigcirc	Md. Harun Or Rashid	Saitama University
PB2-721		Mi-Sun Lee	Korea University
PA1-144	\bigcirc	Napakhwan Whanpetch	千葉大学・院・理
PC2-840		Nguyen Vu Tiep	IDEC
S01-1	\bigcirc	Nina WEDELL	University of Exeter
PA1-084		Onno Muller	Tohoku University
S12-4	\bigcirc	Owen Petchey	shefield University
S18-1	\bigcirc	Paul Moorcroft	Harvard University
		Paul Ofei-Manu	Freelance Research
		Reich Peter	University of Minesota
PA1-157		Rizki Amelgia	Hiroshima University
B1-05	\bigcirc	Robert Johns	Hokkaido For. Inst.
PA1-158		Rong-Hua Wang	Hiroshima University
	\bigcirc	Sarah Abdul Razak	Korea University
S10-2		Scott D Wankel	Harvard University
I1-08		Sharma Sahadev	University of the Ryukyus
N1-08		Sumiya Ganzorig	Hokudai
		WANG ZHE	東大農学生命科学研究科
	\bigcirc	Woo-Kyun Lee	Korea Univ.
PA1-025		WU Min	Univ. of the Ryukyus
T13-3	\bigcirc	Yowhan Son	Korea Univ
PA1-175		Yun Pan	Hiroshima Univ.
S01-3	\bigcirc	Zenobia LEWIS	Okayama University
T01-1	\bigcirc	Zuidema Pieter	ユトレヒト大学
			(2008年19日19日租7

(2008年12月12日現在)

第57回日本生態学会(2010年3月東京)のご案内

2010年の第 57 回日本生態学会大会は、東京大学駒場キャンパスを主会場にして開催されることになりました。2003年 3 月につくば市の筑波国際会議場で開催された第 50 回記念大会以来、7 年ぶりの関東地区の担当となります。

近年、日本生態学会の年次大会は年々大きくなり、参加者総数の大幅な増加はもとより、集会数もうなぎ上りに増加しつつあります。これに伴い大阪大会(第52回、2005年)の大阪国際会議場、新潟大会の朱鷺メッセ(第53回、2006年)、福岡大会(第55回、2008年)の福岡国際会議場など、名だたる大規模コンベンション・ホールが会場になっていたので、第57回大会も当初は千葉市の幕張メッセ国際会議場を予約しました。しかし、賃貸料がすごく高い割に、会場は狭すぎるのです。仕方がないので、急遽、東京大学駒場キャンパス(教養学部)に変更しました。会場変更に伴い、賃貸料がきわめて安い(幕張メッセの1/7の安さ)、200人規模の講義室を多数確保できる、都心なので会場への交通の便がよい、周辺に安価なビジネスホテルが多い等、参加者には利便性の高い会場を提供できると思います。

幸いに、最近では大会企画委員会が大会プログラム作成や参加登録や講演要旨などのサイトを運営して下さるので、地元の大会実行委員会は、東京大学、首都大学東京、国立環境研究所などのスタッフと協力して、充実した大会になるよう準備にあたるつもりです。また、2010年秋には生物多様性条約締約国会議(COP10、名古屋市)も開かれますので、特色あるプログラムを企画したいと思います。

大会実行委員会一同、皆様のご参加を心よりお待ちしています。

大会会長 鷲谷 いづみ 大会実行委員長 嶋田 正和

大会日程: 2010年3月15日(月)~3月20日(土) 会 場: 東京大学 駒場キャンパス(3/15~3/19)

本郷キャンパス(3/20、公開講演会、安田講堂)

〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1 〒113-8654 東京都文京区本郷 7-3-1

問い合わせ連絡先:

http://www.esj.ne.jp/meeting/forms/inquiry/index.cgi